

ISSN 1882-7179

創 価 教 育

第 15 号

2022年3月

創 価 教 育

第 15 号

『創価教育』（第15号）目次

論 文

池田大作が「戸田大学、で学んだこと」…………… 塩 原 將 行 （ 1）

講 演

第11回池田大作思想国際学術シンポジウム基調講演…………… 馬 場 善 久 （69）

カントへの私の道…………… 福 谷 茂 （77）

ジョン・デューイーメリオリズムを生きる思想…………… 藤 井 千 春 （91）

座 談 会

牧口常三郎生誕150周年記念座談会 牧口研究の現状と課題

コメンテーター：塩 原 將 行、アンドリュー・ゲバート、
牛 田 伸 一、岩 木 勇 作、伊 藤 貴 雄 （117）

研究動向

中国における「池田思想」研究の動向（18）

…………… 高 橋 強・堀 口 真 吾 （137）

資料紹介

『創価大学50年の歴史』出典資料一覧（2）……………創価大学50年史編集委員会編 （145）

書 評

「創価教育の源流」編纂委員会『評伝戸田城聖—創価教育の源流第2部』

…………… 松 井 慎 一 郎 （189）

渡邊弘著『創価教育と人間主義』…………… 利 田 律 子 （195）

斎藤毅著『「人生地理学」からの出発』…………… 岩 木 勇 作 （199）

2021年度活動報告…………… （203）

編集後記…………… （207）

池田大作が「戸田大学、で学んだこと」¹

塩原 将行

はじめに

1. 「戸田大学、という言葉はいつから使われるようになったか
2. 「戸田大学、は「人間学」の天才による個人授業
3. 池田大作が受けた薫陶を時期に分けて考察
4. 戸田による日々の薫陶
5. 民衆救済の「大志、
6. 「戸田大学、で何を学んだか
7. 創価学会は「校舎なき総合大学、
おわりに

はじめに

「戸田大学、は、創価大学創立者である池田大作が、師匠である戸田城聖から受けた薫陶を意味する言葉である²。この言葉は、戸田と池田の二人の間で交わされていた。

池田は、1969年に発表した随筆「人生に負けてはいけない。」において、「私の人生に、戸田城聖先生という、恩師がなかったとしたら、今日の私は、無にひとしい存在であったにちがいない。——この事実を、明確に気づいたのは、ずいぶん後のことになる」³と述べている。また、アメリカ・コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジで行った講演（1996年6月13日）では、「今

Masayuki Shiohara（創価大学池田大作記念創価教育研究所客員研究員）

¹ 本稿は、アメリカ・デポール大学池田大作教育研究所の修士課程プログラム「世界市民育成のための価値創造教育」の「戸田城聖の教育哲学と実践」という科目で行った2回のオンライン講義「「戸田大学、とは何か」（2020年6月6日）および「池田大作が「戸田大学、で学んだこと」（2021年6月5日）で語った内容」に加筆したものである。

² 池田の著作では、「戸田大学」もしくは「戸田大学、と書かれることが多い。本稿では、原則として、「戸田大学、と表記する。

³ 荒垣秀雄編『人生の恩師 私（私）の勇気を目覚めさせたもの』（大和書房、1969年）、17頁。なお、池田大作『私の人生観』（文藝春秋、1970年）では、「私の、人生を決定づけた、もっとも、大きな存在は、戸田城聖先生であった。したがって、私自身の、人生を語るのに、戸田先生を、ぬきにしては、画竜点睛を欠くことになってしまう」（15頁）と記している。

の私の98パーセントは、すべて、恩師より学んだものであります」⁴と語っている。本稿の目的は、いわゆる「戸田大学、がどのようなものであったかを考察することにある。

「戸田大学、を考察することには、次の三つの意義があると思われる。

第一に、1930年11月に『創価教育学体系』の第1巻を出版し、小学校から大学まで、「創価教育学の学校、を設立したいと語っていた牧口常三郎と、創価大学をはじめとする「創価」の名を冠した学校を日本のみならず海外6カ国・地域に設立した池田大作は会ったことがない。この二人をつなぐ存在が、牧口の弟子であり、池田の師となった戸田である⁵。池田が、「戸田大学、において、どのような薫陶を受けたのか。このことは、牧口から戸田、戸田から池田へと継承されてきた「創価」⁶の根幹をなすものを考察する上で欠くことはできない。

第二に、池田は戸田から何を学んだか、それを切り口にするすることで、戸田の姿がより鮮明になる。筆者は、「創価教育の源流」編纂委員会の一員として、『評伝 牧口常三郎』（第三文明社、2017年）および『評伝 戸田城聖』上下巻（同社、2019・2021年）計3冊⁷の執筆に携わってきた。月刊誌『第三文明』における「創価教育の源流第一部 牧口常三郎」の連載後、直ちに「第二部 戸田城聖」を執筆したことは、牧口評伝を単行本としてまとめる際に極めて有益であった。今後同様に、戸田に関する評伝の研究には、池田に関する研究から光をあてる必要がある。

第三に、前述のコロンビア大学の講演で池田は、「『創価教育』、すなわち価値創造を掲げた一貫教育のシステムは、私が受けてきた、このような人間教育を、未来の世代にも贈りたいとの願いを込めて創立したものであります」⁸（下線筆者、以下同じ）と述べている。池田がどのような薫陶を戸田から受けたのかを知ることは、池田が示した「人間教育」を考察する上で、手掛かりを得ることになる。

1. 「戸田大学、という言葉はいつから使われるようになったか

(1) 「戸田大学、は、戸田が言い出した言葉

最初に、「戸田大学、という言葉の誕生について述べることにしたい。池田によれば、「戸田大学、という言葉は、戸田が言い出したのだという。池田は次のように述べている。

⁴ 『池田全集・第101巻』、428頁。本稿では、『池田大作全集』（全150巻、聖教新聞社、1988～2015年）について、『池田全集・第0巻』と表記する。

⁵ 牧口は、戸田に創価教育の学校の設立を託していた。また、『創価教育学体系』の第1巻出版（1930年11月18日）から20年になろうとする1950年11月16日、戸田は、池田に創価大学設立の構想を語っている。これらについては、『座談会』牧口先生の思い出②』（『牧口常三郎全集』の「月報6」、第三文明社、1983年3月）の5～6頁、および、『評伝 戸田城聖』下巻の102～104頁などを参照。

⁶ 牧口・戸田・池田の思想や幅広い実践を含む意味で、「創価」とした。

⁷ 以下、本稿では、『評伝 牧口常三郎』と『評伝 戸田城聖』上下巻について、出版社と発行年を省略する。

⁸ 『池田全集・第101巻』、428頁。

かつて、戸田先生は、私にこう言われた。

「お前を大学へ行かせてやりたい。行かなければ、社会で大きなハンディを背負うことになるやもしれぬ。しかし、人間の大学、へ行けばよい。信心の大学、この戸田の大学、へ行けばよい。人間としての最高の力をつける全人格の大学とと思って」と。(1987年、創立57周年記念勤行会)⁹

ルソーは、「ほんとうの教育とは、教訓をあたえることではなく、訓練させることにある」と結論した。意味の深い、大切な言葉である。

私は戸田先生から、訓練を受けきった。一番の代表として、朝から晩まで先生の側にお仕えした。それはそれは厳しい訓練、であり、教育であった。

先生は「戸田大学」と言われていた。二人きりの大学であった。その薫陶を受けたことが、私の青春の誉れであり、幸福である。(1997年、第1回全国学生部幹部会)¹⁰

(2) 池田が「戸田大学、という言葉を使い始めた時期

「戸田大学、という言葉が、出版物で最初に確認されるのは、読売新聞記者の浅野秀満が1970年に上梓した『あすの創価学会』（経済往来社）の、池田へのインタビューをもとに書かれた次の部分である。

大世学院¹¹を中退してそれからの十年間、三十歳になるまで日曜日は一日中、普通の日も毎朝一時間の戸田大学を受講した。この講義が池田をつくり上げたともいえる。(232頁)

その後、池田の発言に「戸田大学」という言葉が確認できるのは、実に25年後の1996年である。ただし、86年からは、次のような表現が見られる。この頃から池田は、「戸田大学、について語ろうと考え始めたのではないか¹²。

〔戸田〕先生から私は、一対一で、いわば塾生として教えていただいたわけで、今もって深き感謝の念でいっぱいである。(要旨)(1986年、創価女子短期大学記念撮影会)¹³

先生は「苦勞をかけさせて悪いな。君の予定を、私が台無しにしてしまったな」と涙ぐんでおられた。そして、その代わりにと言われながら、日曜日をはじめ毎朝、先生みずから諸学問を教えてくださいだったのである。

⁹ 『池田全集・第69巻』、472頁。

¹⁰ 『池田全集・第87巻』、406頁。あわせて、『聖教新聞』2009年11月3日付2面を参照。

¹¹ 「大世学院」は、富士短期大学の前身となる学校。池田は、1948年4月に政治経済学科の夜間部に入学した。

¹² 池田が1965年1月1日から93年2月11日にかけて『聖教新聞』に連載した「人間革命」、および、単行本になった『人間革命』全12巻(1965～93年)には、「戸田大学、という言葉が見られない。2012年に『人間革命・第4巻』が『池田全集・第145巻』に、また、2013年に『人間革命・第7巻』が『池田全集・第147巻』に収録された際、「戸田大学、に関する記述が加筆されている。

¹³ 『池田全集・第59巻』、297頁参照。

それが全部、私の身についている。

いかなる大学も及ばぬ最高の個人大学であった。(1993年、第64回本部幹部会・第7回東京総会)¹⁴

戦後、私は「戸田塾」で学んだ。先生は戸田先生。生徒は私一人。毎朝、十年間、万般の学問を教えていただいた。最後には「これで自分の知っていることは、全部教えた」と言われた。(1994年、創価大学第24回入学式・創価女子短期大学第10回入学式)¹⁵

十年間、私は戸田先生に毎朝、勉強を教わった。「戸田塾」ともいうべき個人教授であった。(1995年、創価中学校・高等学校第28回入学式および関西創価中学校・高等学校第23回入学式)¹⁶

そして、池田が、最初に「戸田大学」と語ったのは、1996年4月17日の創価中学校・高等学校の新入生記念撮影会における次のスピーチである。

十年間、毎朝、私は戸田先生の個人授業で万般にわたる学問を教えていただいた。いわば、「戸田大学、である」¹⁷。

それから3年後、「戸田大学」という言葉は、「随筆 新・人間革命」の「わが魂の『戸田大学』」(『聖教新聞』1999年11月26日付)で初めて随筆のタイトルになった。そして、「『戸田大学』の名講義」(同、12月7日付)、「師弟＝人間教育の真髄」(同、12月18日付)を含めた3つの随筆で、「戸田大学、について、詳しく述べられている。

なぜ池田は、1996年に「戸田大学、という言葉を使うようになったのか。そして、3年後の99年には、より具体的な話をするようになったのだろうか。

考えられることは、池田が創立した創価学園・創価大学が開校からそれぞれ四半世紀を超え、1996年6月にはアメリカ創価大学のリベラルアーツ・カレッジ(教養大学)開設計画が発表されたことである¹⁸。創価教育の学校は、さらなる飛躍の時期に入ったのである。また、開始時期は特定できないが、この頃から池田は、牧口について言及することが多くなり、小説や偉人の言説などを引用することも、以前と比べて格段に増えてきたように思われる。さらに、1991年11月に創価学会と日蓮正宗との関係が断ち切れ¹⁹、創価学会はそれを「魂の独立、と宣言した。彼

¹⁴ 『池田全集・第82巻』、251頁。

¹⁵ 『池田全集・第60巻』、302頁。あわせて、『池田全集・第134巻』の372頁を参照。

¹⁶ 『池田全集・第57巻』、296頁。

¹⁷ 『池田全集・第58巻』、27頁。

¹⁸ 『聖教新聞』1996年6月4日付1面参照。

¹⁹ 1991年11月に日蓮正宗が「創価学会破門通告書」を送付してきたこと(『聖教新聞』1991年11月30日付1面参照)。日蓮正宗は、日蓮の弟子日興が開基した大石寺を総本山とする宗派。1900年に日蓮宗富士派と公称し、1912年に日蓮正宗と改称した(富士年表作成委員会編『日蓮正宗富士年表』、富士学林、1981年、383・393頁参照)。

の胸中には、牧口・戸田・池田と継承されてきた「創価」の根幹をなすものと、戸田から受けてきた「人間教育」を次の世代に伝えたいとの思いが、この頃、一段と強くなってきたのではなからうか。

2. 「戸田大学、は「人間学」の天才による個人授業

池田は、戸田から受けた薫陶について、次のように記している。

私は、大世学院を辞めたが、以来、〔戸田〕²⁰先生は仏法はもとより、人文、社会、自然科学、経済をはじめ、礼儀作法²¹、情勢分析、判断の仕方、組織運営の問題など、すべてを教えてくださいました。(中略)ともあれ、戸田社長のもとで働くこと自体が教育であったといってもよい。私にとっては先生の言々句々の行動は私という人間行動の基底部にいつもあり、それは我が生命に刻印された無形の財産となっているのである。(1975年、『日本経済新聞』に連載された「私の履歴書」)²²

私は、恩師の戸田先生の個人教授で万般にわたる学問を教えてくださいました。いわば、「戸田人間大学」で学んだのです。(1997年、月刊誌『灯台』に連載された「21世紀の教育と人間を語る」)²³

私の青春時代の学校は、戸田城聖という「人間学」の天才の個人授業であった。政治、経済、法律、漢文、化学、物理学……古今の百般を徹底的に教えてくださいました。つまり「戸田大学」である。(1999年、随筆「わが魂の『戸田大学』」)²⁴

私は若き日、恩師である戸田第二代会長から万般の学問と「人間学」を教えてくださいました。それ

²⁰ 以下、〔 〕内は、筆者による補足または注記。

²¹ 中央邦は、池田が話したことも交えて、次のように記している。

「池田は少年時代からハキハキ、齒に衣を着せずにものをいったが、腰は低かった、と当時を知る人はいう。それに磨きかけたのが戸田の訓育であったという。折目正しさも、徹底的に仕込まれた。

『戸田先生は、豪放ライラクで、礼儀もわきまえないような、そぶりがあった。それを真似る幹部もいたが、みんな表面しか知らなかったのだと思う。仏法に対する謙虚な態度を私はいつもそばで見ている、痛切に礼儀正しい人だということを知っていた。

性格的には、小さい時から折目正しい面もあったと思うが、戸田先生の態度から、私は礼儀というものを体得した』(『池田大作論』、大光社、1969年、71頁)

²² 池田大作「私の履歴書⑨」(『日本経済新聞』1975年2月19日付朝刊24面)、『池田全集・第22巻』の260頁に収録。なお、「私の履歴書」には「戸田大学」に関する記述はない。

²³ 「21世紀の教育と人間を語る 第9回」(『灯台』第437号、第三文明社、1997年2月)、57頁。池田大作『21世紀の教育と人間を語る』(第三文明社、1997年)の278頁に収録。

²⁴ 『池田全集・第130巻』、248～249頁。あわせて、池田大作『御書と師弟 1』(聖教新聞社、2010年)の120頁を参照。

が私の不滅の原点となっている。(2004年、女子部・教育本部・学術部合同研修会)²⁵

師の戸田城聖先生は、歴史上の英雄の生涯を通して、人間学、また將軍学というべきものを教えてくださるのが、常であった。(2002年、『第三文明』に連載された「私の人生記録 第三部」)²⁶

このように、戸田によって日常的に行われた池田への薫陶は、「人間としての最高の力をつける全人格的の大学」²⁷であり、「人間学」の天才による個人授業といえるものであった。「戸田大学」は、単に教養書などを教材にして学ぶだけではない。御書²⁸や法華経²⁹などの研鑽を通して、戸田が悟達した仏法の極理を伝えることに主眼があったように思われる。池田は次のように記している。

様々の学問の外に、もっとも精魂こめて教えられたのは、仏法の生命哲学であった。仏典や日蓮大聖人の御書をつぶさに解説しながら、現代思想との対決において教えられたのであった。(1969年、随筆「人生に負けてはいけない」)³⁰

戸田先生はよく、もっとも高き思想のものに、最初から深く入れ、と指導されていた。「日蓮大聖人の哲学が宗教の最高峰であるがゆえに、これを窮めつくすことは、一切の学問の根底をつかむこととなるのである」とも教えられた。(1998年、「5・3」記念協議会)³¹

3. 池田大作が受けた薫陶を時期に分けて考察

2000年以降になると、池田が戸田から受けた薫陶は、池田によってたびたび随筆やスピーチの中で紹介されている。1999年の随筆では、「戸田大学」という言葉は、主に、1952年5月以降の大蔵商事³² 始業前の講義を意味していたが、その後は、より幅広く、①1947年8月の創価学会入会以降に池田が受けた全ての薫陶、②1949年1月の日本正学館入社以降に池田が受けた全ての薫陶、③1950年1月に戸田が池田に提案して始まった個人教授、という意味でも使われている。本稿では、最も広い①の捉え方に従って、池田が創価学会に入会してから戸田の逝去までを5つ

²⁵ 『池田全集・第96巻』、380頁。

²⁶ 池田大作「私の人生記録 第三部 第23回」(『第三文明』第512号、第三文明社、2002年8月)、52頁。『池田全集・第128巻』の127頁に収録。

²⁷ 『池田全集・第69巻』、472頁。

²⁸ 「御書」とは、日蓮の遺文のこと。日蓮の著作・手紙などに対する敬称。日蓮の弟子日興が、日蓮の著作を「御書」と拝して、収集・書写・講義し、大切にすることに由来する(創価学会教学部編『教学用語集』、聖教新聞社、2017年、108頁参照)。

²⁹ 妙法蓮華経のこと。大乘仏教を代表する経典(同前、315～318頁参照)。

³⁰ 前出、『人生の恩師』、23頁。

³¹ 『池田全集・第89巻』、123頁。引用されている戸田の言葉は、巻頭言「書を読むの心がまえ」(『戸田城聖全集・第1巻』、聖教新聞社、1981年)の138頁による。

³² 大蔵商事株式会社は1950年10月に設立され、戸田は最高顧問に就任。池田も同月入社した。同社については、『評伝 戸田城聖』下巻の99頁を参照。

に区切り、その区分ごとに、池田がどのような薫陶を受けてきたのかを見ていきたい。

(1) 池田の創価学会入会から日本正学館入社まで（1947年8月～49年1月）

池田は、創価学会への入会を決意し、信仰の道に入った1947年8月24日について、次のように述べている。

この時、私は、深遠な仏法の哲理を、十分に納得できたわけではない。

家族も大反対であった。ただ私は、表層の次元を超越して、戸田城聖という人格に魅了されてならなかったのである。

「体当たりで、私にぶつかってこい。

青年らしく勉強し、勇敢に実践してみたまえ！」

先生は私を信じてくださった。

私もまた、青年の直感で、「戦争中、平和のため、仏法のために投獄された、この人にはついていける」と確信したのであった。

その意味において、8月24日は、まさしく「戸田大学」への入学の日であった。（2002年、随筆「不二の旅立ち『8・24』①」）³³

この頃の創価学会の主な会合は、千代田区西神田の本部で行われていた戸田による法華経講義と御書講義であった。あとは、各支部が月1回程度開催する座談会である³⁴。入会した池田は、1947年秋から戸田の講義を聴講し³⁵、48年9月13日からは法華経講義の第7期生として、毎週月曜・水曜・金曜の3回、5カ月間かかさず受講した（翌49年2月5日に終講）³⁶。池田は、講義から受けた感動を次のように記している。

ああ、甚深無量なる、法華経の玄理に、遭いし身の福運を知る。

戸田先生こそ、人類の師であらん。

（中略）

妙法の徒。吾が行動に恥なきや。吾れ、心奥に迷いなきや。信ずる者も、汝自身なり。祖国を救うのも、汝自身なり。

³³ 『池田全集・第133巻』、125頁。あわせて、『池田全集・第18巻』の157頁を参照。

³⁴ 『価値創造』第1号（創価学会、1946年6月）、6～8頁参照。

³⁵ 池田は、1960年1月12日の日記に「昭和二十二年秋より、ひとり決意して、戸田城聖先生の講義を神田にてうく。真剣なりし。この師のもとならばと、決意一段と固まる」（『池田全集・第37巻』、503頁）と記している。あわせて、『池田全集・第22巻』の88頁、『価値創造』第11号（創価学会、1947年11月）の8頁、『価値創造』第16号・第3回総会特輯号（1948年11月）の16頁、などを参照。

³⁶ 「法華経講義修了者名簿」、池田大作「戸田先生 法華経講義の感想」（『大白蓮華』第167号、創価学会、1965年4月）の30～33頁、『池田全集・第133巻』の127頁、などを参照。

宗教革命、即、人間革命なり。かくして、教育革命、経済革命あり、政治革命とならん。

(中略)

吾れ、二十台にして、最高に栄光ある青春の生きゆく道を知る。(1948年9月13日の手記)³⁷

戸田の法華経講義は、經典の訓詁注釈ではなかった。獄中における悟達に基づいた、受講者一人一人の生き方の変革(人間革命)を促すもので、その感動は、池田の全身を貫くものとなった。

(2) 池田の日本正学館入社から少年雑誌休刊まで(1949年1月～49年12月)

池田は、1949年1月に、戸田が経営する日本正学館に入社。月刊少年雑誌『冒険少年』の編集を担当し、それまで戸田が行ってきた作家や画家への原稿依頼や受け取りなども担うことになった。多忙な作家や画家たちから執筆の了解をもらうことや締め切りまでに原稿・画稿を受け取るとは、何かと気苦労が多い。作家や画家たちとの人間関係が大事になる。それを、21歳の池田に託したのである。そして、入社半年後には、池田を編集長に抜擢している³⁸。

池田は、入社以降に受けた薫陶を次のように記している。

思えば、私が戸田先生の会社に勤めたのは、昭和24(1949)年1月3日からだった。満21歳の誕生日を迎えたばかりである。それからの十年間というもの、先生の訓練は厳しかった。毎日のように私に対する薫陶は続いた。

毎朝、仕事の前には先生じきじきの個人教授がなされた。『御書』を拝しての指導は当然として、人文・自然・社会科学など万般にわたる勉強だった。(1992年、月刊誌『第三文明』に連載された「続・若き日の読書」)³⁹

恩師の出版社で初めて任された仕事が、『冒険少年』(のち『少年日本』と改題)という少年雑誌の編集でした。21歳のときです。

プランから原稿依頼、編集作業から校正まで、一人でやりました。予定していた原稿が間に合わず、雑誌に「穴」があきそうなときは、自分で書きました。要するに必要に迫られたわけですが、本格的に文章に取り組みはじめたのは、このときです。また当時、戸田先生に厳しく文章を鍛えていただいた経験は、私の生涯の財産です。(1998年、金庸との対談『旭日の世紀を求めて』)⁴⁰

³⁷ 前出、「戸田先生 法華経講義の感想」、31頁。掲載されている感想は、①法華経講義第7期が開講された1948年9月13日、②48年12月末日、③第7期の「卒業式」が行われた49年2月11日の3日分。

³⁸ 『評伝 戸田城聖』下巻の59～63頁、池田大作『御書と青年』(聖教新聞社、2012年)の31～32頁、『池田全集・第73巻』の16～17頁、などを参照。

³⁹ 池田大作「続・若き日の読書 第1回」(『第三文明』第369号、第三文明社、1992年1月)、11頁。『池田全集・第23巻』の251頁に収録。

⁴⁰ 金庸／池田大作『旭日の世紀を求めて』(潮出版社、1998年)、128～129頁。

この時期池田は、雑誌編集を通して戸田から薫陶を受けている⁴¹。なお、たびたび池田は、十年間毎朝、戸田から教えてもらったと述べているが⁴²、戸田の逝去（1958年4月）から逆算すると、1949年1月の日本正学館入社の中から始業前の教育が行われていたことになる。しかし、「約十年の間、毎朝」「十年近くにわたって、毎朝のように」という表現があることと、以下述べる始業前の講義が始まった経緯から、朝に講義が行われるようになるのは、1950年1月以降ではないかと考えられる。

(3) 戸田が経営する東京建設信用組合⁴³の業務開始から停止まで（1950年1月～50年8月）

1949年12月、池田が編集長をしていた『少年日本』が休刊になり、残っていた社員は、同じ建物で営業を始める東京建設信用組合で働くことになった。しかし、1949年3月から始まった金融引き締め政策（いわゆる「ドッジ・ライン」）によって、多くの中小事業者が倒産する中で、開業は、相当の困難が予想されていた。1950年の正月、戸田は、そのことを池田に説明し、「仕事も忙しくなるので、ついては夜学の方も断念してもらえぬか。そのかわり、私が責任もって個人教授しよう」と話している⁴⁴。

池田は、大世学院に通うことを断念する。そして、戸田を支えることに専念した。一方戸田は、池田との約束を守り、休日を使って個人教授を開始。さらに、始業前にも時間を取るようになり、1950年には池田に対し五大部⁴⁵と呼ばれる重要御書の講義を行っている⁴⁶。池田は次のように語っている。

私自身、ほとんどの教育を、私の人生の師・戸田城聖の個人教授から受けました。

約十年の間、毎朝、そして、日曜日は朝から一日中、個人教授を恩師から一対一で、歴史、文学、哲学、経済、科学、組織論等々、万般にわたって受けたのであります。（1996年、コロンビア大学での講演）⁴⁷

⁴¹ 『池田全集・第18巻』の107～108頁、『池田全集・第98巻』の404頁、『池田全集・第126巻』の196・389・484頁、『池田全集・第135巻』の28～29頁、などを参照。

⁴² たとえば、学生部結成の日首都圏記念大会へのメッセージでも、「君たちは通常、4年間の大学時代である。私は、10年間の戸田大学の学生であった」（『聖教新聞』2006年7月1日付1面）と記している。

⁴³ 東京建設信用組合の淵源は、1921年4月28日に設立された「城東建築信用購買利用組合」。その後一度名称変更があり、1949年1月頃に再度「東京建設信用購買利用組合」へ変更された後、専務理事になった戸田によって「東京建設信用組合」に改組された（『評伝 戸田城聖』下巻、91・108～109・444頁参照）。

⁴⁴ 前出、「私の履歴書⑨」参照。あわせて、『池田全集・第59巻』の296～297頁を参照。

⁴⁵ 「五大部」は、日蓮の遺文の中で特に重要とされる「立正安国論」「開目抄」「如来滅後五五百歳始観心本尊抄」「撰時抄」「報恩抄」のこと（前出、『教学用語集』、110頁参照）。

⁴⁶ 座談会「池田会長に聞く学会伝統の『実践の教学』」（『聖教新聞』1962年10月18日付）の4面、『聖教新聞』1952年3月10日付2面、『池田全集・第130巻』の262頁、などを参照。池田は、「〔戸田〕先生は、第二代会長に就任される前、事業が窮地にあったころから、生命を削るようにして、私に御書を教えてくださいました」（『池田全集・第130巻』、284頁）と記している。

⁴⁷ 『池田全集・第101巻』、427頁。

私は、若き日、十年近くにわたって、毎朝のように、戸田先生の個人教授を受けました。(1999年、
韓国・清道郡「^{チョンド}名誉郡民証」授与式)⁴⁸

また、1950年春頃から51年4月頃にかけて、幹部数十人に対して「御義口伝」⁴⁹の講義が行われている。池田は「師のもとで、私が教学を学び始めた時、まず『御義口伝』から入ったのである」⁵⁰と述べている。参加対象でなかった彼も、聴講していた⁵¹。

(4) 東京建設信用組合の業務停止に伴う戸田の創価学会理事長辞任から会長就任まで（1950年8月～51年5月）

戸田は、東京建設信用組合の経営状態が悪化したため、窮余の一策として、大蔵省に他の組合との合併の斡旋を申請した。ところが、意に反して1950年8月22日に同省から届いたのは、業務を停止せよとの通達であった（翌日から業務停止）⁵²。彼は、創価学会の会員に動揺が及ぶことを危惧し、8月24日に同会理事長を辞任する。

同年11月から戸田は、最悪の事態（東京建設信用組合の専務理事である彼が、経営責任を問われて刑事告発されること）も想定して⁵³、池田を含む信頼する7人に対し、1950年秋から日曜日に御書などの講義を行うようになった（51年春まで）⁵⁴。さらに戸田は、1950年11月にホオ

⁴⁸ 『池田全集・第90巻』、236頁。

⁴⁹ 「御義口伝」は、日蓮が身延（現在の山梨県南部）で行った法華経要文の講義を弟子の日興が筆録したものと伝えられている（前出、『教学用語集』、40頁参照）。

⁵⁰ 『池田全集・第132巻』、278頁。

⁵¹ 池田は、研究座談会「教学を身につけよう」の中で、「あの時の御義口伝受講者数十名のうちに、私は入っていなかったのですよ、まだ。入っていないけれども、聴きに行っちゃえって行って、聴いたのですよ」と語っている（『大白蓮華』第55号、創価学会、1955年12月、38頁参照）。あわせて、『池田全集・第36巻』の58・125・219・231・246頁、『聖教新聞』1951年5月1日付1面の記事「支部改廃成る」、などを参照。池田は、1950年5月17日には「方便品八箇の大事」の「第三唯一大事因縁の事」、1951年3月2日には「信解品六箇の大事」の「第六世尊大恩の事」、同年3月23日には菓草喩品等の講義に出席したと日記に書いている。

⁵² 池田は、「[1950年]8月の業務停止から間もなく、給料は遅配から半額支払いになり、やがて無配となっていった」（前出、「私の履歴書⑨」）と記している。

⁵³ 『池田全集・第100巻』、300頁参照。

⁵⁴ 『池田全集・第36巻』の156～157・187～188・200～201頁、『池田全集・第134巻』の134～135頁、前出の『大白蓮華』第55号の37頁、戸田のもとで女子部長・秘書などを務めた山浦千鶴子の手記と聞き取り、などによる。戸田は、「三重秘伝抄」「草木成仏口決」「一生成仏抄」「生死一大事血脈抄」「三世諸仏総勘文教相廢立」「当体義抄」「松野殿御返事」「総在一念抄」などを講義した。池田は、「師は日曜日になると、ご自宅で個人教授をしてくださっていた。『戸田大学』である。秋からの御書の講義も、その講座の一つとなったのである」（『池田全集・第134巻』、134頁）と述べている。

ル・ケエン『永遠の都』⁵⁵、同年12月にユーゴー『九十三年』⁵⁶を池田に渡し、読むように言っている⁵⁷。

翌1951年2月、戸田は、信用組合の整理がまだまだ予断を許さない中、池田が推薦した青年男子⁵⁸14人に、『永遠の都』を回し読みさせ、感想発表会をもっている。その後、彼らに対し、御書講義を行うようになった⁵⁹。また、青年女子15人に対しても、同じ頃から、『永遠の都』・『九十三年』・太宰治『走れメロス』などを教材に、読書会を始めている⁶⁰。

このように、この頃の戸田の池田への薫陶は、個人教授だけではなく、何人かと一緒に行うことで、同じ心で行動できるグループを作ろうとしている。この方式は、その後の水滸会や華陽会に引き継がれた⁶¹。

(5) 戸田の創価学会会長就任から逝去まで（1951年5月～58年4月）

a. 1951年5月頃から52年4月まで始業前の講義を池田一人に対して行う

1951年5月頃から、戸田の池田に対する始業前の講義の教材が、御書から教養書に変わったようである。池田へのインタビューを行った草柳大蔵は、戸田から受けた個人教授の教材だと聞

⁵⁵ 戸田が池田に渡したのは、ホオル・ケエン著／戸川秋骨訳『永遠の都』（世界大衆文学全集・第39巻、改造社、1930年）。同書については、『池田全集・第57巻』の296頁、『池田全集・第78巻』の153～158頁、『池田全集・第81巻』の50～52頁、『池田全集・第89巻』の140～141頁、『池田全集・第131巻』の106～109頁、などを参照。

⁵⁶ 戸田が池田に渡したのは、ユーゴー著／早坂二郎訳『九十三年』（世界大衆文学全集・第17巻、改造社、1928年）。

⁵⁷ 『池田全集・第22巻』の92～93頁、および、池田の旧蔵図書の書き込みによる。池田は、『永遠の都』に、「恩師戸田先生ヨリ戴く 永遠ノ弟子ノ書也 昭和二十五年十一月三日 池田大作」「昭和二十五年十二月一日 読了決意新た也」と。『九十三年』には、「昭和二十五年十二月 恩師戸田先生ヨリ 給わりし本也」と記している。池田は、1951年1月13日の日記に、「革命の大叙事詩、小説家ヴィクトル・ユゴーの『九十三年』完読。感多し」（『池田全集・第36巻』、186頁）とつづっている。なお、戸田は、51年5月3日の会長就任の日にも、池田に『九十三年』を手渡している。あわせて、『池田全集・第60巻』の423頁を参照。

⁵⁸ 戸田の会長就任前には、男子青年部、女子青年部という区別はなかった。1951年5月に男子部長・女子部長が任命され、同年7月に両部が結成された。

⁵⁹ 『池田全集・第131巻』、106～107頁参照。戸田は、「三大秘法稟承事」「諸法実相抄」「四信五品抄」「佐渡御書」などを講義した（『池田全集・第36巻』の211～212・218・224・254・275頁、および、前出の『大白蓮華』第55号の37頁を参照）。

⁶⁰ 『評伝 戸田城聖』下巻、142～143頁の注(16)参照。

⁶¹ 「水滸会」と「華陽会」については、本節の(5)c.で詳述。

いた 21 冊の書名を挙げている⁶²。そのうち、以下の 6 冊はこの時期に使われたのではないかと推測される。

尾高朝雄『法学概論』、国家学会『新憲法の研究』、林信雄『日本労働法』、太田哲三『会計学』、高田保馬『社会学概論』、一柳寿一『地学概論』

そのほかに、和田小次郎『法学原論』が使われたと考えられる⁶³。

b. 1952 年 5 月からの大蔵商事の始業前講義に他の社員も同席して行う

戸田が会長に就任した翌年、大蔵商事に青年男子数人が採用される。それまで池田一人に対して行ってきた始業前の講義に、1952 年 5 月 8 日から、彼らも参加することになった⁶⁴。この講義で使われた主な教材は、以下の通り⁶⁵。

波多野鼎『経済学入門』、林信雄『法学概論』、F・S・テラー著／白井俊明他訳の『化学』⁶⁶『地球と天体』⁶⁷『生命』、小沢栄一他編『資料日本史』⁶⁸、矢田俊隆『世界史』、中西清他編『改訂高等漢文』巻二⁶⁹、

⁶² 草柳大蔵『実力者の条件』（文藝春秋、1970 年）の 224～225 頁などを参照。初出は、草柳大蔵「手づくり人間、池田大作」（『文藝春秋』第 47 巻第 10 号、文藝春秋、1969 年 9 月）の 166～167 頁。草柳は、「矢田俊隆『世界史』、熊谷幸次郎〔等編〕『日本史一概説と問題点』、尾高朝雄『法学概論』、鶴飼信成『憲法』、国家学会〔編〕『新憲法の研究』、ジョン・ゴラン『イギリスの政治制度』、林信雄『日本労働法』、鈴木安蔵『政治学』、高田保馬『経済学原理』、波多野鼎『経済学入門』、太田哲三『会計学』、高田保馬『社会学概論』、一柳寿一『地学概論』、青野寿郎『人文地理〔学〕研究』、白井俊明〔訳／テラー著〕「新科学大系」に収録されている『物質〔のすがた〕』・『動力〕〔上・下〕』・『波』・『化学』・『生命』・『地球と天体』、それに副読本としてガモフ全集（前出、『実力者の条件』の 224～225 頁による）と記している。〔 〕内は、筆者による補足。ガモフ全集については、『池田全集・第 91 巻』の 82 頁および『池田全集・第 133 巻』の 343 頁を参照。

⁶³ 創価大学中央図書館の池田文庫所蔵の和田小次郎『法学原論』（啓文館、1948 年）には、「六月二十三日」と「七月七日」の書き込みがある。このことと、大蔵商事の元社員がまとめた記録、および、池田大作『若き日の日記』（『池田全集・第 36 巻』に収録）などを参照して、『法学原論』は、1951 年の 6 月頃から 7 月頃に、池田への朝の講義で使われたものではないかと推定される。

⁶⁴ 『池田全集・第 130 巻』、262 頁参照。

⁶⁵ 池田とともに大蔵商事の始業前の講義を受講した元社員有志がまとめた「戸田先生の『早朝講義』の記録」による。それぞれの教材が使われた時期については、『評伝 戸田城聖』下巻の 242～244 頁注(22)を参照。書名は、教材となった順に掲載。

⁶⁶ 『池田全集・第 134 巻』、154～155 頁参照。

⁶⁷ 『池田全集・第 130 巻』、270～273 頁参照。戸田は、「これからは天文学の教育に力を入れるべきである。学校でも社会でも天文学を学ぶことで、平和を愛する心を培うことができるのだ」と語っていたという（『池田全集・第 133 巻』、343 頁参照）。

⁶⁸ 『池田全集・第 134 巻』、55～56 頁参照。

⁶⁹ 『池田全集・第 90 巻』の 266～267 頁、『池田全集・第 91 巻』の 290～293 頁、『池田全集・第 130 巻』の 249～251・357～358 頁、『池田全集・第 131 巻』の 454 頁、などを参照。

鈴木安蔵『政治学』⁷⁰、「依義判文抄第三」⁷¹

大蔵商事の元社員がまとめた記録などによれば、始業前の講義（午前8時30分から9時まで）⁷²は、その後、戸田の健康上の理由で中断。1957年9月頃、戸田は、再開したいと言っていたが、実際に再開できたかどうかは明らかではない。なお、同記録には、55年11月14日に始まった「依義判文抄」以降の教材については記されていない⁷³。

c. 1952年12月に男子青年部の代表で結成された水滸会

水滸会は、1951年7月の男子青年部結成後、今後の創価学会を担う青年男子を育成するために52年12月に発足した。途中から池田が実質的な幹事役になり、月1、2回開催された。教材となった小説⁷⁴は、以下の通り。そのほかに、時事問題などがテーマになることもあった⁷⁵。

佐藤春夫訳『新訳水滸伝』⁷⁶、アレクサンドル・デュマ『モンテ・クリスト伯』⁷⁷、尾崎士郎『風霜』⁷⁸
 （後に『高杉晋作』と改題）、村松梢風『風と波と』⁷⁹、ヴィクトル・ユゴー『九十三年』⁸⁰、ダニエル・

⁷⁰ 池田は、「『戸田大学』の政治学の授業で、恩師は、かのプラトンの『哲人政治』の理想についても熱く語ってくれました」（『池田全集・第90巻』、236～237頁）と述べている。

⁷¹ 「依義判文抄第三」は、大石寺の26世日寛（1665～1726年）の6つの論考を集めた「六卷抄」の一つ。当時創価学会では、同抄のほか、「三重秘伝抄第一」「文底秘沈抄第二」「末法相应抄第四」「当流行事抄第五」を学んでいた。

⁷² 講義の時間帯は、受講者の一人である吉田顕之助の手記による（『評伝 戸田城聖』下巻、220頁参照）。

⁷³ 大蔵商事の元社員がまとめた記録、「全国最高協議会での名誉会長のスピーチ②」（『聖教新聞』2007年8月9日付）の3面、池田大作『希望の経典「御書」に学ぶ 1』（聖教新聞社、2011年）の35頁、などを参照。なお戸田は、1956年9月5日に大蔵商事からの引退を宣言している（『池田全集・第37巻』、71頁参照）。その後も、同社に出勤していたかどうかは不明。

⁷⁴ 池田は、「戸田先生は、よく私ども青年に『偉大な世界的小説を読み。徹底して勉強せよ』と厳しく指導された。『御書の拝読は当然として、そのうえで、人類の偉大な思想的遺産は、みな仏法に通じ、仏法を証明しゆく糧となる』とも言われていた」（『池田全集・第70巻』、257頁）と記している。

⁷⁵ 2020年に行った秋谷栄之助からの聞き取りなどによる。書名は、教材となった順に掲載。なお、秋谷によれば、教材は水滸会の出席者が選んだとのことである。秋谷は、創価学会第5代会長。戸田のもとで、男子部長などを務めた。

⁷⁶ 『池田全集・第16巻』の406～407頁、『池田全集・第87巻』の299頁、王蒙／池田大作『未来に贈る人生哲学 文学と人間を見つめて』（潮出版社、2017年）の235・247～250頁、などを参照。

⁷⁷ 『池田全集・第16巻』の201～204頁、『池田全集・第23巻』の154～164頁、『池田全集・第72巻』の149頁、『池田全集・第86巻』の258～260頁、『池田全集・第90巻』の232～233頁、『池田全集・第92巻』、228～232頁、『池田全集・第119巻』の112～113頁、『池田全集・第133巻』の75～77頁、『池田全集・第135巻』の476頁、などを参照。

⁷⁸ 『池田全集・第23巻』、117～123頁参照。

⁷⁹ 『池田全集・第139巻』、199頁参照。

⁸⁰ 池田大作『人間と文学を語る ロマン派の詩人ヴィクトル・ユゴーの世界』（潮出版社、1991年）の84頁、『池田全集・第23巻』の237・240～243・246頁、『池田全集・第76巻』の402～403頁、『池田全集・第78巻』の210～211頁、『池田全集・第127巻』の247・250頁、『池田全集・第137巻』の90～91頁、などを参照。

デフォー『ロビンソン・クルーソー』⁸¹、ニコライ・ゴーゴリ『隊長ブーリバ』⁸²、ヘンリク・イブセン『人形の家』⁸³、吉川英治『三国志』⁸⁴、吉川英治『新書太閤記』

水滸伝と三国志は、戸田が十代の頃から親しんできた長編小説⁸⁵。中国を舞台に多くの人物が描かれている。水滸会では、上記の教材をもとに人物論などについて意見を交わし、その後戸田が講評を加えている⁸⁶。

なお、水滸会と並行して女子青年部の代表で華陽会が結成されている。1952年10月に20名の女子青年部員で結成された同会は、水滸会と同じく戸田が出席して月1、2回開催。以下の小説が、教材になった⁸⁷。

チャールズ・ディケンズ『二都物語』、ハリエット・ピーチャー・ストウ『アンクル・トムス・ケビン』、マーク・トウェイン『トム・ソーヤの冒険』、尾崎士郎『風霜』、ラファエル・サバチニ『スカラムーシュ』、夏目漱石『坊っちゃん』、フランシス・ホジソン・バーネット『小公子』⁸⁸、ヘンリク・イブセン『人形の家』、ニコライ・ゴーゴリ『隊長ブーリバ』、趙樹里『結婚登記』、趙樹里『家宝』、トマス・ハーディ『テス』、吉川英治『三国志』、坂口安吾『信長』、エドワード・ブルワー・リットン『ボンベイ最後の日』、ルイーザ・メイ・オルコット『若草物語』⁸⁹

⁸¹ 『池田全集・第23巻』、169～173頁参照。

⁸² 『池田全集・第23巻』の318～319・325～329頁、『池田全集・第71巻』の225頁、『池田全集・第91巻』の412・430頁、などを参照。

⁸³ 『池田全集・第23巻』の420～421頁、『池田全集・第87巻』の26頁、『池田全集・第119巻』の419頁、J・U＝サイフェルト／池田大作『生命の光 母の歌』（聖教新聞社、2015年）の154～156頁、などを参照。

⁸⁴ 戸田は、青年たちに「『三国志』は、人間指導者の最良の教科書であると思って学びたまえ」と語っていたという（『池田全集・第137巻』、339頁参照）。そのほか、『池田全集・第16巻』の268・273・278～279頁、『池田全集・第23巻』の135～142頁、『池田全集・第60巻』の334頁、『池田全集・第95巻』の39・49頁、『池田全集・第97巻』の213・406～408頁、『池田全集・第99巻』の65～67頁、『池田全集・第100巻』の105～106・344頁、『池田全集・第119巻』の266～267・285・304～305頁、『池田全集・第134巻』の141頁、『池田全集・第138巻』の395～396頁、『池田全集・第139巻』の140～141頁、前出の『旭日の世紀を求めて』の414頁、前出の『未来に贈る人生哲学』の208・217頁、などを参照。

⁸⁵ 『評伝 戸田城聖』上巻、48頁参照。

⁸⁶ 『評伝 戸田城聖』下巻、225～228頁参照。

⁸⁷ 華陽会の会員が作成した『華陽会集録』（1959年作成）などによる。書名は、教材となった順に掲載。

⁸⁸ 『池田全集・第98巻』、391～392頁参照。

⁸⁹ 『池田全集・第100巻』の145頁、および、サーラ・ワイダー／池田大作『母への讃歌 詩心と女性の時代を語る』（潮出版社、2013年）の117～118頁を参照。

4. 戸田による日々の薫陶

(1) 寸暇を惜しんでの薫陶

戸田は、時間を惜しんで、池田を育てようとした。池田は、「先生にお供して移動する際も、飛行機の中でも、車の中でも、あらゆるところが『戸田大学』の校舎になった」⁹⁰、「私はよく先生とともに旅をした。飛行機の中でも、電車の中でも、次々と質問が飛んできた。先生は、そうして私を鍛えてくださった」⁹¹と述べている。さらに、次のようにも語っている。

車中、戸田先生は、お疲れでありながら、休みもせず、あらゆる角度から、哲学の話、世界の指導者の話、牧口先生の話、そして、これからの学会の前途に対する諸注意等々、それこそ息つく暇もなく語ってくださった⁹²。

戸田先生と出会ってからは、それこそ、毎日のように、「今日は何を読んだか」「何が書いてあったか」と聞かれ、心も頭も鍛えていただきました。

恩師は、口癖のように言われていました。

「仏法を信じているからといって、独善的になってはならない。あらゆる学問、あらゆる文学、あらゆる一流の思想家たちの持論・論調を真摯に勉強することが大事である。それによって、さらに仏法も理解できる」と⁹³。

「大作、今日は何を読んだ」と、何度も何度も、いつもいつも聞かれた。厳しかった。鋭かった。怖かった。

師をお護りし抜く、激しい戦いの渦中である。もとより、読書に専念する時間はない。

師とお会いする時は、何を讀んだか、そこから何を得たのかを答えることが、苦痛でさえあった⁹⁴。

このような池田への薫陶は、戸田が逝去する前月の1958年3月まで続いた⁹⁵。

(2) 書物や歴史上の人物を通じた語り合い

池田の随筆やスピーチには、戸田と書物を通して語り合った話がたびたび出てくる。池田は、

⁹⁰ 『聖教新聞』2006年8月26日付3面。あわせて、前出の『御書と師弟 1』の31頁、『池田全集・第30巻』の281・400頁、『池田全集・第132巻』の204～206・213頁、などを参照。

⁹¹ 『池田全集・第96巻』、381頁。

⁹² 『池田全集・第135巻』、231頁。

⁹³ ミハイル・ズグロフスキー／池田大作『平和の朝へ 教育の大光一ウクライナと日本の友情』（第三文明社、2011年）、60～61頁。あわせて、『池田全集・第131巻』の105～106頁を参照。

⁹⁴ 『池田全集・第138巻』、210～211頁。

⁹⁵ 『池田全集・第99巻』、26～27頁参照。

次のように語っている。

教育者でもあった牧口先生、戸田先生は、『エミール』をはじめ、ルソーの書を愛読されていた。私も、戸田先生と、幾度となく『エミール』について語りあった。

昭和25年のことであつたと思う。戸田先生と小岩のあるお宅を訪れた。その帰路、小岩駅前でおすしを御馳走になり、帰りの車中で『エミール』や文学について、種々、語りあった。そして、目黒駅まで先生をお送りしたことを懐かしく思い起こす⁹⁶。

私が青春時代に読んだ本は、なぜかトルストイが多かつた。たまたま、戸田先生から「今日は、トルストイの何を読んでいるのか」と、車中で聞かれた時は嬉しかった。

その時、お答えしたのがトルストイの『読書の輪』であつた。(中略)先生は笑顔で頷いてくださった⁹⁷。

戸田と池田の間で話題になつた主な書物や人物(大蔵商事の始業前の講義と水滸会の教材および『永遠の都』を除く)は以下の通り。

ルソー『エミール』、ラファエル・サバチニ『スカラムーシュ』⁹⁸、ハイネ『ドイツ・冬物語』⁹⁹、ユゴー『レ・ミゼラブル』¹⁰⁰、ダンテ『神曲』¹⁰¹、ヒルティ『幸福論』¹⁰²、『十八史略』¹⁰³、『史記』¹⁰⁴、吉川英治『新・平家物語』¹⁰⁵、吉川英治『黒田如水』¹⁰⁶のほか、エマーソン¹⁰⁷、シラー¹⁰⁸、ショーペンハ

⁹⁶ 『池田全集・第68巻』、113頁。『エミール』については、1950年10月2日の日記(『池田全集・第36巻』の129～130頁に収録)、『池田全集・第23巻』の144・153頁、『池田全集・第69巻』の466～467頁、『池田全集・第87巻』の405～406頁、『池田全集・第138巻』、415～417頁、なども参照。

⁹⁷ 『池田全集・第136巻』、251頁。

⁹⁸ 『池田全集・第23巻』の177頁、および、『池田全集・第72巻』の260頁を参照。

⁹⁹ 『池田全集・第86巻』、163頁参照。

¹⁰⁰ 『池田全集・第23巻』の130頁、『池田全集・第78巻』の210～211頁、『池田全集・第143巻』の315頁、前出の『旭日の世紀を求めて』の382頁、シャルル・ナポレオン／池田大作『21世紀のナポレオン 歴史創造のエスプリ(精神)を語る』(第三文明社、2011年)の284頁、などを参照。

¹⁰¹ 『池田全集・第100巻』、162～163頁参照。

¹⁰² 『池田全集・第135巻』の73～74頁、および、『池田全集・第137巻』の151頁を参照。

¹⁰³ 『池田全集・第23巻』の251頁、『池田全集・第69巻』の396頁、『池田全集・第75巻』の150頁、『池田全集・第100巻』の333～334頁、『池田全集・第137巻』の132頁、顧明遠／池田大作『平和の架け橋 人間教育を語る』(東洋哲学研究所、2012年)の75～76頁、などを参照。

¹⁰⁴ 『池田全集・第23巻』、251頁参照。

¹⁰⁵ 『池田全集・第68巻』、191頁参照。

¹⁰⁶ 『池田全集・第137巻』、390頁参照。

¹⁰⁷ 『池田全集・第23巻』の392頁、『池田全集・第86巻』の296頁、『池田全集・第90巻』の268頁、『池田全集・第100巻』の183頁、などを参照。

¹⁰⁸ 『池田全集・第98巻』、403頁参照。

ウアー¹⁰⁹、ソクラテス¹¹⁰、ツバイク¹¹¹、ディケンズ¹¹²、トルストイ¹¹³、ヒルティ¹¹⁴、ペスタロッチ¹¹⁵、モンテスキュー¹¹⁶、ルソー¹¹⁷、孫子¹¹⁸、杜甫¹¹⁹、山本周五郎¹²⁰、などの作品、アインシュタイン¹²¹、グルントヴィイ、コル¹²²、タゴール¹²³、ダ・ビンチ¹²⁴、ナポレオン¹²⁵、ネルー¹²⁶、ベルジャエフ¹²⁷、ホイットマン¹²⁸、カーライル¹²⁹、ゲーテ¹³⁰、ディズレーリ¹³¹、プラトン¹³²、ベルグソン¹³³、ユゴー¹³⁴、周恩来¹³⁵、諸葛孔明¹³⁶、孫文¹³⁷、田中正造¹³⁸、北里柴三郎¹³⁹、高山樗牛¹⁴⁰、吉田松陰、高杉晋作¹⁴¹の人物についてなど

- ¹⁰⁹ 『池田全集・第67巻』、226頁参照。
- ¹¹⁰ 『池田全集・第136巻』、67頁参照。
- ¹¹¹ 『池田全集・第138巻』、214～215頁参照。
- ¹¹² 前出、『未来に贈る人生哲学』、168頁。
- ¹¹³ 『池田全集・第97巻』の351～352頁、『池田全集・第131巻』の209～211頁、『池田全集・第143巻』の137頁、などを参照。
- ¹¹⁴ 『池田全集・第135巻』、73頁参照。
- ¹¹⁵ 『池田全集・第94巻』、467頁参照。
- ¹¹⁶ 『池田全集・第138巻』、220頁参照。
- ¹¹⁷ 『池田全集・第23巻』の278～279頁、『池田全集・第92巻』の413頁、『池田全集・第94巻』の281頁、などを参照。
- ¹¹⁸ 『聖教新聞』2006年8月26日付3面参照。
- ¹¹⁹ 『池田全集・第134巻』、447～448頁参照。
- ¹²⁰ 『池田全集・第85巻』、422頁参照。
- ¹²¹ 『池田全集・第21巻』の124～125・133頁、『池田全集・第57巻』の163頁、『池田全集・第72巻』の549頁、『池田全集・第138巻』の193頁、などを参照。
- ¹²² グルントヴィイとコルについては、ハンス・ヘニングセン／池田大作『明日をつくる`教育の聖業。ーデンマークと日本 友情の語らいー』（潮出版社、2009年）の16頁を参照。
- ¹²³ 『聖教新聞』2006年5月30日付3面参照。
- ¹²⁴ 『池田全集・第131巻』、213～215頁参照。
- ¹²⁵ 『池田全集・第128巻』、127～128頁参照。
- ¹²⁶ 『池田全集・第57巻』の270頁、『池田全集・第79巻』の463頁、『池田全集・第88巻』の64～65頁、『池田全集・第130巻』の241～242頁、などを参照。
- ¹²⁷ 『池田全集・第131巻』、207頁参照。
- ¹²⁸ 『池田全集・第130巻』の252～253頁、『池田全集・第138巻』の277頁、前出の『母への讃歌』の306頁、などを参照。
- ¹²⁹ 『池田全集・第138巻』、222頁参照。
- ¹³⁰ 『池田全集・第132巻』の213頁、および、『池田全集・第138巻』の225頁を参照。
- ¹³¹ 『池田全集・第136巻』、401頁参照。
- ¹³² 『池田全集・第133巻』、61頁参照。
- ¹³³ 『池田全集・第132巻』、205頁参照。
- ¹³⁴ 『池田全集・第132巻』の205頁、および、『池田全集・第136巻』の74～83頁を参照。
- ¹³⁵ 『池田全集・第88巻』、64～65頁参照。
- ¹³⁶ 『池田全集・第90巻』の298頁、および、『池田全集・第100巻』の105～106頁を参照。
- ¹³⁷ 『池田全集・第135巻』、202頁参照。
- ¹³⁸ 『池田全集・第88巻』、287頁参照。
- ¹³⁹ 『池田全集・第73巻』、498頁参照。
- ¹⁴⁰ 『池田全集・第23巻』、87頁参照。
- ¹⁴¹ 吉田松陰と高杉晋作については、『池田全集・第60巻』の416頁、『池田全集・第62巻』の326頁、『池田全集・第85巻』の170頁、『池田全集・第132巻』の251頁、『池田全集・第138巻』の122・334～341・343～349頁、『池田全集・第139巻』の101頁、などを参照。

戸田の池田への個人教授は、一方的な知識の伝達ではなく、対話によって学び合う知恵の啓発であった¹⁴²。池田は、次のように記している。

恩師は「君は若いのだから、学んだことを私に話せ。知っていることは何でも話さない」と言われていた。現代は情報戦である。社会の情勢、新しい知識に鋭敏でなければ指導者として失格である、とのお心であろう。「話さない者は、敵だよ」とまで厳しく言われていた。

ゆえに私も必死であった。日々の新聞はもとより、さまざまな分野の書物をむさぼるように読んでは、学んだこと、感じたことを、そのつど、先生にお話したものである¹⁴³。

1953年頃の池田について、曾根原敏夫が次のように記している。当時池田は、男子青年部第一部隊長。

当時、私は男子部班長¹⁴⁴として活動していました。先生〔＝池田〕が会合などで、毎回のように激励されていた内容は、歴史、科学、小説、詩、哲学など、社会全般にわたる書物から引用されたものでした。

昼は仕事に夜は活動に多忙を極めるなか、しかも男子部のメンバーに、激励の和歌やメッセージを贈られるなかでのことです。

私は失礼と思いつつ「部隊長はいつ勉強されるのですか？」と質問したことがあります。その時、先生は「私の話していることはすべて戸田先生から教えていただいたことだよ」と話されました。

戸田先生から学んだことを、命に刻まれておられるから、原稿なしで話せるのだな、と大変に感動したものです¹⁴⁵。

(3) 戸田と池田の「詩心、の交流

戸田と池田の間は、詩歌・漢詩などを話題にした語らいがあった¹⁴⁶。二人は、感謝や決意を詩歌に託して交換している¹⁴⁷。信用組が業務停止となり、「お金もない、人もいない、まったく、どん底」にあった戸田が、ふとそばにあった一輪の花を取り、まるで「勲章、のように池田の胸元に挿したことがあったという。これらは、二人に「詩心、がなければ生まれないエピソードで

¹⁴² ブラジル・ベルナンブコ連邦大学「名誉博士号」授与式における池田大作の謝辞（『聖教新聞』2021年12月7日付）、3面参照。

¹⁴³ 『池田全集・第126巻』、372～373頁。あわせて、『池田全集・第96巻』の380頁を参照。

¹⁴⁴ 1953年頃の男女青年部の編成は、部長・部隊長・班長・隊長・分隊長・部員。

¹⁴⁵ 『聖教新聞』1999年12月26日付7面。

¹⁴⁶ 『池田全集・第99巻』、370頁参照。1959年1月に池田が北海道を訪れた時、同行した青年たちに、「戸田先生は、詩人でいらっちゃった、と語っている（『聖教新聞』1959年1月23日付5面の「総務ら一行歌の旅」を参照）。

¹⁴⁷ 『評伝 戸田城聖』下巻、98頁・118～119頁の注(48)・131～132頁参照。

ある¹⁴⁸。

戸田は和歌を詠み、会員に励ましの言葉を贈っていた¹⁴⁹。それは、叙景や抒情といった文学作品ではない。池田は、次のように記している。

思えば恩師も、折りにふれて和歌や句を詠まれ、門下に贈られた。よくペンを執られたまま詩想をめぐらされた。書き上がるとメガネをはずされ、紙片に顔をすりつけるようにして推敲しておられたものである。

数学の天才であっても、文学的な技巧という面からいえば、必ずしもプロの素養を身につけられていたわけではない。だが、詩とは「境涯」である。恩師の言々句々には、贈られた者の胸いっぱい広がる愛情があった。その人を奮い立たせずにはおかない、強い強い励ましの心の鼓動があった¹⁵⁰。

池田もまた、折に触れて、会員への励ましを詩歌に託している。彼は、戸田と出会う前から詩を作っていたが、励ましを詩歌に託すことは、戸田の振る舞いから学んでいる¹⁵¹。

(4) 御書講義担当者会・教学部員対象の研究会

戸田は、創価学会の地区などで月2回の御書講義を担当する幹部に対して、事前の勉強会を持っていた。また、教学部員対象の研究会¹⁵²では、担当を決めて発表させたり、戸田から矢継ぎ早に質問したりすることもあった。池田は、地区講義¹⁵³担当者の勉強会とともに、教学部員の研究会に出席している。池田は、次のように記している。

地区講義を担当することになった講師には、私も含めて青年が多かった。

現場第一である。実践第一である。これが、稀有の師であられる戸田先生の、弟子たちに対する訓練であった。

それだけに、先生がしてくださる、担当者への事前の講義は峻厳であった¹⁵⁴。

また池田は、「百六箇抄」について、戸田から一対一の講義を受けている。

¹⁴⁸ 『池田全集・第136巻』、271頁参照。あわせて、デイビッド・クリーガー／池田大作『希望の選択』（河出書房新社、2001年）の172頁を参照。

¹⁴⁹ 『戸田城聖全集・第1巻』（聖教新聞社、1981年）には、337首の和歌が収録されている。

¹⁵⁰ 『池田全集・第126巻』、316頁。

¹⁵¹ 同前、316～317頁参照。

¹⁵² 教学部員による研究会では、日寛の「文段」や「六巻抄」を教材にしている。当時の教学部は、教授・助教授・講師・助師で構成されていた。

¹⁵³ 創価学会では、各支部のもとに地区が置かれている。「地区講義」については、本稿の「7. 創価学会は「校舎なき総合大学。」で詳述。

¹⁵⁴ 『池田全集・第132巻』、129頁。あわせて、前出の『御書と青年』の122～123頁を参照。

〔教学部員の代表に〕百六箇抄とか、御義口伝とか、観心本尊抄とか、そういう課題を先生がお決めくださって勉強させたのです。その時の私の課題が百六箇抄であって、先生のもとへた方に会社を終わってから、いつも勉強に行っておった¹⁵⁵。

「百六箇抄」の講義を受けた時期もあった。

ある日、先生は、横になってお休みであったにもかかわらず、「よし、やろう！」と言われて、快く教えてくださったこともある。

しかし、私に少しでも真剣さが欠けた時には、先生は言下に叱咤された。

「やめた！ 私は機械じゃないんだ」¹⁵⁶

(5) 創価学会の組織のなかで受けた薫陶

池田が戸田から受けた薫陶は、書物を通してだけではなかった。池田には、創価学会のいくつかの役職を兼務させ、その中で厳しく訓練している。創価学会が新しい展開をするための対応や、極めて困難な局面にあえて立たせたりしながら、池田を育てていった¹⁵⁷。代表的なものとして、前者では、参謀室長や渉外部長¹⁵⁸、後者では、参議院議員選挙大阪地方区の責任者に任じたことが挙げられる。

〈付記〉なお、上記以外に、戸田が出席した研究会には、以下のものがあつた。

東京大学法華経研究会

1953年4月18日に数人の東京大学法華経研究会の学生を対象に始まった法華経講義では、戸田が「御義口伝」に基づいて講義した。一方的でなく、学生の質問に一つ一つ丁寧に答えていたため、なかなか先に進まなかったという。55年9月までに26回開催され、55年になると東大以外の学生も参加するようになった。その後、この講義の受講者が、57年6月に結成される学生部の核になっている。なお、池田は多忙であったため、一緒に参加することはなかったという¹⁵⁹。

教育者懇談会

幼稚園から大学までの教員もしくは経験者による「教育者懇談会」（その後「教育者クラブ」と改称）が、1953年6月23日に発足している。この懇談会には、戸田は何度も出席し、同年11月に出版された牧口常三郎著・戸田城聖補訂の『価値論』を研鑽するとともに、それぞれの教育

¹⁵⁵ 前出、座談会「池田会長に聞く学会伝統の「実践の教学。」、4面参照。

¹⁵⁶ 『池田全集・第130巻』、284頁。

¹⁵⁷ 詳細は、『評伝 戸田城聖』下巻を参照。

¹⁵⁸ 『池田全集・第72巻』の304～305頁、『池田全集・第89巻』の192～193頁、『池田全集・第95巻』の100～101・132・354～355頁、『池田全集・第100巻』の297～298頁、などを参照。

¹⁵⁹ 篠原誠「戸田城聖と学生—東大法華経研究会50周年記念—」（『創価教育研究』第2号、創価大学創価教育研究センター、2003年）の177～184頁などを参照。講義を最初から受講した篠原は、池田について「勉強会の終わり頃になってよくお見えになり、『戸田先生から、講義を受けられるのは、大変なことだよ』と、何回も激励を受けたことがございました」（181頁）と語っている。

現場における創価教育学の応用についても話し合われた¹⁶⁰。

5. 民衆救済の「大志」

戸田は、「生き方とは、志のことだよ。人生の深さは、志の深さで決まる」と語っている¹⁶¹。彼が1945年7月に出獄する前年の11月、師である牧口常三郎が獄死した。同じ頃戸田は、獄中での思索の中で、法華経に出てくる地涌の菩薩¹⁶²としての自覚に立つ。さらにその後も思索を重ね、日蓮仏法による民衆救済を自らの使命とした¹⁶³。それを端的に表しているのが、創価学会第二代会長就任式（1951年5月3日）における、戸田の次の発言である。

私が生きている間に七十五万世帯の折伏は私の手です。もし私のこの願いが、生きている間に達成できなかったならば、私の葬式は出してくださるな。遺骸は品川の沖に投げ捨てていただきたい¹⁶⁴。

日蓮仏法による民衆救済の志は、戸田の師である牧口から継承したものであった。太平洋戦争の最中の1943年6月27日、牧口は、所属する日蓮正宗の管長から、軍人主導の政府の宗教政策に創価教育学会¹⁶⁵も迎合するよう求められた。彼は、それを拒絶しただけでなく、たとえ日蓮正宗が弾圧されて滅びるようなことになったとしても、誤った宗教政策を改めるよう政府に諫言すべきであると管長に進言している¹⁶⁶。つまり、牧口は、宗教団体の存続よりも、大事なことがあると考えていたのである。それは、民衆を不幸のどん底に突き落としてはならないということ

¹⁶⁰ 教育者懇談会および教育者クラブの記録が確認できなかったため、参加対象でない池田が、出席していたかどうか明らかでない。

¹⁶¹ 『池田全集・第128巻』、127頁参照。池田は、「大きな「志」は大きな人生をつくります。教育の核心は、その「志」をどう引き出し、力を発揮させるかにあると思っております」（前出、『母への讃歌』、349頁）、「牧口会長と、戸田会長の平和と人道の『大志』が、創価教育に学ぶ青年たちに脈々と受け継がれていることを、私は何よりも心強く思っております」（同前、351頁）と述べている。

¹⁶² 「地涌の菩薩」は、法華経の従地湧出品第15において、釈尊の呼び掛けにこたえて、下方の虚空から湧き出てきた無数の菩薩たちのこと。地涌の菩薩は、如来神力品第21において、釈尊滅後の法華経の流布を託された（前出、『教学用語集』、184頁参照）。あわせて、池田大作『御書と師弟 2』（聖教新聞社、2010年）の60～61頁を参照。

¹⁶³ 戸田城聖「創価学会の歴史と確信（下）」（『大白蓮華』第17号、創価学会、1951年8月）の1～2頁、および、『池田全集・第70巻』の312～313頁を参照。

¹⁶⁴ 『戸田城聖全集・第3巻』（聖教新聞社、1983年）、433頁参照。戸田が会長に就任した頃の創価学会の会員は、3千人ほどであった（「戸田会長推戴賛意署名簿」参照）。池田は次のように述べている。「七十五万世帯達成は、まさに〔戸田〕先生の『出世の本懐』であったと思えてならない。

しかし、先生は、その生涯の願業の成就さえも、一つの通過点にすぎないかのように、瞬時も立ち止まらず、一心に未来を見つめておられた。

この世から『悲慘』の二字をなくすことが、わが師の念願であった」（『池田全集・第130巻』、442～443頁）

¹⁶⁵ 創価教育学会は、1930年11月に牧口と戸田の二人によって設立された。40年10月に牧口が会長、戸田が理事長に就任。42年8月時点の会員は3千人（『評伝 戸田城聖』上巻、235～236・333～334・394頁参照）。

¹⁶⁶ 前出の「創価学会の歴史と確信（下）」の1頁、および、『評伝 牧口常三郎』の423～426頁を参照。

あった¹⁶⁷。

そして、進言からわずか9日後の7月6日、牧口と戸田は特高警察によって検挙されている。その後牧口は、1944年11月に東京拘置所で獄死。戸田は、同拘置所で2年間の獄中生活を送ることになる。

戸田城聖、さらには、後継者となった池田大作を理解していく上で、戸田の心中にあったこの『大志』を理解することが、きわめて大事であると思われる。池田は、1956年7月に21世紀を展望して戸田と語り合ったことを、次のように記している。

その時、〔戸田〕先生は、「大作の後半生の時代には、創価学会は、人類の平和と文化の不可欠な中核体となるだろう」と、未来を予見されるように語られた。さらに先生は言われた。

「創価学会は、間違いなく、宗教界の王者になるにちがいない。そのことによって、社会のあらゆる分野に、政治や経済や教育や文化の世界に、真に優れた人物を送り出すことができる。それが使命なのだ。それらの人たち、一人一人の偉大な人間革命が、新しい世紀における人類社会に偉大な貢献をすることになる」

これが、戸田先生が思い描いた21世紀の創価学会像であった¹⁶⁸。

また戸田は、亡くなる約二週間前に、次のように池田へ語ったという。

メキシコへ行った夢を見たよ。待っていた、みんな待っていたよ。日蓮大聖人の仏法を求めてな……。君の本当の舞台は世界だよ¹⁶⁹。

戸田の心にあったのは、地球上のすべての人々が幸福に暮らすことができる社会の実現であった¹⁷⁰。彼の『大志』を、端的に表した三つの発言を挙げてみたい。

(1) 「地上から、『悲惨』の二字をなくしたい」

第一は、戸田がたびたび述べている「地上から、『悲惨』の二字をなくしたい」という言葉である¹⁷¹。池田は、戸田と初めて会った時（1947年8月）にも、この言葉を戸田が口にしていたと

¹⁶⁷ スチュアート・リース／池田大作『平和の哲学と詩心を語る』（第三文明社、2014年）、293頁参照。

¹⁶⁸ 『池田全集・第92巻』、144～145頁。

¹⁶⁹ 『池田全集・第138巻』、223頁参照。あわせて、『池田全集・第72巻』の285頁、『池田全集・第82巻』の143～144頁、『池田全集・第126巻』の130～131頁、『池田全集・第127巻』の356～357頁、などを参照。

¹⁷⁰ 前出、『戸田城聖全集・第1巻』、302頁参照。

¹⁷¹ 『聖教新聞』1957年1月1日付第一元旦号1面の年頭語の辞「仏法で民衆救済」、および、『池田全集・第73巻』の288頁を参照。戸田は、「仏法の目的は、全人類の人格を宇宙大の最高の境涯に高めていくことだ。そうすれば戦争も不幸もなくなるだろう」と語っていたという（アレクサンドル・セレプロフ／池田大作『宇宙と地球と人間』、潮出版社、2004年、295頁参照）。

いう¹⁷²。池田は、次のように述べている。

戦争中、そして動乱の戦後のなかにあつて、最も苦しみ、最も生活の犠牲を強いられたのは、女性たちであった。

(中略)

その人生と生活の中には、慟哭があつた。限りない地獄があつた。

その女性たちの安穏と満足と幸福の大道を開きゆくことが、私の師匠である戸田城聖の命がけの戦闘であつた。

「地上から、`悲惨、の二字をなくしたい！」

この熱願が、戸田先生の根本的思想であつたのである¹⁷³。

戸田は、戦乱に巻き込まれ、悲惨な状況に置かれている外国の民衆のことを心に留めていた。1950年6月に始まった朝鮮戦争について、次のように述べている。

あの朝鮮の動乱を見よ。地獄の苦にあえぐ朝鮮民族を救うは誰か、明日の日を知らず迷う東洋民族の否世界人類に光明を与える力は何か。大聖人様の御慈悲を蒙せる以外に何ものもないではないか。(1951年、支部長会)¹⁷⁴

此の戦争に依つて夫を失ひ妻をなくし子を求め親を探す民衆が多く居りはしないかと嘆くものである。(1951年、論文「朝鮮動乱と広宣流布」)¹⁷⁵

また、1956年10月に起こった「ハンガリア問題」¹⁷⁶については、次のように述べている。

昨冬ハンガリア問題が世界の注目を引いた。そのくわしい事情に就いては知る由もない。(中略)ただ国民が悲痛な境遇にあることだけは察せられる。貧乏と困苦の生活の上に加えられたものは鉄火の見舞である。

¹⁷² 山本伸一「随筆 我らの勝利の大道 112 地涌の誉れの『8・24』」(『聖教新聞』2013年8月24日付3面)を参照。8月24日は、池田が創価学会に入会した日。「山本伸一」は、池田のペンネーム。

¹⁷³ 『池田全集・第135巻』の410～411頁。

¹⁷⁴ 『聖教新聞』1951年4月20日付1面参照。

¹⁷⁵ 『大白蓮華』第14号(創価学会、1951年5月)、1頁。「広宣流布」とは、仏法を広く宣べ流布すること。戸田は、「広宣流布とは全人類の境涯を最高の価値にまで引き上げ、地球上に真の幸福と平和を実現しゆくことである」と語っていた(『池田全集・第87巻』、247頁参照)。池田は、「世界の広宣流布は、仏法の究極の大願である。言い換えれば、この世界から『悲惨』の二字をなくし、人類の幸福なる恒久平和を実現することであるのだ。一宗教の繁栄が目的ではない。全民衆の幸福が根本の目的である。『人間』のために、仏法はあるからだ」(『池田全集・第135巻』、49頁)と述べている。

¹⁷⁶ 「ハンガリア問題」は、1956年10月に東欧・ハンガリーの市民が政府に対して蜂起したが、ソビエト連邦(現在のロシア)の軍隊によって鎮圧された事件。

(中略)

願わくば吾人と志を同じくする同志は世界にも国家にも個人にも『悲惨』という文字が使われなようにありたいものと考えて、望み多き年頭を迎えようではないか。(1957年、年頭の辞「仏法で民衆を救済」)¹⁷⁷

そして、戸田は、『大白蓮華』1957年4月号の巻頭言の中で、次のように記している。

社会の繁栄は、一社会の繁栄であってはならない。全世界が一つの社会となって、全世界の民衆がそのまゝ、社会の繁栄を満喫しなければならない。(中略) 日本民衆の幸福のために、他の民衆を犠牲にしてはならないし、アメリカ民衆の幸福のために、日本民衆を犠牲としてはならない。共産主義の一指導者の幸福のために、他国の民衆が犠牲になってはならない。

世界の民衆が喜んでいける社会の繁栄の中に、各個人もまた喜んで生きていければなるまい¹⁷⁸。

(2) 地球民族主義

第二は、「地球民族主義」である。戸田は、1952年2月17日に開催された第一回男女合同青年部研究発表総会において、「私自身の思想を述べますならば、私は共産主義やアメリカ主義では絶対ありません。東洋民族、結局は地球民族主義であります」¹⁷⁹と語っている。戸田が「地球民族主義」という言葉を使ったのは、『聖教新聞』『大白蓮華』を見る限り、この時だけである。戸田が語った「地球民族主義」は、どういうものなのか。その手掛かりとして、次の池田の文章を紹介したい。

師は、「私自身の思想を述べておく、と前置きされ、初めて「地球民族主義、という言葉は口にされたのだ。

耳慣れぬ言葉であった。だが、それは、広宣流布の遠征が世界を相手にしていることを、いやがうえにも自覚させたのである。

当時、朝鮮戦争(韓国戦争)の戦火は未だ止まず、東西の対立は、第三次世界大戦の危機さえはらんでいた。イデオロギーや国家体制の相克は、世界の分断の溝を深め、不信と憎悪の泥沼が広がっていたのである。

恩師は、この深刻な対立を止揚する、平和と共生の指標として、「地球民族主義」を提唱されたのであろう。それは、まさに「人間という原点に立ち返れ!」「世界市民の精神に目覚めよ!」との警世の叫びであった。(2002年、随筆「わが師と地球民族主義」)¹⁸⁰

¹⁷⁷ 『聖教新聞』1957年1月1日付第一元旦号1面。あわせて、同紙2面を参照。

¹⁷⁸ 戸田城聖「王仏冥合論(九)」(『大白蓮華』第71号、創価学会、1957年4月、1頁)。

¹⁷⁹ 『聖教新聞』1952年3月1日付1面参照。

¹⁸⁰ 『池田全集・第133巻』、197頁。

宇宙の根本法たる仏法の真髓を覚知された戸田先生は、つねに宇宙的視野から、物事を考えられていた。

そして、東西両陣営の対立の溝が深まる1952年（昭和27年）2月、先生は「地球民族主義」の叫びを放たれた。

民族、国家、イデオロギーなどを超え、人類が「地球家族」「世界は一つ」という認識に立って、共存への道を開かなくてはならないというのが、先生のお考えであられた。（1998年、随筆「地球民族主義の光」¹⁸¹）

戸田会長も、いかなる国の民衆も戦争や人権抑圧の犠牲になることを許してはならないと、国家の垣根を超えた「地球民族主義」を提唱していました。

その戸田会長が当時、青年だった私たちに訴えた、「国連は、二十世紀の人類の英知の結晶である。この世界の希望の砦を、次の世紀へ断じて守り、断じて育てていかねばならない」との言葉を忘れることができません¹⁸²。

(3) ‘原子爆弾を用いたものは悪魔であり、魔ものであるという思想を、全世界に弘めることこそ、全日本青年男女の使命である。

第三は、1957年9月8日に開催された第4回東日本青年部体育大会における、戸田が「遺訓すべき第一のもの」とした次の発言である。後にこの発言は、「原水爆禁止宣言」と言われるようになった。

もし原水爆をいずこの国であろうと、それが勝っても負けても、それを使用したものは、ことごとく死刑にすべきであるということを主張するものであります。なぜならば、われわれ世界の民衆は、生存の権利を持っております。その権利をおびやかすものは、これ魔ものであり、怪物であります。それをこの人間社会、たとえ一国が原子爆弾を使って勝ったとしても、勝者でもそれを使用したものはことごとく死刑にされねばならないということを、私は主張するものであります。

たとえある国が原子爆弾を用いて、世界を征服しようとも、その民族、それを使用したものは悪魔であり、魔ものであるという思想を、全世界に弘めることこそ、全日本青年男女の使命であると信ずるものであります¹⁸³。

この‘原水爆禁止宣言、から2カ月後の11月20日朝、戸田は、12年前に原爆が投下された広島市へ行くこうとして、自宅の玄関で倒れた。それ以降戸田は、自宅での静養を余儀なくされて

¹⁸¹ 『池田全集・第129巻』、247～248頁。

¹⁸² ケビン・クレメンツ／池田大作『平和の世紀へ 民衆の挑戦』（潮出版社、2016年）、381頁。

¹⁸³ 第4回東日本青年部体育大会の音声記録、および、『聖教新聞』1957年9月13日付1面による。戸田は、同趣旨のことを、総合雑誌『キング』第33巻第11号（大日本雄弁会講談社、1957年11月）に掲載された随筆「ある友人の話から」の中に書いている。

いる。実は、19日、極度に衰弱している戸田の身体を案じた池田が、広島行きをやめるよう説得した。しかし戸田は、「一度、決めたことを止められるか。男子として、死んでもゆく」と言っ
て、頑として聞き入れなかったという¹⁸⁴。

歯科医師の浅井亨は、被爆した方々への戸田の心情が推量できる、次のような手記を書いている。

〔戸田〕先生御来阪のあるとき自動車の中で「浅井、原子病は直るか」「ソウデスネ科学ではその
力の及ぶ範囲もわからない現在、到底医学では直せません」と申し上げましたら「御本尊様なら必
ず直るヨ」と申されました。それから間もなく、昭和32年9月、横浜三ツ沢グラウンドのあの原水
爆宣言が遺訓の第一として、堂々と全世界に対して大獅子吼されたのであります¹⁸⁵。

原爆は絶対に使わせない。また、原爆の後遺症などで苦しんでいる人には、命の限り励まし、
健やかな生活へと導きたい。これが戸田の心であった。池田は、「戸田会長は仏法者として、核
兵器が長く人類の頭上を覆う最大の脅威となるであろうことを、生命の深い次元から「直感的、
に感じ取っていたのだと思います」¹⁸⁶と述べている。

さらに池田は、次のようにも記している。

核兵器とは、「生存の権利」を脅かす「絶対悪」であり、核廃絶なき「平和」は虚構です。この核
兵器の本質を、民族でもイデオロギーでもなく、人間の「生命」という地平に立つことによって明
らかにしたのが、1957年9月8日の「原水爆禁止宣言」だったのです。

(中略)

むしろ、戸田会長は仏法者であり、「死刑制度」には反対でした。あえて「死刑」という言葉を使
ったのは、原水爆を持ちたいという人間の「魔の衝動」に、楔を打ち込み、原水爆を使用しよう
とする魔を絶滅させたかったからにはほかなりません。「死」という言葉の対極にある「生」を確かな
ものとするためです¹⁸⁷。

私は、戸田第二代会長から、「人類の平和と進歩のためには、具体的な提案をすることが大切であ

¹⁸⁴ 『池田全集・第37巻』の218～219頁、『池田全集・第129巻』の349頁、『池田全集・第138巻』の128
～129頁、『評伝 戸田城聖』下巻の391～392頁、などを参照。

¹⁸⁵ 浅井亨「戸田先生の大確信にふれて」(『大白蓮華』第107号、創価学会、1960年4月)、70頁。

¹⁸⁶ ジョセフ・ロートブラット／池田大作『地球平和への探求』(潮出版社、2006年)、125頁。戸田は、核戦
争について、「原水爆禁止宣言」の6年前に書かれた「創価学会の歴史と確信」の中で、「世界の文化が
いくら発達しても、国と国とのもつ間柄が道徳を無視して実力と権力斗争の世界では決して人類の真の幸
福はない。不幸にして原子爆弾による戦争が起こったならば世界の民族は崩壊の道をたどる以外にない」
(『大白蓮華』第16号、創価学会、1951年7月、3頁)と記している。また、「原水爆禁止宣言」の前にも、
雑誌の対談などで、原水爆は禁止すべきであるとたびたび語っている(『評伝 戸田城聖』下巻、388～
389頁参照)。

¹⁸⁷ 前出、『希望の選択』、237頁。あわせて、『池田全集・第73巻』の288頁を参照。

る」と繰り返し教えられました。

「たとえ、すぐには実現できなくとも、やがてそれが〘火種、となり、平和の炎が広がっていく。空理空論はどこまでも虚しいが、具体的な提案は、実現への〘柱、となり、人類を守る〘屋根、ともなっていく」と、師は強調していました¹⁸⁸。

6. 〘戸田大学、で何を学んだか

池田は、「私は恩師・戸田先生のもとで10年間、毎朝のように、万般の学問を打ち込んでいただいた。それだけではない。折に触れて教えていただいた人間学、指導者論は数知れない」¹⁸⁹と述べている。また、創価学会における師弟について、次のように語っている。

理想が偉大であればあるほど、一つの世代で、すべてを実現することは難事です。

ゆえに、次の世代への継承が必要となる。

世代から世代へ、着実に社会で根付かせていってこそ、輝きを増す。

その意味で言えば、「師弟」とは、同じ理想を分かち合い、その実現に向かって戦う最高無二の同志といえるのではないでしょうか¹⁹⁰。

それでは、池田が戸田からどのようなことを学んだと考えられるのか。以下、池田の発言や随筆から、まとめてみたい。

(1) 日蓮仏法は、万人のためにある

池田は「私への訓練の根幹に置かれたのが、末法の民衆救済の一書たる『御書』の研鑽であった。土台がしっかりしていなければ、すべて砂上の楼閣となってしまうからだ」¹⁹¹と述べている。戸田は、戦前の創価教育学会の幹部が軒並み退転してしまったのは、日蓮仏法を深く研鑽してこなかったからだと考えた。そして、獄中で法華経を精読する中で覚知した仏法の真髓を踏まえ、地涌の菩薩としての自覚（民衆救済の使命感）¹⁹²を会員の中に浸透させるため、法華経や御書の講義に力を入れている。

池田は、戸田の獄中での悟達について、次のように述べている。

〔戸田は〕「仏とは何か」を追求しぬいて、仏とはほかならぬ自分のことであり、宇宙の大生命であり、それらは一体であると分かった。

¹⁸⁸ 前出、『地球平和への探求』、140頁。

¹⁸⁹ 創価教育代表協議会（2006年6月4日）でのスピーチ（『聖教新聞』2006年6月12日付）の2面。

¹⁹⁰ 前出、『明日をつくる 〘教育の聖業』、208～209頁。あわせて、『池田全集・第92巻』の17～18頁を参照。

¹⁹¹ 『池田全集・第134巻』、135頁。

¹⁹² 『池田全集・第59巻』の483頁、『池田全集・第85巻』の149頁、季羨森／蔣忠新／池田大作『東洋の智慧を語る』（東洋哲学研究所、2002年）の233～235頁、などを参照。

(中略) 自身の根源を掘り下げていく時、そこに万人に共通する生命の基盤が現れてきた。それが永遠の宇宙生命です。戸田先生は、まさに自身の根源を悟られるとともに、「あらゆる人が、じつは根本においては地涌の菩薩である、という人類共通の基盤を悟られたのです」¹⁹³。

戸田は、「一事業の危機ですまされるものでなく、誕生まもない『創価学会』が断絶するかどうかというせとぎわ」¹⁹⁴にあっても、始業前に毎朝、池田への「訓練の根幹」である御書講義を継続した。この戸田直伝の講義が、その後の池田の活動に活かされていくことになる。

また、戸田の会員への講義は、獄中での悟達に基づき、民衆の心の中に勇気と希望を沸き立たせるものであった。しかしそれは、僧侶（聖職者）によって受け継がれてきた僧侶中心の考え方とは異なるものでもあった。そのため、創価学会員が増加していく中で、僧侶たちとの軋轢が何度も起きることになる¹⁹⁵。それを乗り越え、御書全集の発刊や創価学会の法人化など、万人のための宗教の基盤を確立したのが戸田であり、一体となって進めたのが池田であった。

池田は、日本正学館に入社以来、戸田とともに数々の困難を乗り越えてきた。そして、日々の行動や振る舞いを身近で見てきた。池田は次のように述べている。

戸田先生がいつも教えられたのも、「人びとを愛せよ」「民衆を愛せよ」ということであった。一方、「指導者は民衆のために働け」とよく言われた。地位や権威で人を見下す人間には厳しい先生であった。庶民とともに生き、庶民を心から愛された先生であった。(1992年、月刊誌『第三文明』に連載された「続・若き日の読書」)¹⁹⁶

何よりも私は、恩師の人格から学びました。

投獄にさえひるまなかつた、平和へのあの断固たる情熱を、恩師は終生、燃やし続けました。

そして、苦悩の民衆の中に分け入って、人々と交流を間断なく続けました。その深き人間愛こそ、私が恩師より最も教えられたものなのであります。(1996年、コロンビア大学での講演)¹⁹⁷

(2) 平和社会実現への断固たる意志

池田が少年雑誌の編集長として携わった記事の中で、特筆すべきは、『少年日本』の1949年10月号と11月号の原子力と原子爆弾についての特集である。特に11月号には、広島への投下

¹⁹³ 池田大作『普及版 法華経の智慧〔中〕 二十一世紀の宗教を語る』(聖教新聞社、2012年)、212頁。

¹⁹⁴ 『池田全集・第71巻』、87頁。

¹⁹⁵ 『評伝 戸田城聖』下巻の171～178頁・198頁の注(28)・310～313頁などを参照。

¹⁹⁶ 池田大作「続・若き日の読書 第9回」(『第三文明』第377号、第三文明社、1992年9月)、28頁。『池田全集・第23巻』の313頁に収録。

¹⁹⁷ 『池田全集・第101巻』、427頁。

直後を描いた小説「原子野の花」が掲載されている¹⁹⁸。

当時日本は連合軍の占領下であり、全ての出版物が検閲の対象であった。特に、原子爆弾についての記述は、厳しく検閲されていた。その中で、広島を惨状を描いた小説を掲載したのである。検閲の結果次第では、発行禁止になる。そうなれば、日本正学館は大打撃を受ける。これほどのリスクを承知の上で企画されたのは、戸田社長の強い意志があったからにはほかならない¹⁹⁹。この経験は、戸田の心の中にある平和社会実現への断固たる意志を池田へ伝えることになった。

逝去する7カ月前の1957年9月、戸田は、約5万人の会員を前に、前述の「原水爆禁止宣言」を行った。この発言を遺訓として心に留めた池田は、11年後（1968年）の同日に「日中国交正常化提言」を発表²⁰⁰。さらに、74年の同日にはソビエト連邦（現在のロシア）を初訪問。同年12月には再度中国を訪れ、対立関係にあった両国の和解に向けた民間外交を展開している。

また、創価大学開学2年前の1969年5月に、同大学の創立者である池田は、大学の基本理念の一つとして、「人類の平和を守るフォートレス（要塞）たれ」を提唱。創価大学設立の目的の一つが、民衆の幸福と平和を守り抜くことであるとした²⁰¹。

(3) 創価学会を大きく発展させていくための指導者学

池田が戸田から受けた薫陶の核心にあったのは、今後創価学会をどのように発展させていくかということであった²⁰²。池田は、次のように記している。

戸田先生の教えは、つねに抽象論ではなかった。現実の「急所」を押えた、生きた知恵であった。

歴史を論じて、たとえば「あの民族は、なぜ興隆したのか」「この国家は、どうして衰亡したか」、また「あの宗教は、なぜ栄えたのか」「なぜ衰退したのか」等々、個人についても、集団についても、さまざまな「興亡の歴史」に焦点をあてられた。そのようにして、青年に鋭く、深い「史観」を養

¹⁹⁸ 「原子野の花」については、前出の『平和の朝へ 教育の大光』の136～137頁、および、「民衆こそ王者 池田大作とその時代 希望を繋ぐ人篇（7）」（『潮』第753号、潮出版社、2021年11月）の130～138頁を参考にさせていただきたい。

¹⁹⁹ 連合軍総司令部（GHQ）の検閲を受けた『少年日本』1949年11月号の表紙には、60,000部を印刷したことを示す検閲者の書き込みがある（アメリカ・メリーランド大学ホーンバイク図書館ゴードン・W・ブランゲ文庫所蔵資料による）。60,000部は、判明している『冒険少年』『少年日本』各号の印刷部数の中では、最も多い。

²⁰⁰ 池田は、「戦後〔戸田は〕、創価学会の再建に取り組む一方で、アジアの平和のために行動することを、青年たちに訴えたのです。『日本はアジアの国から心より信頼されるようになった時に、本当の平和国家といえる』とも、よく言っていました。私は、1968年の9月、この師の心を心として、『日中国交正常化提言』を発表しました」（章開元／池田大作『人間勝利の春秋 歴史と人生と教育を語る』、第三文明社、2010年、75頁）と述べている。また池田は、1964年の公明党結党に際し、党の外交政策の骨格として「中華人民共和国を正式承認し、日本は中国との国交回復に努めるべきである」と提案している（公明党史編纂委員会編『増訂版 大衆とともに 公明党50年の歩み』、公明党機関紙委員会、2019年、36頁参照）。

²⁰¹ 『聖教新聞』1969年5月5日付4面参照。あわせて、前出の『平和の哲学と詩心を語る』の220～222頁を参照。

²⁰² 戸田は、「民衆万年の幸福を確立することが、創価学会の使命である」と語っている（『戸田城聖全集・第4巻』、聖教新聞社、1984年、372頁参照）。

わせながら、広布の万代にわたる発展の歴史を、どう築いていくかを教えられたのである。(1988年、第2回神奈川県支部長会)²⁰³

「戸田大学」は、ある時は一対一で、また、数名のメンバーと共に、断続的に続けられた。その間、先生は、私に「正義の大指導者学、ともいふべき、万般の学問を授けてくださったのである。(2003年、随筆「恩師の峻厳な日曜講義」)²⁰⁴

「戸田大学」の講義の折々に、先生は語られた。

「勉強だよ。勉強だ。妙法の智慧者とならなければ、今後の大使命は果たせない。社会万般のことは無論だが、全世界の運命のなかに、自分というものを置いて、そこからすべての発想をすることが、必要な時になっている」(2007年、随筆「桜花の『4・2』に恩師を想う(下)」)²⁰⁵

(4) 人間としての誠実さ

1949年10月、戸田は出版業から手を引くことを決断した。それは、資本力がある競合誌が増えてきたことで、会社の経営が立ち行かなくなったからである。社員は、同じ建物で営業を始める東京建設信用組合で働くことになった。池田も、月掛け貯金の募集や集金などを担当する。開業したばかりの小さな信用組合が顧客に信頼してもらえるかどうかは、営業担当者の印象で決まる。池田は、一回一回の出会いを大事にしなが、毎晩遅くまで新規開拓に努めた²⁰⁶。

実はこの年、インフレが進む日本経済を立て直すため、中小の事業者を切り捨てるような政策が断行されていた。そのため、多くの事業者が倒産を余儀なくされた。東京建設信用組合も経営状態が悪化。1950年8月に大蔵省(現在の財務省)から業務停止命令を受けることになった。社員は次々と退職し、外回りは池田一人になる。結核を患っていた池田にとって、精神的にも肉体的にも過酷な日々となった。その中で池田は、戸田から「人間対人間のこの社会で、なによりも肝心なことは、結局、誠意以外のなにものでもないことを、口をすっぱくして教えられた」²⁰⁷という。池田は、次のように記している。

債権者の人々に対して、先生は、誠意をつくしてあたり、事態の收拾にうちこんだ。私も、そうした席に、同伴されるのが常だったが、それは単に私が社員であるからというのではなく、私を教育するためであったと思われる。——渉外にあたっての、相手の人物に対する認識や、折衝後の判

²⁰³ 『池田全集・第71巻』、270頁。あわせて、『池田全集・第69巻』の196頁を参照。

²⁰⁴ 『池田全集・第134巻』、134頁。

²⁰⁵ 『池田全集・第138巻』、147～148頁。

²⁰⁶ 池田の紹介で創価学会に入会した土屋せつ子からの聞き取りの記録などによる。

²⁰⁷ 『池田全集・第18巻』、155頁。あわせて、『池田全集・第71巻』の484頁、『池田全集・第72巻』の576～577頁、『池田全集・第87巻』の169頁、『池田全集・第97巻』の379頁、『池田全集・第124巻』の364～365頁、などを参照。

断と手の打ち方等を、先生は、事こまかに教え、訓練してくださった²⁰⁸。

当時、大蔵省関東財務局理財部金融課長であった小林春男は、「40年を経た現在も、お互いに信頼し、話し合えた故理事長〔＝戸田〕の人格の内なる光をいまだに忘れることができない²⁰⁹」と、後日著書に記している。

また、信用組合の営業停止直後には、それを聞きつけた新聞記者が訪れているが、翌日戸田と池田が誠意を尽くして事情を説明したことにより、その記者は記事にすることを断念したという²¹⁰。

晩年戸田は、多くのジャーナリスト・作家・評論家と会っている²¹¹。その中には、共産党の元中央委員や僧籍にある者もいた。彼らが書いたものを読むと、そのほとんどが好意的な内容である。飾らない振る舞いの中で戸田は、彼らの心をしっかりつかんでいた。これらの記事は、1954年12月に池田が創価学会の渉外部長になり、戸田と池田の二人が誠実に対応してきたからであろう。

また戸田は、1954年頃に岸信介（1957年2月から60年7月まで首相）と親交を結んでいる²¹²。このつながりから、首相になった岸が、1958年3月16日に6千人の青年たちが待つ大石寺を訪れることになった。これは、当日朝に岸の側近から強い反対があって実現しなかったが、1カ月後の4月20日に行われた戸田の学会葬に岸が参列し、マスコミなどを驚かせている²¹³。

(5) 戸田が考える創価教育の学校における教育はいかなるものか

牧口から託された学校設立²¹⁴について、戸田はどのように考えていたのだろうか。『創価教育学体系』の第1巻出版から20年となる1950年11月、戸田は、創価大学設立の構想を池田に語っているが²¹⁵、その詳細は明らかではない。しかし、彼がどんなことを考えていたか推察する手掛かりは、`戸田大学、の中にある。

池田は、`戸田大学、は「戸田城聖という『人間学』の天才の個人授業」²¹⁶と述べている。浅

²⁰⁸ 『池田全集・第18巻』、154頁。

²⁰⁹ 小林春男『信用金庫経営論』（日本経済評論社、1992年）、27頁。

²¹⁰ 『池田全集・第137巻』の281～282頁、および、山本伸一「随筆 我らの勝利の大道 27 聖教と共にさあ前進!①」（『聖教新聞』2010年8月30日付3面）などを参照。

²¹¹ 『評伝 戸田城聖』下巻、286～290頁の注(44)参照。

²¹² 同前、416～417頁の注(40)参照。

²¹³ 『朝日新聞』など各紙の1958年3月17日付朝刊および同年4月21日付朝刊を参照。

²¹⁴ 小平芳平は、牧口から、創価大学の構想を聞いていた。1955年11月3日に後樂園球場で行われた第13回創価学会秋季総会において、「先代の会長牧口先生が絶えず、創価大学、総合大学という事を、お話になって居られましたが、その総合大学の実現、総合大学の建設も必ずや間近いものと、確信してやまないものであります」（『聖教新聞』1955年11月13日付2面参照）と述べている。

²¹⁵ 『評伝 戸田城聖』下巻、102～104頁参照。あわせて、『池田全集・第59巻』の412頁および『池田全集・第143巻』の517頁を参照。

²¹⁶ 『池田全集・第130巻』、248頁。

野秀満によれば、創価大学の開学（1971年）にあたり、池田は人間学部と国際関係学部（仮称）の開設を考えていたという²¹⁷。

創価大学設立準備財団の事務局長を務めた岡安博司は、次のように語っている。

創立者は「『人間学部』を最初につくりたい」とのお考えでした。当時、他大学にまだ例がなく先駆的な発想でした。この件について、文部省にその開設の可否を聞いたところ、極めて厳しい反応でした²¹⁸。

1970年頃の文部省は、既設の名称以外の学部新設は認めない方針だった。そこで設立準備財団は、認可される可能性が高い法学部・経済学部・文学部の三学部で申請することにした。

それから20数年経って池田は、大学の首脳に人間学部の設置を検討するよう提案している。その頃までに文部省の方針は大きく変わり、「人間」を含む名称の学部・学科が数多く認可され、その教育内容も多様なものであった。筆者も参加した新学部の検討委員会では、創価大学が設置する「人間学部」は、どのようなものが良いかと教職員で議論を重ねた。そこで浮かんできた案は、アメリカのリベラルアーツ・カレッジ（教養大学）に近いものであった。しかし、それは、2001年に開学するアメリカ創価大学の構想と重なっていた²¹⁹。

筆者が、牧口・戸田・池田の評伝的研究に取り組むようになったのは、この委員会での経験が背景にある。アメリカ創価大学でできないことは何かと考え、それは、牧口・戸田・池田研究の基盤を整えることだと思いついたからである。

また、創価大学を開学して3年経った頃、創立者である池田は、屋外でも授業が行えるようにキャンパス内の林の中に広場を作りベンチを置くことなどを提案している。学生も賛同して緑に囲まれた広場や散歩道の整備に参加し、1974年5月には創立者とともに緑の丘・太陽の丘の開園式を行った。この提案は、かつて池田が経験した『戸田大学、における「対話による教育」』²²⁰の大切さを示唆したかったのかも知れない。

²¹⁷ 前出、浅野秀満『あすの創価学会』、191頁参照。

²¹⁸ 岡安博司「創価大学の開学を語る—創立者の大学構想を中心に—」（『創価教育研究』第4号、創価大学創価教育研究センター、2005年）、178頁。

²¹⁹ その後、創価大学では、2007年4月には文学部の改組転換で人間学科が、14年4月には国際教養学部が開設されている。

²²⁰ 池田は、次のように述べている。

「創大建学のモットーの第一には、『人間教育の最高学府たれ』と掲げた。『知識』ばかりではない。その『知識』を生かすための、『知恵』と『人格』こそを育みたいと思ったからである。（中略）ただ、『人間教育』といっても、特別なものではない。もとより授業のカリキュラム等については、当初から大学当局にお任せしてある。そのうえで私が心がけたのは、学生との一対一の対話であった」（『池田全集・第126巻』、30～31頁）

「本当の意味での教育——つまり、人間をつくる教育は、決して、学校教育のみではなしえないと思えてならないのだ。一個の人格をつくる教育は、天性の教師にのみ許されたものなのだと思えてくる。私は、戸田城聖先生という稀有の師に巡り会い、十一年間にわたる師弟関係を通じて、最高の人生教育を受けることができた。それが、どんなに感謝すべきことであるか、年を経るごとに、しみじみと感慨を深めずにはいられない」（『池田全集・第18巻』、158～159頁）

1929年から51年まで、シカゴ大学総長を務めたロバート・ハッチンズ（Robert Maynard Hutchins）は、グレイト・ブックス（古典・名著）による教育を提唱し²²¹、アメリカのリベラルアーツ教育の淵源の一つになった。〘戸田大学、において、池田が戸田から受けた薫陶は、このグレイト・ブックスによる教育と通じるところがあるのではないかと筆者は考えている。

1970年代以降、池田は、国内外の多くの識者と対話し、数多くの対談集も出版した。〘戸田大学、で受けた薫陶が大きく開花したのである²²²。

7. 創価学会は〘校舎なき総合大学、

戸田は、一人一人の会員と語り、励ますことに多くの時間を割いていた。1950年8月の東京建設信用組合の業務停止後、しばらくして彼は、大蔵商事株式会社の最高顧問となった。1951年5月に戸田が創価学会第二代会長に就任した後、大蔵商事は市ヶ谷ビルの一室に移転²²³。その隣に創価学会本部分室が置かれた。分室といっても、机が一つあるだけである。平日の午後、そこは会員との面接の場になった。この面接について戸田は、多い時で1日に50人の人に会えても一年間に1万5千人しか会えません、と語っている²²⁴。分室は、新宿区信濃町へ本部が移るまで約2年半存続しているので、実に延4万人近い会員と会ったことになる。太平洋戦争敗戦の余燼がくすぶる中、戸田は、深刻な悩みを抱えた会員たちと日々向き合い、わがことのように同苦して励まし続けた²²⁵。

また彼は、支部単位で行われていた座談会でも、出席者の悩みをじっくり聞いて、包み込むように、またある時は、厳しく指導している²²⁶。会員との対話は、帰りの電車の中まで続くこともしばしばあり、会員宅を一軒一軒訪問することを喜びとしていた²²⁷。

埼玉に住む壮年からこんな話を聞いた。彼がまだ高校生の時、戸田が逝去する（1958年4月）。それを聞いた母と姉は、一週間も毎晩泣いていたというのである。戸田の学会葬には約25万人が参列したが、彼らは集められたのではなく、行かずにはおれなかったのである²²⁸。まさに、戸田と一人一人の会員の心は、直結していた。

池田によれば、戸田は支部長に対して、〘人数がいくら多いからって昔の大名は二万や三万の

²²¹ R・M・ハッチンズ著／田中久子訳『偉大なる対話』（岩波書店、1956年）などを参照。

²²² 『池田全集・第127巻』の81頁、『池田全集・第139巻』の374～375頁、『池田全集・第143巻』の15・434頁、などを参照。

²²³ 大蔵商事は、新宿区百人町の仮事務所を経て、同区市谷田町の市ヶ谷ビルに移転している。

²²⁴ 『聖教新聞』1952年12月10日付1面の「会長講演」を参照。

²²⁵ 『池田全集・第73巻』の436頁、『池田全集・第131巻』の72～77頁、『池田全集・第134巻』の109～112頁、『評伝 戸田城聖』下巻の169～171頁、などを参照。

²²⁶ 小泉隆は、「戸田先生は『三人だって同志がおったら喜んで話すんだ。いや、たった一人でもよい。一人でも心から話し合い、感激し合って帰ればよいんだ』というのが口癖でした」（『大白蓮華』第350号、聖教新聞社、1980年4月、37頁）と語っている。あわせて、『池田全集・第65巻』の348頁を参照。

²²⁷ 『池田全集・第17巻』の56頁などを参照。

²²⁸ 『池田全集・第37巻』の310頁、および、『池田全集・第62巻』の354～355頁を参照。

家臣のことは全部知っていたんだ、と話したことがあったという²²⁹。実際にそうであったかは別として、戸田は、その何倍もの会員と対話し、励ましていた。

会員が増えるに従い、会員一人一人と直接話す時間が限られてきた。そこで戸田は、希望すれば誰でも彼の講義を聞くことができる大きな会場を手配した。人々は、戸田の話を聞きたい一心で、開始時間が近くなると駆けるようにして会場に集い、壇上まで人で埋め尽くされる日もあった。その中で彼は、ユーモアを交えながら御書などを講義²³⁰。さらに、誰もが納得できる「対話」を大事にして、質疑応答の時間を持つようにしていた²³¹。このような戸田の姿を、池田は身近で見ていた。

戸田が第二代会長に就任後、池田は、次々と創価学会の役職に任命された。そのたびに池田は、戸田の期待に応える結果を出して、全組織に活力を与えている。その行動の基本形は、戸田が行ってきた会員一人一人との対話と励ましである。池田は、誰よりも忠実に、それを実践したのである。

戸田は、創価学会は「校舎なき総合大学、であると語っていた²³²。戸田は、彼が抱く「大志、を担いゆく幾十万人の老若男女を一对一の対話を基本に育成したのである。

また、秋谷栄之助によれば、創価学会が短期間に発展した原動力の一つは、月2回開催された「地区講義」だという。創価学会の会員が全国各地に広がっていけば、当然戸田に会えない人も多くなる。そのことを解決したのが、戸田から直接講義を受けた教学部員が各地に出向いて行う「地区講義」であった。それが、一人一人に内在する生命力²³³を奮い立たせる力になったというのである。講義を担当した人の年齢・性別・学歴は千差万別であった。また当時、創価学会は「貧乏人と病人の集まり」と揶揄されていたが、講義の担当者も例外ではなかった。

戸田は、「この仏法は、逆境にある人が幸せになる宗教なのだ。不幸な人ほど、それを乗り越えたとき、すごい力が出るのだよ。その人こそが、本当に不幸な人びとの味方になれるのだよ」と語っていたという²³⁴。深い悩みと向き合っている人が集い、学び合う中で、自他共の幸福を目指す人々の輪が急速に広がっていったのである。

²²⁹ 座談会「これからの学会青年部」（『聖教新聞』1957年6月16日付）の5面を参照。

²³⁰ 『池田全集・第132巻』、115頁参照。

²³¹ 『聖教新聞』と『大白蓮華』には、会員の質問とそれに対する戸田の答えが、合わせて600以上掲載されている（『大白蓮華』第74号、創価学会、1957年7月、34頁などを参照）。『戸田城聖全集・第2巻』（聖教新聞社、1982年）には、そのうちの283項目が収録されている。

²³² 戸田は、1955年に行われた華陽会で、「今後の創価学会は校舎なき総合大学を作って行くのである」と語っており、学生部の設置に際しては、創価学会学生部を「校舎なき総合大学」と表現している（1959年に作成された「華陽会集録」および『聖教新聞』1956年4月8日付1面を参照）。あわせて、『池田全集・第72巻』の211頁、および、『池田全集・第134巻』の154頁を参照。

²³³ 「生命力」について戸田は、絶筆となった巻頭言「思想の混乱」において、「要するに根本は強き生命力と、たくまき智慧とによって、我が人生を支配していかなくては、本当の幸福は得られないことを知らねばならぬ」（『大白蓮華』第83号、創価学会、1958年4月、1頁）と記している。あわせて、前出の『御書と師弟 2』の55頁および『池田全集・第68巻』の578頁を参照。

²³⁴ 星生八重子「戸田前会長と草創期の婦人部」（八矢弓子編『この日ありて一広布に生きる母の記録一』、聖教新聞社、1977年）、23頁参照。

おわりに

教育者である牧口と創価大学をはじめとする多くの教育機関を創立した池田。この二人をつなぐ存在の戸田もまた教育者であった。『評伝 戸田城聖』上巻では、1945年7月以前の戸田について、小学校や私塾時習学館での教育実践、さらには、彼が著した学習参考書や編集した教育雑誌・学習雑誌などについて詳しく述べている。

しかし、「戸田大学」、そして、創価学会は「校舎なき総合大学、である」という視点で見えていくと、戸田が教育者としての本領を発揮したのは、むしろ1945年7月以降といえないか。池田を、各国の首脳や識者と胸襟を開いて語らうこともできる人間へと育てただけでなく、幾万幾十万人々の心の中に、牧口・戸田・池田の三代に継承されてきた、「創価」の根幹をなす「民衆救済の『大志』」を根付かせたからである²³⁵。

今、国際社会では、気候変動への対応をはじめとする地球的諸問題の解決のために、各国政府がこれまでの「国益至上主義」の思考を改め、「人類益」に立脚した共存共栄の地球社会を目指す発想の転換が求められている²³⁶。しかしそれは、政府や自治体、企業だけに求められているのではなく、地球に住むすべての人々に同様の自覚と行動が求められている²³⁷。

戸田は、1920年の牧口との出会いから44年までの体験をもとに、『人間革命』という小説を書いた²³⁸。池田は、同じ題名の小説で、戸田が豊多摩刑務所を出所した1945年7月²³⁹から、逝去した58年4月までをつづっている。池田の『人間革命』の「はじめに」には、「一人の人間における偉大な人間革命は、やがて一国の宿命の転換をも成し遂げ、さらに全人類の宿命の転換をも可能にする」と書かれている。この一文は、戸田が懐いていた「民衆救済の『大志』」を端的に表現した言葉である。

「人間革命」は、戸田一人の内なる生命の変革から始まった。それは、「戸田大学」によって、戸田から池田へと継承されることになった。そして同時に、「校舎なき総合大学、である創価学会によって、誰もが人間革命の方途を学び、実践することが可能になった。戸田は、「〔創価〕学会は苦しんでいる人々を救うため、広宣流布という仏の仕事をする、最高に尊い組織だ。戸田の

²³⁵ 池田は、戦後の創価学会の拡大が、「戸田先生と『心のギア』をかみ合わせた同志の奮闘から生じた」と述べている（『池田全集・第75巻』、264頁参照）。

²³⁶ 前出、『希望の選択』、103頁参照。あわせて、ノーマン・カズンズ／池田大作「世界市民の対話 平和と人間と国連をめぐって」（毎日新聞社、1991年）の106頁などを参照。

²³⁷ 池田は、識者との対談の中で、「地球環境を改善する『地球革命』といっても、人間自身の変革、つまり『人間革命』が出発点であり、それこそが地球的問題群を解決しゆく王道であると信じています」（R・D・ホフライトネル／池田大作『見つめあう西と東 人間革命と地球革命』、第三文明社、2005年、84頁）、「利己的な貧欲のエネルギーを制御して、自他共の幸福と繁栄の方向へ向かわせていくこと、そして自己に閉ざされた『利己的な生き方』を他者に開かれた『奉仕的な生き方』へと転換していくこと——これが私たちSGIの進める『人間革命』運動の目的です」（M・S・スワミナサン／池田大作『緑の革命』と『心の革命』、潮出版社、2006年、155頁）と述べている。

²³⁸ 戸田が1951年1月20日から1954年8月1日付にかけて『聖教新聞』に連載した「人間革命」を参照。

²³⁹ 戸田は、1945年6月に東京拘置所から豊多摩刑務所に移送されている。

命より大事な組織だ」と、何度も話していたという²⁴⁰。

創価学会では、自らの苦悩に沈んでいた人間が、他人の不幸をも我がこととして悩み、励ます人間（自他共の幸福を目指す人間）へと変革されていく。そして、その人の輪は、幾重にも広がっていった。私は、ここに、今世界が抱える多くの難題を解決する道筋が示されているのではないかと考える。戸田や池田が示した「人間革命」は、「自他共の幸福」を目指す人間を次々と生み出していく運動である²⁴¹。

1945年7月以降の戸田は、会員を励まし育てることに徹していた。縦糸が、池田への「戸田大学、であったとすれば、横糸は、創価学会を舞台とした「校舎なき総合大学、であった。

本稿では、池田が学んだ「戸田大学、はどのようなものであったか、概観的に捉えることにとどまっている。「戸田大学、における教育方法や教育内容に関する研究は、後進の方々に託すこととしたい。

²⁴⁰ 『池田全集・第96巻』、269頁参照。池田は、「それ〔＝創価学会〕は、『苦しんでいる人を放っておけない』『励まさずにはいられない』という、人間の真心で織り成された組織だ」（『池田全集・第130巻』、306頁）と述べている。あわせて、『池田全集・第99巻』の75頁を参照。

²⁴¹ 池田は、「随筆 我らの勝利の大道 89 『創立』の原点に誓う」の中で、「〔創価学会が目指す〕広宣流布は、一人ひとりが我が生命に幸福の宮殿を築きながら、人類が夢見た人間共和の『永遠の都』を建設しゆく大聖業である」（『聖教新聞』2012年11月15日付3面）と述べている。

What Ikeda Daisaku Learned at “Toda University”¹

Masayuki Shiohara

Translated by Nozomi Inukai

Introduction

“Toda University” is a term that refers to the education that Soka University founder Ikeda Daisaku received from his mentor Toda Jōsei. This was a term used between Toda and Ikeda.

In a 1969 essay titled “Do Not Be Defeated in Life,” Ikeda wrote as follows: “If I did not have Toda Jōsei as my mentor in my life, I would have become someone who hardly amounted to anything. I came to this realization much later [in life]” (Aragaki, 1969, p. 17).² Further, in his [1996] lecture at Teachers College, Columbia University, he stated, “Ninety-eight percent of what I am today I learned from him” (Ikeda, 2021a, p. 12). The purpose of this article is to examine what this so-called Toda University was.

In examining the meaning and significance of Toda University, I believe we must consider the following three points.

First, Makiguchi Tsunesaburō, who published the first volume of *Sōka kyōikugaku taikei* (The System of Value-Creating Pedagogy) in November 1930 and who wished to establish an elementary through university education system that practices his value-creating pedagogy (Makiguchi, 1981-1996; “Sōka Kyōiku no Genryū” Hensan Inukai, 2021), and Ikeda Daisaku, who established schools and universities with the name “*Sōka*” in Japan and around the world, never met. Toda, who was Makiguchi’s disciple and Ikeda’s mentor, was the bridge

Masayuki Shiohara (Ikeda Research Institute for Soka Education, Soka University)

Nozomi Inukai (Institute for Daisaku Ikeda Studies in Education, DePaul University)

¹ This article is based on two virtual lectures conducted for “Toda Jōsei’s Educational Philosophy and Practice,” a course in DePaul University’s master’s degree program in Value-Creating Education for Global Citizenship. The lectures were titled “What is Toda University?” (June 6, 2020) and “What Ikeda Daisaku Learned at Toda University” (June 5, 2021). Formatting and citations have been converted to APA style and some footnotes were added for this translation. The translator thanks Jason Goulah and Andrew Gebert for their feedback on versions of this translation.

² This and subsequent quotes without reference to published English sources were translated by the translator or taken from an existing unofficial translation provided by the Sōka Gakkai translation department.

between these two. What kind of education did Ikeda receive at Toda University? The answer to this question is critical in considering the foundation of “*Sōka*”³ that has been inherited from Makiguchi to Toda, and then from Toda to Ikeda.

Second, a true picture of Toda becomes clear by looking at him from the perspective of what Ikeda learned from him. I was a member of the editorial board that published *Hyōden: Makiguchi Tsunesaburō* (Makiguchi Tsunesaburō: A Critical Biography) (“*Sōka Kyōiku no Genryū*” Hensan Iinkai, 2017) and *Hyōden: Toda Jōsei jō-ge* (Toda Jōsei: A Critical Biography Parts 1 and 2) (“*Sōka Kyōiku no Genryū*” Hensan Iinkai, 2019, 2021). Working on Toda’s biography immediately after finishing the serialized publication of the manuscript of Makiguchi’s biography in the monthly magazine *Daisan Bunmei* (Third Civilization) was very useful in publishing [a revised and updated version of] Makiguchi’s biography as a complete book. Therefore, [just as research on Toda’s biography helped improve the critical biographical research on Makiguchi], I believe biographical research on Toda requires a similar engagement with research on Ikeda’s biography.

In the abovementioned lecture at Teachers College, Ikeda (2021a) stated as follows: “The integrated Soka education system, which promotes value creation, was founded out of a desire that future generations should have the opportunity to experience this same kind of human education [that I received from Toda]” (p. 12). Thus, the third significant point is that knowing what kind of education Ikeda received from Toda is key for understanding what Ikeda means by “human education,” [which is Ikeda’s principal educational philosophy].

When Was the Term Toda University First Used

Toda University Is a Term First Used By Toda

I would like to start by discussing how the term Toda University was born. According to Ikeda (1988-2015, Vol. 69), Toda was the first to use it:

Once Mr. Toda spoke to me as follows: “I want very badly to send you to college. Unless you go, you may be at a disadvantage in society. However, you will be fine if you go to ‘a university of humanity,’ ‘a university of faith,’ that is, this ‘Toda University.’ Consider it a college for polishing all aspects of your character and acquiring your greatest power as a human being.” (p. 472)

On another occasion, Ikeda (1988-2015, Vol. 87) further stated:

Rousseau concluded, “true education consists less in precept than in practice.” These

³ The author uses the term “*Sōka*” to encompass a broad meaning that includes the thought and practice of Makiguchi, Toda, and Ikeda.

are deep and important words. I fully received training from Mr. Toda. As a foremost representative [of his disciples], I was at his side from morning to night. It was a strict training and education. Mr. Toda called it “Toda University.” It was a university of just the two of us. Receiving such education is the pride and happiness of my youth. (p. 406)

When Ikeda Started Using The Term Toda University

The first instance of the term Toda University appearing in print is in a book titled *Asu no Sōka Gakkai* (Tomorrow’s Sōka Gakkai) (1970) by Asano Hidemitsu, a journalist at the *Yomiuri Shimbun*. He wrote the following based on his interview with Ikeda:

During the ten years from when he stopped attending night courses at Taisei Gakuin⁴ until he turned 30, Ikeda attended “Toda University” all day on Sundays and one hour in the morning on other days. We can say these lectures created who Ikeda is. (p. 232)

After this, we do not see Ikeda using the term Toda University until 25 years later in 1996. Nevertheless, as in the following quotes, starting in 1986, Ikeda began sharing his experiences of receiving one-on-one instruction from Toda, and thus we might infer this is when he began thinking of talking about Toda University.⁵

Mr. Toda taught me one-on-one as his student and, to this day, I am filled with deep appreciation. (1988-2015 [1986], Vol. 59, p. 297)

My mentor said to me, “I’m sorry to bring such hardship upon you, to ruin all your plans [by having you work for me instead of attending college].” To compensate, Mr. Toda personally tutored me in various subjects on Sundays and each morning from Monday through Saturday. Everything he taught me has made me what I am today. It was like attending my own, private university; it was the greatest education anyone could have, surpassing any established higher educational institution. (1988-2015 [1993], Vol. 82, p. 251)

⁴ Taisei Gakuin later became Fuji College and is present-day Tokyo Fuji University. Ikeda entered the night program in politics and economics at Taisei Gakuin in April 1948.

⁵ The term “Toda University” was never used in Ikeda’s novel *The Human Revolution* when it was serialized in the *Seikyo Shimbun* from January 1, 1965 to February 11, 1993, nor when it was first published as a 12-volume book series. When Vols. 4 and 7 of *The Human Revolution* were edited to be included respectively in volumes 145 and 147 of *The Complete Works of Ikeda Daisaku*, references to Toda University were added.

After the Second World War, I studied at the “Toda Academy.”⁶ Toda Jōsei, the second Sōka Gakkai president, was the teacher. I was the only student. Every morning for ten years, I studied a diverse range of subjects under my mentor. Finally, Mr. Toda said to me, “I have taught you everything I know.” (1988-2015 [1994], Vol. 60, p. 302)

Every morning for a period of ten years, Mr. Toda gave me instruction. He was my personal tutor; it’s as though I studied at the “Toda Academy.” (1988-2015 [1995], Vol. 57, p. 296)

The first time Ikeda used the term Toda University was in a speech at the commemorative photo session for incoming students at the Soka Junior and Senior High School on April 17, 1996, where he shared: “Every morning for ten years, I studied privately with Mr. Toda, covering every subject. One could say I was a student at Toda University” (1988-2015 [1996], Vol. 58, p. 27).

Three years later, the term Toda University was used for the first time in the title of Ikeda’s essay series “Thoughts on *The New Human Revolution*,” published on November 26, 1999. Ikeda provided detailed recollections of Toda University in this and two other essays titled “The Superlative Classes at Toda University” and “The Heart of Human Education: The Relationship Between Teacher and Student,” published respectively on December 7 and December 18, 1999.

Why did Ikeda start using the phrase Toda University in 1996? And why did he start discussing it in more detail three years later in 1999?

It could be because more than 25 years had passed since the opening of Soka Junior and Senior High School and Soka University and, in June 1996, a plan to open Soka University of America as a liberal arts college was announced. In other words, it was when the Soka school system had entered a period of further development. Moreover, although the exact date is unclear, this is when Ikeda began referring to Makiguchi, as well as novels and words of great philosophers, more than he had been. Further, the Sōka Gakkai separated from the Nichiren Shōshū priesthood in November 1991, which the Sōka Gakkai calls its “spiritual independence.” I believe that [with these events] Ikeda further deepened his commitment to passing onto the next generation the foundation of “Sōka” that he inherited from Toda and Makiguchi, as well as the “human education” he received from Toda.

⁶ In these initial instances Ikeda used the term *Toda juku*, which is translated here as Toda Academy. Thereafter, he has consistently used *Toda daigaku*, which is translated here as Toda University.

Toda University Was Private Instruction by a Master in “The Study of Humanity”⁷

Ikeda wrote about the education he received from Toda in the following passages:

I had to quit Taisei Gakuin, but thereafter Mr. Toda taught me not only Buddhism, but all subjects, such as the humanities, sociology, natural science, economics, as well as etiquette, trend analyses, methods of decision making, and organizational management...It can be said that working under Mr. Toda itself was an education. For me, his every word and action have become the foundation of my own action as a human being, and it is as if an intangible asset has been imprinted in my life. (1988-2015 [1975], Vol. 22, p. 260)

I learned the full spectrum of disciplines under the private tutelage of my mentor Mr. Toda. In other words, I studied at Toda University. (1997, p. 278)

The school of my youth was the private instruction I received from Toda Jōsei, a master in “the study of humanity.” He gave me a thorough and complete grounding in an encyclopedic range of subjects, including politics, economics, law, Chinese classics, chemistry, and physics. I studied at Toda University. (1988-2015 [1999], Vol. 130, pp. 248-249)

When I was young, I learned a wide range of subjects and the “study of humanity” from my mentor, Mr. Toda. This has become an indestructible foundation for me. (1988-2015 [2004], Vol. 96, p. 380)

Through the lives of great people in history, my mentor Toda Jōsei always taught me the study of humanity and the art of leadership. (1988-2015 [2002], Vol. 128, p. 127)

As the above quotes indicate, the daily educational training Ikeda received from Toda was “a university that cultivates a person’s entire character for the achievement of their highest potential as a human being” (Ikeda, 1988-2015, Vol. 69, p. 472), something that can be called private instruction by a master in “the study of humanity.” Toda University not only used regular teaching materials for instruction, but through the study of Nichiren’s writings and the Lotus Sutra, there seemed to be a focus on passing on the ultimate principles of Buddhism to which Toda had awakened. Ikeda wrote as follows.

Besides the various fields of study, what [Mr. Toda] taught with most vigor was the

⁷ This is a translation of *ningen gaku*, which is a key term for Ikeda. It refers to a deepening understanding of humanity and how to live more fully through the study of great individuals.

Buddhist philosophy of life. By thoroughly explaining the Buddhist scriptures and Nichiren’s writings, he taught them in contrast to contemporary thought. (Aragaki, 1969, p. 23)

Later Ikeda reflected:

Mr. Toda often taught that the highest thought should be deeply pursued from the beginning. He also said, “The teachings of Nichiren Daishonin are the highest philosophy of life. Therefore, if you probe into these deeply, you will naturally know the basis of all knowledge.” (1988-2015 [1998], Vol. 89, p. 123)

Analysis of Different Periods of Toda’s Educational Training for Ikeda

After 2000, Ikeda often introduced the educational training he received from Toda in his essays and speeches. In his 1999 essay, the term Toda University was used to refer mainly to the lectures conducted before work at Ōkura Shōji, Toda’s business, but later Ikeda used the term to refer broadly to the following: 1) all the education and training Ikeda received since he joined the Sōka Gakkai in August 1947; 2) all the education and training Ikeda received since he started working for Nihon Shōgakkai, Toda’s publishing company, in January 1949; and 3) the private one-on-one instruction Ikeda received from Toda since January 1950. In this article, I use this first [definition of Toda University], which is the broadest [of the three] and, dividing the time from Ikeda joining the Sōka Gakkai to Toda’s death into five periods, I examine what kind of educational training Ikeda received during each period.

From Joining Sōka Gakkai to Starting Employment at Nihon Shōgakkai (August 1947 – January 1949)

In the following passage, Ikeda recalled August 24, 1947, when he decided to join the Sōka Gakkai and pursue the path of faith.

At that time, I still did not fully comprehend the profound teachings of Buddhism. My family was also strongly opposed to my decision. But transcending these surface problems, I was deeply drawn to the character of Toda Jōsei.

He believed in me, saying: “Come on! Don’t hesitate! Challenge your seeking spirit with me! Study and courageously practice, as befits a youth!” And I, with the intuition of youth, was convinced that I could follow this man who had been imprisoned during the war for the sake of peace and Buddhism. In that sense, August 24 marked my entrance into Toda University. (1988-2015 [2002], Vol. 133, p. 125)

The main activities of the Sōka Gakkai around this time were Toda’s lectures on the

Lotus Sutra and the writings of Nichiren at the headquarters located in Nishikanda in Chiyoda ward, along with the discussion meetings conducted once a month in each chapter. Ikeda started attending these lectures in the Fall of 1947, and from September 13, 1948, to February 5, 1949, as a member of the seventh class he attended the lecture three days a week—on Mondays, Wednesdays, and Fridays—for five months. [In a diary at that time,] Ikeda (2004) reflected on his impressions of the lecture as follows.

What great fortune to know the infinitely profound and compassionate teachings of the Lotus Sutra. I admire Mr. Toda as a teacher for all humankind...

I am a student of the Mystic Law. Am I not ashamed of my behavior until now? Do I not have delusion in the back of my mind? I myself doubt and hesitate.⁸ Religious revolution equals human revolution, one that will be followed by revolutions in education, economics and politics...

I am only twenty years old, and I have discovered the most glorious path to follow in youth! (p. 349)

Toda's lecture on the Lotus Sutra was not a mere commentary or explanation. It was encouragement for each attendee to transform their way of life—human revolution—based on Toda's own enlightenment in prison which moved Ikeda deeply.

From Starting Employment at Nihon Shōgakkān to the Cessation of Publishing Boys' Magazines (January 1949 - December 1949)

In January 1949, Ikeda entered Nihon Shōgakkān, a publishing company that Toda operated. He was in charge of editing the monthly boys' magazine *Bōken Shōnen* (Boy's Adventure), and he also became responsible for soliciting and receiving manuscripts from the writers and illustrators, which was something Toda used to do. Working with writers and illustrators who were extremely busy caused a lot of worry. Forming relationships with them was critical, and yet Toda entrusted Ikeda, who was only 21 years old, with this responsibility. Half a year later, Ikeda was appointed chief editor.

Ikeda wrote about the education he received after entering Toda's company in the following way.

I started working for Mr. Toda's company on January 3, 1949. It was right when I turned 21 years old. During the following ten years, Mr. Toda strictly trained me every single day. Every morning before work, he gave me private lectures. We of course studied Nichiren's writings, but also various subjects in the fields of humanities

⁸ In his diary, Ikeda sometimes addresses himself in the third person, and therefore a more literal translation of this sentence is closer to "You yourself are the one to have faith. You yourself are the one to save the nation."

and natural and social sciences. (1988-2015 [1992], Vol. 23, p. 251)

The first assignment entrusted to me at my mentor’s publishing company was editing a children’s magazine called *Boy’s Adventure* [*Boken shōnen*] (later changed to *Children’s Japan* [*Shōnen nihon*]). I was 21 at the time. I was responsible for all aspects of the publication, from planning to soliciting manuscripts as well as editing and proofing. At times when it seemed that a solicited manuscript would not arrive in time and there would be a lack of content, I would have to make up for it by writing material myself. In short, this was when I was pressed, by necessity, to seriously devote myself to writing. I began developing my writing under the strict tutelage of Mr. Toda, and this has been the most valuable experience of my entire life. (Yong & Ikeda, 2013, p. 24)

During this period, Ikeda received educational training from Toda through the process of editing magazines. Ikeda often states that he received education from Toda every morning for ten years, and if this is literal and we calculate from Toda’s death in April 1958, the morning lectures must have started even before Ikeda began working at Nihon Shōgakkai in January 1949. However, Ikeda sometimes uses expressions such as “every morning for about ten years” and “every morning for almost ten years,” and based on the reason Toda started these morning lectures, which is explained in the following section, we can infer they began after January 1950.

The Period of Working at Tokyō Kensetsu Shinyō Kumiai, Toda’s Credit Association (January 1950 – August 1950)

In December 1949, the publication of *Shōnen nihon* (Children’s Japan), the boys’ magazine of which Ikeda was editor, was suspended, and the entire staff became employees of Tokyō Kensetsu Shinyō Kumiai, a credit association Toda was starting in the same building. However, starting a new business amid the Dodge Line financial and monetary contraction policies issued in March 1949, which caused many small businesses to go bankrupt, portended many difficulties. Knowing this, on the new year’s day of 1950, Toda asked Ikeda, “Work will become busy, so would you quit night classes? Instead, I will take full responsibility and provide you one-on-one instruction” (Ikeda, 1988-2015 [1975], Vol. 22, p. 260).

Ikeda gave up attending [night classes at] Taisei Gakuin and devoted himself to supporting Toda. Toda kept his promise and started offering private instruction to Ikeda on days off. He then extended this to mornings before work and, in 1950, he started lecturing on

the five major writings of Nichiren⁹. Ikeda wrote as follows:

In my own case, most of my education was under the tutelage of my mentor in life, Josei Toda. For some ten years, every day before work, he would teach me a curriculum of history, literature, philosophy, economics, science and organization theory. On Sundays, our one-on-one sessions started in the morning and continued all day. (2021a, p. 12)

When I was young, for about ten years, I received Mr. Toda's private instruction almost every day. (1988-2015 [1999], Vol. 90, p. 236)

Further, starting around spring of 1950 until the following April, Toda gave lectures on Nichiren's "The Record of Orally Transmitted Teachings" to some leaders of the Sōka Gakkai. Although Ikeda was not included in the list of participants, he also attended the lecture; as Ikeda (1988-2015) wrote, "When I first began studying Buddhism [with Toda Jōsei], we started with the 'The Record of Orally Transmitted Teachings'" (Vol. 132, p. 278).

From Toda's Resignation as Sōka Gakkai General Director Because of the Suspension of His Business to His Inauguration as Sōka Gakkai President (August 1950 – May 1951)

Because the business conditions of his credit association worsened, as a last resort Toda appealed to the Ministry of Finance to act as a merger intermediary between his company and another credit association. However, on August 22, 1950, the Ministry notified Toda that his business would be suspended. So as not to affect the Sōka Gakkai members, he resigned from the position of the Sōka Gakkai General Director on August 24.

In November of that year, Toda, anticipating the worst (of being found guilty of criminal charges regarding the management responsibilities of his credit association), started giving lectures on Nichiren's writings to seven trusted members of the Sōka Gakkai, including Ikeda (Ikeda, 1988-2015, Vols. 36, 134). Toda also gave Ikeda Hall Caine's *The Eternal City* and Victor Hugo's *Ninety-Three* and told him to read them (Ikeda, 1988-2015, Vols. 89, 131).

The following February, Toda, still dealing with his business issues, held a session with 14 young males that Ikeda recommended to share their impressions on reading *The Eternal City*. He also started lecturing on the writings of Nichiren to these same members (Ikeda, 1988-2015, Vols. 78, 131). Around the same time, he also created a reading circle with 15 young females, using *The Eternal City*, *Ninety-Three*, and Dazai Osamu's *Run, Melos!* as

⁹ They are 1) On Establishing the Correct Teaching for the Peace of the Land, 2) The Opening of the Eyes, 3) The Object of Devotion for Observing the Mind, 4) The Selection of the Time, and 5) On Repaying Debts of Gratitude.

materials (“Sōka Kyōiku no Genryū” Hensan linkai, 2021).

In these ways, during this period, in addition to one-on-one instruction to Ikeda, Toda strove to create groups of people who shared the same spirit through group instruction. This method was later used in the Suiko-kai [Water Margin Group] and the Kayō-kai [Flower Sun Group]¹⁰.

From Toda’s Inauguration as President of Sōka Gakkai to His Passing (May 1951 – April 1958)

From May 1951 to April 1952: One-on-One Lectures Before Work for Ikeda

It seems to be around May 1951 that the teaching materials for the morning lectures changed from the writings of Nichiren to general educational materials. Kusayanagi Daizō, who interviewed Ikeda, listed 21 books that were used as materials for Toda’s one-on-one lectures.¹¹ Among them, the following six seem to be from this period: Odaka Tomoo’s *Introduction to Law*, Kokka Gakkai’s *Study of the New Constitution*, Hayashi Nobuo’s *Japanese Labor Law*, Ōta Tetsuzō’s *Study of Accounting*, Takada Yasuma’s *Introduction to Sociology*, and Hitotsuyanagi Juichi’s *Introduction to Geology*. In addition, it seems that Wada Kojirō’s *Principles of Law* was used.

From May 1952: Other Employees Join the Morning Lectures

The year after Toda was inaugurated as the President [of Sōka Gakkai], several young males were employed at Ōkura Shōji. On May 8, 1952, these employees joined the morning lectures that had been solely for Ikeda (Ikeda, 1988-2015, Vol. 130, p. 262). The main materials used during this period include the following, listed in the order they were used: Hatano Kanae’s *Introduction to Economics*, Hayashi Nobuo’s *Introduction to Law*, Frank Sherwood Taylor’s *The World of Science*, Ozawa Eiichi’s *Document of Japanese History*, Yada Toshitaka’s *World History*, Nakanishi Kiyoshi’s *Revised Edition of Advanced Chinese Classics* (Vol. 2), Suzuki Yasuzō’s *Politics*, and [Nichikan’s] “The Interpreting the Text Based upon Its Essential Meaning.”¹²

Based on records by a former employee of Ōkura Shōji, these morning (8:30-9:00am) lectures were terminated due to issues with Toda’s health. Around September 1957, Toda

¹⁰ These groups will be discussed in detail in the following section.

¹¹ The list includes books from a wide range of subjects such as Japanese and world history, law and the Constitution, Japanese and world politics, Japanese labor laws, economics, accounting, sociology, geography, earth science, chemistry, and astronomy.

¹² This is the third volume of *The Six-Volume Writings*, a work by Nichikan, the twenty-sixth chief priest of Taiseki-ji temple and scholar of Nichiren’s teachings, completed in 1725.

expressed his wish to resume the lectures, but it is unknown whether that happened. These records include no mention of study materials after “The Interpreting the Text Based upon Its Essential Meaning.”

From December 1952: Establishment of the Suiko-kai at a Meeting of Young Men’s Division Representatives

The Sōka Gakkai Young Men’s Division was established in July 1951, and the Suiko-kai was established in December 1952 to train a group of young men who would shoulder the future of the Sōka Gakkai. After a while, Ikeda became the de facto organizer and the meetings were held once or twice a month. Along with current events, these novels were used in the following order as curricular material: *The Water Margin*, translated by Satō Haruo, Alexandre Dumas’ *The Count of Monte Cristo*, Ozaki Shirō’s *Wind and Frost* (the title was later changed to *Takasugi Shinsaku*), Muramatsu Shōfū’s *Wind and Waves*, Victor Hugo’s *Ninety-Three*, Daniel Defoe’s *Robinson Crusoe*, Nikolai Gogol’s *Taras Bulba*, Henrik Ibsen’s *A Doll’s House*, Yoshikawa Eiji’s *The Romance of the Three Kingdoms*, and Yoshikawa Eiji’s *New Biography of Toyotomi Hideyoshi*.¹³

Both *The Water Margin* and *The Romance of the Three Kingdoms* are novels Toda had read since his youth (“Sōka Kyōiku no Genryū” Hensan Iinkai, 2019, p. 48). Since both depict various characters in China, using these as materials, the group discussed topics on character and personality, and then Toda added his perspectives (“Sōka Kyōiku no Genryū” Hensan Iinkai, 2021, pp. 225-228).

Along with the Suiko-kai, the Kayō-kai was also created with 20 representative members of the young women’s division in October 1952. Just like the Suiko-kai, they met once or twice a month with Toda, using the following novels, in the following order, as material: Charles Dickens’ *A Tale of Two Cities*, Harriet Beecher Stowe’s *Uncle Tom’s Cabin*, Mark Twain’s *The Adventures of Tom Sawyer*, Ozaki Shirō’s *Wind and Frost*, Rafael Sabatini’s *Scaramouche: A Romance of the French Revolution*, Natsume Sōseki’s *Botchan*, Frances Hodgson Burnett’s *Little Lord Fauntleroy*, Henrik Ibsen’s *A Doll’s House*, Nikolai Gogol’s *Taras Bulba*, Zhao Shuli’s *Marriage Registration and Family Treasure*, Thomas Hardy’s *Tess of the d’Urbervilles*, Yoshikawa Eiji’s *The Romance of the Three Kingdoms*, Sakaguchi Ango’s

¹³ These are based on records created by members of the Suiko-kai, as well as Ikeda’s own writings included in the following volumes of *The Complete Works of Ikeda Daisaku*: Vols. 16, 23, 76, 78, 86, 87, 90, 92, 95, 97, 99, 100, 119, 127, 133, 134, 135, 137, 138, 139, as well as the following publications: Ikeda (1991), Unkart-Seifert and Ikeda (2015), and Wang and Ikeda (2017). Also, according to personal communication with Einosuke Akiya, who was a young men’s leader under Toda and later became the fifth Sōka Gakkai president, these materials were selected by Suiko-kai members.

Nobunaga, Edward Bulwer-Lytton’s *The Last Days of Pompeii*, and Louisa May Alcott’s *Little Women*.¹⁴

Toda’s Daily Educational Training

Devoting Every Spare Moment to Educational Training

Toda devoted every spare moment to educating Ikeda. Ikeda stated as follows: “Wherever we traveled together, be it by car or plane, that place was a lecture hall of Toda University” (2010, p. 31); “I often traveled with Mr. Toda. Whether it was on the plane or train, he asked me many questions. That was how he trained me” (1988-2015, Vol. 96, p. 381). The following passages by Ikeda also describe Toda’s efforts [in this regard].

While traveling on train, even when he was tired, without taking even a moment of rest, [Mr. Toda] spoke on various topics, such as philosophy, world leaders, Mr. Makiguchi, and advice for the Sōka Gakkai’s future. (1988-2015, Vol. 135, p. 231)

Since I met Mr. Toda, he trained both my brain and heart by asking daily, “What have you read today? What was written in it?” He often said, “Although you believe in Buddhism, you should not become self-righteous. It is important to sincerely study various fields of scholarship, literature, and the theories of first-class philosophers. By so doing, you can further your understanding of Buddhism.” (Zgurovsky & Ikeda, 2011, pp. 60-61)

Mr. Toda often asked me, “Daisaku, what have you read today?” He was strict and fierce. I felt terrible. It was in the middle of a fierce battle to protect my mentor. There was not much time to devote to reading. When I saw him, I felt distressed having to answer what I read and what I learned from it. (1988-2015, Vol. 138, pp. 210-211)

Such educational training continued until March 1958, a month before Toda’s passing (Ikeda, 1988-2015, Vol. 99).

Discussion on Books and Historical Figures

In many of Ikeda’s essays and speeches, such as those from which the following passages come, there are episodes about his discussions with Toda on various books.

¹⁴ These are based on records by members of the Kayō-kai, as well as Ikeda’s dialogue with Sarah Wider (Wider & Ikeda, 2014).

In the evening, I went with Mr. Toda to visit K. in Koiwa. Discussed various business matters on the train. On the way back, Mr. Toda treated me to sushi near Koiwa Station. On the train home, we talked enthusiastically about Rousseau's *Emile* and other aspects of literature. Saw Mr. Toda off at Meguro Station. (2000, p. 51)

In my youth, I read many books by Tolstoy. I fondly remember an occasion when President Toda and I were riding a train together, and he asked me which of Tolstoy's writings I was reading that day. My reply was *A Calendar of Wisdom*. Mr. Toda smiled and nodded approvingly. (1988-2015, Vol. 136, p. 251)

Major writers and books that Ikeda indicates he and Toda discussed (excluding those used in the morning lectures before work and the materials used for the Suiko-kai) include the following: Hall Caine's *The Eternal City*, Jean-Jacques Rousseau's *Emile, or On Education*, Rafael Sabatini's *Scaramouche: A Romance of the French Revolution*, Christian Johann Heinrich Heine's *Germany. A Winter's Tale*, Victor Hugo's *Les Misérables*, Dante Alighieri's *Divine Comedy*, Carl Hilty's *Eudaemonics*, Shiba shilue [Eighteen Histories in Brief], *Records of the Grand Historian*, Yoshikawa Eiji's *New Tale of the Heike* and *Kuroda Josui*; various works by Ralph Waldo Emerson, Johann Christoph Friedrich von Schiller, Arthur Schopenhauer, Socrates, Stefan Zweig, Charles Dickens, Leo Tolstoy, Carl Hilty, Johann Heinrich Pestalozzi, Charles-Louis de Montesquieu, Jean-Jacques Rousseau, Sun Tzu, Du Fu, Yamamoto Shūgorō; works on the personality and character of historical figures such as Albert Einstein, Nikolaj Frederik Severin Grundtvig, Christen Kold, Rabindranath Tagore, Leonardo da Vinci, Napoléon Bonaparte, Thomas Carlyle, Johann Wolfgang von Goethe, Benjamin Disraeli, Plato, Henri Bergson, Victor Hugo, Jawaharlal Nehru, Sun Yat-sen, Nikolai Alexandrovich Berdyaev, Walt Whitman, Zhou Enlai, Zhuge Liang, Kitasato Shibasaburō, Tanaka Shōzō, Yoshida Shōin, Takasugi Shinsaku, and Takayama Chogyū.¹⁵

Toda's private instruction was not a one-way transmission of knowledge, but was a cultivation of wisdom through dialogic, mutual learning. Ikeda (1988-2015, Vol. 126) wrote as follows:

My mentor said, "You are young, so tell me what you learned. Tell me everything you know." I believe this is based on his thought that the current age was a time of competition based on information and that those who are not keen on new knowledge

¹⁵ These are based on Ikeda's writings included in the following volumes of *The Complete Works of Ikeda Daisaku*: Vols. 21, 23, 57, 60, 62, 67, 68, 69, 72, 73, 75, 78, 79, 85, 86, 88, 90, 92, 94, 97, 98, 100, 111, 128, 130, 131, 132, 133, 134, 135, 136, 137, 138, 139, 143, as well as from the following publications: Henningsen and Ikeda (2009), Ikeda (2006a, 2006c), Mingyuan and Ikeda (2012), Napoléon and Ikeda (2011), Wang and Ikeda (2017), and Wider and Ikeda (2014).

are disqualified from being a leader. He even strictly stated that “those who do not share [what they have learned] are acting as enemies.” I was therefore desperate. I voraciously read everything—from daily newspapers to books in various fields—and each time I shared with Mr. Toda what I learned and felt from them. (pp. 372-373)

Regarding Ikeda around 1953 when he was the leader of the young men’s division first corps, Sonehara Toshio (1999) wrote as follows:

At that time, I was a group leader in the young men’s division. Ikeda quoted from various books in society, such as those on history, science, literature, poetry, and philosophy, to provide encouragement. This was in the midst of his extremely busy schedule with work during the day and the Sōka Gakkai activities at night, even sending poems and messages to members of the young men’s division as encouragement. I once asked, “When do you study?” He replied, “Everything I am sharing is what I learned from Mr. Toda.” I remember I was deeply moved that because he has engraved everything he learned from Mr. Toda in his heart, he can talk without a script. (p. 7)

Toda and Ikeda’s Exchange of the “Poetic Spirit”

Toda and Ikeda not only discussed poetry, including Japanese *waka* poems and classical Chinese poems, but they also exchanged them to express their appreciation and determination. When Toda’s credit business was suspended and his life hit rock bottom with no money or support from people, [all Toda could offer was] a flower which he inserted in Ikeda’s lapel as a badge of honor [of completing the courses at Toda University and remaining by his side]. This is an anecdote that emerged from their “poetic spirit.”

Toda presented Japanese *waka* poems to members. These were not literary works with scenic descriptions or lyrical expressions. On this, Ikeda stated as follows:

I recall my mentor often writing Japanese *waka* poems and presenting them to members. He often pondered what to write with a pen in his hand. When he finished, he took off his glasses and revised the poems with his face close to the paper as if to rub against it. Mr. Toda was a math genius, but from the perspective of literary technique, he was not a professional. However, poetry is “a state of life.” My mentor’s poems were filled with love that spread in the hearts of those who received them. They were infused with the heart of encouragement, a strong determination that roused people to stand up. (1988-2015, Vol. 126, p. 316)

Ikeda has also sent poems to many members as encouragement. Although he had written poems even before he met Toda, it was from Toda that he learned to use poems as a

form of encouragement.

Study Groups for Lecturers on Nichiren's Writings and Members of the [Sōka Gakkai] Study Department

Toda held study sessions for Sōka Gakkai leaders who lecture the writings of Nichiren twice a month at the district level. In addition, at the study groups for the members of the Study Department, Toda had members present the study materials and asked them one question after another. Ikeda also attended these study sessions as the lecture of Nichiren's writings for the districts and as a member of the Study Department.¹⁶ Ikeda wrote as follows:

Those who became responsible for giving district-level lectures [on Nichiren's writings], including myself, were mostly youth. The local level and practice are of foremost importance. This was the training of Mr. Toda, who was an unprecedented mentor. Therefore, his lectures preparing those responsible [for speaking on Nichiren's writings] were rigorous and strict. (1988-2015, Vol. 132, p. 129)

Ikeda also received a one-on-one lecture on [Nichiren's] "The One Hundred and Six Comparisons" from Toda, and he wrote about it in the following passages.

Mr. Toda selected study materials such as "The One Hundred and Six Comparisons," "The Record of the Orally Transmitted Teachings," and "The Object of Devotion for Observing the Mind," and had [representatives of the Study Department] study them. The one I was responsible for was "The One Hundred and Six Comparisons," and I always went to his place in the evening after work to study. (1962, p. 4)

Mr. Toda also lectured me on "The One Hundred and Six Comparisons." One day, when he was lying down resting, my mentor suddenly said: "All right! Let's start!" and he happily gave me a lecture right then and there. However, if I was ever less than attentive, he promptly rebuked me: "That's enough! I'm not a machine." (1988-2015, Vol. 130, p. 284)

Training Received within the Sōka Gakkai Organization

The training Ikeda received from Toda was not only through books. Toda appointed Ikeda to various positions within the Sōka Gakkai and provided strict training through these, such as by having him learn how to take measures for new developments and even placing him in difficult positions. Some examples include chief of staff, head of the public relations

¹⁶ This will be further discussed in the section "Sōka Gakkai is a 'University without a Campus.'"

department, and person in charge of the Osaka district in the national House of Councilors election.

The “Great Resolve” to Save All People

Toda often said “the way of life means one’s resolve. The depth of one’s life is determined by their depth of resolve” (1988-2015, Vol. 128, p. 127). His mentor Makiguchi Tsunesaburō died in prison in November 1944, before Toda was released from prison in July 1945. Around that time, through deep contemplation Toda became aware that he himself was a Bodhisattva of the Earth depicted in the Lotus Sutra. Through further contemplation, he made it his mission to save all people through Nichiren Buddhism. A passage that clearly describes this is the following excerpt from Toda’s remarks at his inauguration ceremony as the second Sōka Gakkai President on May 3, 1951.

I will achieve 750,000 member-households with my own hands while I am still alive. If this goal is not achieved by the time I die, do not bother holding a funeral for me; just throw my ashes into the sea off Shinagawa! (Toda, 1981-1990, Vol. 3, p. 433)

The resolve to save all people through Nichiren Buddhism was something Toda inherited from his mentor Makiguchi. On June 27, 1943, in the midst of the Pacific War, Makiguchi was urged by the Nichiren Shōshū high priest that the Sōka Kyōiku Gakkai (Value-Creating Education Society) also accept the militarist government’s policies on religion. Makiguchi not only rejected these, but urged the high priest to remonstrate with the government to abandon its mistaken religious policies even if that led to the oppression and destruction of Nichiren Shōshū. Makiguchi believed there was something more important than the survival of a religious organization. That was not to push people into the depths of unhappiness (Rees & Ikeda, 2018; “Sōka Kyōiku no Genryū” Hensan Iinkai, 2017).

On July 6, only nine days after Makiguchi made this suggestion, both Makiguchi and Toda were arrested by the Special Higher Police. Makiguchi died in the Tokyo Detention Center in November 1944, and Toda ended up spending two years there.

In order to understand Toda and his successor Ikeda, I believe it is extremely important to understand this “great resolve” that was in Toda’s heart. Ikeda later wrote about July 1956 when he and Toda discussed their vision for the 21st century:

At that time, as if predicting the future, Mr. Toda said, “Daisaku, in your later years, the Sōka Gakkai will become an essential core of humanity’s peace and culture.” He further stated, “The Sōka Gakkai will undoubtedly become the monarch of the religious world. As such, it will be able to send truly capable people into all spheres

of society, such as politics, economics, education, and the arts. That is our mission. A great human revolution in each one of such people will contribute immensely toward society in the century to come.” This was Mr. Toda’s vision for the Sōka Gakkai in the 21st century. (1988-2015, Vol. 92, pp. 144-145)

Toda also shared with Ikeda the following two weeks prior to his passing: “Last night I dreamed that I went to Mexico. They were all waiting, waiting...seeking Nichiren Buddhism. ... The world is your true stage” (Ikeda, 2021b, p. 315).

What was in Toda’s heart was the realization of a society where all people in the world can live a happy life. I would like to list three of his statements that clearly express this “great resolve.”

“I Want to Eliminate Misery from the Earth”

First is “I want to eliminate misery from the Earth,” which Toda stated on many occasions. According to Ikeda, Toda also said these words in August 1947 when they first met (Yamamoto, 2013). Ikeda (2016) also wrote as follows:

During World War II and its aftermath, it was women who suffered the most and were forced to endure the greatest privations...Their lives and daily experiences were filled with bitter tears. It was an existence of endless hell. My mentor Josei Toda dedicated his life to the struggle to open the great path leading to security, fulfillment, and happiness for women such as these. “I want to rid the world of misery!” —this ardent desire was the core of Mr. Toda’s philosophy. (pp. 23-24)

Toda also kept in his heart the people in other countries who were afflicted by war and in dire circumstances. In regards to the Korean War that started in June 1950, Toda wrote the following:

Look at the upheaval on the Korean peninsula. Who can save the Korean people from the hell of suffering? What can give light to the Asian people—no, to all people in the world—who wander aimlessly without knowing tomorrow. It is none other than the compassion of Nichiren Daishonin. (1951b, p. 1)

I lament that, because of this war, there are many people who lost their husbands and wives or those who are searching for their children or parents. (1951a, p. 1)

Further, regarding the Hungarian Revolution that started in October 1956, Toda (1957a) wrote as follows:

Last winter, the Hungarian Revolution attracted the attention of the entire world. I cannot fathom the details of the circumstances...However, I can imagine the people

there are in painful, heartrending conditions. On top of a life of poverty and suffering, what they received was gunfire....I wish that my comrades who share the same resolve all strive to eliminate misery from individuals, countries, and the world. With this I want to welcome a hope-filled new year. (p. 1)

Toda (1957c) further wrote in the foreword of the April 1957 issue of the *Daibyakurenge* as follows:

Prosperity of society should not be the prosperity of just one society. The whole world should become one society where people all over the world can enjoy the prosperity of society....We should not sacrifice people in other countries for the happiness of the Japanese people, nor should we sacrifice the Japanese people for the happiness of the American people. For the sake of the happiness of one communist leader, people in other countries should not be sacrificed. The prosperity of society in which all the world's people rejoice must be one in which every individual can live in happiness. (p. 1)

Global Nationalism¹⁷

Second is “global nationalism.” On February 17, 1952 at a youth meeting, Toda (1952a) said, “If I may express my own philosophy, mine is absolutely neither Communism nor Americanism; it is of the oriental race and, ultimately of the global race” (cf. Yatomi, 2006, p. 99). A perusal of the *Seikyo Shimbun* and *Daibyakurenge* indicates that this is the only time Toda used the term “global nationalism.” What then is this “global nationalism” ? To understand this, I would like to quote the following passages from Ikeda.

After saying, “Let me state my philosophy,” my mentor used the phrase global nationalism for the first time. It was an unfamiliar phrase, but it inevitably made me realize that the journey of *kosen-rufu*¹⁸ is to go out into the world. At that time, the Korean War had not yet ceased, and the antipathy between the East and West had led to the danger of a potential third World War. The conflict in ideology and political systems deepened the rift [between the two worlds], and distrust and hatred spread throughout the world. Mr. Toda must have advocated for global nationalism as a guide

¹⁷ This is a translation of Toda's unique term *chikyū minzoku shugi*, which literally means something like “global race-ism,” “global people-ism,” “global ethnos-ism,” or “global nationalism.” It has been translated in works on and by Ikeda as “one worldism,” “global family,” “global nationalism,” and “global citizenship,” but the term also includes dimensions of race and ethnicity and indicates Toda's belief in the underlying unity of the world's peoples (Goulah, 2020).

¹⁸ This is a term from the Lotus Sutra that means to declare and spread widely. Here, it refers to the Sōka Gakkai's effort of spreading Nichiren's teachings to create a peaceful society.

to stop this serious divide and lead people toward peace and creative coexistence. It was truly a clarion call of warning to “return to the prime point of humanity” and “awaken to the spirit of a global citizen.” (1988-2015, Vol. 133, p. 197)

Having grasped the essence of Buddhism, which is the fundamental law of the universe, Mr. Toda always thought from a cosmic or universal perspective. In February 1952, as the rift between the Eastern and Western blocs was deepening, he advocated for global nationalism. He firmly believed that humanity must transcend its ethnic, national, and ideological differences and, based on the awareness that we are a global family sharing one, unified world, blaze a new path of creative coexistence. (1988-2015, Vol. 129, pp. 247-248)

Mr. Toda...also called for a “global nationalism” transcending state borders, while asserting that no people should be victims of war or the suppression of human rights. I will never forget Mr. Toda telling us youth that the United Nations represented the distillation of wisdom of twentieth-century humankind and was a bastion of the world’s hopes that needed to be protected and developed into the next century. (Clements & Ikeda, 2019, p. 144)

“I Believe It Is the Mission of Every Member of the Youth Division in Japan to Disseminate Throughout the Globe the Idea that Anyone Who Uses Nuclear Weapons Should Be Viewed as Devils, as Evil Incarnate”

Third is the following statement by Toda, which he called “the foremost of my instructions for the future” and was made on September 8, 1957 at the [Sōka Gakkai’s] Fourth East Japan Youth Sports Festival. This later came to be called the “Declaration Calling for the Abolition of Nuclear Weapons.”

I wish to declare that anyone who ventures to use nuclear weapons, irrespective of their nationality or whether their country is victorious or defeated, should be sentenced to death without exception. Why do I say this? Because we, the citizens of the world, have an inviolable right to live. Anyone who jeopardizes that right is a devil incarnate, a fiend, a monster. I propose that humankind applies, in every case, the death penalty to anyone responsible for using nuclear weapons, even if that person is on the winning side.

Even if a country should conquer the world through the use of nuclear weapons, the conquerors must be viewed as devils, as evil incarnate. I believe that it is the mission

of every member of the youth division in Japan to disseminate this idea throughout the globe. (Toda, 1957b)

On the morning of November 20, two months after the “Declaration Calling for the Abolition of Nuclear Weapons,” Toda collapsed as he was about to head to Hiroshima, where the atomic bomb was dropped twelve years earlier. Thereafter, Toda had to rest and recuperate at home. The day before, on the 19th, Ikeda, worried about Toda’s extremely frail health, had tried to persuade Toda to cancel his trip to Hiroshima. However, at that time Toda stubbornly rejected, saying, “I can’t turn my back on something once I’ve decided to do it. I will go even if it kills me!” (Ikeda, 1988-2015, Vol. 37, pp. 218-219).

A dentist, Asai Tōru (1960), wrote the following memoir from which we can surmise Toda’s feelings toward the survivors of the atomic bomb.

Once when Mr. Toda visited Osaka, he asked me when we were riding in a car, “Asai, can radiation sickness caused by atomic bombs be cured?” When I answered, “Well, today when science cannot even elucidate its sphere of influence, there is no way to find a medical treatment,” he responded, “The Gohonzon can surely cure it.” Soon after, in September 1957, at the Mitsuzawa Stadium in Yokohama, he boldly made the nuclear abolition declaration, a lion’s roar to the entire world, as the foremost of his instructions for the future. (p. 70)

“I will never let anyone use the atomic bomb. I want to wholeheartedly encourage those who are suffering from the after-effects of the atomic bomb and lead them to a healthy life.” This was Toda’s heart. Ikeda wrote that “as a practicing Buddhist, my mentor acutely understood from the depths of his soul that nuclear weapons would become the greatest threat hanging over humankind” (Rotblat & Ikeda, 2007, p. 5). Ikeda further stated:

Nuclear weapons threaten our right to exist and are an absolute evil. Unless we rid the world of them, peace will remain an illusion. Forty-five years ago, in his declaration against them, Toda clearly identified the true nature of nuclear weapons not from the standpoint of ideology but from that of all human life...

Of course, as a Buddhist, Toda opposed capital punishment. He spoke of condemning to death to emphasize the severity of the consequences of the demonic impulse represented by the wish to possess nuclear weapons. He wished to eradicate the evil that makes people want to use them, using the word *death* to underscore the importance of its antonym, life. (Krieger & Ikeda, 2002, pp. 129-130)

My Mentor, Josei Toda, repeatedly emphasized the importance of presenting a clear and concrete plan for progressing toward peace for humanity. He stressed, “Even

if the goal is not achieved immediately, ultimately, your efforts will serve a kindling, and the warm glow of peace will spread. Empty theories are useless, but a clear and concrete plan serves as a pillar supporting the structure that will protect humankind.” (Rotblat & Ikeda, 2007, p. 12)

What Ikeda Learned at Toda University

Ikeda (2006b) stated, “Almost every morning for ten years, my mentor Mr. Toda taught me various subjects. Further, on various occasions, he also taught me the study of humanity and leadership theories” (p. 2). Ikeda also described the mentor and disciple relationship in the Sōka Gakkai in the following manner:

The greater the ideal, the more difficult to actualize it in one generation. Therefore, it is necessary to have a successor. This ideal will come to shine brighter as it steadily takes root in society by being passed on from one generation to the next. In that sense, mentor and disciple can be characterized as the best and unparalleled comrades who, by sharing the same ideal, fight to make it a reality. (Henningsen & Ikeda, 2009, pp. 208-209)

What then did Ikeda learn from Toda? I analyze this question based on Ikeda’s speeches and essays and present them below.

Nichiren Buddhism Is for All People

Ikeda stated, “What [Mr. Toda] placed at the foundation of my training was reading *The Writings of Nichiren*, a book that saves the people in the latter day of the law. This was because without a firm foundation, everything becomes a castle built on sand” (Ikeda, 1988-2015, Vol. 134, p. 135). Toda believed the reason many Sōka Gakkai leaders abandoned their faith during the war period was because they did not deeply study Nichiren Buddhism. And, based on his own understanding of the essence of Buddhism developed through a thorough reading of the Lotus Sutra in prison, Toda made efforts to lecture on the Lotus Sutra and Nichiren’s writings to awaken each member to their mission to save people as Bodhisattvas of the Earth (Xianlin et al., 2002). Regarding Toda’s enlightenment in prison, Ikeda also stated as follows:

Through thoroughly pursuing the question “What is the Buddha?” Toda came to realize that the Buddha is none other than the self and the great life of the universe; that these two—the self and the universe—are in fact one...when we dig into the inner reaches of our own being, the common foundation of life that all people share comes

into view. This foundation is none other than the eternal life of the universe. President Toda became enlightened not only to the wellspring at the core of his own being, but also to the foundation of life that all people share. He realized that, as he put it, “in essence, all people are in fact Bodhisattvas of the Earth.” (Ikeda et al., 2001, p. 266)

Even during the most dire circumstances when not only his business but even the Sōka Gakkai organization could be ruined, Toda used the time before work and continued to offer lectures on Nichiren’s writings as the foundation of his training for Ikeda. These lectures directly from Toda later became the basis of Ikeda’s activities.

Further, these lectures based on Toda’s awakening in prison aroused courage and hope in people. This was different from the understanding of Buddhism inherited by the priests. Because of this, as the number of Sōka Gakkai members increased, there were many instances leading to strife and discord (“Sōka Kyōiku no Genryū” Hensan Iinkai, 2021). Overcoming these difficulties, Toda published *The Collected Writings of Nichiren Daishonin* and established the Sōka Gakkai as a religious corporation, creating the foundation of a religion for all. Ikeda worked closely on and supported all of these efforts.

Ever since he started working for the Nihon Shōgakkai, [Toda’s publishing company,] Ikeda had overcome many difficulties alongside Toda and closely observed Toda’s actions and behavior. Ikeda stated as follows:

What Mr. Toda taught me was to “love the people.” He often said that “leaders should work for the people.” He was strict to those with status and authority who looked down on ordinary people. He was someone who lived among the ordinary people and loved them from the bottom of his heart. (1988-2015, Vol. 23, p. 313)

Most of all, however, I learned from his example. The burning commitment to peace that remained unshaken throughout his imprisonment was something he carried with him his entire life. It was from this, and from the profound compassion that characterized each of his interactions, that I most learned. (2021a, p. 12)

Firm Resolve to Realize a Peaceful Society

Among the articles published in the boys’ magazines during the time Ikeda served as the chief editor, one that warrants particular attention is the special series on the nuclear energy and the atomic bomb in the October and November 1949 issues of *Shōnen Nihon*. The November issue included a short story called *Genshino no hana* (Flower in the Atomic Wasteland) [written by Akinaga Yoshirō] that depicted the aftermath of the atomic bombing in Hiroshima.

At that time, Japan was under the GHQ occupation, and all publications were subject to censorship. In particular, anything related to the atomic bomb was strictly censored. Under such conditions, Toda published a novel that illustrated the atrocity of the atomic bomb. Depending on the results of censorship, the publication of the magazine could have been banned. The fact that this series was planned even with such high risk shows Toda's strong will to actualize a peaceful society; Ikeda also learned from this experience.

On September 8, 1957, seven months before his passing, in front of 50,000 [Sōka Gakkai] members, Toda made his declaration calling for the abolition of nuclear weapons. Eleven years later on September 8, 1968, Ikeda, who kept Toda's words in his heart, called for the normalization of Sino-Japanese diplomatic relations. Further on September 8, 1974, he visited the Soviet Union for the first time and, three months later, visited China again, engaging in citizen diplomacy for the peaceful relations between the two countries.

In May, 1969, two years before the opening of Soka University, as its founder Ikeda proposed "Be a fortress for the peace of humankind" as one of the university's fundamental principles. He asserted that one of the aims of establishing Soka University is to protect peace and happiness of the people.

Leadership Theory for the Development of the Sōka Gakkai

At the core of the education Ikeda received from Toda was how to develop the Sōka Gakkai. The following statements by Ikeda (1988-2015) attest to this:

Mr. Toda's teaching was never an abstract theory. It was practical wisdom grounded in reality. When discussing history, for example, he asked questions such as, "Why did this ethnic group thrive?" "Why did this country decline?" and "Why did this religion thrive or decline?" In other words, whether individuals or groups, he focused on various "histories of the rise and fall." In this way, he cultivated in young people a keen and deep perspective toward history and taught them how to create a history of kosen-rufu that would develop for many generations. (Vol. 71, p. 270)

[Classes at] Toda University were conducted sometimes in a one-on-one setting and sometimes together with several members. During this time, Mr. Toda taught me various subjects that can be called a "great leadership theory for justice." (Vol. 134, p. 134)

During the lectures at Toda University, Mr. Toda often said, "Continue to study and learn! Unless you become a person of wisdom of the Mystic Law, you cannot fulfill

your great mission in the future. In addition to gaining a broad understanding of society, you must place yourself within the destiny of the entire world and formulate all of your ideas from this perspective. (Vol. 138, pp. 147-148)

Sincerity as a Human Being

In October 1949, Toda decided to leave the publishing business. This was because the management of his company became difficult as more and more big publishing companies with larger capital emerged. The employees started working for Toda’s credit association in the same building. Ikeda’s responsibilities also changed to selling monthly savings plans and collecting money. Whether a small credit association can earn trust from customers depends on first impressions of the sales person. Ikeda cherished each encounter and walked around to make sales until late at night every day.¹⁹

In fact, that year, in order to recover the Japanese economy from inflation, the government issued many policies that would close many small and medium-sized businesses, which led many companies to go bankrupt. The business conditions of Toda’s credit association also declined, and in August 1950, the Ministry of Finance notified him to suspend his business. Employees quit one by one, and Ikeda was the only one left. For Ikeda, who was sick with tuberculosis, this was a physically and mentally difficult time. Ikeda (1988-2015) wrote, “Mr. Toda often told me that in this society formed by human connections, ultimately the most important thing comes down to sincerity” (Vol. 18, p. 155). Ikeda (1988-2015) also wrote the following:

Mr. Toda interacted with the creditors with sincerity and made efforts to settle all matters. I was often called to accompany him on those occasions, and I believe this was not merely because I was an employee, but because he considered these to be opportunities to educate me. He thoroughly taught and trained me on matters of public relations such as recognizing each person’s personality, making decisions, and taking actions after negotiations. (Vol. 18, p. 154)

Kobayashi Haruo (1992), who was chief of the Finance Division of the Kantō Regional Finance Bureau in The Ministry of Finance during this time, later wrote that “today, even after 40 years, I cannot forget the bright light inherent in the character of Mr. Toda with whom I developed trust and relationship” (p. 27).

When the credit association was closed down, a newspaper reporter who heard this came to write sensational articles. However, because Toda and Ikeda sincerely explained the

¹⁹ This is based on the record of an interview with Tsuchiya Setsuko, who joined the Sōka Gakkai after being introduced by Ikeda.

situation, the reporter decided not to write about it (Ikeda, 1988-2015, Vol. 137, pp. 281-282).

In his final years, Toda met many journalists, writers, and critics. Among them were also a previous member of the Communist Party Central Committee and a priest of other Buddhist sects. When we read what they wrote, most of them are very favorable toward Toda. Through his frank and unpretentious behavior, Toda was able to reach their hearts. This is also most likely a result of the sincere efforts of both Toda and Ikeda, with Ikeda becoming chief of the public relations office of the Sōka Gakkai in December 1954.

Further, around 1954, Toda developed a close relationship with Kishi Nobusuke, who served as Prime Minister from February 1957 to July 1960. Because of their relationship, Kishi, who was Prime Minister at the time, decided to attend a ceremony on March 16, 1958 at the Taiseki-ji temple, where 6,000 [Sōka Gakkai] youth awaited. Ultimately, Kishi did not attend due to strong opposition from those close to him, but he attended Toda's funeral a month later on April 20 conducted by the Sōka Gakkai, which surprised the mass media.

Toda's View on the Education to Be Conducted at Soka Schools

What was Toda's view of founding schools, a vision entrusted by Makiguchi? In November 1950, 20 years after the publication of the first volume of *The System of Value-Creating Pedagogy*, Toda shared with Ikeda his vision of establishing Soka University, but the details remain unknown. However, I believe a clue for understanding his vision can be found in Toda University.

Ikeda described Toda University as "private instruction by Toda Jōsei, a master in the study of humanity." According to Asano (1970), at the opening of Soka University in 1971, Ikeda had envisioned establishing the Faculty of Humanities and the Faculty of International Studies. Okayasu Hiroshi (2005), who served as the secretary general of the Soka University Establishment Preparation Committee, stated,

The Founder wanted to first create the Faculty of Humanities. At that time, it was a pioneering idea with no such example at any other university. When we asked the Ministry of Education whether this was possible, we received a response that this was difficult. (p. 178)

In the 1970's, the Ministry of Education had a policy that did not allow the establishment of any new Faculty other than what already existed. Therefore, the Soka University Establishment Preparation Committee decided to apply for approval of the Faculty of Law, Faculty of Economics, and Faculty of Letters, which were likely to be approved.

About 20 years later, Ikeda suggested creating the Faculty of Humanities to the administration of Soka University. By this time, the Ministry of Education had greatly changed

their policies, approving many faculties and departments with “human” in their name and with a diverse curriculum. As a member of the university’s review board of the new faculty, I discussed with other staff and faculty what the “Faculty of Humanities” at Soka University should entail. What emerged from these discussions was something similar to what is known as a liberal arts college in the United States. However, this was similar to the vision for Soka University of America that was about to open in 2001.

The reason why I started conducting biographical research on Makiguchi, Toda, and Ikeda can be traced to this experience serving on the review board. I asked myself, what is something that cannot be done at Soka University of America? I came to the conclusion that it is building the foundation for research on Makiguchi, Toda, and Ikeda.

On another note, about three years after the opening of Soka University, Ikeda suggested putting benches in the open space surrounded by trees so that classes can be held outdoors. Students agreed and joined in creating plazas and pathways surrounded by plants and trees. In May 1974, Ikeda was welcomed for the opening ceremony of the Greenery Hill and Sunny Hill. This suggestion may have come from the importance of the dialogic education Ikeda once experienced at Toda University.

Robert Maynard Hutchins (1956), who served as the President of the University of Chicago from 1929 to 1951, advocated for education based on the “great books,” which became one of the origins of liberal arts education in the U.S. I believe the education Ikeda received from Toda at Toda University has similarities with this education through the “great books.”

Since the 1970’s, Ikeda has conducted dialogues with many scholars from around the world, many of which have been published as books. The education he received at Toda University has fully blossomed.

Sōka Gakkai is a “University Without a Campus”

More than anything, Toda spent his time talking with and encouraging individual members. Soon after his credit business was suspended in August 1950, he became the executive advisor of Ōkura Shōji. When Toda became the second president of the Sōka Gakkai in May 1951, the office of Ōkura Shōji was moved to a building in Ichigaya, and the satellite office of the Sōka Gakkai was created next door. Although it was called a “satellite office,” it was just a room with one desk. On weekday afternoons, this became a place where Toda conducted guidance sessions for Sōka Gakkai members. Toda (1952b) said that even if he met 50 people in a day, he could only meet 15,000 people in a year. This continued for two and a half years until the Sōka Gakkai headquarters moved to Shinanomachi in Shinjuku ward, so

it is estimated that he had met a total of 40,000 people. In the aftermath of WWII, Toda faced members with serious problems every day, sharing their suffering and encouraging them (Ikeda, 1988-2015, Vol. 134, pp. 109-112).

Toda also thoroughly listened to each member's worries at discussion meetings, sometimes warmly and sometimes strictly giving guidance. Dialogue with members often continued on the trains after the meetings, and he felt joy in visiting members at their homes (Ikeda, 1988-2015, Vol. 17, p. 56).

I heard the following story from a men's division member in Saitama. He was still a high school student when Toda passed away. When his mother and older sister heard the news of Toda's passing, they cried for a whole week. About 250,000 people attended Toda's funeral, but it was not that they were told to gather; rather, they could not help but see him off. Each member felt connected to Toda in their hearts.

According to Ikeda (1957), Toda used to tell chapter men's leaders, "In the past, feudal lords knew everything about each of the 20,000 or 30,000 people who worked under them" (p. 5). We do not know if this was true for the feudal lords, but Toda met and encouraged members many times more than this.

As the number of members increased, it became increasingly difficult for Toda to directly talk with every member. Therefore, Toda created opportunities for any member to be able to hear his lectures. Wanting to hear his lecture, members rushed to the lecture halls to listen to him, so the lecture halls were packed sometimes even to the stage. Toda gave lectures on Nichiren's writings with a sense of humor (Ikeda, 1988-2015, Vol. 132, p. 115). He also took time for Q&A, ensuring that everyone was able to understand.²⁰ Ikeda closely observed such behavior.

After Toda became the second president of Sōka Gakkai, Ikeda was appointed to many important positions in the organization. Every time, Ikeda responded by achieving results that met Toda's expectations, which revitalized the entire organization. At the root of all his actions was Toda's one-on-one dialogue and encouragement. Ikeda faithfully practiced [what he learned from Toda].

Toda often described the Sōka Gakkai as a "university without a campus" (Ikeda, 2013, p. 186). Toda, raised hundreds of thousands of people—men and women, young and old—who uphold the same resolve as he through one-on-one dialogues.

According to [fifth Sōka Gakkai president] Akiya Einosuke, one of the reasons the Sōka Gakkai quickly developed in such a short span was the local district-level lectures held twice a

²⁰ In the *Seikyo Shimbun* and *Daibyakurenge*, more than 600 questions from members and Toda's answers were published.

month. As the number of members grew around the country, the number of members who had never met Toda also increased. To address this issue, members of the Study Department who directly heard Toda’s lectures went to each area and conducted district-level lectures. This became the springboard to awaken the life force inherent in each person. Those who conducted these lectures varied in age, gender, and educational level. The Sōka Gakkai was at that time ridiculed as a gathering of the sick and the poor, and these lecturers were no exception.

Toda often said, “This Buddhism is for those facing adversity to become happy. Those who suffer can bring forth incredible strength when they overcome their sufferings. Those are the people who can truly become an ally to others who are suffering” (Hachiya, 1977, p. 23). As those who faced serious problems gathered to study together, the circle of people who aimed for the happiness of self and others quickly spread.

Conclusion

Makiguchi was an educator, and Ikeda established many educational institutions such as Soka University. Toda, who connected these two, was also an educator. The first volume of *Toda Jōsei: A Critical Biography* gives a detailed account of Toda’s life before July 1945, such as educational practices at elementary schools and his private school, Jishū Gakkan, and his publications of study guides and educational magazines.

However, when we look from the perspective of Toda University and the Sōka Gakkai as a university without a campus, I think it was actually after July 1945 that Toda revealed his true potential as an educator. This is because not only because Toda educated the youthful Ikeda to grow into a person who could engage in heart-to-heart dialogues with leaders and intellectuals from all around the world, but also because he cultivated in the hearts of hundreds of thousands of people the same “great resolve” to save all people, the core and foundation of “Sōka” that was inherited from Makiguchi to Toda, and then to Ikeda.

Today, we face global problems such as climate change, requiring each country to discard the conventional thinking of placing utmost importance on national interest and to shift perspectives to aim for the mutual prosperity of a global society based on the interest of all humanity (Krieger & Ikeda, 2002). However, this is not something that is demanded of just national and local governments or companies, but it also requires the awareness and actions of all of us who live on earth (Díez-Hochleitner & Ikeda, 2008; Swaminathan & Ikeda, 2005).

Toda wrote the novel *The Human Revolution* [serialized in the *Seikyō shimbun*] based on his own experiences from his encounter with Makiguchi in 1920 to [his enlightenment in prison in] 1944. In a novel with the same title, Ikeda chronicled Toda’s life after July 1945, after

his release from prison to his passing in April 1958. In the preface to *The Human Revolution*, Ikeda (2004) wrote, “A great human revolution in just a single individual will help achieve a change in the destiny of a nation and, further, will enable a change in the destiny of all humankind” (p. viii). This sentence succinctly and clearly expresses Toda’s “great resolve” to save all people.

[The spirit of] human revolution started from the inner transformation of Toda alone. It was then inherited by Ikeda through Toda University and, at the same time, has become possible for anyone to learn and put into practice through the Sōka Gakkai, a university without a campus. Toda often said, “The Sōka Gakkai is a noble organization doing the Buddha’s work to save all suffering people. It is an organization more important than my own life” (Ikeda, 1988-2015, Vol. 96, p. 269).

In the Sōka Gakkai, people in the depths of suffering transform into people who, with the aim of the happiness of self and others, take others’ problems as their own and encourage them. This circle of people [encouraging each other] has spread widely. I believe the path to solving the many challenging global issues we face today can be found here. The [path of] human revolution that Toda and Ikeda demonstrated is a movement to create a stream of people who strive for the happiness of self and others.

Toda dedicated his life after July 1945 to encouraging and educating members. If the warp is the Toda University for Ikeda, the weft was a university without a campus in the Sōka Gakkai.

This article focused on presenting an overview of Toda University where Ikeda studied. I will leave it to future research to analyze the content and educational methods of Toda University.

References

- Aragaki, H. (Ed.). (1969). *Jinsei no onshi: Watashi no yūki wo mezamesaseta mono* [Mentor in life: What awakened my courage]. Daiwa Shobo.
- Asai, T. (1960, April). Toda sensei no daikakushin ni furete [On perceiving Mr. Toda’s great conviction]. *Daibyakurenge*, 107.
- Asano, H. (1970). *Asu no Sōka Gakkai* [Tomorrow’s Sōka Gakkai]. Keizaioiraisha.
- Clements, K. P., & Ikeda, D. (2019). *Toward a century of peace: A dialogue on the role of civil society in peacebuilding*. Routledge.
- Diez-Hochleitner, R., & Ikeda, D. (2008). *A dialogue between East and West: Looking to a human revolution*. I.B. Tauris.

- Goulah, J. (2020). Daisaku Ikeda and the Soka movement for global citizenship. *Asia Pacific Journal of Education*, 40(1), 35-48.
- Hachiya, Y. (Ed). (1977). *Kono hi arite: Kōfu ni ikiru haha no kiroku* [With this day: Records of mothers who lived for kosen-rufu]. Seikyo Shimbunsha.
- Henningsen, H., & Ikeda, D. (2009). *Asu wo tsukuru kyōiku no seigyō* [Shaping the future: The sacred task of education]. Ushio Shuppansha.
- Hutchins, R. M. (1956). *Idai naru taiwa* [The great conversations] (H. Tanaka Trans.). Iwanami Shoten.
- Ikeda, D. (1957, June 16). Korekara no Gakkai seinenbu [Sōka Gakkai’s youth division in the future]. *Seikyo Shimbun*.
- Ikeda, D. (1962, October 18). *Ikeda kaichō ni kiku Gakkai dentō no “jissen no kyōgaku”* [President Ikeda on “Buddhist study for practice,” the tradition of the Sōka Gakkai]. *Seikyo Shimbun*.
- Ikeda, D. (1991). *Ningen to bungaku wo kataru: Romanha no shijin Bikutoru Yugō no sekai* [On humanity and literature: The world of Victor Hugo, a poet of Romanticism]. Ushio Shuppansha.
- Ikeda, D. (1988-2015). *Ikeda Daisaku Zenshū* [The Complete Works of Ikeda Daisaku]. (Vols. 1-150). Tokyo: Seikyo Shimbunsha.
- Ikeda, D. (1997). *21seiki no kyōiku to ningen wo kataru* [On education and humanity in the 21st century]. Daisan Bunmeisha.
- Ikeda, D. (2000). *A youthful diary: One man’s journey from the beginning of faith to worldwide leadership for peace*. World Tribune Press.
- Ikeda, D. (2004). *The human revolution* (Abridged, Vol. 1–12). World Tribune Press.
- Ikeda, D. (2006a, May 30). *Seikyo Shimbun*.
- Ikeda, D. (2006b, June 4). Sōka kyōiku daihyō kyōgikai [Speech at the meeting of representatives of Sōka education]. *Seikyo Shimbun*.
- Ikeda, D. (2006c, August 26). *Seikyo Shimbun*.
- Ikeda, D. (2010). *Gosho to shitei* [The Writings of Nichiren Daishonin and mentor and disciple]. Seikyo Shimbunsha.
- Ikeda, D. (2013). *The new human revolution* (Vol. 24). World Tribune Press.
- Ikeda, D. (2016). *Zuihitsu: Minshū gaika no daikoushin* [Essay: Great march of people’s song of victory]. Seikyo Shimbunsha.
- Ikeda, D. (2021a). *The light of learning: Selected writings on education*. Middleway Press.
- Ikeda, D. (2021b). *The new human revolution* (Vol. 30). World Tribune Press.
- Ikeda, D., Saito, K., Endo, T., & Suda, H. (2001). *The wisdom of the Lotus Sutra* (Vol. III). World Tribune Press.

- Kobayashi, H. (1992). *Shinyōkinko keieiron* [Theory of managing credit associations]. Nihon Keizai Hyoronsha.
- Krieger, D., & Ikeda, D. (2002). *Choose hope: Your role in waging peace in the nuclear age*. Middleway Press.
- Makiguchi, T. (1981-1996). *Makiguchi Tsunesaburō zenshū* [The complete works of Makiguchi Tsunesaburō] (Vols. 1-10). Daisan Bunmeisha.
- Mingyuan, G., & Ikeda, D. (2012). *Heiwa no kakehashi: Ningen kyōiku wo kataru* [Human education: A bridge to peace]. The Institute of Oriental Philosophy.
- Napoléon, C., & Ikeda, D. (2011). *21seiki no Naporeon: Rekishi sōzō no esupuri wo kataru* [Napoleon of the twenty-first century: A conversation on the spirit of creating history]. Daisan Bunmeisha.
- Okayasu, H. (2005). Sōka daigaku no kaigaku wo kataru: Sōritsusha no daigaku kōsō wo chūshin ni [On the opening of Soka University: Centered on the founder's vision for the university]. *Soka Kyōiku Kenkyū* [Journal of Soka Education Research], 4, 173-185.
- Rees, S., & Ikeda, D. (2018). *Peace, justice and the poetic mind: Conversations on the Path of nonviolence*. Dialogue Path Press.
- Rotblat, J., & Ikeda, D. (2007). *A quest for global peace: Rotblat and Ikeda on war, ethics, and the nuclear threat*. I.B. Tauris.
- “Sōka Kyōiku no Genryū” Hensan Inkaï [Editorial Board, “The Origins of Sōka Education”]. (2017). *Hyōden: Makiguchi Tsunesaburō* [Makiguchi Tsunesaburō: A critical biography]. Daisan Bunmeisha.
- “Sōka Kyōiku no Genryū” Hensan Inkaï [Editorial Board, “The Origins of Sōka Education”]. (2019). *Hyōden: Toda Jōsei jō* [Toda Jōsei: A critical biography Part 1]. Daisan Bunmeisha.
- “Sōka Kyōiku no Genryū” Hensan Inkaï [Editorial Board, “The Origins of Sōka Education”]. (2021). *Hyōden: Toda Jōsei ge* [Toda Jōsei: A critical biography Part 2]. Daisan Bunmeisha.
- Sonehara, T. (1999, December 26). *Seikyo Shimbun*.
- Swaminathan, M. S., & Ikeda, D. (2005). *Green revolution and human revolution*. EastWest Books.
- Toda, J. (1951a, May). Chōsen douran to kosen-rufu [Strife in Korean peninsula and kosen-rufu]. *Daibyakurenge*, 14.
- Toda, J. (1951b, April 20). Shibuchō-kai [Chapter leader's meeting]. *Seikyo Shimbun*.
- Toda, J. (1952a, March 1). *Seikyo Shimbun*.
- Toda, J. (1952b, December 10). *Seikyo Shimbun*.
- Toda, J. (1957a, January 1). Buppō de minshū wo kyūsai [Saving people through Buddhism]. *Seikyo Shimbun*.

- Toda, J. (1957b). Declaration calling for the abolition of nuclear weapons. <http://www.joseitoda.org/vision/declaration/read.html>
- Toda, J. (1957c, April). Ōbutsu myōgōron [One the secular law and the Law of the Buddha being fused and in mutual accord]. *Daibyakurenge*, 71.
- Toda, J. (1981-1990). *Toda Jōsei zenshu* [*The complete works of Toda Jōsei*] (Vol. 1-9). Seikyo Shimbunsha.
- Unkart-Seifert, J., & Ikeda, D. (2015). *Inochi no hikari: Haha no uta* [The light of life: Songs of mothers]. Seikyo Shimbunsha.
- Wang, M., & Ikeda, D. (2017). *Mirai ni okuru jinsei tetsugaku: Bungaku to ningen wo mitsumete* [A philosophy of life for future generations: Learning from literature and people]. Ushio Shuppansha.
- Wider, S., & Ikeda, D. (2014). *The art of true relations: Conversations on the poetic heart of human possibility*. Dialogue Path Press.
- Xianlin, J., Zhongxin, J., & Ikeda, D. (2002). *Tōyō no chie wo kataru* [*Dialogue on Oriental Wisdom*]. The Institute of Oriental Philosophy.
- Yamamoto, S. (2013, August, 24). *Zuihitsu warera no shōri no daidō 112: Jiyu no homare no “8.24”* [Essay our great path of victory 112: Honor of the Bodhisattva of the Earth “8.24”]. *Seikyo Shimbun*.
- Yatomi, S. (2006). *Buddhism in a new light: Eighteen essays that illuminate our Buddhist practice*. World Tribune Press.
- Yong, J., & Ikeda, D. (2013). *Compassionate light in Asia: A dialogue*. I. B. Tauris.
- Zgurovsky, M., & Ikeda, D. (2011). *Heiwa no ashita e kyōiku no taikō: Ukuraina to nihon no yūjo* [*The great light of education toward the dawn of peace: Ukraine-Japan friendship*]. Daisan Bunmeisha.

第11回池田大作思想国際学術シンポジウム基調講演

馬場善久

I. はじめに

本日は、第11回池田大作思想国際学術シンポジウムの開催にあたり、このように多くの皆様にご出席いただき心より御礼を申し上げます。

今回の会議はもともと昨年の秋に開催される予定でしたが、コロナウイルスの感染症のために、1年延期を決めました。今年は皆様に創価大学でお迎えして、何とか開催できないか、実行委員会で種々検討していただきました。世界中で感染症の状況など、諸事情を考慮して、残念ですがオンラインでの開催を決定しました。大勢の皆様が創価大学のキャンパスを訪問されることを楽しみにされていたことと存じます。皆様が本学を訪問できる何らかの機会を今後検討して参りますので、ご理解をいただければと思います。

この度、来賓として挨拶をいただいた清華大学元学長である顧秉林（コヘイリン）高等研究院院長、並びにN.ラダクリシュナン博士に衷心より御礼を申し上げます。ご多忙の中、素晴らしい祝辞をいただき、誠にありがとうございます。

また、中華日本学会の高洪会長並びにデポール大学のジェーソン・グーラー教授には基調講演をお引き受けいただいたことに御礼を申し上げます。お二人の基調講演によって本シンポジウムの学術的価値を高めることができました。

池田大作思想国際学術シンポジウムは、皆様のご支援、ご協力のおかげで、今回で11回目を迎えることができました。第1回目は2005年に、北京大学において『『二十一世紀への対話』と現代社会』をテーマに掲げ、北京大学池田大作研究会と創価大学の共同で開催しました。参加人数は30名という小規模なものでした。今回は、中国、台湾、韓国に加え、アメリカ、スペイン、ブラジル、インド、ケニア、カナダからも研究者が参加され、10カ国・地域、52大学機関から、89名の方が論文発表を予定しております。このように盛大に開催することができ、第1回目の当時を知る私個人にとっても感慨深い思いがあります。

本シンポジウムが今日まで継続・発展できたのは、これまで本シンポジウムの共催を引き受けて下さった中国の各交流大学の皆様をはじめ、池田研究機関の多くの研究者の皆様のお陰です。これまでの本シンポジウムの開催にご尽力をいただいたすべての方々に心から御礼を申し上げます。

本年、創価大学は創立50周年の佳節を迎えました。その意義を留めるために「創価大学50年の歴史」を編纂し出版いたしました。出版に際し、創立者池田大作先生は「発刊に寄せて」と題するご寄稿を贈っていただきました。

寄稿の中で創立者はハーバード大学のエリオット学長の「大学は人間のつくった制度の中で最も永続するものの一つである」との言葉を紹介された上で、大学の意義について次のように述べておられます。

「大学は人間をつなぐ結合の中で最も普遍にして力強いものである」と。

そして、

「冷戦下の世界であって、わが創大は日本と中国、日本とロシア、中国とロシア、さらには日本とキューバ、アメリカとキューバ等々を、イデオロギーや体制を超えて、教育・文化の橋で結ぶ貢献を果たしてきました」

と本学の国際交流について述懐しておられます。

本シンポジウムが学術・文化の交流を通して、これまで以上に強く人間を結び付けつける機会となることを心より期待をしています。

II. 創立者の世界市民並びに世界市民教育について

今回のシンポジウムのテーマは「人類の共生と世界市民教育」です。本学の世界市民教育を考えると、25年前に創立者が行った講演が重要な意義もっています。それは、1996年にアメリカのコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジでの「地球市民教育に関する一考察」と題する講演です。

創立者は、1970年代から世界市民並びに世界市民教育に関して言及し、考察を加えてきました。1975年から1996年のティーチャーズ・カレッジ講演までに、講演、スピーチ、論文や提言などでこの問題について論究していますが、その数は20を超えます。ここで、皆さんとともにその概要を振り返ってみたいと思います。

1970年代に創立者は世界市民の資質として平和に貢献することを特に強調されています。1975年5月に創価大学2期生へのスピーチの中で次のように世界市民への期待を述べておられます。

未来精神をもちグローバルな視野に立った世界市民として、世界の平和の為に進んでいって

いただきたい。それ以外に日本のゆく道もないし、また世界の平和につながる直道もないと思います。

また、1979年2月の『創大平和研究』創刊号への特別寄稿「二十一世紀への平和路線」で以下のように言及されています。

私がかつて、国連のワルトハイム事務総長に会った際、「国連を守る世界市民の会」（仮称）の設置を提案したのも、世界市民の自覚に立った人々の連帯の輪こそ、国連を誤たずにリードしていく重要な一環となると考えたからである。

1970年代には、東西冷戦が継続されており、また、中ソの対立、1975年までベトナム戦争が続くなど、平和の問題が喫緊の課題となっていたことを想起する必要があります。そして、平和を含め世界の様々な問題を解決するには、国連の機能強化が必要だとの考えは、トインビー対談以後、創立者の一貫した主張です。

国連に関連して、1987年の「SGIの日」記念提言では、1991年から10年間を「国連世界市民教育の10年」として取り組むことを提案しています。更に、1988年の同提言では、「世界市民」教育のベースになるものとして、「世界市民憲章」の制定を提案されています。

1990年代に入ると、創立者の世界市民に関する言及は増加します。特に、世界市民の資質に関して、世界の大学の講演で考察をされています。ここでいくつかの例を示します。

1991年のマカオ大学での「新しき人類意識を求めて」と題する講演では、「五常（仁・義・礼・智・信）」という徳目と世界市民の関連を論じられ、「世界市民の条件は、まさにこのエゴイズムの超克にある」と結論されています。そして、この五常という徳目を体現した人物として、周恩来総理を挙げられ、元総理の言動と振る舞いにふれられています。

同じく1991年のハーバード大学での「ソフト・パワーの時代と哲学」と題する講演では、「内発的精神に支えられた自己規律、自己制御の心」を世界市民の資質として挙げられ、“アメリカ・ルネサンス”の旗手と称されるエマーソン、ソロー、ホイットマン等がその資質を有していたと論じられています。

1994年のポロニア大学での「レオナルドの眼と人類の議会—国連の未来についての考察」と題する講演では、国連を活性化する基盤としての世界市民のエートス（道徳的気風）をレオナルド・ダビンチを例にとって論じられています。そして、「自己を統御する意志」と「創造の間断無き飛翔」をその条件とされています。

その他、フィリピン大学、モスクワ大学での講演、さらに中国社会科学院では「共生のエートス」（対立よりも調和、分裂よりも結合、“われ”よりも“われわれ”を基調に、人間同士が、人間と自然とが、共に生き、支え合いながら、ともどもに繁栄していこうという心的傾向）を世界市民の資質として論じられています。

以上、1970年代からの世界市民と世界市民教育に関する創立者の考えを概観してきましたが、20年以上にわたる考察が1996年のティーチャーズ・カレッジ講演に結実したと考えることができると思います。

ご存じのように、ティーチャーズ・カレッジは教育大学院で常に全米のトップランクに評価されている教育学の分野で教育・研究の世界的な拠点です。そして、かつてジョン・デューイが教鞭をとっていた歴史のある機関です。

幸運なことに私は25年前の講演を直接聞くことができました。この講演は、それまでの創立者の世界市民並びに世界市民教育に関する集大成ともいえるべき内容です。それは、創価大学の教育・研究に大変に重要な意義がある講演ですし、創価大学の未来の方向性を考える上でも大きな示唆を与えてくれます。私自身、その講演内容を何度も読み返すことで、創立者の教育の考え方、デューイと牧口先生の教育思想の比較、地球市民の要件、地球市民と菩薩の関係、創価教育機関設立への創立者の思い、そして、地球的課題への取り組みなど、読むたびごとに新たな気づきがありました。

この講演で、創立者は、価値創造力を「端的にいうならば、いかなる環境にあっても、そこに意味を見だし、自分自身を強め、そして他者の幸福へ貢献しゆく力」と定義しています。そして、「地球規模で価値創造のできる人間」を「地球市民」とし、以下の3つを地球市民の要件として指摘しています。

- ・生命の相関性を深く認識しゆく「智慧の人」
- ・人種や民族や文化の差異を恐れたり、拒否するのではなく、尊重し、理解し、成長の糧としゆく「勇気の人」
- ・身近に限らず、遠いところで苦しんでいる人々にも同苦し、連帯しゆく「慈悲の人」

国連は2012年に「グローバル教育第一イニシアティブ」(GEFI: Global Education First Initiative)を提唱し、その3つの重要な課題の1つに地球市民性の育成を挙げています。その後、地球市民教育に関する実施機関としてユネスコがさまざまなプロジェクトや会議を開催し、いくつかの重要な報告書も公表しています。創立者の世界市民の考え方との関連で、私が興味深く感じているのが2015年にユネスコによって出版された“Global Citizenship Education : TOPICS AND LEARNING OBJECTIVES”です。この中で地球市民教育に期待される学習成果を1) 認知 (Cognitive)、2) 社会や情緒 (Socio-emotional)、3) 行動 (Behavioural) という3つの領域で定めております。先に述べた創立者による「智慧」、「勇気」と「慈悲」という3つの要件と、この3つの領域を比較すると、類似性が高いことがわかると思います。例えば、表1のように分類することが可能ではないでしょうか。

創立者コロンビア大学講演	ユネスコの定義	
	領域 (Domain)	学習成果 (Learning Outcomes)
生命の相関性を深く認識しゆく「智慧の人」	認知 (Cognitive)	地球、地域、国、地方に関する問題や様々な国々や人々の相互依存に関する知識、理解や批判的思考を獲得していること。
人種や民族や文化の差異を恐れたり、拒否するのではなく、尊重し、理解し、成長の糧としゆく「勇気の人」	社会や情緒 (Socio-emotional)	人類の一員であるとの感覚や差異や多様性に対する価値、責任、共感、連帯や尊敬を有していること。
身近に限らず、遠いところで苦しんでいる人々にも同苦し、連帯しゆく「慈悲の人」	行動 (Behavioural)	地域、国や地球レベルでより平和で持続可能な世界のために有効にそして責任を持って行動すること。

表1

また、世界市民の概念については、多くの人々が論じており、多様な考え方があるというのも事実です。例えば、Laura Oxley と Paul Morris は、雑誌 “British Journal of Educational Studies” に発表した “Global Citizenship : A Typology for Distinguishing Its Multiple Conceptions” と題する論文で世界市民の概念を8つに分類しております。表2に示しているように、彼らは世界市民の概念を2つのタイプ、すなわち、Cosmopolitan と Advocacy に分け、それぞれ4つに分類しています。時間の関係上、その詳細を論じることはできませんが、創立者の世界市民の概念とこれらの類型との関連などについても専門家の方々の力で今後研究が進むことを期待しています。

Cosmopolitan types	Advocacy types
Political global citizenship	Social global citizenship
Moral global citizenship	Critical global citizenship
Economic global citizenship	Environmental global citizenship
Cultural global citizenship	Spiritual global citizenship

出典：Laura Oxley & Paul Morris (2013) “Global Citizenship : A Typology for Distinguishing Its Multiple Conceptions” *British Journal of Educational Studies*, v61 n3

表2

Ⅲ. 創価大学の世界市民教育の取り組み

創価大学は開学当初から、国際交流と国際教育に注力をしてきました。学生の国際理解を深めるために、学生の交換留学制度も1980年代から充実を図ってきました。また、キャンパスでは国内外の識者を招き、折々に学生向けに講演も行っております。これまでノーベル平和賞受賞者だけでも、ベティ・ウィリアムス女史、ゴルバチョフ元ソ連大統領、ワンガリ・マータイ女史、ムハマド・ユヌス氏が本学を訪問し、学生への講演会を実施しています。昨年は、オンラインでICANのフィン事務局長が核廃絶と青年の役割をテーマに講演してくれました。

創立者のティーチャーズ・カレッジでの講演以後、正課の教育課程に世界市民教育を取り入れ

る努力を続けています。平和、人権、環境、開発の地球的課題を学べるように、共通科目に該当科目を設置し、学生誰もが履修できる措置をとりました。

2010年から実施した2020年までの中長期計画である「創価大学グランドデザイン」では、国際戦略をその重要項目として、受け入れと派遣の交換留学生の増加とともに留学生の増加を目標として掲げました。その目的は創価大学のキャンパスそのものを多文化共生の、そして多様性豊かなグローバルキャンパスとして構築することにあります。また、2010年度より、学部横断の世界市民教育プログラム（global citizenship program, GCP）を開始し、「智慧」、「勇氣」、「慈悲」という世界市民の3つの資質を育成するプログラムを開始しました。

こうした本学の国際交流、国際教育と世界市民教育の取り組みにより、2014年に文部科学省によって実施されたスーパーグローバル大学創成支援事業に本学も採択されました。本学は、「人間教育の世界的拠点の構築～平和と持続可能な繁栄を先導する『世界市民』教育プログラム～」をテーマに掲げました。この事業は全国で37大学が採択され、これまで2回の中間評価が実施されましたが、本学は2回連続で最高評価を得ることができました。ちなみに、2回連続最高評価は本学を含めて4大学だけが獲得しております。また、THEによる世界大学ランキング日本版2021の「国際性」の分野で、本学が9位にランクインをしました。これらの評価も、本日の会議に出席されている皆様のご協力の賜物であると心から感謝を申し上げます。

最後に、本学の今後の世界市民教育の取り組みについてその概要を説明します。先ほど述べましたように、本年4月2日に創価大学は創立50周年の佳節を迎えました。そして、本学の10年間の中長期計画である『Soka University Grand Design 2021-2030』の取り組みを開始しました。その内容は本学ホームページで公表されておりますので、是非ご覧ください。その計画では、「世界市民教育」、「SDGsの達成」、「多様性あるキャンパスの構築」などをコンセプトとして、「価値創造を実践する『世界市民』を育む大学」とのテーマに掲げました。SDGsが掲げる地球規模の問題に対して真摯に向き合い、「平和」という目的の実現に向けて、新たな価値を創造する「世界市民」を輩出することが本学の使命です。「価値創造を実践する世界市民」とは、貧困や環境、教育、紛争などの地球規模の課題であっても、「どんな困難な問題でも人間が引き起こしたものである限り、必ず解決することはできる」との希望から出発し、他者と連携しながら未来を切り開くための力を有した人材です。

教育の分野では、世界市民教育の体系化、世界市民教育の成果の可視化、世界市民教育のネットワーク形成を掲げ、変化する社会を支える「世界市民」が育つ教育システムの構築を目指します。

研究の分野では、池田大作記念創価教育研究所が中心となって、世界市民教育の拠点構築を目指し、国際共同研究を通じた研究者のネットワークを構築して、刊行物の発刊やシンポジウム開催等による教育・研究成果の発信に取り組みます。また、現在文学研究科の教育学専攻を教育学研究科に改組して、世界市民教育の研究者や高度人材養成に取り組みます。

特に、世界市民教育に関する国際共同研究の推進はこの10年間の重点事項です。現在、2030

年までに、2022年、2026年と2030年の3回、世界市民教育シンポジウムの開催を予定しています。第1回は明年の秋の開催を目指し、現在準備をすすめております。創立者のティーチャーズカレッジの講演でも言及されたデューイに焦点をあて、“Learning to Live Together : Global Citizenship Education and John Dewey”がテーマです。その詳細は間もなく、実行委員会からアナウンスされますので、興味ある方は是非参加を考えていただければと思います。

今年も世界中で気候変動の影響で異常気象が発生しています。夏の間だけでも、ヨーロッパの異常な高温と洪水、中国の河南省を中心とする大雨、ブラジルでは南部に寒波が押し寄せ、コーヒーの不作の原因となっています。北米の西海岸にも熱波が押し寄せました。日本でも九州、中国地方を中心に大雨による洪水と土砂災害が発生しました。今年8月に国連の気候変動に関する政府間パネル（IPCC）が報告書を発表しました。その報告書では気温上昇が「人が原因である」と初めて断定し、産業革命以降の世界の平均気温の上昇幅が今後20年以内に1.5度に達するとの科学的予測を示しています。

本日の会議のテーマは「人類共生と世界市民教育」です。気候変動の問題をとっても、「どんな困難な問題でも人間が引き起こしたものである限り、必ず解決することはできる」との希望から出発し、他者と連携しながら未来を切り開くための力を有した世界市民が必要です。これからも創価大学は、世界市民教育に関して、できる限り幅広いネットワークを形成し、皆様とともにこの地球により良い未来をもたらす世界市民を輩出することに全力を尽くしてまいります。

ご清聴、ありがとうございました。

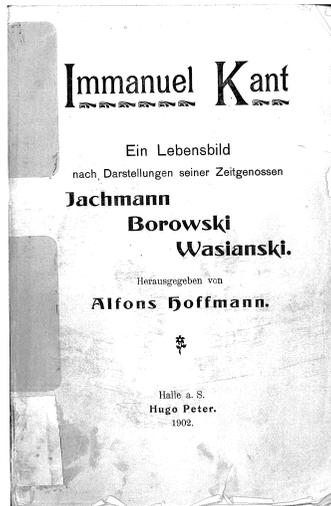
カントへの私の道

福 谷 茂

1 牢獄で読むカント

本日は皆さんの前で講演をする機会を与えてくださりましたことに御礼申し上げます¹。講演に先立って先日、伊藤貴雄先生とご一緒に創価教育研究所の方に伺い、収蔵されている書籍や資料を拝見しました。その後塩原将行さんから牧口常三郎の評伝も頂戴いたしました。牧口常三郎の蔵書の中に入っていた、カントおよび哲学関係の洋書の写真も見せていただきました。今画面にアップされましたものが、カントに関わる書籍です(写真1)。この本はカントを勉強する人間は必ず目を通したことがあるカントの伝記に関する基本的な資料で、現在でも、新しい版が出版されております。上がヤッハマン Jachmann、その下がボロウスキー Borowski、下がヴァジヤン

(写真1：牧口が所蔵していたヤッハマン、ボロウスキー、ヴァジヤンスキー著『イマヌエル・カント 同時代人の記述による伝記』(創価学会所蔵))



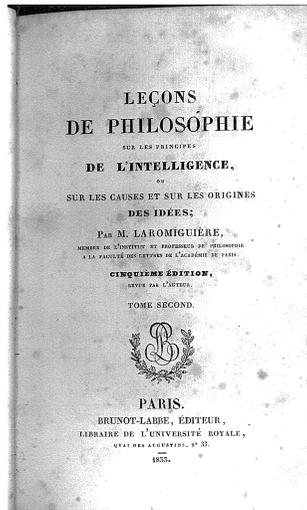
Shigeru Fukutani (創価大学大学院文学研究科教授、京都大学名誉教授)

¹ 本稿は「牧口常三郎生誕150周年記念講演会」(池田大作記念創価教育研究所主催、2021年6月7日、オンライン開催)における講演「カント哲学へのアプローチ」の原稿に加筆修正を施したものである。

スキー Wasianski と、3人の著者名が書いてあります。同時代人の手によるまとまった回想記が三点残されているのはカントのユニークなところですが、本人をよく知っている人たちによって思い出ないしは生涯の概略が三通りも書き残されている幸運な哲学者は他にはなかなか見当たらないのです。この三点はもとは別々の著作ですが、今では必ず一つの本としてまとめて出版されています。

あともう一冊ありました。これはまだ何故この本が牧口の旧蔵書の中に入っていたのであるのか、というその理由に関して手がかりがないということを知りました。ラロミグエールという著者の書物です(写真2)。これはフランスの哲学者ですが、現在では完全に忘れられているといつてよろしいと思います。なぜそういうような人の本が遥々日本に届いて、しかも牧口常三郎の蔵書の中に見出されるのかということとはとりあえず謎であるというような気がいたします。ただし、調べてみますと、このラロミグエールという人はその時代においては、アカデミズムの中心的な位置にいた人であることだけは確認することができました。19世紀以後になりますと哲学者はすなわち大学教授であるという時代ですので、アカデミズムの中核に位置していたということは同時代には非常に重要な役割を果たしていた人と思われれます。しかし、この本の内容ないしはそれがどういうふうに関わってくるのかということに関しては私には見当が付きません。

(写真2：牧口が所蔵していたラロミグエール『知性の原理、もしくは観念の原因と起源に関する哲学教程』（創価学会所蔵）



まず蔵書の中の2冊の本をご紹介します。ところでいただきました評伝の456ページに、今度は本人の言葉としてカントの名前が出てくるところがあります。しかもそれは生涯で一番最後に書いた便りです。獄中から家族宛てに出した葉書の中で、「カントの哲学を精読して居る」という言葉が出てきました(1944年10月13日付)。仮にどなたであったとしても生涯の最後に「カントの哲学を精読して居る」という言葉が残されたとすれば、私共のようなカント研究者にとっては、どうしてなんだろう、何を読んでいたのだろうと、どうぞ本人と関わったのだろうと、た

ちどころに興味を喚起する事柄です。

私も大して調べていることではございませんけれども、実はもう一人獄中でカントを読んでそのことを家族に対して伝えていた例を存じています。それは、バルトロメオ・ヴァンゼッティという人です。この人はアメリカに移民をしたイタリア人で、アナキストです。アナキストはこの時代社会的に迫害を受けていました。日本でいうと大正時代です。それである事件にかこつけてヴァンゼッティという人は逮捕されて投獄されていました。今ではヴァンゼッティは冤罪であったという意見の方が強いようでもありますけれども、当時は世界中で話題になった事件です。日本でも相当の関心を持たれました。そのヴァンゼッティがやはり獄中でカントを読み、そのことを家族宛ての手紙の中で触れています。ヴァンゼッティの場合はカントを読むことによって現在の苦勞、現在の状況をなんとか超えることができているという内容のものです（1926年12月8日付）。

こうしてみると、「獄中でカントを読む」というようなトポスが考えられるのかもしれませんが。実は埴谷雄高（1909 - 1997）という作家がいて、この人も逮捕され獄中でカントを読んでいたのです。よく言われる彼のドストエフスキー体験ほどではないのですが、『死霊』の埴谷さんの獄中カント体験は昭和文学史のちょっとしたエピソードになっています。何故こういう境遇でカントが出てくるのか。カントの哲学のうちに何があって、そういう逆境に耐えるという状況で念頭にのぼってくるのが可能であるのかということです。これは簡単に答えられることではないわけですが、皆様にご報告しておきたいとこういうふう思った次第でございます。

2 カントと日本

さて、ここから「カントへの私の道」というテーマに入っていきたいと思います。しかし、今お話ししたことと多少は関わってくる場所もございます。

2014年に、カント研究者の国際的な学会である国際カント学会がウィーンでありました。国際カント学会は5年に一度の大会でイマヌエル・カント賞という賞が、功績のあったカント研究者たちに授与されております。2014年に授与されたのはオノラ・オニールという女性のカント研究者でした。非常に小柄でしかも美しい銀髪が目立つ方でした。そのオノラ・オニールさんは受賞記念講演をされましたけれども、その講演を「私は40年間カントを研究した」という言葉で語り始められました。この言葉はその場にいた多くの人々に感銘を与えるとともに、共感をも得ていたように思います。なぜなら、40年、50年とカントを研究してきた研究者というのはその場では少なくなかったわけです。私自身もそのうちの一人であるということになります。カントに関わって40年、50年というのは珍しいことではなくて、一旦研究を始めてしまうとそれぐらいの歳月をカントと共に過ごした、という人は珍しくないと思います。

このごろ、有名なカント研究者たちがカントを論じている動画をインターネットでたくさん見

かけます。半世紀前の私の学生時代に既に古典と言われていた研究書を書いたその著者たちが、今も矍鑠として熱くカントを語っている現場をインターネット上で見つけることができます。これは私自身としては、あの人がまだこんなに元気だったのかという意味で驚くことでありましたが同時に、いわゆる儒夫をして立たしむるという感じがする光景です。つまりカント研究者というのは生涯カントについて考え続け、語り続けるというタイプの人たちが結構多いんだなという感慨を持ったわけです。ヘーゲル研究者とか、あるいは他の西洋哲学史上の大哲学者たちについてそれを研究した人たちが同じような晩年、あるいは最晩年、後期高齢者の時代を過ごしているのかどうかという点はまだ調査しておりませんが、どうもカントに関してはそういうことが目立つな、という印象をもっております。これもまた、どうしてなのだろうというその理由を考えてみたくなる事柄です。

どうもカントという哲学者には人を捉えて離さない何かが宿っているように思われるのです。それは一体なんなのだろうかということです。これも極めて大きな問題であり、それ自体が哲学的な興味をそそることです。けれども、今日お話ししようと思っているのはもうちょっと絞ったことになります。それは、カントと特に日本人とは深い縁で結ばれているようにも思われるわけですが、どういうところに理由があるのだろうか、ということです。言い換えると私たち日本人にとって明治以後、カントというのがどうしてこのように身近な、あるいは勉強したい、研究したいと思わせる存在であったのであろうかという問題であります。ヘーゲルとかシェリングとかいうカント以後の哲学者たちに比べてみて、特にカントが身近に感じられるというふうな事情がもしあったとするならば、それは一体どこに淵源しているのだろうかということを少し考えてみたいと思います。

いろんな事情があること、あるいはいろんな答え方があるということはすぐに分かる事柄です。明治になる前の日本において、どのような準備が行われていたかということ、そして、そのこととカントというのが結びつくなんらかの下地が設けられていたのではないのかということです。恐らくこういうふうにご答える方は思想史の研究者をはじめとしておられるだろうと思います。例えば朱子学というのが江戸幕府の時代から言わば公認の学問として研究をされていた。その朱子学とカント哲学にどこか親近性を感じられると、こんなふうな考え方をすることも恐らくはおられるだろうと思います。私は思想史方面の専門家ではありません。あくまで哲学史研究という角度からカントにアプローチをしておりますので、私なりに考えたその結果ということをお話ししたいと思います。

では、どこに着眼点があるかということ、カントが私たちにとって身近な、親しい存在として受け入れられるということの背景には、カントが自分の哲学の方法として採用していたもの（カントはそれを考えに考えた上で採用したのですけれども）とわれわれ日本人が明治以降、西洋哲学と本格的に接したときにおかれた状況への苦心の対処策との間に親和性が生じたのではないか、と思われるのです。

3 哲学と哲学者の変貌 17世紀と18世紀

そのことについて、これからお話をしていきたいと思います。そのためにはまずカント以前とカントとの違いに目を向けたいと思います。カントは1724年に生まれて1804年に亡くなった人でありまして、大体18世紀という時代を生き抜いた人であると言えます。18世紀という時代はやっぱりヨーロッパの歴史の中でも激動の時代であったことは間違いがありません。カントはいわゆるフランス革命と呼ばれているものをリアルタイムで経験した人物です。

カントが生きたのは18世紀ですけれども、西洋哲学における近世の最初のピークは17世紀です。といいますのは、思いつくままに名前を列挙いたしますと、デカルト、スピノザ、ライプニッツ、マルブランシュというような非常に有名な、スーパースターという言葉を使ってもいい、誰もが知っているような大きな哲学者が17世紀に輩出したからです。「天才の世紀」といういいかたをした人もあります。1596年に生まれて1650年に亡くなったのがデカルトですが、この人が出発点となって近世のその後の哲学者たちは出てきたと言えます。ですから17世紀は哲学史において非常に華々しい時代であったと言えます。

この17世紀という時代について考えておくことがカントを理解するためにはまず必要です。17世紀の哲学者たちとカントとの違いはどこにあるのでしょうか。そうしますと、17世紀における哲学という営みはかなり狭いエリアの中で行われていたということに気が付きます。つまり、パリ、アムステルダム、ロンドンという西ヨーロッパの3つの大きな都市を結ぶ三角形の中で17世紀の哲学というものは展開されていたと言えるのではないかと思います。デカルト(1596 - 1650)はフランス人ではあるわけですが、哲学者になってからはオランダに原則として住んでいました。そして時々パリに帰っていた。スピノザ(1632 - 1677)がアムステルダムに住んでいたということは、皆さんご存知のことだろうと思います。ライプニッツ(1646 - 1716)はアムステルダムにスピノザを訪ねて行ったりしています。こういうふうには、17世紀の哲学は、非常に狭いエリアにおいて、しかも大都会をベースとして、そのなかで哲学者たちが交流するという形態で成立していました。この大きな三角形エリアのうちに主要な哲学者たちは住んで、書簡を往復したり、時には相互に訪問したりしていた。デカルト、マルブランシュ(1638 - 1715)のほかに、パスカル(1623 - 1662)もこの三角エリアの中で活躍していました。ライプニッツはドイツ人ですけれども、彼が哲学者および数学者として第一線に躍り出たというのは、彼が1672年にパリに出てきてからのことです。

17世紀の哲学はこういう大都会が舞台であり、また担い手たちはそこに住んで、そのなかで非常に密接に交流をしていました。ライプニッツがスピノザを訪ねて行って、スピノザがまだ公にしていなかった『エチカ』という彼の主著の原稿を見せてもらう、というような付き合い方は、その後なかなか哲学者同士の付き合いとしては見られません。たとえば大学教師が哲学者であるのが普通になった19世紀においては見られなくなってしまったことです。哲学的にはライプニッツはスピノザを批判しましたが、付き合い方としてはそういう密接さをもっていたのです。

従って、17世紀の哲学者たちはこういうふうに関境を越えた、いわば見えないコミュニティに属していたと言えるのではないかと思います。英語だと、レパブリック・オブ・レターズというような表現、「文芸共和国」なんていうふうに訳しておりますけれども、なにかそういう目に見えない共同体のうちに属しているのだという自覚をもったごく少数の人たちが哲学の最前線を担っていたのが17世紀という時代です。ごく少数の、お互いにほとんど面識があると言ってもいいぐらいな間柄の哲学者たちが担い手だったわけです。

それから、もちろん彼らのスポンサーの存在も忘れることができません。というのは、デカルト、スピノザ、ライプニッツ、マルブランシュは誰一人大学教授ではなかった点が共通しています。芸術家ほどではありませんが、当然これらの人たちも研究生活を支えるためにスポンサーを必要としていました。王侯貴族で学問好きで哲学者たちを後援した人は、デカルトを賓師としたスウェーデン女王クリスティーナ（1626 - 1689）、ライプニッツが『モナドロジー』を届けた名将プリンツ・オイゲン（1663 - 1736）、『リヴァイアサン』のホップズ（1588 - 1679）を終身住み込み家庭教師としたデヴォンシャー公爵家など、この時代には無数にあげることができます。この点が先ほどのカントとは大きな違いをなしているわけです。大学ではなくて、自分たちこそが哲学の最前線を担っているという自覚をもって大変密なコミュニケーションをすることによって、17世紀つまり近世哲学の最初のピークの時代というのを彼らは形成・実現したのです。

4 ケーニヒスベルク

以上のことを念頭におくと、これからお話をしようとしておりますカントはそれとは相当違った研究生活を送ったことがよくわかります。カントこそは王侯貴族や教会などのスポンサーなしで勉強し、大学で学び大学教師として生計を立て、大学の講義で研究を展開した、つまり大学が生み出した最初の哲学者と言えるのです。その上で、カントには彼をユニークな存在としたファクターがほかにもいくつかあります。カントの環境でまず第一のポイントは、カントが生まれて生きて死んだ場所であるケーニヒスベルクという都市の性格です。今現在はこの名前は地図の上にはなく、カーニングラードという名前前で載っております。ということからも分かるように、現在ではドイツでさえなく、ロシア共和国の飛地です。モスクワを首都とするロシア共和国の本体からは一旦外に出て、その上でまたバルト海沿岸の地域として飛地になっているところに行くと、そこがカーニングラード地区です。それがかつてはケーニヒスベルクという名前のもとにプロイセンあるいはドイツ帝国の都市であり、カントがそこで生まれて生きて死んだところでした。したがって、西ヨーロッパ、つまりアムステルダム、パリ、ロンドンというところをベースにしている人たちから見ると、カントは完全にヨーロッパの辺境に生まれた哲学者であったと言えると思います。

カール・ローゼンクランツ（1805 - 1879）という哲学者がおります。ヘーゲルの弟子です。

この人が1833年にケーニヒスベルク大学の教授に採用されまして、赴任のためドイツの中央部からケーニヒスベルクへの旅をすることになりました。非常に筆の立つ人物でしたから、その体験を著書として書き残しています。『ケーニヒスベルガー・スキッツェン』という題で、「ケーニヒスベルクのスケッチ」という意味です。大変面白いものです。カントが亡くなって30年ほどたったケーニヒスベルクの様子を生き生きと伝えている資料です。最初に出てくるのはケーニヒスベルクに至るまでの旅で、それ自体がもうすでに一つの体験記と言いますか、旅行記というような体裁で語られています。ほとんど外国に行くというような心持ちです。カントが活動した場所は19世紀の初めにおいても、かなり特異な地域であると一般ドイツ国民には受けとめられていたことがよくわかります。

そもそもケーニヒスベルクはもともと東プロイセンという沼沢の多い荒蕪地を開拓するための屯田兵村が起源でした。一橋大学の阿部謹也先生が研究された「ドイツ騎士修道会」という軍隊組織の修道会がヨーロッパ人として最初に入植してきて開墾した土地です。これははるかに十字軍の時代に遡ったことです。ですからこの地は伝統的にスラブとの、あるいは当初においては非キリスト教民族および地域との境目という意義を持っていました。近くにタンネンベルクという地名がありますが、ここは第一次世界大戦の時にドイツとロシアとの大きな会戦が行われた場所です。カントの在世中にもケーニヒスベルクは一時的にロシアに占領されていたことがあるくらいです。

どうも辺境という点ばかり強調しましたが、実はそれはケーニヒスベルクの一面に過ぎないことも付言しておかねばなりません。同時にケーニヒスベルクは立派な港湾を持っていて外国貿易が盛んに行われていた都市でもありました。カントより一年早く生まれた、ほぼ完全な同時代人に経済学の祖と言われるアダム・スミス(1723 - 1790)がいますが、スミスの『国富論』(1776)にケーニヒスベルクが出てきます(第四編第二章)。そこでスミスは海上貿易によって思わぬ遠隔地同士の行き来が生じている一例として、リスボンとケーニヒスベルクを結ぶ航路の存在を挙げ、注意を促しています。しかもこのルートの中継地としてアムステルダムの名前が出てきます。陸路では辺境であり、かつ海上交通によって世界につながっているというケーニヒスベルクのこの二面性はカント哲学そのもののメタファーになっていると私は考えています。海をベースとした空間感覚が陸とはまったく異なるものを生み出したことを強調したのはカール・シュミット(1888 - 1985)でした(『陸と海』)。カントは『人間学』で貿易によって殷賑を極める港湾を描き出した印象的な文章を残しています。カント自身がケーニヒスベルクという地に生まれたことになにか自負心のようなものが感じていたことがわかる記述です。

今年(2021年)11月に日本カント協会の大会が予定されておりまして、そこでの企画として「カントとケーニヒスベルク大学」という共同討議が行われることになっています。私は司会を割り当てられておりますが、チャンスがあれば司会者も割り込んでこういう話もさせていただきたいと考えています。この場では時間の制限がありますのでこれ以上の立ち入ったお話は断念いたします。

カントの主著は1781年に出版されました『純粹理性批判』です。カント57歳の出版です。これはわれわれにとって大いに力を与えることです。先ほど触れました17世紀の大哲学者たちは非常に早く自分の考え方というものをまとめてしまっています。そもそもデカルトは54歳、スピノザは45歳で亡くなっているのです。カントに近い時代の人で申しますと、イギリスにはヒューム(1711 - 1776)やパークリ(1685 - 1753)がいました。この人たちはデカルトやスピノザよりはもう少し長生きをしています。しかし哲学者としては20代で決定的な書物を出版しています。その後彼らの考えは本質的には変わっていません。パークリにせよ、ヒュームにせよ、20代で彼らの名を哲学史にとどめる著書を出してしまっているのです。これに対してカントは、20代ではまだ自分の考え方、何を言おうと自分はしているのかということが本人にとっても明らかになっていませんでした。57歳になって初めて、哲学史上に彼の名前を今に至るまでとどめている本が出たのです。大器晩成とっていいのかわかりません。ただ後半生において大きなジャンプを経験した人であったとは言えます。

ともかく、カントの哲学は1781年になってからが始まりです。ここでもう一度、辺境という点を実感するファクトがあります。『純粹理性批判』の1781年初版の扉は現在私たちが読んでいる刊本でも復刻して掲げるのが習わしになっています。それを見て驚くのは、初版の出版地はリガであることです。リガとは日本でいう「バルト三国」のうちラトビアの都市です。リガとはどこにあるか、すぐ答えられる人は少ないのではないかと心配するくらいのところ。こういうところで先ほどお話ししたカントの環境の二つの面のうち、辺境感がダメ押しされるわけです。ホップズの『リヴァイアサン』をはじめとして17世紀には大都会アムステルダムを出版地とした書物が結構あるわけですが、カントの『純粹理性批判』はそんな都会で出た本ではないのです。現代で言えば地方出版物です。『純粹理性批判』の初版本は日本にも何冊か入っており、その展示を見たことがあります。小さな版型に驚き、あまりに粗末な用紙と装丁にショックを受けた経験があります。隣には先ほど触れたエリアで17世紀に出版された豪華本が並べて展示してあったので、ひときわ鮮明なコントラストを示していました。

5 カントの戦略

もうちょっと話を具体化していくことにしたいと思います。ハンディを負った場所でカントが勉強したことから始めましょう。カントは生涯生まれた都市から一歩も出たことがなかったというのは神話ですが、今では「カーニングラード地区」と呼ばれている地域から外へは出たことがない人であるということは間違いありません。だから、カントはハンディキャップを背負った哲学者であったと言えます。先ほど触れました西ヨーロッパの都会でホットに論じられていた17世紀の哲学というのをカントも学び始めるわけですが、それを相当遠くの地域から一歩も出ることなしに勉強しなければならなかったのです。これがカントの哲学の勉強に最初与えられた

初期条件みたいなものであります。そんなカントが、それではどういう勉強をしたか、ということです。つまり、カントは自分が哲学を勉強していく上で、つまり哲学者になっていくうえで、ある戦略を立てていたと考えられるわけです。

それは一体どういうことであるのかということをごこれから申し上げたいと思います。カントが立てた戦略と言いましても、もちろん私の戦略はこうだとカント自身が書いているわけではありません。それを私がカントからどのように読み取ったかというに過ぎません。しかしこの読みがカントへの私の道を開きました。さきほども言いましたように『純粹理性批判』という本を1781年に出してカントは哲学史の中にデビューしました。それまでのカントももちろんいろんな仕事をしていたので、一応ドイツ国内では名前を知られている哲学者であったようです。しかしカントの名前がワールドワイドになったのは1781年のこの書物以後です。1781年以後はフランスでも、イギリスでも、その名前が知られている哲学者になっていったわけです。従って、この本がカントのすべてとは申しませんが、すべての出発点であるとは言えると思います。この書においてカントの戦略を読み取ろうというのはそのゆえです。

では、この本のなかから読み取ることができるカントの戦略というのはなんなのでしょうか。ハンディキャップを転覆すると言いますか、ハンディキャップを却って強みへと逆転していく、そういう戦略をカントはとっていると私は考えています。これだけですと後進国の思想的優位という昔よく聞かされた話にすぎないと言われるかもしれません。しかし私が言いたいのはもっと即物的なことです。カントが採用した戦略だと私が考えるのは、『純粹理性批判』の外形から読み取れます。この『純粹理性批判』という本はちょっとおもしろい、ユニークな構成をもっています。そこにカントの戦略を探り当てられると私は思うのです。

大まかに捉えるならば、カントは『純粹理性批判』を、カント自身の主張を説くパートと、伝統的哲学（これを形而上学と言います）に批判を述べるパートという二つのパートから構成されているような書物として書きました。普通カント自身の主張を書いたこの第一部（という言い方は本人はしておりませんが）こそがカント哲学なのであって、それを解説することがカント哲学の入門であることになっています。けれども、実は、分量としては伝統的哲学の批判には費やした部分のほうがずっと多いというのがこの書物の実情なのです。そこに注目しなければいけないと私は考えます。しかも、カントがここでやっていたのは単なる批判ではない、ということをご強調しておきたいと思います。単なる批判だったらそんなに膨大なページ数を費やす必要はないのです。単なる応用問題であるとするならば、本文が終わった後にアンバランスなぐらいのページ数を費やすはずはないと考えられるわけです。

それでは、一体カントは何をやっていたのかということ、伝統的な哲学を思考方式に還元するという作業です。ここがところが実はカント哲学を考える上において、決定的に重要なポイントになるのではないのかと、こういうふうには私は考えているのであります。

この辺をもうちょっと具体的にお話しすることにしたいと思います。哲学の基礎的な部門を「形而上学」と申します。英語でいうと metaphysics という綴りになります。明治、あるいはもうち

よっと早かったかもしれませんが、中国古典に典拠を仰ぐという手続きを踏まえたうえで「形而上学」という言葉を日本で造語しました。ところがこの形而上学という言葉自体がなんとなく雰囲気だけは伝わってくるものの、実態が読み取りにくい言葉になっております。そういうことを言えばそもそも「哲学」という言葉そのものが雰囲気は伝わるけれどもそれを手掛かりに内容を理解するということへと繋がっていきにくい言葉になっています。この点で、訳語の問題もわれわれにとってもまたハンディとして作用してきているのです。ともかく、これはアリストテレスという古代ギリシャの大哲学者から名前を、そして内容も伝えてきている学問です。

形而上学はなかなか内容をつかむことは難しいし、わが国では、大学の講義でも形而上学と銘打ってやっているのは、カトリック系の大学とか特別なところだけだろうと思います。しかしこれが、伝統的にはアカデミズム哲学の中核として位置付けられてきた部門です。先ほどから言っておりますように、近世哲学に登場する人たちはたとえ自分自身が大学の先生にならなかったとしても、大体大学ないしはそれに匹敵するところに通ったという経験をもっております。そこで何を習ったのか、何を教えられたのかということをおぼろげに後年思い出します。そうすると、例えばロックとかヒュームとかデカルトは皆異口同音に、自分が教えられた哲学に対する反発が自分自身の哲学を形成する上での原動力になったと語っているわけです。これらの人々はそれぞれ当時のヨーロッパにおける最高学府に学びました。デカルトであればラフレーシュのコレージュ、ロックであればオックスフォード大学に行ったのですが、それぞれそこで習った哲学に甘んじられなかったと述懐しています。たしかにこの不満こそが近世哲学の出発点であったわけです。

しかし、そういう意味においては、誰もがアカデミズムを通過しているわけです。そして、その中核に置かれていたのは形而上学です。ただし、だれもが異口同音に形而上学に対して愛想をつかしたという趣旨の言葉を残しています。大学で習った哲学への不満というのは具体的には形而上学への不満です。この意味では近世の哲学者はみな形而上学批判をしているのです。それとカントの形而上学批判がどう違うのかということをお話ししようと思います。つまり、大学の学問が退屈だったということはみんな言います。それを原動力にしてみっとおもしろい自分の学問というものを発見したんだとか、作ったんだと説くのはむしろ常套的であるとさえ言えます。そして、ベーコンやロックやデカルトは、やはり形而上学そのものに対して嫌悪感を示しています。役に立たないとか、あるいは単なる伝統の集大成みたいなものに過ぎないものが、しかも頭ごなしに教えられるので、それにわくわくとしながらついていくことができなかつたとか、そんなふうな体験談です。

カントの場合はそうではありません。カントはまず在来の形而上学というものにもっと踏み込んでいます。ただ不満と嫌悪感を表明するだけではないのです。ではどうしたかと言いますと、何故そういうタイプの学問というのが哲学という資格を認定されて、しかも大学という制度の中に組み込まれるにいたつたのであるかということ、ここにまで遡って考えようとしています。つまり、形而上学は形而上学で一つの哲学だという資格を認められたから大学のなかに、講義科目として場所を与えられていたのです。しかし、それが無味乾燥であるということはカントも認め

ないことではない。それどころか十分に認めることであるわけです。何故そうってしまったのか。つまり、形而上学の対象とは世界と人間と神であるということは形而上学自身もそういう主張をもっていますし、カントも自分の哲学で取り扱うものとして世界と人間と神をあげています。神と自然ないし世界と人間というものが、この宇宙を構成している三通りの、それぞれその在り方を異にしている存在であるわけです。これらについて解明するということが哲学や、あるいは哲学の基礎的な部門としての形而上学というものの使命であると考えるのは全然不思議なことではないのです。

ところが、その考えた結果というよりは、そもそも考える際のやり方が、カントから見れば形而上学の場合は間違っていた。先ほど形而上学の思考方式という言い方をしました。17世紀の大哲学者たちが、彼らが習った形而上学に対する批判とか絶望感、失望感とそういったものを材料として、自分なりの独創的な哲学にたどり着いたとこういう体験談を語っていた。しかし、体験談に留まっていたということを、カントはそういう状況に直面して、何故駄目なのかというその根源に遡って問題を捉えたというところに、カント哲学の哲学史上の大きな功績ということ認めることができるのではないのかと考えるわけです。

そうするとこの思考方式というのは、具体的にはどういうことなのだろうかということが核心の問題になってくると言えます。そこに、カント自身の長年の工夫および大変な力を注ぎこんだ仕事ということがあったと考えられます。つまり、形而上学を大学の学科とか講座だとか、学問とかっていうふうに捉えてそれを批判していたのが17世紀の大哲学者たちであったわけですが、カントの場合は、単なる学科とか、教科書とか、講座だとかっていうことではなくて、「人間理性」というところに問題を遡らせて考えようとしたのです。だから、我々が人間であって理性的に考えようとする限りにおいて、いつでも、あるいはどんな場所においても、陥る可能性のある問題としての形而上学というふうに捉え方をつかめたというところにカントの面白さ、今に至るまでのカントのメッセージということ私たちが聞き取ろうとする理由を求めることができるのではないのかと思います。つまり人間が理性的であり、理性的であるという、存在であるがゆえに陥ってしまいやすい誤謬というのがあって、それをいわば具現したものが形而上学だという捉え方をカントはしたと私は見ます。学問が間違っているわけじゃない、テーマの立て方が間違っているわけではない、ただそれにアプローチする思考方式というものが、とかく人間が陥りやすい過ちというものがあって、それをいわゆる形而上学、伝統的な形而上学、デカルトらが大学で教わって彼らが反発したところの形而上学というものが、それに陥っていたのであるというのがカントの批判点である、ということになるわけです。

6 誤謬としての形而上学

では、具体的にこの人間理性そのものに宿っている思考方式としての誤謬に導いていくものは

一体何なんだろうかと、こういうことがカントにとっての究極の問いとなります。それはいくつかあるわけですが、その少なくとも一つであるということはできるかと思います。それを問題にしなければいけないというわけですね。そこでカントは、先ほどアリストテレスという人がヨーロッパの哲学の一番深いところでそれを支える人でもあり、また、それを導いてきた人でもあると申しました。またそれが批判されてきたという面もあるんですけども。そういう大きな存在であったという話をしました。そして、形而上学という本そのものも、形而上学という学問そのものもアリストテレスに根差しているというお話をいたしました。さらに、カントにとってのアリストテレスというものを煮詰めていくと、論理学にたどり着くということになるわけです。

一言で言ってしまうと、形而上学の思考方式というものは論理学が即現実というものを捉えることができるとこういうふうな考え方に基づいていたというのが、カントが捉えた形而上学の真相であるわけです。こう言うだけでは、ちょっと抽象的なところがあるので、もっと話を具体的なところにもっていきましょう。ここからがカントの相当独創的なと申しますか、苦勞をしたところですが。また人によっては強引だと批判を向けるところではあるかもしれませんが。というのは、カントの頃は論理学というものは概念と推論と判断とこういうものによって組み立てられているんだと考えていたわけです。だから、論理学の構成要素そのものも概念と推論と判断という三つのものでよろしいと考えていました。そして、カントはこれら三つのもを運用することで形而上学という学問が生まれたと考えました。ところがここで間違った運用の仕方がなされているというのがカントの見立てです。

では、これが一番難しいといえますか、なかなか飲み込みにくいところですが、カントが形而上学の一番根本にある誤った思考法として取り出したのが、「系列 Reihe」として論理学を運用していくと表現することができるやり方です。これは、残念ながらカント哲学の解説も、そんなに詳しい解説が与えられているところではないわけです。つまり、普通カント哲学というと、先ほどお話したように、カント自身の主張ということ論じた、その部分を基にしてカント哲学そのものが説明され、講義されています。ところが実はカントのそういう主張というのがそもそも、哲学あるいは形而上学が今まで陥ってきたところの過ちをカントがまず捉えて、その過ちに陥らない、それに代わるものとして、持ち出されています。これが本来のカント哲学の主張がでてくる道筋になっているわけです。だから、実際には、この二つを、あるいはそのコントラストを捉えることがカント哲学の正面からの理解には必要なわけです。両者を引き比べて、両者を突き合わせてみるという手法を使うことで初めて、カントの言いたいことをいわば懐深く、より立体的に捉えることができる、こういうふうな性格をもっているのです。

そうすると、今、カント自身が使っている言葉で、「系列」という言葉で代表させました。英語で言いますと series という言葉になります。要するに、この系列は物と物とが順番に並んでいるというイメージです。ですから、形而上学の根本的な思考法は、物が順番に並んでいるというような仕方で世界を捉えます。その順番を先のほうへ行くとか、始まりのほうへ行くとかいう仕方で、順番づけられたものの全体を一つの「系列」として完結させたときに、「認識」という

ものが成り立つんだというわけです。ここはもう大変、おそらくは飲み込みにくい表現になってしまっていることをお詫びしなければなりません。ここを十分に説明していると、完全に大学の授業15回分くらい使わなければならないということになってしまいますので、結論だけをお話します。

カントにとって、形而上学的に物を知るということは、順序づけられた系列を完結させることでした。系列が完成された時に何かを知ったこととなります。この時代の形而上学は世界と神とそれから人間（これは核心としては人間の魂です）を対象としています。したがって、これらのものを認識するというのとはどういうことかということ、それらのものを順序がつけられた系列として捉え、その系列を完結させるという仕方では何かを捉えることにほかなりません。こんな考え方が形而上学の根本にあるというふうにカントは捉えたということになるわけです。

そして、これこそがカントによれば形而上学というものの誤謬の根源にある考え方です。もっと端的に言うならば、事物を単体で捉えてそれを「系列」として全体化させ完結させるという手法こそが形而上学が何事に対しても適用してそれによって物事を認識できたとして結論を出す際のやり方なのであると、このようにカントは捉えたということができないのではないかと考えています。

カントのテキストにご自分であたっていただければ、なるほどと思われるところがひょっとしたらあるかもしれないと考えています。先ほど名前を出したオニールさんみたいに40年間もかかった勉強の結論を、ひとことで言ってしまったというところがございまして、その辺はお詫びしなければいけません。

カントの現状認識としては、形而上学はまだ学問としての歩みを始めていない。数学であるとか、論理学であるとか、あるいはその物理であるとかいうような学問と比べてみて、哲学は恥ずかしいという状況判断ということカントは『純粹理性批判』の序文の中で言っております。そういう判断の根拠になるのは形而上学がいまだに正しい思考法というものを、わがものとしていないからだという論旨になります。テーマの深刻さの割には、手法というのがあまりにも素朴、幼稚すぎるとデカルトやロックが考えたそういうタイプの哲学、つまり形而上学というものが生じてきた、その出発点であると考えたものをカントはこのように捉えたのです。だから、カントの哲学は、この点をターゲットにして自分自身の哲学を打ち出したものであるという角度からアプローチされるべきものであると言えるのではないかと思います。これから先はごく簡単に触れることにせざるを得ません。

まず、初めのほうに触れた話題の伏線を回収するということをいたします。カントはある戦略を立てたということを申しました。非常にハンディキャップを負った場所で一気に哲学の最前線にキャッチアップしなければならない。つまり、それに追いついてその全体をわがものとしなければならないという課題です。これは実は西田幾多郎が背負った課題というものとパラレルなところがあります。非常なハンディキャップがあるところで一気に自分一人で相手方というものを全体として捉えて、そのうえで自分の哲学を構成しなければならないのが西田哲学です。

西田哲学には自覚的にそれを果たすという抱負があります。カントもまたヨーロッパとはいえそういう大変な辺境の場所においてその西ヨーロッパのゴールデン・トライアングルで起こっていたことを、全部まとめて捉えていく必要があるというような課題を背負っていたのです。

彼がやった戦略は、いろいろな哲学、形而上学の中でのいろんなタイプというものが生まれてくる原点としての形而上学の思考法というところで押さえることでした。全体として自分に先立つ哲学の伝統を捉えて、その上で自分の哲学をそれに付け加えていくというのがカントがとった戦略でした。富永伸基（1715 - 1746）という江戸時代の天才的な学者がおりますけれども、彼は自分の方法論として「加上説」というものを唱えています。大乘非仏説という観点をこれで富永伸基は打ち出したわけです。それにも一脈相通するものがあると感じます。それがカントの方法であったということです。カントはそういう辺境にいるというデメリットを、却ってそこにいるからこそ、遠くからの眺めとして全体として捉えることができるという非常に特権的なポジションみたいなものに読み替えることができた。これは富永伸基もやっていたことです。日本にいるというデメリットを、遠くから大観するという、そのゆえのメリットに転換することができるという逆説です。鎖国の時代の日本に生きたからこそ、インドとか中国とかいうような非常に大きな文明を類型化して捉えることができるポジションに富永伸基は立つことができたのです（『翁の文』）。富永伸基が、それぞれの文明を固有の思考法に還元することができるということを、もうすでに江戸時代において指摘をしていたことをつい思い出してしまうわけです。

カントもまた遠くにいて中心からは外れていてリアルタイムで、あるいはその現場において自分自身も参加することができない。これはデメリットではあるわけなのですが、それを逆手にとって、遠くからの視線にだけ初めて見えてくるような姿として全体像を捉えることができた。それを自分の哲学の一つの柱にした。先ほど言いましたようなターゲットを捉えて、それにいわば対置するものとして自分の哲学を打ち出すことができた。これが結局、『純粹理性批判』という書物そのものを成り立たしめている根源だということができるのではないのかと思うわけです。従って当然、先ほど述べたような事物を単体で捉えて、それを「系列」として全体化するというので、その事物を捉えきったというふうになす思考法というものに対置しているカントの哲学、普通の意味でのカント哲学というものをこの観点から見直したら、こういったものを逆転していかなければならないということになるわけです。カント哲学の本当の話は実はここから始まるのです。しかし今日は時間が来ておりますので、カント哲学本体というよりは、「カントへの私の道」ということで話が終わってしまった嫌いがございませう。けれども一応、デメリットをメリットに逆転するための戦略というのを積極的に採ったカントという人は、日本の富永伸基とか西田幾多郎というような大きな哲学者たちも採用していたのと同じような方法論を採っていた人として理解することができるのではないのかということが言いたかったわけでありませう。こういうようなことが今回の私の話の結論ということで、これで終わらせていただくことにしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

ジョン・デューイ

—メリオリズムを生きる思想—

藤 井 千 春

はじめに

思想は、その思想家が生きた時代の社会状況から生まれ出ます。その時代、人々が生きる上でどのような問題が意識され、人々がその問題の解決にどのように取り組もうしていたのかとの相関において、思想は生まれてきます。思想とは、社会問題の解決に取り組む人々が求めた理想、価値、観念、考え方などが、言語によってまとめられて表現されたものです。ですから、思想を理解するためには、その思想が生み出された背景について、つまり、その時代の社会状況とそこにおいて人々が解決に向けて取り組んでいた社会的な問題について知る必要があります。そのようにすれば、その思想家が、なぜそのような思想を論じたのかについて、立体的に理解することができます。

本日お話をさせていただくのは、ジョン・デューイ (John Dewey, 1859-1952) の思想です。私は、デューイの思想を「メリオリズムを生きる思想」というように、その特色について副題で示しました。メリオリズム (meliorism) とは、聞きなれない言葉かもしれませんが。一般的に言えば、「改良主義」という意味です。デューイの生きた時代における、デューイ自身の思想的な問題意識に即していえば、「人間は自らの知性的な努力により社会を改良することができる」という立場を意味します。

みなさんは、「人間は自らの知性的な努力により社会を改良することができる」など、当たり前のことだと思うかもしれませんが。しかし、今から100年と少々前、1900年前後のアメリカでは、そのようには考えられていなかったのです。社会を進歩させることに人間は無力だ、「愚かしい努力」であり、むしろ有害だというような考え方が根強かったのです。デューイは、そのような考え方を反駁し、「人間は自らの知性的な努力により社会を改良することができる」という立場を擁護する論理の構築を、自らの思想的な課題としました。デューイは、メリオリズムを擁護する論理を構築し、人間自身の知性的な努力によって社会改良に取り組んでいる人たちを、思想的に支えるという役割を果たそうとしたのです。

では1900年前後のころ、アメリカ社会はどのような状況にあったのでしょうか。そこではど

のような社会問題が発生し、人々はその問題の解決にどのように取り組もうとしていたのでしょうか。また、そのような取り組みに対して、それを無力だ、有害だとして妨害する主張は、どのような立場を擁護するために、また、どのような考え方に基づいて主張されていたのでしょうか。

1. デューイの生涯における『民主主義と教育』の位置づけ

デューイは、1859年から1952年まで、19世紀から20世紀へという転換を挟んで、100歳近い長い生涯を生きました。日本に当てはめると、江戸時代末に日米の国交が開かれたころから、第二次世界大戦後のアメリカによるわが国の占領が終了する年までです。デューイは長い生涯を通じて膨大な著作、しかも教育に関するものだけではなく、哲学、倫理学、心理学、政治学、経済学、芸術論、宗教論など、幅広い分野にわたる著作を残しました。しかし、私は、デューイの著作の中でも、1916年の『民主主義と教育』が、デューイの思想が経験を中心概念として論じられ、体系的に完成された著作であると考えています。というのは、1916年、デューイは57歳であり、当時の平均寿命から考えてもすでに老荘の成熟した学者であり、思想的には完成を迎えて当然の年齢にありました。また、アメリカはその翌年から第一次世界大戦に参戦し時代的な転換点を迎えます。デューイが1800年代末から参加してきた革新主義運動 — 後に説明します — が、終結を迎えた年として一般的にはみなされています。つまり、デューイは30歳代、40歳代、50歳代と、アメリカにおける革新主義運動という社会改良運動に参加していました。『民主主義と教育』は、その運動への参加を通じて生成してきた思想を、経験を中心概念として体系的にまとめた著とみなすことができるのです。その後のデューイの膨大で、幅広い分野にわたる著作では、デューイが『民主主義と教育』において論じた諸テーマが、哲学、倫理学、心理学、政治学、経済学、芸術論、宗教論などごとに敷衍されています。また、それぞれの著作を執筆した時代における社会問題にも言及されています。それぞれの著作は、デューイの思想の各論として、発展的に詳述されたものなのです。つまり、『民主主義と教育』で取り上げた諸テーマを、経験を中心概念として反省的に深化・発展させ、自らの思想を哲学として体系化していったように読み取ることができます。

では、デューイが青壮年期に参加した革新主義運動とは、アメリカのどのような社会状況に対する「革新」として立ち現れた運動だったのでしょうか。

2. 「嵐のような工業化」とその帰結

南北戦争の終了（1865年）後、アメリカでは工業化が急速に進み、1800年代末にはイギリスを抜いて世界第一の工業国となりました。わずか30年くらいの間に、人々は農村の地域ごとのコミュニティを単位とした生活から、全米的な経済圏に巻き込まれた生活へと転換を余儀なくされました。農民たちも農産物の市場価格や大都市への輸送条件など、資本主義の経済活動に左右

されるようになりました。

この時期の工業化は、自由放任を原則とする経済活動によって進展されていました。つまり、経済活動は各企業の自由な競争に任せられ、政府は各企業の活動を規制や調整するなど、それに対して介入することはありませんでした。経済活動は、個人、すなわち「私」が生来有する自然権に基づく活動であり、それに政府が介入することは公権力の濫用、私権に対する不当な侵害だと考えられていました。このような考え方は、1700年ごろのジョン・ロックの自然権思想に源流があります。ロックは財産権を、それぞれの個人に自然権として認められている不可侵の権利であると主張しました。時代を経て1700年代後半に活躍したアダム・スミスは、自分の財産を増やす経済活動も自然権として認められている私権だと論じました。そして、公権力は経済活動を制約してはならないというように、経済活動に対する自由放任を主張したのです。このような考え方が1800年代後半のアメリカにおいても継承されていたのです。

しかし、1800年代後半という産業革命を経たのちのアメリカの経済活動は、スミスの時代状況とは大きく異なっていました。スミスは、経済活動に対する伝統的な慣習や特権などの不合理な制約からの解放を求めて、すなわち、そのような社会問題の解決のために経済活動の自由放任を主張しました。しかし、1800年代後半のアメリカにはそのような古い不合理や制約は存在せず、自由放任は、それらからの自由ではなく、実質的には弱肉強食的な企業間の競争の自由、いわば強いものが自由にあふる権利となっていました。そのため工業化の進展とともに、企業間の自由放任に基づく競争は、勝ち残りのためのトーナメント戦のような闘争状態になっていました。経済的な競争に勝った企業は敗れた企業を吸収し、やがて巨大な独占企業が誕生しました。例えば、カーネギーの鉄鋼会社、ロックフェラーのスタンダード石油などです。そして、自由放任の経済活動の帰結としての巨大な独占企業の誕生は、逆に多くの人々の経済活動における不自由、不平等、不公正を生み出すことになりました。自由放任の結果として、多くの人々が様々な不自由に苦しめられることになったのです。

例えば、資本が弱小の企業は、市場に参入しようとしても価格競争などの点で資本力の強い独占企業と勝負することはできません。また、輸送や販売など流通網まで独占企業の傘下に置かれていた場合、製品を輸送して販売することができません。労働者は、賃金や労働時間の改善を独占企業に申し入れて拒否されたとしても、他に働く場所がないため有利な労働条件の職場に移ることはできません。実質的に職場を選択することはできず、独占企業の押し付ける不利な労働条件で働くことしかできません。消費者は、市場が特定の企業の製品で独占された場合、購入する商品を選択することはできません。質の悪い商品が高価格で購入することしかできなくなります。市場における商品の選択の自由はなくなります。独占企業対弱小企業、独占企業対労働者、独占企業対消費者との間に不平等や不公正が発生し、弱小企業、労働者、消費者の側は経済活動が不自由となる状態に陥っていたのです。そのような社会的な対立が人々に意識され、解決されるべき社会問題となっていたのです。

巨大な独占企業の誕生は、企業の経済活動にとどまらず、国民の様々な生活に不自由な状態を

強制し、経済的な格差やそれによる対立を引き起こすことになりました。労働争議も流血を伴う大規模で過激なものとなりました。

3. 革新主義運動

産業社会の発展により、1900年ごろには、アメリカでは大都市に都市中間層という新しい社会集団が形成されました。都市中間層は商工業経営者など旧中間層、公務員、企業社員、医師や法律家などの専門職などから構成されています。比較的安定した収入があり教養水準も高い人たちです。それらの人たちが、当時、発達し始めたジャーナリズムを媒介として、社会問題に関する情報を共有し、その問題の解決に向けて世論を形成しました。そのようにして、社会改良の運動を推進する主体としての結びつきが形成されました。

アメリカにおける革新主義運動とは、都市中間層がジャーナリズムを媒介として結びつくことによって担われた社会改良運動だったのです。一般的には、1890年ごろから1917年の第一次世界大戦参戦までの時期に展開されたとされています。この運動は、連邦政府や州政府の規制や調整、すなわち、公権力の介入による経済活動における公正の実現をめざすことが中心的な目標の一つでした。この目標以外にも、都市政治のボス支配からの転換・正常化、移民や経済的困窮者に対する社会福祉の実施、学校教育の改革など多方面に及びました。公共の福祉の実現をめざし、公権力による政策を通じての社会改良をめざしたという点で共通する、多様な社会問題に対する群発的な取り組みの総称といえます。

この運動は、経済活動だけではなく、人々の生活全般において、公共の福祉という観点から公権力が人々の活動や生活に関与していくという、新たな社会原理をアメリカにおいて提唱するものでした。経済活動に関していえば、トラストの規制、労働者保護、消費者保護 — 食品の衛生や薬品の安全など — に関する法律の制定、及び取り締まりや監視に当たる専門家による機関の設置などが実現されました。それにより、政府が公共の福祉を観点にして、経済活動の公正さを維持するために介入することが実現されました。つまり、自由放任の原則からの転換が実現されたのです。ただし、この理念の完全な実現は、一般的には、1929年の大恐慌の発生後に実施されたニューディール政策に待つことになったといわれています。ニューディール政策によって、政府による景気調整や所得再分配など、ケインズ流の修正資本主義が実現されます。

デューイは、思想新聞の発刊の計画、シカゴの移民や貧民のための福祉施設であるハルハウスの活動への参加、シカゴ市民連盟への参加など、革新主義運動に関与しました。最大の参加といえるのは、シカゴ大学に附属実験学校を設置して、自らの理論に基づく新しいタイプの学校教育に取り組んだことです。ここでデューイは、教育の中心の重力、すなわち、学習活動を計画・実行・評価するための観点を、教科 — 何を教えるか — から、子どもの興味関心や成長発達 — どのように育てるか — に移動することを主張しました。そして、子どもが自分たちの興味・関心に基づいて意識を集中して取り組み、社会生活の発展や科学的原理について、しかも協同的

な活動を通じて学ぶという、オキュペーションとしての学習指導を推進しました。この教育実践についてまとめられた著作が『学校と社会』（1899年）です。

このように革新主義運動とは、都市中間階級の人々が、連帯・協同して、公共の福祉の実現をめざして、社会問題の解決に取り組んでいった運動でした。人間自身の知性的な努力によって社会改良をめざした運動だったのです。

4. 企業家からの抵抗

政府による経済活動の規制や調整を求める革新主義運動に対しては、経済活動の自由放任を主張する企業家たちの側からは強い反論が提出されました。

一つは、経済活動の自由は自然権に由来する私権であり、公権力がこれを侵すことはできないという、伝統的な論理に基づく反論です。これは1700年代以来の考え方です。

そして、もう一つは、1800年代後半、まさにこの時代に生まれた考え方に基づく論理です。それは、ハーバート・スペンサーの社会進化論です。デューイの生誕と同時期に発表されたダーウィンの進化論は、生物学など自然科学だけではなく、社会の在り方についての考え方にも大きな影響を及ぼしました。スペンサーは、ダーウィンの「自然淘汰」、すなわち、環境への適応に成功した個体が生き残るという概念を、「適者生存」という概念、すなわち、環境への適応競争に勝ち残ることを通じて優れた個体を選ばれて、その生物種は進化するというように捉え直しました。

そして、当時のアメリカの企業家や自由放任の経済活動を擁護する経済学者たちは、生まれつきに優秀な遺伝子を有する個体が自由な競争により「適者」として選ばれて、そのような自然淘汰を繰り返して人類は進歩するのだというように理解しました。そして、このような理解に基づいて、次のように主張されました。第一に、自由放任の競争を通じて優れた遺伝子を有する個人が勝ち残り、人類や文化・社会の進歩が達成される、第二に、企業家、しかも競争に勝ち残った大企業家こそ、知恵、勇気、精神力、体力などに優れた「強靱な個人」である、第三に、優れた遺伝子を持つ個人が、自由にその遺伝された能力を発揮できるように放任することが人類や文化・社会の進歩のための条件であり、公権力が経済活動を規制・調整することは劣った遺伝子を有する弱者を保護し、人類や文化・社会の進歩を妨げることになる、と。そして、このような考え方は、生物学の理論に基づいた人間世界についての真理であると主張されたのです。カーネギーは、スペンサーの社会進化論を絶賛したと伝えられています。

また、社会進化論を支持する人たちは、個人の能力は遺伝子により生まれつき決まっていると主張しました。人類や文化・社会が進歩するためには、その遺伝された能力が自由に制約を受けずに発揮されることにより、優れた者が勝ち残り、他方、劣った者が淘汰されることを重視したのです。そのような考え方に基いて経済活動における自由放任の原理の維持を主張したのです。このような立場からすれば、政府による経済活動の規制・調整は、弱者を生き残らせて進歩を妨

げる「愚かしい努力」となるのです。

この当時、1800年代の末、もう一つ、革新主義運動の立場であるメリオリズムにとっての論敵が、一つの大きな勢力となっていました。マルクス主義の唯物史観です。マルクスは人間の社会の制度や法律などの在り方 — 「上部構造」 — は、その時代に社会の生産力によって規定され、生産力の増大に伴って、経済的な平等を実現する方向で、法的に組み替えられていくと論じました。唯物史観では、生産力の増大に伴って社会の在り方が経済的な平等を実現する方向で組み替えられていくのであれば、生産力が増大した資本主義の次の社会の在り方は、必然的に社会主義、そして共産主義だと予言されていたのです。歴史はそのように法則に従って、必然性をもって変化していくのだと主張されました。そして、唯物史観によれば、社会の在り方は法則に従って変化していき、その変化の方向そのものを人間が変えることはできないのです。人間にできることは変化の方向を知り、その方向に従って生きていくことだけなのです。そのような生き方が、歴史の進む方向において進歩的、あるいは前衛的なのです。また、マルクス主義では、社会の本質は経済的な支配階級と被支配階級との間での階級闘争にあると考えられました。人間の正しい生き方は、歴史の法則を知り、その方向性を促進するための闘争や暴力も辞さない革命に参加することだと論じられていました。労働争議が多発し過激化する中で、マルクス主義者による暴力的な社会革命に対する危機が、アメリカにおいて人々に現実的に感じられていました。

自由放任の支持者とマルクス主義者とでは、それぞれが主張している経済活動の在り方は真逆です。自由放任の支持者は、個人の経済活動の自由を尊重し、政府が経済活動に介入することを拒否しました。他方、マルクス主義者は、政府による経済活動の全面的な統制により、人々に経済的な平等を実現することを主張していました。しかし、人間の自らの知性的な努力による社会改良の可能性を否定している点、および、社会の本質を闘争や競争にしている点では共通しています。したがって、革新主義運動では、その運動を推進するために、この二つの論敵の論理を論破するだけの独自の論理を構築し、メリオリズムの可能性と必要性を論証することが課題となったのです。適者生存の自由競争により強い遺伝子を有する個体が生き残るのが世界の真実なのでしょうか。あるいは、社会の歴史は法則に基づいて階級闘争として進展しているのでしょうか。いずれにしても、人間の知性的な努力は無用、あるいは無力なのでしょうか。

5. 自由放任の論拠に対する反駁 — メリオリズムの擁護 —

デューイは、どのような先行思想からどのような考え方を吸収して、これらの論敵に対して反駁を試みたのでしょうか。そして、自身のメリオリズムの論理をどのように構築したのでしょうか。

デューイは自らの思想を生成する過程で、ヘーゲル主義、進化論生物学、プラグマティズムを吸収したといわれています。デューイは、それらの思想を素材として、それらに含まれている諸観念を取捨選択して、メリオリズムを擁護する論理として、独自の経験概念を構築しました。

(1) ヘーゲル主義の吸収

① 人々のつながりの先行

デューイは、ヘーゲルの社会についての考え方から、人々はつながりの中で生きているという考え方、すなわち、個人の生き方は集団のつながりの在り方によって制約されたり、保障されたりするという考え方を学びました。

ジョン・ロック以来のイギリスの社会契約論に基づく考え方では、社会に先立って、自然状態において、生まれながらに生命、身体、財産の自由 — 自然権 — を有する個人が存在していると想定されました。そのような個人が、相互の自然権を保護する目的で、相互に契約を結ぶことによって政府が誕生したと想定されました。この考え方、すなわち、社会契約説では、自由を有する個人が政府よりも先に存在していると考えられています。そして、政府の任務は個人の自然権の保護にあると設定されています。だから、個人に生まれながらに付与されている自然権 — その一つが財産権、後には経済活動の自由 — は、政府の権力によって侵害されてはならないと主張されたのです。

しかし、現実的に考えると、歴史上のいつ、どこで社会契約は結ばれたのでしょうか。社会契約説は一種の仮定です。政府による権力の濫用を防止するための、みんなで合意した一つの考え方なのです。つまり、基本的人権（自然権）をお互いに尊重し合える社会を実現するための形而上学なのです。自然権とされる自由が、個人に生来所有されていることは、どのような論理によって論証することができるのでしょうか。もちろん現代において、基本的人権は何よりも尊重されなければなりません。しかし、それは、私たちの生きる社会の前提として、このような仮定に立つことにみんなで合意することによって成り立っているのです。つまり、基本的人権は、みんなの自由を最大限尊重し合おうという、それが保障される社会の在り方を大切にしようという、私たち自身の努力によって現実的に守られているのです。基本的人権として設定されている自由は、社会における人々のつながりの中で、そのつながりの在り方が大切に維持されることによって保障されるのです。

人間の歴史を記述的に、すなわち、目的や理想を負荷することなく見るならば、人間は集団で生活することによって生存してきました。また、事実として、人間は現実には何らかの集団、例えば家族、地域、国家、会社、学校などの一員として生きています。それぞれの集団のつながりの中で、そのつながりを支える成員として活動しています。ヘーゲルは、人間はそのようなつながりの中で生きる存在であると考えました。そして、重要なことは、そのつながりの在り方だと論じました。ヘーゲルは人間の歴史は、そのつながりが次第に相互の自由を承認し合える在り方に組み替えてゆく過程であると説明しました。ヘーゲルによれば、人間はその精神の発達を通じて、しだいに相互の自由を承認し合えるつながりの在り方に、社会における人々のつながりの在り方を発展させてきたのです。ヘーゲルは、自由について、個人が社会に先立って生来的に所有している権利としてではなく、社会の中で、そのつながりの在り方によって保証される権利として考

えたのです。人間は歴史を通じて、社会に発生した不自由に関する対立を止揚するような、そして、人々の自由をさらに保証するような新たな文化 — 法や制度など — を生み出してきたのです。権力の濫用の防止も、個人の人権の保護も、それらを尊重しようという人々の間のつながりの在り方によって実現されたのです。個人の自由は生まれつき付与されたものではなく、社会において、すなわち、人々のつながりの中で付与され保障されているのです。

② 民主主義としてのつながりの在り方

デューイは、ヘーゲルの考え方に学び、社会は、原子のような個人の相互の契約によって成り立っているのではなく、人々を結び付けているつながりによって成り立っているのだという立場に立ちました。個人はすでにそのつながりの中で、そのつながり方に規定されている存在なのです。重要なことは、そのつながりの在り方なのです。

したがってめざすべきことは、そのつながりの在り方を民主主義としてふさわしいもの、すなわち、それぞれの人々の自由が尊重され、平等が実現されるようなつながりの在り方とすることなのです。自由放任の経済活動の下では、人々の間に様々な不自由や不平等が発生していました。そのような社会問題が放置されている状態は、民主主義としてふさわしい社会、すなわち、人々の自由や平等を実現し保障するつながりの在り方ではありません。経済活動の自由放任も、人々のつながりの在り方として人為的に生み出されたつながりの在り方の一つにすぎず、自然世界の本来的真の在り方ではないのです。しかも、そのつながり方は、不自由や不平等など社会に問題を発生させています。経済活動の自由放任の原則は、時代状況に対して旧いつながりの在り方となり、現状の間に矛盾を発生させているのです。ですからヘーゲル主義の立場から言えば、新たな文化、すなわち、法や制度などを創り出すことによって、言い換えると、人々の間に新しいつながりの在り方を設定することによって、止揚され解決されなければならないのです。

このようにデューイは、個人の自由、しかも経済活動の自由を自然権として絶対視する考え方を反駁するために、ヘーゲル主義の考え方に基づいて、社会が人々のつながりによって存在していること、そのつながりの在り方は相互の自由と平等を実現し得るつながりへと変化発展してきたという考え方に立ちました。

(2) 進化論生物学

① 多様性の調和・共生による全体論

デューイもダーウィンの進化論生物学から影響を受けました。しかし、スペンサーとは異なり、デューイは生命世界について、多様な構成要素が相互依存につながり合って全体的に調和して成り立っているという、生態学的な考え方を学びました。

デューイは、生命世界について、スペンサーが理解したような構成要素間の弱肉強食の闘争・競争によって成り立っているとは考えなかったのです。それぞれに個性的な構成要素が相互に支援的に作用し合い、その全体的な調和・共生によって成り立っていると考えました。種の単位で考えた場合、自然界には独り勝ちはないのです。ライオンが強いからといって、ライオンが一人

勝ちしてしまえば、もはやライオンが食べる動物もいなくなってしまう。それではライオン自身も生きることはできなくなってしまう。捕食ということも生命世界の相互依存の一例なのです。また、種内の個体間で考えた場合、個体間が直接的に闘争しているわけではありません。それぞれに多少の形質に差異のある個体が、それぞれに環境へのより有利な適応を試みているのです。生命世界は多様なそれぞれに個性的な構成要素の調和・共生というバランスの上に成り立っているのです。

重要なことは、そのバランスが崩れて不調和が生じたときに、それを回復することです。バランスの不調和は生命が生きる環境の変化によって発生します。環境が変化したときに、それに再適応できずに死滅してしまう種もあります。一方、変化した環境に適応できる身体的形態や能力を有する個体の子孫の系列が生き残り、結果として進化を遂げる種もあります。そのようにして新たな全体としての調和・共生のつながりの在り方へと組み替えられます。この点で生命世界はダイナミズムによって支配されています。環境の変化とは進化のためのふるいではなく、新たな調和・共生を達成するつながりの在り方への転換なのです。

② 環境の変化の偶発性

デューイは、自由放任の原理は1800年代末にはすでに時代遅れになっていると指摘しました。自由放任の原理は、アダム・スミスの時代に、古い封建的な特権が優遇されていた状態から経済活動を解放することを目的として主張されました。しかし、経済活動の影響が広く深く多くの人々の生活に影響をもたらす時代になり、自由放任の原則は、新しい環境との間に社会問題の発生など不適応を生み出していると指摘しました。デューイは、進化論生物学の立場から、生命体は環境との相互作用によって生命を維持していると論じています。そして、生命体は環境が変化したときに、新たな相互作用の方式を模索し、それに成功することによって新たな環境に再適応して生命を維持すると論じています。そのような観点から、デューイは、人間について、人間は環境の変化に対して、自らの知性に基づく努力により新しい文化—考え方、制度、法、技術など—を創り出し、それによって新しい環境に再適応を果たしてきたと述べています。人間の歴史において、社会はダイナミズムに支配されており、静的に固定されてはいないのです。

ここで人間にとって重要となる点は、新しい文化の創造へとつながる新しいアイデアは、特定の個人から発生するという点です。そして、人間の場合、そのアイデアは多く他の人々に伝えられ、それらの人々によってよりよいものへと高められていきます。そのアイデアが新しい文化として社会に実現されることにより、その文化は人々の集団において共有されます。新しい文化を創造して共有することにより、人間は集団として新しい環境に再適応してきたのです。環境の変化に対して、一部の人が勝ち残って生き延びてきたわけではありません。多様性を維持したままで全員が集団として生き延びてきたのです。これは人間の知性とその協同による成果です。このことがまさに人間という生物種の歴史を特徴づけているのです。

また環境はどのように変化するかは不明です。進化論的生物学は、生命世界のダイナミズムは偶発性に支配されているという考え方に立ちます。言い換えると、生物の進化の過程には目的は

存在しないのです。ある完成に向けてというように、特定の進化の方向性はないのです。生物種は、環境の偶発的な変化の結果として、それぞれ進化を遂げてきたのです。このような観点に立つならば、人間の歴史には、次第に人々の自由が実現されてきた、あるいは、次第に人々の平等が達成されてきたなど、確かに一定の傾向はみられます。しかし、それらが目的や法則に導かれて実現・達成されたわけではありません。歴史は人間を取り巻く環境の変化によって進展するものであり、環境の変化は偶発的に発生します。ヘーゲルが考えたような人間の歴史を動かす超越的な力 — 絶対精神 — も、マルクスが考えたような法則 — 唯物史観 — もないのです。その時代に発生している社会的な問題を解決し、自由を実現しようとする、また、平等を達成しようとする、人間の知性とその協同に基づいた努力による新しい文化の創造によるのです。そのような努力の結果、人々のつながりの在り方が組み替えられて、人間の歴史は動いてきたのです。

③ 再適応における人間の主体性

先に述べたように、デューイは、人間はつながりの中で存在しているという点で、ヘーゲル主義に学びました。しかし、ヘーゲル自身は、人間の精神の発達、また、社会的な問題を止揚する新しい文化の創造は、人間の世界を超越した絶対精神の働きによると論じました。歴史は絶対精神によって、次第に自由を実現していくという目的に向けて動かされていくのです。つまり、人間を超越した力としての絶対精神が、それぞれの時代の指導者の精神に指令を発して、その指導者はあたかも絶対精神の操り人形のように動かされて、社会に新しい文化をもたらすのだと論じました。この点でヘーゲルは、社会問題の解決に向けての、すなわち、人間自身による社会改良に向けての主体的な知性的な努力を認めていません。この点で、デューイは、ヘーゲル主義にみられる絶対主義からは離脱したのです。社会を改良するための新しい文化を創造するのは、人間自身の主体的な知性的な努力によるのです。

マルクス主義の史的唯物論も、先に述べたように、第一に、歴史は必然的な法則に基づいて展開し、その展開の前に人間の力は無力であると、第二に、人間社会は階級間の対立・闘争という関係に本質があると主張します。それに対して、デューイは、人間の歴史は偶発的な環境の変化を契機とし、そこにおける問題を解決し、社会を改良しようとする人間の主体的な知性的な努力とその協同によって達成されると論じています。つまり、必ずしも暴力を伴う革命によって社会が変わるわけではありません。また、人間社会のつながりの在り方は、多様な個人的な要素の相互依存に基づく調和・共生なのです。この点で、共産主義の社会が実現されると、それは労働者階級の一人勝の状態になってしまいます。後にデューイは、ソビエト連邦において、支配者階級と被支配者階級という新たな階級分化が発生していることを指摘しています。ただし、デューイ自身は、1900年代初期には、直接マルクス主義を批判してはいません。ロシア革命直後の時期にはソビエト連邦をむしろ好意的に評価していました。マルクス主義に対しては、スターリンによる独裁が強まってから、1930年ごろから批判を強めました。

マルクス主義と自由放任を主張する立場とでは、経済の在り方については正反対の主張をしました。しかし、両者とも社会の本質を闘争・競争と捉えていました。また、社会改良に対する人

間の主体性については、これらの立場とともに、ヘーゲルもその可能性を否定していたのです。

④ 個性的な能力の必要性和それらの協同による再適応

もう一つ、偶発的な変化に対応するために、多様性がなぜ必要とされるのかについて説明します。環境の変化は偶発的でいつ、どこで、どのように発生するかについて、十分に予想することはできません、しかし、その変化に適切に対応できなければ生物種として生き延びることはできません。先に説明したように、環境の変化に再適応するための新しい文化の創造は、ある一人の個性的な個人に閃いたアイデアが出发点になります。ただし、どのような個性的な能力を持つ個人のどのようなアイデアが必要とされるかは、変化に先立って予想することはできません。だから多様な個性的な能力を集団の中に担保しておくことは、変化に再適応するための保険として必要なのです。人間の集団は、そのような個人が一人いることにより、その個人から発するアイデアによって全員が生き延びることができるのです。この点でも、全員が同じになってしまう一人勝ち状態や全体主義は、偶発的な変化が発生した場合、それに対応することが難しく、集団や社会の存続のためには危ない在り方なのです。

デューイにとって民主主義とは、多様なそれぞれに個性的な能力を有する人々が協同的な活動に参加・貢献しているつながりの在り方です。ですから、デューイにとって民主主義社会とは、多様な個性的な能力が平等に扱われ、それを自由に発揮できるまでに成長が保障されており、そして、それぞれの個性的能力が協同に自由に平等に参加することが制度的に保障されているつながりの在り方なのです。

このようにデューイは、進化論生物学に学ぶことにより、人間の社会の在り方の本質について、分断された個人間や階級間の闘争・競争としてではなく、多様な個性的な個人の相互依存に基づく全体としての調和・共生として捉えました。また、環境の変化は偶発的であるという立場から、歴史を人間の主体的に知性的な努力による文化の創造による集団的な再適応の過程として説明しました。そして、多様性とその協同を偶発的な環境の変化に柔軟に再適応することを保証するつながりの在り方、すなわち、民主主義としてのつながりの在り方として説明しました。

(3) プラグマティズム

① 帰結主義

デューイは、パース、ジェイムズという、デューイに先行するアメリカのプラグマティズムの哲学者から帰結主義という考え方を学びました。帰結主義とは、ある事物や観念(考え)の意味や価値を、その事物を使用してどのような結果が発生するか、あるいはその観念に従って行動した場合、どのような結果が発生するかによって検証することを主張する立場です。例えば、石という物体は、比較的多くの他の物体とこすり合わせたり、あるいはぶつけたりして使用し、他の物体を傷つけたり壊したりするという結果が発生します。そのようにして、「石は固い、すなわち、こすり合わせたり、ぶつけたりすると多くの物体を傷つけたり、壊したりする」というように、石という物体の意味を検証することかできます。また、「石を投げてぶつけるとガラスは割れる」

という観念の価値は、実際にそのように行動してそのような結果が発生することにより検証されます。つまり、事物や観念の意味や価値を、伝統的な哲学が論じてきたように、例えば、アイデアなどの本質に照らし合わせたり、自然権などの前提として仮定される原理にさかのぼったりして判定するという方法を否定したのです。事物や観念の意味や価値を、行動から帰結される出来事によって明確にすることを提案したのです。この点でプラグマティズムは、伝統的な哲学が掲げていた真理の究明、あるいは、真理に照らしての判定という主題を放棄しました。それに替えて、行動の方法の究明、あるいは、行動の現実性を高めることを、哲学の主題として掲げたのです。

そして、デューイは、帰結主義の考え方に基づいて、活動の公共性に関して新しい基準を模索しました。すなわち、デューイは「公共」についての伝統的考え方、つまり、公権力は「私」に対立し、私権を侵害する傾向を有する性悪的なものである、という考え方からの転換を図りました。デューイは、「公共的な活動」についての定義を、従来のように政府による、すなわち、私権に対立する公権力による活動という定義から、帰結として第三者に影響を及ぼす活動というように転換しました。この定義に従えば、経済的活動は、国民の多くの生活にその帰結として影響を及ぼす活動です。デューイによる活動の帰結を規準とする新しい定義に基づくならば、経済的な活動は私的な活動ではなく、公共的な活動になります。巨大企業の活動は、他の企業家の活動、労働者の労働条件、消費者の生活の安定・安全に大きな影響を広く及ぼします。したがって、経済活動の帰結は、多くの人の福祉、すなわち、公共の福祉に影響を及ぼすという点で、公権力によって規制・調整されるべき対象となります。多くの第三者の権利を守るために、政府がそのような活動を規制・調整することは正当な介入と見なすことができます。したがって、公権力によって保護される対象となる権利も、企業家の経済活動に対する自由ではなく、経済活動の帰結に影響として被る人々の福祉となるのです。

デューイは、国民生活に広く重大な影響を現実には発生させている経済活動の在り方は、それが自然権に由来しているという理由によって放任されるべきではないと考えました。人々にもたらされる帰結の重大性に鑑みて政府によって、公共の福祉という観点から規制・調整されなければならないと主張しました。ここに自由放任に替わり、政府が経済活動に介入して規制・調整するという新たな経済活動に対する原理が生まれたわけです。

② 実験主義

また、デューイは、ジェイムズの観念についての論述を手掛かりにしました。ジェイムズは、人間は観念に導かれて行動していること、そして、意図した結果を現実には達成することができるかどうかは、その観念の適切性とその観念を信じる意志の強さによると論じました。ジェイムズは、人間に実現可能だと信じさせ、実現に向けて行動を推進し、実際に実現という帰結に至った観念 — 目的として実現をめざした頭に描いたことがら — が真理だと考えたのです。

デューイは、目的を明確に意識し、どのように行動するかについて計画を立て、それに基づいて実行して問題を解決するということは、仮説を立てて実験的に活動を進める自然科学の実験的方法と同じであると論じました。デューイによれば、すでにこの時代に自然科学は、このような

実験的な方法で人間の現実の生活における様々な技術的な問題を解決し、人間の生活に多くの利便を生み出していたのです。人間の知性的な努力によって、人間が自然世界に対する改良に成功していることは、現実世界における否定できない事実となっていたのです。ですからこのような自然科学の方法に学び、社会問題の解決のための方法、すなわち、社会改良のための方法として転用することが可能なはずだと考えたのです。自然科学の実験的方法を社会問題の解決の方法とすることにより、人間は自らの知性的な努力によって行動を導き、その帰結として社会改良は可能だと主張したのです。

このようにデューイは、パースやジェイムズのプラグマティズムから、第一に、事物や観念の意味や価値について、実際にそれらを使用することを通じて現実に生み出される結果において明確にするとする帰結主義の考え方、第二に、生み出したい帰結に至りつくような行動の計画をしっかりと立てて行動を導くという実験主義の考え方を確立しました。

以上について確認しましょう。

デューイは、第一に、ヘーゲル主義から学び、自由は、個人に生来的に所有されているのではなく、人々のつながりの在り方によって社会的に保障されるのだと論じました。それにより、自由放任の経済活動の論拠、すなわち、経済活動は個人の自然権であるという考え方を否定しました。

第二に、進化論生物学から学び、社会は個体間の闘争・競争によって成り立っているのではなく、多様な個性的な人々の相互作用による全体的な調和・共生によって成り立っていると論じました。また、環境の変化は偶発的であり、人間は新しい文化の創造によって集団的に再適応して生存してきたと論じました。この点で歴史には法則はなく、また再適応は人間の主体的で知性的な努力、しかも、それぞれに多様な個性的な能力を有する人々の協同への参加・貢献によって遂げられてきたのです。

第三に、プラグマティズムから学び、経済活動の在り方について、自然権という形而上的な想定に遡及して考えるのではなく、それが現実世界の人々に生み出している帰結に基づいて考えるべきだと論じ、公共の福祉という観点から政府による調整・規制という介入の正当性を論証しました。また、自然科学と同様に、意図して実験的に活動を導くことにより社会改良を達成することが可能であると主張しました。

このようにして、デューイは、自由放任の経済活動を支持していた論理に対する反駁となる論理を構築したのです。ただし、デューイは、革新主義運動に参加しつつ、同時期にこれらの学説から自由放任の論拠を反駁するのに有効な考え方を抽出し、自らの思想へと変容させていったのです。そのようにして、デューイはメリオリズムを生きる思想を生成していったのです。

6. 経験概念の構築 — メリオリズムの論理 —

新しい思想は、古い思想に対する反駁という側面とともに、当面している問題解決のための方

法論という側面を有しています。デューイは、前述のように古い思想を反駁しました。では、デューイは、人間自身が自らの知性的な努力によって社会改良するための、どのような方法論を構築したのでしょうか。つまり、社会改良の達成を可能にする知性的な努力を推進するために、どのような理論を提案したのでしょうか。

(1) 知性についての自然主義的説明

デューイは、近代哲学の祖であるデカルトが提唱した考え方、すなわち、人間は「理性」—— 正しく考える能力 —— の生まれながらの所有者であるという考え方を否定しました。デカルトのこの考え方は、近代の西洋では長く哲学の前提とされてきました。確かに人間は論理的に飛躍なく考える能力を所有しています。しかし、デューイによれば、そのような能力は生まれたときには潜在的なものに留まります。デューイは、人間の有する諸能力について、生後の環境との相互作用を通じて開花するものと論じています。例えば、人間は言語を話す能力を潜在的に所有しているものの、それが実現されるのは生まれた後に周囲の人との相互作用を通じてなのです。デューイは、伝統的な「理性」という観念を廃棄して、環境との相互作用を通じて発達していく知性という観念を新たに使用しました。

では、知性はどのように発達していくのでしょうか。

デューイは、人間を進化論生物学に基づいて把握しました。進化論生物学において、生命体は、環境と相互作用することによって生命を維持しています。そして、高度な生命体になると、環境との相互作用の方式が複雑になります。例えば、何かを道具として使用して間接的に環境に働きかけることにより、直接的に働きかけることと比べて極めて効果的に環境からの反応を得ることができます。また、時間的に隔たった環境と相互作用することができます。つまり、過去の出来事から学んだことを利用したり、時間的に未来に反応を得ることを計画して働きかけたりすることもできます。さらに空間的に隔たった環境と相互作用することができます。通信技術を使用して地理的に遠い場所の出来事に対しても働きかけて反応を得ることができます。さらに環境が変化したときに、新しい文化を創造することによって再適応することができます。高等な生命体は、このように環境と複雑に相互作用したり、環境の変化に柔軟に再適応したりすることができます。

つまり、デューイは、生命体の複雑で柔軟な相互作用の方式に知性を見出したのです。このようにデューイは、「理性」という形而上学的に想定された観念を前提とすることなく、生物学的に観察可能な事象に基づいて人間の知性について説明したのです。そして、知性とは、生まれた後に環境と相互作用することによって発達し高められていく能力なのです。どのような能力が開花して高められるかは、それぞれの時代の環境によって決定されます。環境に適応するための必要性によって開花される能力は異なるのです。また、知性は人間だけが特権的に所有している能力ではなく、他の生命体にも程度の差はあれ示されている能力なのです。したがって、デューイは、人間を世界の中で特別な特権的な存在とする考え方を否定し、人間と他の生命体とを連続的な存在として捉えました。

もちろん人間の知性については、他の生命体と比べて極めて高度です。また、人々の間でも知性に関する能力は、後に H. ガードナーが多重知性 (MI) 理論として提唱するように、多様であり均質ではありません。また、人によって知性的な多様な能力のそれぞれについて差異があることも事実です。知性についての多様な能力をどのような組み合わせで持っているかは、それぞれに個性的なのです。また、それらの能力は、生まれた後に環境との相互作用を通じて発達します。この点で教育が重要になるのです。このことはまた後に論じることにしてしましよう。

(2) 人間の活動に示される知性

デューイは、生命体、特に人間の環境との相互作用の方式に知性を見出しました。では、環境に再適応する際に、人間はどのようにして変化した環境に再適応することに成功しているのでしょうか。

環境が変化してそれまでの相互作用の方式が機能不全となるということは、いわば問題の発生です。その場合、生命体は生き延びるために、新しい相互作用の方式を開発しなければなりません。環境から生命を維持するための有効な反応を引き出すための新たな相互作用の方式を開発する活動は問題解決、あるいは探究ということが出来ます。デューイはそのような問題解決の事例を分析して、その活動ではどのような知識がどのように使用されているのか、思考はどのように機能しているのか、行動はどのように遂行されているのかを分析し、問題解決にどのように知性が見られるかについて解明しました。

例えば、森の中を道から外れて散歩していたとしましよう。特に進行方向に特別の障害がなく歩行そのものを意識する必要のない場合、環境との相互作用は習慣に従って効率的に行われています。しかし、前方に小川が見られた時、跳び越えられる川幅か、近くに跳び越えられるような地点はあるかなど、思考が機能して観察が行われます。習慣に停止がかかります。この場合、観察に基づいて「跳び越えられる」という判断がなされれば、跳び越えるという他の方式の行動が実行されます。しかし、詳細な観察の結果、「跳び越えられない」と状況について判断された場合、問題が発生することになります。

そして、周囲を見回したところ数本の倒木があったとしましよう。その倒木を見て、それを小川に橋として架けて渡るという考えが生まれたとします。そして、倒木の中から、小川の川幅より長く、渡るために乗っても折れることのない太さがあり、小川まで持ち運ぶことができる重さの倒木を選び、さらに転がらないように安定させるために石を添え置いて、実際に橋として架けて対岸に渡ることになったとしましよう。このようにして問題は解決されるのです。

この問題解決の一連の活動において、例えば、どの倒木を橋として使用できるかを判断するために、橋の長さ、橋の耐性、持ち運びの重量、橋の安定性などについての知識が使用されています。これらの知識は、倒木を橋として架けるための条件を示しています。橋として架けるためには川幅より長いこと、自分が乗っても折れないこと、川まで運ぶことができること、転がらないように安定させることなど、倒木を橋として架けるといふ行動が可能であることを判定するための規

則を使用することが必要となります。このように問題解決において使用されている知識は、伝統的な哲学が論じてきたような存在の真なる様相なのではないのです。知識とはある目的を実現するために、それに従うことが条件となる行動の規則なのです。これらは意味、すなわち、物事や出来事の関連や連続、あるいは働きかけと反応との結びつきなのです。このような意味を行動の規則として使用して、直面している問題状況の特質を明らかにしたり、目的を実現するための行動を計画したりするのは、デューイのいう知識とは意味であり、それは状況の特質を明確にしたり、目的の実現に効果的な行動を計画したりするための道具や材料なのです。

また、思考は、行動の規則としての知識を使用して未来における目的の実現のための行動を計画します。問題解決において思考は、形而上学的な原理に遡及して情報の真偽を判定することではなく、未来の帰結に向けて知識を駆使して予想し、どのように行動すべきかについて計画するために機能します。伝統的な哲学では、確かな原理から出発して論理的に情報を検証することが理性に合致した思考、すなわち、合理的な思考として重視されてきました。しかし、デューイは目的の実現という未来に向けて予想して計画することに思考の役割を設定しました。真理に照らして検証することではなく、特定の帰結を目指して行動について計画することが思考の果たす役割なのです。

さらに、行動とは、やみくもに行うという悪い意味での試行錯誤ではありません。伝統的な哲学では、現実世界における実践的な活動は、いくらそれを積み重ねても原理などの真なる知識を得ることはできないと見なされていました。しかし、デューイは、現実世界で実践的な活動に有能に取り組む熟練者の活動、例えば、医者や法律家、技術者、熟練職人などの実践的な仕事への取り組み方を分析しました。そして、それらの人々が毎回の活動から行動の規則としての知識を抽出して蓄積していること、そして、その後に取り組む問題解決において、それらを道具や材料として活用して、行動についての計画を立てて、実際に問題解決に成功していることを明らかにしました。つまり、知識を思考において活用して行動の計画を立て、そのようにして活動を実験的に導いているのです。行動は知識及び思考と緊密に結びついているのです。

したがって、問題解決は、必要な知識を適切に使用して、直面している問題状況の性質を十分に調べて、問題解決のために有効な行動を慎重に計画して、そのようにして行動を進めることにより遂げられるのです。つまり、知識を思考において活用して行動を実験的に導くことによって、現実的に成果が達成されているのです。デューイは、このように知識と思考と行動とが緊密に結びついていること、すなわち、目的として意図された問題解決という帰結に向けて、行動が実験的に導かれていくという方式に、知性が示されると論じているのです。この点で、知性とは、そのようにして展開される優秀な活動を修飾する誉め言葉なのです。

デューイは、人間が問題解決に実際に取り組んでいる活動をこのように分析することによって、問題解決という活動を知性的に導くための方法を解明しました。繰り返し言えば、行動の規則としての知識を活用して直面している状況について十分に調べ、解決のために有効な行動の方法について慎重に計画し、そのようにして活動を導くという方式です。このように取り組むことが知性

的な努力なのです。このような方式で活動を推進することにより、人間の知性的な努力による社会改良は可能であると論じました。メリオリズムのための具体的な取り組み方を提示したのです。

(3) 確実性の増大

デューイは、このようにして、人間は自らの知性的な努力によって現実世界で発生している社会問題を解決し、社会改良を達成することができるという、メリオリズムを擁護する論理を構築しました。

ただし、一つ重要な点を忘れてはいけません。

知性は、人間の努力に絶対的な確実性を保証することはできません。この点で、人間の努力の知性的な水準をいくら高めたとしても、その帰結に絶対的な確実性を事前に完全に保障することはできないのです。つまり、人間の知性的な努力は、不確実性から逃れることはできないのです。現実世界に生き、そこで活動する人間は、不確実性を引き受けて問題解決に取り組まざるを得ないのです。しかも、人間は現実世界から逃避することはできません。この点で、デューイの論じた思考の方法は、問題解決 — 探究 — を導く絶対確実なマニュアルではありません。確実性を高めるための留意点なのです。『思考の方法』（1933年）で述べられている「反省的思想の五つの側面、あるいは局面」を、探究を成功させるためのマニュアルとして理解することは誤りです。

人間の知性的な努力において可能なことは、目的、すなわち、生み出したい帰結に至る確実性を高めることなのです。絶対的な確実性が人間の活動に保障されることはあり得ません。しかし、人間は知性的であることにより、その確実性を高めることはできるのです。そのために行動の規則としての知識について、適切かつ有効なものを十分に活用して、状況の性質をよく調べ、行動の方法を慎重に計画することが要請されるのです。また、そのために、毎回の問題解決の活動を反省し、そこで有効だった知識や新たに発見された知識を確認して、その後の問題解決において使用できるように蓄積するのです。そのようにして次の問題解決の活動を知行的に行うことができるように準備するのです。さらに、知性的であることにより、うまく解決できなかった問題解決の取り組みを反省することからも、その後に役立つような知識を抽出することができます。

伝統的な哲学からは、デューイのこのような問題解決についての考え方に対しては、相対主義という非難が浴びせられました。しかし、メリオリズム擁護の論理の構築をめざすデューイの思想は、真理の探究のための合理的な方法の究明ではなく、現実世界における問題解決のための知性的な方法の究明を目指すものでした。現実世界を生きる人間のための問題解決を主題とする思想なのです。現実世界において人間を取り巻く環境の変化は偶発的です。人間は偶発的に変化し続ける状況の中で問題解決に取り組みつつ生きる行為者なのです。人間は、そのような世界から逃れることも、このような行為者であることを放棄することもできません。問題解決を先延ばしにすることも、それに失敗することも許されません。それは人間の種としての生存にかかわってきます。そのような「状況の中の行為者」としての人間には、知性的な努力によって確実性を高めつつ、問題解決を通じて社会改良に取り組み続けることが運命づけられています。

このようにメリオリズムを生きるとは、選択的なものではありません。メリオリズムを生きることは、人間にとって宿命なのです。人間は不確実性を引き受けつつ、知性によって確実性を高めるべく努力して問題解決に取り組むという生を生きる存在なのです。

デューイにとって経験とは、一つは反省された活動です。つまり、意味が抽出されて次の活動において、それを使用してその後の経験の確実性を高めるように蓄積されている過去の活動です。もう一つは意図された活動、すなわち、ある帰結を意図して意味を組織的に使用して進められる活動です。いずれにしても知識と思考と行動とを十分に関連させて、知性的に取り組まれる活動です。つまり、人間が自らの知性的な努力として取り組んでいる問題解決の活動です。この点で、経験とは、メリオリズムに基づく活動の方式なのです。

デューイは、メリオリズムを擁護する論理を、経験という概念として構築したのです。

7. メリオリズムの社会

人間は、環境の変化に対して、新しい文化を創造することにより、集団として生存を維持してきました。人間は、一人の個人に閃いた新しいアイデアをみんなで協同して文化として洗練し、それをみんなで共有することによって、新しい環境に集団として再適応してきたのです。そのようにして生存の更新に成功してきたのです。そうであるならば、人間の知性的な努力による問題解決への取り組み、すなわち、経験は、個人としてだけではなく、集団によって協同として行われることが重要になります。そのような観点から考えるならば、人間は相互に闘争や競争して発展してきた存在ではなく、協同や共有によって発展してきた存在だといえます。協同して問題を解決し、文化を共有することに、人間の社会が環境の変化に対する再適応に成功して、維持され発展してきた理由を見出すことができます。

したがって、人々の間のつながりの在り方が重要なのです。人々が協同して問題解決に取り組む、再適応に有効な文化の共有を可能にするつながりとは、どのようなつながりの在り方なのでしょうか。

(1) 自由なコミュニケーション

協同とは複数の参加者が活動の目的、それを達成することの意義、取り組み方についての計画などを共有し、それぞれが分担した役割を果たしていく活動です。ですから、例えば、人間と馬とが畑を耕すという作業を共に行っていたとしても、その活動は協同ではありません。人間と馬とでは、その作業を行う目的が異なるからです。人間は数ヶ月後の穀物の収穫、さらにはその出荷まで見通しています。馬はその日の作業後に餌をもらうことを期待しています。

人間たちによる協同的な活動では、何を目的とするのか、その活動の意義は何か、取り組み方をどのように計画するかなどが、参加者たちによる合意に基づいて決定されなければなりません。

参加者たちが協議して合意を形成していること、あるいは、少なくとも参加者にそれらについての説明がなされ、参加者から自発的な同意が得られていることが、その活動が協同といえるための条件です。もちろん、活動が開始された後であっても、条件や状況の変化などが発生した場合、参加者たちの再協議による修正や変更が柔軟に行われなければなりません。つまり、参加者の間でコミュニケーションが活発に展開され、そのようなコミュニケーションの自由が保障されていることが、協同としての要件なのです。

つまり、コミュニケーションがなされることにより、協同による人間の集団的な経験の確実性が増大するのです。多様な人々のそれぞれの経験から得られた知識が結び付けられて使用され、また、多様な人々の個性的な思考の方法が機能することにより、多様な行動の方法についての計画を考え出すことができます。協同的な活動の機能は、コミュニケーションの活発さによって知性的なものとして高められるのです。この点に関して、憲法が制定されていること、三権が分立していること、国民主権に基づく普通選挙が実施されていることなどは、その国家が民主主義国家といえるための基盤的な条件ではあります。しかし、デューイは、たんに法や制度が整えられているだけでは、その国家で民主主義が機能しているとはいえないと述べています。社会的な問題の解決が、関係する人々の参加による協同的な活動として取り組まれている点に、つまり、法や制度が人々の活発なコミュニケーションを促進する仕組みとして実際に機能している点に、民主主義の尺度を設定したのです。協同的な活動への参加とは、コミュニケーションへの参加を基盤としているのです。多様な個性を有する人々のコミュニケーションに基づく協同を通じて、人間は自らの集団的な経験の確実性を増大することができます。ですから民主主義は環境の変化に対して強いつながりの在り方なのです。全体主義では全員が均一となることが求められます。均一な要素の間でのコミュニケーションから、新しいアイデアは生まれません。独裁国家では人々の間でのコミュニケーションは禁止されます。コミュニケーションがなければ、新しいアイデアの流通やそれを洗練するための協同はなされません。

このように人々の間での自由なコミュニケーションに基づく協同により、人間は集団としての経験の確実性を増大することができます。デューイにとって、コミュニケーションとは、相互の経験のやり取りです。例えば、一人の人の問題解決の経験を他の人に伝えることにより、伝えられた人は、自らの次の問題解決への取り組みにおいて、その伝えられた他者の経験を利用して自分自身の問題解決の確実性を増大することができます。このように一人の人の経験を他の人々に伝達し、他の人々の経験において役立つように、集団的に共有していくことがコミュニケーションなのです。また、その経験が多くの人々に伝達されていく過程で、当初の経験が他の人々の経験と照らし合わされて修正されたり洗練されたりします。そのようにして共有された経験が文化となるのです。

このようにデューイは、人間の主体的で知性的な努力による社会改良の可能性を、単に個々の人間が有する能力として論じたわけではありません。コミュニケーションを通じて、協同することによって、集団の経験としての確実性を高める可能性を論じたのです。知性の協同、あるいは、

集団的な知性の可能性です。それを保証する人々のつながりの在り方を社会に実現することが課題となるのです。そのようなつながりの在り方が民主主義なのです。

(2) 個性の平等と自由

先に述べたように、新しいアイデアは、一人の個性的な成員の閃きとして生まれます。ですから、新しい文化の創造は、多様な個性的な能力が尊重され、それぞれに個性的な成員間の自由なコミュニケーションが保障されている社会において可能なのです。

環境の変化は偶発的です。いつどのような方向に変化するかは、ある程度までは予想できるかもしれませんが、完全に予想することはできません。想定外の変化もしばしば発生します。ですから生命体は、親と子どもの間でも、また同一の親から生まれた子ども相互の間でも、少しずつ形質が異なっています。環境が変化したときに、いずれかの子どもが再適応に成功できるように、いわば保険として多少ともそれぞれに異なった形質を有する子孫を残すのです。繰り返し述べますが、人間は知性によって新しい文化を創造することによって、集団として再適応に成功して、みんなで生き延びてきました。このような観点からも、社会の中に多様な個性的な能力を有する成員を確保しておくこと、そして、自由なコミュニケーションを保証することが、想定外の環境の変化に再適応するための要件となるのです。

民主主義社会において、自然権として想定されているような自由を相互に尊重し合えること、また、経済的な平等をある範囲で確保することは重要です。デューイは、前述のような観点から、自由や平等について次のように考えました。

まず、自由についてです。デューイは、それぞれの個性的な能力を最大限にまで成長させることへの自由、そして、協同的な活動においてその能力を発揮して、社会貢献に参加することへの自由を主張しました。ここで、デューイが、たんに個性的な能力の存在の自由を主張したことにとどまっていな点に留意しなければなりません。個性的な能力がその所有者に実現させるためには、それを発達させるための環境が必要です。つまり、教育がなされなければなりません。社会に教育という制度が存在して機能することにより、それぞれの人の個性的な能力が発達して現実において開花するのです。個性的な能力がその所有者にとって自由に発揮できる能力であり、社会への貢献として役立つ能力となるのです。自由とは、それぞれの人の所有している個性的な能力を、それぞれの人が具体的な活動において最大限にまで発揮していることに示されます。その能力を所有している個人が、実際に具体的に行動して周囲に働きかけて意図した反応を得ることができなければ、その個人は自由であるとはいえません。したがって、自由は、それぞれの人の個性的な能力を最大限にまで発揮できる制度やシステムを整えるとともに、それぞれの人の個性的な能力の成長が最大限にまで遂げられるような制度やシステム、すなわち、教育を整えることによって実現されるのです。このようにデューイの論じる民主主義社会において、教育は重要な社会的機能を担っているのです。

次に平等についてです。先にも述べましたが、環境の変化は偶発的です。ですから生命体につ

いていえば、どのような個性的な形質を有する子どもが新しい環境に再適応できるかは、あらかじめ予想することはできません。この点で、できるだけ多様に変異した形質を残すことが生命体にとっての保険となるのです。したがって、人間の社会が偶発的な環境の変化に再適応するための新しい文化を創造するためには、多様な個性的な能力を有する成員が社会において存在していることが必要となります。したがって、デューイにとって平等とは、多様な個性的な能力についてのそれぞれの平等なのです。しかも、単に多様な能力が存在していることに対する形式的な平等ではありません。それぞれが最大限にまで発達して開花されるように教育を受けることの保障に関する平等であり、また、それを発揮して社会に貢献するために協同的な活動に参加することに関する平等なのです。ある特定の能力だけが、その発達や貢献が優遇されるのではなく、あらゆる能力の発達と貢献に関して開かれて保障されることが平等なのです。このような平等を実質的に保障するうえでも、デューイの論じる民主主義社会では、教育は重要な社会的機能を担うのです。

自由放任の経済活動が展開される社会では、経済的な能力を有する人だけが優秀な個人として評価されていました。デューイによれば、社会を取り巻く環境が変化すれば、そこにおいて重視される能力も変化すると述べています。また、たとえ経済的な能力が重視されている時代においても、他の能力も不可欠の役割を果たしていると述べています。個人間の闘争や競争によって社会が進化すると論じる社会ダーウィニズムの立場に立てば、経済的な能力に優れた個人以外は淘汰されてしまいます。そうなる環境が変化した時に、新しい文化を創造して再適応することができなくなってしまいます。デューイは経済的な能力に優れた個人が活躍することを否定していません。しかし、その他の多様な個性的な能力との調和的・共生的な相互依存関係が基盤となっていなければなりません。そのような基盤を否定する考え方を批判しているのです。それは環境の変化に対する再適応の妨げとなるのです。

デューイは、環境の変化に柔軟に再適応できる社会の在り方という観点から、多様な個性が相互依存的に調和・共生しているつながりの在り方を重視しました。多様な個性のそれぞれの自由で平等な成長とそれを発揮しての貢献が保障される人々のつながり方です。それがデューイにとっての民主主義社会なのです。

(3) コモンマンへの信頼と教育

社会ダーウィニズムに基づいて自由放任の経済活動を支持する企業家や学者は、人間が生まれつき所有している能力の自由な発揮による闘争や競争を通じて社会は進歩すると主張しました。つまり、企業家として成功するような優秀性は、その個人が生まれながらに所有している能力であると考えられていたのです。逆に言えば、淘汰されてしまう人は生まれつき能力の点で劣っていると見なされたのです。

確かに人間の生来の能力には差異があります。デューイは、人間の生来の能力に関しては、個々の要素的な能力の優秀性 — 例えば、ある観念が頭に思い浮かぶという、示唆が速やかに、多様

に、連続的に得られるというような — についていえば、個人間に差異があることを認めています。しかし、人間の能力は多様であり、個々の人間は、多様な能力を組み合わせとして所有しており、その組み合わせの状態はそれぞれにより多様で個性的なのです。一人の人間を見れば、ある特定の要素的な能力では劣っていても、他の特定の要素的な能力では優れているというのが現実です。経済的な能力という特定の要素的な能力のみで、人間の能力について評価することはできないのです。また、その能力だけが重視されることは環境の変化への再適応を遂げる上で危険なのです。

革新主義運動では、デューイをはじめそれに参加した学者たちは、人間の能力は生まれたときの差異よりも、教育を通じて達成される差異の方が大きいと主張しました。この主張は、普通の平均的な人々、すなわち、コモンマンには、社会改良のための知性的な活動に参加する能力はないという考えに対する反論として主張されました。デューイが設置したシカゴ大学附属実験学校における教育活動は、コモンマンの教育の可能性を実証するための試みであったといえます。学校教育という活動そのものによる、デューイ自身の革新主義運動への具体的な参加だったのです。『学校と社会』以後も、デューイは新教育運動をはじめ教育に関与し続けます。1916年の『民主主義と教育』は、デューイが民主主義社会を再構築するための、すなわち、教育を通じて社会改良を担い得る能力をどのように発達させることができるのかについて論じた著書です。いわば、コモンマンの教育の可能性とその方法について示した著書なのです。デューイは、その後の政治・経済や社会などの在り方について論じた著書においても、教育を通じてコモンマンの能力を発達させることの可能性と必要性を繰り返し指摘しています。

デューイの論じる教育は、成長する能力を育成することを目的とします。すなわち、それぞれの子どもが、自分自身の個性的な能力を、生涯にわたって成長させ続ける能力を育成することを目的とします。そのために子どもたちの興味・関心がある素材やテーマに基づいた学習活動が設定されます。そして、子どもたちが自分たちで全身全霊を打ち込んで取り組むことができるように環境が整えられて活動が支援されます。このようにして子どもたちが取り組む学習活動がオキュペーションなのです。教師は、子どもたちがそのように活動に取り組むための環境を設定して支援することを役割とします。デューイは、それぞれの子どもの個性的な能力の発達を遂げることをめざす教育活動の在り方をこのようにして探りました。

また、デューイは、子どもたちの学校の生活と社会における生活、特に民主主義の生き方が、前者から後者へと発展的に連続するように配慮しました。デューイは、『学校と社会』において、学校を子どもたちにとって「小型の共同体、胎芽的な社会」とすることを提唱しています。つまり、民主主義社会における多様な個性的な能力を有する人々の参加と貢献によって取り組まれる協同的な問題解決を、学校のカリキュラムにおける子どもたちの活動の形態としました。子どもたちが自分たちの達成を目指すプロジェクトに協同して取り組む探究的な活動です。このような活動において、子どもたちは活動の目的やその意義、さらには活動の進め方などについて協議して共通の理解を形成し、それぞれの個性的な能力を生かして活動を分担し、それぞれ相互依存的に調

整しながら活動に取り組みます。そのようにして展開される活動では、当然のこととして、子どもたちは仲間と密度の濃いコミュニケーションを行わなければなりません。相互の経験から抽出されている知識や技能が伝え合われることにより、アイデアが発展して具体化されたり、活動における問題が技術的に解決されたりします。子どもたちは、このようなコミュニケーション豊かな協同への参加と貢献を実地に経験するのです。そのような活動を積み重ねることにより、協同的な活動に参加して貢献する能力を発展的に育成することをめざすのです。

また、デューイは、そのような子どもたちの興味関心に基づき、子どもたちが主体的に意識を集中して取り組む学習活動において、そこにおける必要性から知識や技能を習得させることを主張しました。もちろん習得させる内容は、読書算の基礎的なリテラシーだけではありません。社会や生活の発達に関する歴史的理解や科学的原理の洞察にいたる内容も含まれます。また協同すること、相互の個性を尊重すること、他者の境遇を洞察し配慮することなど、民主主義の生活の仕方に関する理念や方法なども含まれます。

そのようにして学校での経験を民主主義社会における経験へと連続的に発展させることを目指しました。デューイの教育論は、教育における重力の中心を子どもに移したとして評価されています。この点でデューイの教育論は、教科ではなく子どもの生活の論理を重視し、子どもの生き方を育てることを目指す教育論です。しかし、それは、社会改良に向けて知性的に努力することのできる能力、また、そのような活動を協同として組織し、そこにコミュニケーション豊かに参加・貢献できる能力の育成を主眼に置く教育論なのです。この点でデューイは、教育を通じての社会改良を主張し、それをめざしたのです。つまり、過去の遺産の伝達から、それらを使用しつつ現在の社会を改良していく能力の育成に学校教育の社会における役割を移したのです。

メリオリズムを生きることは、特定の能力に優れたエリートのみ可能な生き方ではありません。コモンマンの生き方でなければならないのです。また、民主主義とは、コモンマンの参加と貢献によって取り組まれる協同的な活動が展開されていることに示されます。デューイの教育論では、コモンマンがメリオリズムを生きる能力を有していることが主張され、教育を通じてそのような能力を発達させて開花させるための具体的な方法が論じられているのです。

人間の知性的な努力による社会改良は、多様な個性的な能力を有する人々の協同によって、それを遂げる確実性は高められます。人間は、コミュニケーションを通じて相互の経験を交換して共有することができます。多様な個性的な能力が社会に実現されて確保されていることにより、環境が変化した際に再適応するための新しい文化を創造することが可能になります。この点で、教育を通じて多様な個性を最大限にまで発達させ、それによって協同的活動に参加し貢献できる制度やシステムを準備して機能させることが不可欠となります。そのためにも教育には、普通の人々がそれぞれの個性的な能力を最大限にまで発達させ、また、協同的な活動に参加して貢献できるための経験を発展させるという役割が求められます。民主主義とは、人々が協同的な活動に参加して社会的な問題の解決に貢献しているという生き方に示されます。そのように知性的な努

力が集団的に機能していることに示されます。メリオリズムとは、そのように社会改良に取り組む民主主義社会における人々の生き方なのです。

おわりに

ヘーゲルは、「ミネルヴァのふくろうは、たそがれがやってくるとはじめて飛びはじめる」という言葉を残しています。この言葉は、ある時代において人々はその時代の社会的な問題の解決に向けて生成してきた思想は、その時代の終焉を迎えるころに、つまり、社会問題が一応の解決に達した段階において明確にされるということを述べています。新しい思想は、社会問題の解決に取り組むことを通じて生成されるのです。まず新しい思想が誕生して、それが人々に問題の所在を告げて、解決に向けて人々の取り組みを導くわけではありません。問題を意識し、解決に向けて取り組む過程で、新しい理想が明確になってくるとともに、他方で、論敵が立ち顕われてくるのです。そして、論敵に対抗して新しい理想を実現するための論理の必要性が自覚され、その構築に向けて思想活動が立ち向かうのです。そのように時代の社会状況との相互作用を通じて思想は生成されるのです。そして、その取り組みが終焉を迎える時期に、その取り組みを通じて生成された思想が反省され、論理的に体系化されて哲学として構築が完成するのです。この点で、哲学は一つの時代における社会改良の取り組みを後付的に正当化する論理ともいえるのです。

ですから、本講演で述べてきたようなデューイのメリオリズムの思想は、1800年代末から1900年代初頭にかけてのアメリカにおける革新主義運動を導いた思想ではないのです。デューイが革新主義運動への参加を通じて生成してきた思想なのです。革新主義運動への参加によって意識した思想的課題に基づいて、デューイは、ヘーゲル主義、進化論生物学、プラグマティズムから学び、自由放任の経済活動を支えていた論理を反駁し、人間の知性の協同による努力を通じて社会改良は可能であるとする論理を構築していったのです。ですからその論理の完成は、革新主義運動が一定の成果を達成してその終焉を迎える1916年の『民主主義と教育』だったのです。この点で『民主主義と教育』は、デューイの経験を中心概念とする哲学の構築として、また、メリオリズムに基づく民主主義を擁護する論理の提案として評価することができます。革新主義運動を後付的に正当化する論理だったのです。

その後、デューイは長寿に恵まれ、60歳代、70歳代に多くの著作を残しました。経験概念に基づいて、『民主主義と教育』で論じたテーマを哲学、倫理学、政治・経済論、芸術論、宗教論などごとに、また、それぞれの時期における社会問題に論及しつつ多くの著作でメリオリズムの生き方に関する論理を体系的に、哲学として発展させました。

デューイのメリオリズムの思想は、相対主義だ、人間の知性への楽天的なほどの信頼だ、と批判されてきました。しかし、すでに述べましたが、人間にはその生存が絶対的に保証される基盤は存在しないのです。偶発性に支配される動的な世界の中で、自ら知性を持みとして協同して問題解決に取り組みつつ生きる存在なのです。社会問題の解決を放棄し自然の闘争や競争に自らを

委ねることも、あるいは、絶対的な存在や法則に自らを委ねることも、デューイから見れば現実逃避であり、また、人間の主体性の放棄なのです。人間が主体性に生きること、すなわち、知性的な努力により社会改良することは、人間の可能性というよりは、デューイにとって人間の宿命なのです。絶対的なものへの従属こそ、楽天的な現実逃避なのです。

現代の世界は、100年少し前のアメリカと多くの点で類似した状況となっています。経済のグローバル化に伴う経済的な格差が発生しています。グローバル化した経済活動には新たなルールに基づく調整や規制が必要とされています。アメリカをはじめとする西洋的な文化とイスラム原理主義との文化的な対立、近代西洋型の民主主義国家と新たに興隆してきた全体主義的な国家との対立などが発生しています。分断と対立は世界規模のものとなり、それだけ深刻なものとなっています。また、SDGsに示されたような、人類が地球規模で一体となって協同して解決に取り組まなければならない、差し迫った課題に直面しています。

メリオリズムは、人間の知性的な努力に信頼を寄せます。しかし、それは楽天的な信頼ではありません。それは、自らの知性に恃まなければ人間は生き残ることができないという、人間の実存を引き受ける覚悟でもあります。人間は不確実性を受けつつも、知性により確実性を増大して問題解決に取り組む実践者です。完全にわかり合えるとは限らないものの、共通の理解を構築しようとコミュニケーションする言語使用者です。それぞれの個性を差異として排除や攻撃し合うのではなく、相互の個性を協同して新しい文化を生み出していく創造者です。確かに、1920年代のアメリカに兆しとして見られていた大衆社会では、W.リップマンが指摘したように、コモンマンは健全な輿論の担い手である公衆とはなりにくい状況が発生していました。また、R.ニーバーが指摘したように、人間には集団になると、相互に対して残虐になるという傾向もあります。しかし、人々の政治的な無関心や一時的な熱狂、集団的な残虐性などは、ある特定の条件の下での人間の傾向ではあるものの宿命ではありません。人々の間のつながりの在り方の問題なのです。デューイのメリオリズムも人間にとって一つの可能性に留まるものです。しかし、私たちが戦争を回避して平和を維持し、また、貧困など経済的な格差を縮小し、様々な差別・抑圧をなくし、持続的な発展を続けていくためには、デューイのメリオリズムを私たちの基本的立場として確認することが必要なのです。

- ・この世界は、多様な要素の相互依存による調和・共生によって成り立っています。
- ・この世界は、動的で偶発的な変化に支配されていますが、人間は多様な個性的な能力の参加・貢献による協同を通じて、そこで発生する問題を解決してみんなで生存を維持することができます。
- ・人間は、コミュニケーションして知性を協同することにより、社会を改良することができます。

現代において、私たちは、デューイのメリオリズムについて発展的に理解するならば、それを人間の知性に対する信頼の表明というよりは、社会改良に対する知性的な努力を自らの義務として引き受ける生き方と理解しなければなりません。私たちの自由、平等、人権の保障、平和、環境保護などは、絶対的なものによって守られてはいないのです。それらの価値を共有している人々

のつながりの中で、すなわち、メリオリズムを生きる人々の共同体の中で、その共同体の活動を民主主義にふさわしく機能させることによって保障されるのです。民主主義は、民主主義の社会を維持し発展させようと努力する、人々の知性の協同によって維持され発展していくのです。メリオリズムを生きることについて、このことをデューイからの学びとして強調し、本講演のまとめとさせていただきます。

牧口常三郎生誕 150 周年記念座談会 牧口研究の現状と課題

塩原 将行, アンドリュー・ゲバート, 牛田 伸一,
岩木 勇作, 伊藤 貴雄 (司会)

伊藤 今年は牧口常三郎(1871-1944)生誕150周年の佳節に当たります。そこで、本研究所で牧口研究に携わっている方々に集まっていただき、それぞれの考える牧口研究の現状や課題を出し合って共有したいと思います。登壇者は、評伝的研究を推進してこられた塩原将行さん、英語圏での翻訳紹介に尽力してこられたアンドリュー・ゲバートさん、ヘルバルト主義教育学との関連で研究してこられた牛田伸一さん、近代日本教育史の観点から研究してこられた岩木勇作さんです。最初に1人5分をめぐりに話をして、そのあと参加者間のディスカッションに入ります。それでは、まず塩原さんからお願いします。

塩原 私は2017年に「創価教育の源流」編纂委員会の一員として、『評伝 牧口常三郎』を出版させていただきました。その経験を通して感じた牧口研究の現状と課題について、3点に分けて問題提起させていただきます。

第一は、新たに見つかった牧口常三郎の論考等についての対応です。この20年余りの間に、牧口全集に収録されていない多くの論文等が見つかっております。これら82点は評伝牧口の巻末付録にアスタリスクマークをつけて掲載しました。また、牧口が発表したことは確かですけれども、現在手に取ることができないものについては、「未発見のもの」として、まさに指名手配という形で掲載いたしました。おかげさまで評伝出版後にそのうち2つが見つかりました。さらに新たに確認できたものを加えると12点が著作リストに加わることになります。評伝に掲載した未発見のものでいえばあと10点ですけれども、他にも題名すらわかっていないものはまだまだあると思われます。たとえば、牧口が主幹を務めた大日本高等女学会が発行した『大家庭』『家庭楽』は見つかったものがその一部にすぎず、1930年以降に出版された教育雑誌『環境』『進展環境 新教材集録』『新教材集録』『新教』『教育改造』は、約65冊のうち45冊しか見つかっていません。特にこれらの教育雑誌は、創価教育学と

Takao Ito (文学部教授・研究所副所長)

Shinichi Ushida (教育学部教授・研究所所員)

Andrew Gebert (研究所教授・所員)

Masayuki Shiohara (研究所客員研究員)

Yusaku Iwaki (通信教育部非常勤講師)

という言葉が誕生した以降の牧口の思想と創価教育学会の活動を知るうえで、極めて重要だと思われる。このことから、ぜひとも見つかってほしいと思っております。それ以外にも見つかるかもしれません。このような未発見の資料の発見は、極めて地道で気の長い戦いです。時間という海に落ちた指輪を探すようなものです。それを可能にするには、そのことに執念を持ち続ける機関があることが大事です。そこに情報と物が集まります。そして、研究者だけでは到底できることではありませんので、幅広い研究の裾野を形成することが大切と思われる。その上でさらに大事なことは、新たに発見された情報が共有されることです。最も望ましいことは、牧口全集の補巻として出版されることでありますけれども、まずは解題をつけて紀要等に発表することなどが考えられます。見つかった資料は今後も二度と見つからないものがほとんどです。そのため、これらの元版は、`創価の至宝、として大切に保存・管理されていくことが望ましいと思います。

第二に、牧口常三郎の実証的な評伝研究は、始まったばかりだということです。『評伝 牧口常三郎』の執筆は、従来の伝記の中で `伝説、と思われる部分や小説として付加された部分を切り落とし、逆に新たな資料を加えて、裏付けがとれることだけを書くように心がけました。さらに、今後の研究の足掛かりにさせていただくために、注を多くつけて根拠となる文献を明示させていただきました。今後牧口研究を志す方に、最低限、目を通していただきたい文献は、できるだけ掲載しております。

現在私は、2021 年に『評伝 戸田城聖』下巻の出版を終えて、積み残した課題や新たに浮かび上がった課題に取り組んでおります。例えば、牧口の通信教育については、新たに見つかった資料を加えてもう一度書くこと。それから牧口は大正期に入って地理学から教育学の分野へと関心が移っていきませんが、どんな経緯なのか澤柳政太郎が会長を務めていた教育教授研究会を手掛かりに書いてみたいと思っています。それから、これも新たな資料に基づいて、『創価教育学体系』の第一巻出版前の事情を一步踏み込んで書きたいと思っています。また、牧口が誕生した新潟県の荒浜村の学校において、彼がどのような教育を受けてきたかということについても、少し手掛かりが掴めましたので書いてみたいと思っています。また、これは力が及ばないかもしれませんが、明治期の初期社会主義者との交流についても論じたいと願っております。

今改めて感じることは、議論することの大事さです。複数の目で、いろんな角度から光を当てると見えてくることがあります。それとともに、意識し続けることの大切さを実感しております。先日も、20 年以上悩んできたことが、ふとしたことで解決の糸口が見えてまいりました。そして、現在の牧口研究において、最も大事だと思うことは、次世代の担い手となる人々（できれば学生を含めて）が、牧口研究に携われる場を作ることです。そのために有効なのは、プロジェクトを立ち上げ、それに向かって共同作業をすることではないかと、まあ夢のようですが、考えております。立場や年齢を越えて、力を合わせていくことで人は育っていくのではないのでしょうか。もう一つは、研究に必要とされる関係資料の集積

とネットワークの形成です。資料を集めるには膨大なエネルギーと時間がかかります。しかし、資料が集まってくると、そこで新たな発想が生まれ、新たな発見があるものなのです。

第三に、戸田研究から牧口を見ることの重要性であります。私は『評伝 牧口常三郎』と『評伝 戸田城聖』上下巻の3冊に携わらせていただきました。これは古川敦さんとの二人三脚の10年でもあったわけですが、その中で強く感じたことは、牧口のことを誰より知っているのは、身近にいて日々語り合っていた戸田であるということです。牧口の教育学を知ろうとしたら、戸田がそれをどのように実践したかを知ることは欠かせないと思われまふ。その手立てとしては、戦前であれば、戸田の時習学館における教育、また彼が著した学習参考書や編集した学習雑誌、また戦後であれば、戸田が「戸田大学」「校舎なき総合大学」と表現したものをしっかり研究することであると思ひます。言い過ぎと言われるかもしれませんが、戸田の視点からのアプローチがなければ、牧口理解も一歩不十分なものになるのではないかと思っております。しかし、その戸田研究、特に教育の視点からの研究の現状はどうでしょうか。故・高崎隆治先生が先鞭をつけてくださいましたが、今はまず土台を少しずつ整え、その中で担うべき人を育てていくことが大事だと考えております。そのためにはまず、牧口研究と同様に基本となる著作が共有できる環境を作ることが大事だと思ひます。その第一歩は、戸田全集に入っていない彼の教育著作『中等学校入学試験の話と愛児の優等化』、『推理式指導算術』の初版、『推理式指導読方』4冊などの復刻かなと思ひます。

最後になりますが、牧口・戸田評伝を執筆することで、創価教育を形成してきた牧口・戸田・池田の3人の足跡とその関係を考え続けることができました。そこで感じたのは、この3人に継承されてきたものは何かを考えることが、今後の牧口研究に新たな視野を開いていくのではないかとということです。それは池田研究においても言え、牧口・戸田研究の深化は、池田研究に新たな視野を開くのではないかと考えております。ちょっと早口で申し訳ありません。以上です。

伊藤 塩原さん、ありがとうございました。それでは次にゲバートさん、お願いします。

ゲバート はい。今執筆中の来月いっぱい締め切りの原稿があって、『Religions』というジャーナルに出すことになっていますが、それが日本における「宗教」という概念の受容をテーマに特集を組んでいます。その中で私は牧口の宗教概念というものについて考察することになっています。20年前くらいから、「宗教」という概念が果たして価値のある、あるいは意味のある概念なのかと、社会学や文化人類学、また宗教学の中からも——Talal Asadや磯前順一さんが代表的ですが——非常に厳しい問いかけがなされています。普遍的また超歴史的な現象としての「宗教」というものが本当に存在しているのか、それは意味のある概念なのか非常に厳しく問われていて、むしろ社会学とか文化人類学とかの中でその現象を取り扱うことがより有効ではないか、というふう考えられるようになってきています。

特に日本における宗教概念は、明治に“religion”の翻訳語として「宗教」という言葉が作られた際に、国家の意思というものが関わっていて、その中核がやはり、神道非宗教説でした。要するに、宗教と世俗というワンセットが、世俗は公的であり、宗教は私的であり、そして世俗は外面的であり、宗教は内面的であるとして捉えられたのですが、これで「信」ずるという行為から発するエネルギーを、内面に封じ込むことができ、統治側にとって都合が良かったのです。それは宗教概念が日本に輸入された際に、どうしてもキリスト教、特にプロテスタントが原型となって普及されたということがありますが、しかし欧米のように、内面の発露が「良心」を通して「世俗」（政治権力）に働きかけるという回路が未開発のまま定着しました。これは日本の宗教史または宗教概念史を特徴づける一つの現実と言えると思います。

その中で牧口はどうだったかということですが、宗教に関する正式なあるいは公式な政府の見解が、例えば井上哲次郎の『教育と宗教の衝突』のような形で整理され、それが国家の宗教政策あるいは国民精神政策として実践されていくの対比すると、こうした政府の宗教概念に対して牧口が様々な意味ではみ出ていることが分かります。特に牧口が神道非宗教説を認めていないということが、公式な宗教観あるいは宗教概念とは親和性のない立場をとり続けた背景にあります。そのことが戦後の創価学会を考えるにあたって重要な示唆を与える観点でもあると思います。これに関連して牧口の見落とされがちで、あるいは見落とされてきているキーワードとして「生活」があります。牧口は、訊問調書の中でも釈尊を生活の勝者、生活において勝った人であると述べています。仏を生活者として捉えるというのが非常に特異な立場を表しているものでもあると思いますし、またたどってみると『人生地理学』まで遡っても、生活という「場」が非常に大事にされています。宗教概念に対する捉え方をはじめとする牧口の思想が、生活というものに集約されていることを中心に考えると、新たな視点が生まれるのではないかなと思います。

塩原さんの非常に俯瞰的な、また全体性のある話に対して、私が特異性一本でやっていることをお詫びして話を終わらせていただきたいと思います。

伊藤 ありがとうございます。次に牛田さん、よろしくお願いします。

牛田 私からは、ヘルバルト主義者としての牧口常三郎という観点で話をさせていただきます。斎藤正二先生（例えば、『牧口常三郎の思想』第三文明社、2010年）や今ここで司会をされている伊藤貴雄先生の研究（特に「J. F. ヘルバルトの類化論と初期牧口思想の形成」『東洋哲学研究所紀要（第16号）』東洋哲学研究所、2000年、150-167頁）が明らかにしているように、とりわけ自らの思想の幹を太くする時期に、彼はヘルバルト主義者からの強い影響下にありました。日本にも、優れたと形容してよいと思われる、ヘルバルト主義者に関する研究業績が多数残されています（例えば、稲垣忠彦『増補版 明治教授理論史研究』評論社、

1995年；庄司他人男『ヘルバルト主義教授理論の展開』風間書房、1985年；竹中暉雄『ヘルバルト主義教育学』勁草書房、1987年など)。これらを踏まえた上で、牧口が直接に対峙したと考えられるヘルバルト主義者、あるいは牧口が直接には触れてはいないかもしれないけれども、しかし当時の教育界を影響下に置いたヘルバルト主義者の研究を進めることが大事なのではないかと考えています。その理由には、日本に紹介された数々のヘルバルト主義者がどう翻訳され紹介されたのか、そして実際のところドイツ語などの原典を参照すれば、それぞれのヘルバルト主義者が何を言っていたのかを整理できて初めて、牧口を含めたヘルバルト主義者間の異同を捉えることができ、そこから、他のヘルバルト主義者とは異なる牧口の特異性が浮かび上がるかもしれないからです。これが一つ目です。

これとの関連で探究すべきは、ヘルバルト主義者がヘルバルト本人の影響下にあったわけですから、当のヘルバルトがどのような時代認識からどのような教育を、どのように構想していたのかを究明しなければなりません。このヘルバルト本人の研究も、ドイツや日本を含めれば、すでに膨大な量があります（例えば、高久清吉『ヘルバルトとその時代』玉川大学出版部、1987年；鈴木晶子『判断力養成論研究序説』風間書房、1990年；杉山精一『初期ヘルバルトの思想形成に関する研究』風間書房、2001年)。これらを踏まえた更なる研究の進展が期待されるところです。これが二つ目です。

これら二つについて少しだけ具体例を挙げておきます。ヘルバルト主義者の多くは、学校において教師が教授し、そして子どもが学習することになる、多方に広がる内容が、子どもにどうしたらまとまりをもって、別の言葉にすれば、単一的に統合されるのかに関心を寄せました。この点はヘルバルト自身が、教育における多方向性と単一性の関係を問題にしていました。この解決の仕方を、ヘルバルト主義者は当時プロイセン・ドイツにおいて整備されつつあった学校教育におけるカリキュラム構成に見い出そうとしました。この鍵概念が「中心統合」です。そしてこの鍵概念をめぐるカリキュラム構成のコミュニケーションに、牧口も参加することになります。この参加と熟考の結果が、彼の第2著作である『教授の統合中心としての郷土科研究』（1912年；『牧口常三郎全集（第3巻）』第三文明社、1981年）にまとめられています。詳細は割愛しますが、使用される鍵概念は、その言葉それ自体に限定すると、確かに他のヘルバルト主義者と牧口の間では殆ど同じなのですが、しかし中心統合法の意図や中身は全く異なります。この差異を見究めるには、牧口の中心統合法ばかりでなく、ヘルバルト主義者たちのそれも精緻に捉える必要があるわけです。私が勉強している限りで言えば、牧口は、他のヘルバルト主義者から見れば、極めて特異なやり方で中心統合を構想していました。

以上はヘルバルト主義者、そしてヘルバルトそれ自体の突っ込んだ研究を、これまでの先達の業績を踏まえた上で、更に進めて行くことが大切だということの一つの事例です。

伊藤 ありがとうございます。続いて岩木さん、お願いします。

岩木 よろしくお願ひします。牧口常三郎研究との関わりを簡単に述べさせていただきたいと思ひます。

牧口常三郎に対して学術研究的にアプローチし始めるようになったのは、斎藤正二先生の「二育 (paradigm) と三育 (Ideologie) との間－牧口教育理論の基本思考を検証する作業の試み－」(『教育学部論集』第 29・31・32・33・34 号に第 1 回～第 5 回まで掲載。29 号は創価大学教育学会発行、以降は創価大学教育学部発行。1990～1993 年) という論文を読んだことがきっかけでした。それまでも『体系』の熱心な読者でありファンだったのですが、その論文を読んだことで私も研究できるかなあと思うようになりました。斎藤先生の論文スタイルのおかげでしょうか、丁寧に研究指導してもらったような読後感が残ったのです。そこから斎藤先生に惚れこんでしまひまして、ご迷惑も顧みず弟子入り志願めいた手紙を送ったりして困惑させていたところを、伊藤さんに取り持ていただいたという経緯があります。

そういうところから牧口研究と繋がっていつて、様々な縁もあり研究所とも関わらせてもらうようになって、「『人生地理学』補注補遺」(『創価教育』第 5 号、創価教育研究所、2012 年、に第 1 回を掲載。以降、順次掲載) の編集も担当させていただくようになりました。また編集委員として『評伝牧口』と『評伝戸田』にも関わらせていただきました。ちょうど『評伝戸田』の連載中に、結局、戸田城聖が出した補訂版の価値論ってどういう位置づけなのだろうという大きな問題が出てきまして、これを調べてほしいという依頼があり、そこで書いたのが「価値論形成史の試み－牧口常三郎と戸田城聖－」(『創大教育研究』26 号、創価大学教育学会、2016 年) という論文です。ここでは牧口の初版の価値論(『体系』第二巻収録) のテキストと戸田城聖が戦後に出した補訂版『価値論』のテキスト全文を比較分析し、かなり戸田城聖の手が入っていて、生命論という戸田城聖の立場から再構成されていたことがよく分かりました。

牧口常三郎に対する疑問としてよく言われるのが、なぜ宗教運動をしたのかというものなのですが、「創価教育学体系の教育学的論理からみた宗教の必要性」(『創価教育』13 号、創価教育研究所、2020 年) という論文の中で、この問題に対する私なりの解答を試みました。単に個人的な理由に由来するというよりは、牧口の探究する教育学の要請として宗教が求められたのではないかと仮説を立てて論証しています。「創価教育」というタイトルが付けられた著作を年代順に並べて、価値基準の変化、善悪観の変遷等を捉えて分析しています。

私自身の教育活動としては、2017 年から牧口常三郎のパートを大学共通科目の創価教育論講義で担当させていただいています。これが私の『創価教育学体系』に対する認識を改める上で非常に役立っています。学生の方から色々とするどい突っ込みをもらいながら、バージョンアップに勉めています。牧口常三郎研究として、今後は、長野県の教員と牧口の関わりや、牧口の教育勅語解釈などの研究にも取り組めたらなあと思っています。

牧口の教育勅語解釈は私の専門的にも大変興味のあるところで、伊藤さんが既に書かれているものもありますけども(伊藤貴雄「牧口常三郎の戦時下抵抗－天皇凡夫論と教育勅語批

判を中心にー』『創価教育』第2号、創価教育研究所、2009年を参照)、改めて教育勅語を牧口がどのように解釈したのか解明できれば面白いですね。牧口は、忠孝一本というものを、政府見解とは真逆に捉えていて(「孝」に「忠」が含まれる)、これがどういう発想で出てきたのか。先ほど牛田さんも言われたようにヘルバルト教育学とかも関わってくるのではないかなあと考えていて、明治中期以降、小学校で、修身教授をやるためには、教育勅語を教材としても扱わないといけないのですが、ヘルバルト学派が流行った明治20～40年代は特に、教育勅語の教育学的な読み取りが結構盛んに行われていたみたいなのです。「孝」と「忠」どっちの順番で教えるかとか、教育学的に徳目をどういう順番で教えるかとか、教育勅語はそもそも子ども向きじゃない、「興味」を持たせられないとか、そういう議論が実は結構ありまして、そういうところがベースになっているのではないかと考えています。興味説との関わりとか、教育勅語は興味説から見たら子どもにとってどうだとか、そういう観点から見ていけたら面白いかなと。

あとは、牧口常三郎の人物・思想研究が近代日本教育史の中でもっと盛んになればと期待しています。伊藤さんがすでに研究所の紀要で紹介されていますが(伊藤貴雄「佐藤秀夫の牧口常三郎研究」『創価教育研究』第2号、創価教育研究センター、2003年を参照)、著名な日本教育史研究者の佐藤秀夫先生が牧口常三郎について結構な分量の論考を書いていらっしゃるの、本の形になれば、後続研究者の助けになりますし、興味をもたれる研究者の方も多いのではないでしょうか。以上、私と牧口常三郎研究との関わりという形で話させていただきます。

伊藤 ありがとうございます。では私からも簡単にお話しします。

私が最近調べているのは、牧口常三郎と新カント派との関連です。従来、牧口の代表的な思想は「利・善・美」を中心とする価値論にあるとされてきましたが、そこでの根本概念である「価値」は、主として新カント派の価値哲学、とりわけ日本でそれを受容した左右田喜一郎の著作群によって触発され、構築されたものです。このことは牧口自身が『創価教育学体系』第二巻「価値論」の序で認めています。しかし、牧口がなぜそこまで「価値」という概念に入れ込んだのかを明らかにするのは、相当困難なことです。一人の人物の思想形成のプロセスを理解する際、その人物が生きた時代のコンテクストも同時に押さえなければ十分な理解になり得ません。ところが近代日本において新カント派価値哲学を受容した哲学者は左右田以外にも大勢いました。代表的な人物を挙げると、桑木巖翼、朝永三十郎、西田幾多郎、波多野精一、田邊元、土田杏村、恒藤恭、蠟山政道などです。狭義の哲学だけではなく、広く文化評論、経済学、法律学、政治学など社会学の各分野にわたっています。したがって、そもそも近代日本の思想界にとって新カント派価値哲学とは何であったかという重大問題を検討しなければならないわけです。これは単に牧口研究だけに関わるのではなく近代日本思想史研究にとっても考究すべき重大課題です。そのため、現在、「近代日本における新カ

ント派受容の歴史と意義～社会科学との交渉を中心に～」という共同研究を科研費で取得して進めています。また、『東洋学術研究』第 60 巻第 1 号から、「近代日本における価値哲学者の群像」という共同連載を開始しています。

この連載の 2 回目に私は「牧口常三郎の価値哲学とそのコンテクスト」という論文を寄せました。そこではこんなことを書きました。プロの哲学研究・思想史研究の分野で牧口価値論を扱った先行研究としては、まず山内得立と梅原猛のものがありません。彼らは論理的整合性という点で牧口に難点を見出しましたが、その際彼らが依拠していたのは《初版》ではなく、戸田城聖による《補訂版》の価値論でした。この補訂版は牧口晩年の諸論文からも抜粋して作られているので、牧口著作群をトータルに踏まえないで読むとどうしても論理性の点で躓いてしまうだろうと思います。この点、『牧口常三郎全集』全 10 巻（第三文明社）を編集した斎藤正二先生や宮田幸一先生は、牧口思想の形成過程を時系列的に捉えることによって、こうした躓きを防ぐ実証的な研究を発表してきたと言えます。興味深いことに、斎藤先生は牧口が新カント派の「真理と価値の二元論」に忠実だったと解釈し、宮田先生は牧口がこうした二元論の克服を図ったと解釈しています。同じく全集を編集した研究者の間でも見解の一致を見ていないのです。このように、牧口価値論と新カント派価値哲学との関係は専門家の間でも未決の問題なのです。というよりも、そもそもドイツの新カント派自体についても、本格的な研究はドイツでも日本でも非常に少ないのです。最近になってようやくバイザーやルフトといった英語圏のヨーロッパ哲学史家たちが取り上げ始めたという状況です。新カント派と一言でいっても膨大な数の哲学者たちがいますし、そのなかでとくに価値哲学を展開したヴィンデルバントやリッケルトは生涯に何度も自著の《改訂版》を出しています。日本ではそれらの著作の初版だけが訳されたり、改訂版だけが訳されたり、あるいはその両方が訳されたりと受容のされ方も一様ではありません。牧口が触れていたのが誰のどの著作のどの版だったのか、あるいはそれらを研究したり翻訳したりした日本の学者の解説書だったのか、一つ一つを跡付けるのは非常に困難なことです。しかし、《急がば回れ》というように、そうした地道な探索をしていくことが、思想研究として息の長い仕事をするには大切なことではないかと考えています。

今日の皆さん方のお話に引き付けて言うと、牧口が新カント派価値哲学に接近したきっかけも、先ほどゲバートさんが言われた「生活」という概念にあったと思われれます。ドイツで新カント派のリッケルトに師事した左右田喜一郎は、銀行家でもあり、経済的価値を重視しました。この経済的価値について説明するときに左右田が使ったキーワードが「生活」という言葉です。ドイツ語では「生命」という言葉と「生活」という言葉は同じ *Leben* という単語です。これを「生命」と訳さずに「生活」と訳すのは、経済学や政治学など社会科学と交渉の深かった学者たちで、左右田も「生活」という概念で新カント派価値哲学を再構成しました。一方、牧口が初期の著作『人生地理学』でキーワードにしたのもまさに「生活」でした。この著作でいう「人生」とは「人間の生活」のことを指します。したがって、『人生

地理学』をベースに自分の教育学を作ろうとした牧口にとって、左右田が「生活」というキーワードを使って新カント派価値哲学を説明していたことが、ある種の媒介を果したと言えます。また、牧口の新カント派理解にはもう一つ別のルートがあって、それが先ほど牛田さんが言われたヘルバルト学派です。端的に言えば、牧口はヘルバルト学派の教育学をベースに新カント派を解釈していました（この件については斎藤正二著『牧口常三郎の思想』が詳細に論証しています）。ちなみに、このことは岩木さんが紹介されていた牧口の「教育勅語」解釈とも関わります。牧口は当時日本政府が推奨していた「忠一元論」ではなくて、いわば「孝一元論」ともいべき立場をとりましたが（拙稿「牧口常三郎の戦時下抵抗」第1回および第2回を参照していただければ幸いです）、牧口のこうした姿勢も彼のヘルバルト学派受容を踏まえることで十分に理解できます。他にもいろいろお話ししたいことはありますが、時間の関係上ここまでにしておきます。

（ディスカッション）

伊藤 ではここからはオープン・ディスカッションにしたいと思います。何かご質問・ご意見等ありましたら、どなたからでも出してください結構です。

岩木 塩原さんが次世代育成プロジェクトみたいな、何かしらのプロジェクトが必要で、それを次世代の方々と一緒に取り組むことが必要だという話をされていましたが、私も同感です。とても大事なことで、結局のところ、私も『評伝牧口』とか『評伝戸田』とか、また他のプロジェクトに編集とかで、いろんな形で参加させてもらうことで、すごく研究意欲も湧きましたし、研究を進めるきっかけになりました。そういう経験が多かったので、もし、これから次世代も育成しながら、何か成果を出すようなプロジェクトとして、なにかアイデアがあったらお聞きできればと思います。

塩原 実は、私自身、そういう経験をしたことがあったので提案させていただきました。大学一年の時に、聖教新聞社で編年体の御書全集の編纂の仕事に携わらせていただきました。右も左も分からない学生を混ぜていただいて、どこまでお役にたてたか分かりませんが、ただそこでの経験が、牧口・戸田・池田の評伝的研究に繋がっているかなっていう実感があります。今、一番思うことは、牧口研究・戸田研究・池田研究の裾野をいかに広げるかということです。そのためには、10年、20年先を考えて人を育てていく必要があると思います。そういう意味で、今どういったことができるかと考えて、先ほどいくつかの話をさせていただきました。取り組む人が多くいなければ、新しい展開を進めることはできません。研究所として、ぜひともお考えいただければありがたいなと思っております。

ゲバート ちょっと個人的な話をしますが、牧口研究をしていて、やはり重要ななあ、しかも方法論的に難しいなあというのが、牧口の著作の中に、いろんな「沈黙」があるということです。例えば戸田と牧口を比べると、戸田が戦後書いた「創価学会の歴史と確信」などでは、自分の子供を亡くしたとか奥さんを亡くしたとか非常に胸に迫ってくるような記述があるんですが、私の管見の限りでは、牧口は子供の死について一言も述べていません。またしいて言えば、宗教とか仏教を受容して、そして自分の生活を革命したという言い方をしながらも、その内面探求というか内面の記述がほぼないですね。1935年の『創価教育学体系梗概』概論の方にほんの2、3ページあるくらいで、それ以外にはほとんどありません。そして他の当時の日本の知識人と比べると、彼らの場合、日本人とは何ぞや、日本とは何ぞやというのが非常に関心のあった課題であったのに対し、牧口はそうした話にほとんど興味を示さないのです。そういういろんなところに沈黙があります。政治に関しては、やはり師範学校時代から政治について立場上「語るものではない」という規律が習慣化されたのか、あるいは牧口の文章に対する姿勢として、読者に実行可能なものしか提供しないという方針があったのか、ともかく、あーだこーだと批評したり論じたりすることがほぼないのです。彼が大学出ではなく、公式に認められた知識人でもなかったこと、なんでもかんでも批評するという知識人の癖を持っていなかったこともあると思いますが、このようにいろんなところに彼の沈黙があるので、それをどう読めばいいのかというのが自分の大きな研究課題です。

伊藤 私からは、直接牧口に関係することではないのですが、自分の教育実践について一言報告しておきます。現在、文学部の教育の一環として、「桑都プロジェクト」という八王子のまちおこし活動をやっています。「桑都」とは、かつて絹の生産地として有名だった八王子の別称です。幕末には海外からも訪問者が相次いだほどの産地でした。その一人に有名な考古学者のハインリヒ・シュリーマン（1822～1890）もいました。彼は「トロイ」遺跡の発掘に先立つ6年前、1865年に来日した際、八王子を訪れています。今年度はシュリーマンの生誕200周年を迎えるので、社会福祉学の西川ハンナ先生と相談して、彼の八王子訪問の史実を八王子の地域活性化に活かせないかと学生に呼びかけたところ、40名近い学生が集まってくれてプロジェクトがスタートしました（令和3年度大学コンソーシアム八王子学生企画事業補助金採択事業「シュリーマン生誕200周年～シュリーマンの見た“桑都”八王子の魅力を発掘～」）。

まず、前提として、なぜシュリーマンが八王子に来たのかということを知識として押さえておく必要があります。そこで本学の中央図書館とコラボして、シュリーマンとその時代に関する基礎知識や、関連書籍の検索方法について学生対象にショート・レクチャーを行いました。さて、今度はこの話をどう地域活性化に結びつけるかです。一つは、八王子市民に人気の「都まんじゅう」（つるや製菓）とコラボして、学生がデザインした「シュリーまん」という饅頭を作りました。次に、くまざわ書店八王子店とコラボして、シュリーマンに関連

する書籍数十点を学生が推薦する「学生選書」コーナーを設置しました。また、市のNPOである「Dr. 肥沼の偉業を後世に伝える会」とコラボして、「ドイツと八王子～シュリーマンと肥沼信次～」という展示会を開催しました。肥沼博士は八王子出身の医師として戦後ドイツで医療に従事して亡くなった方です。もちろん、シュリーマンとは時代も分野も異なるのですが、両者は“世界市民”という生き方で共通しているのではないかという考察を行いました。さらに、東京富士美術館とコラボして、「国立ベルリン・エジプト博物館展」の広報サポート活動も行いました。出品元である国立ベルリン博物館群が「シュリーマン・コレクション」を所蔵しているので、来日した同博物館群の学芸員に学生がコレクションの由来をインタビューすることになりました。

これらのプロジェクト学習を進めながら私が同時に意識していたのは、牧口も重視したヘルバルト教育学でいう「多方興味」です。ヘルバルトは人間の興味を、①経験的興味、②思考的興味、③審美的興味、④同情的興味、⑤社交的興味、⑥宗教的興味の6つに分類しましたが、例えば、中央図書館での調査は「思考的興味」、都まんじゅうの製作は「社交的興味」、肥沼博士と絡めた展示会は「同情的興味」、東京富士美術館の広報サポートは「審美的興味」に当たると言えます。学生選書コーナーでは、シュリーマン絡みで古代ギリシャの神話や宗教に関する本も扱いましたから、それは「宗教的興味」も含むものですし、こうして学生が八王子という街と直接に関わることは「経験的興味」に属するものでしょう。牧口はヘルバルトの多方興味論をベースにした「郷土科」を提唱しましたが、いま報告したようなプロジェクト学習は、ある意味で郷土科の現代版とも言えると思います。

勘坂 二つ質問させてください。

一つは、「生命」という概念についてです。これまでの話で、「生活」がキーワードであると指摘されていましたが、「生命」についてはどうでしょうか。牧口は価値論で、「評価主体又は主観たる人間生命の伸長にあてがはれる対象の関係力を利」と述べています。彼は、こうした議論を、カール・メンガーなど、経済学における主観効用価値説を参照しながら展開しているのですが、その内容は一般の経済学の理解とは異なっていると思います。私は経済学を勉強しているので、こうした議論を興味深く読みました。そこで、牧口は、「生命」を他の文脈ではどのように用いているのかお聞きしたいと思います。

もう一つは、牧口が、当時の日本のアカデミズムのいわゆる王道にはいなかったことの意味です。つまり、彼は、大学の教員でもないし、いわゆる研究者としての教育も受けていなかった。このことが、牧口の思想や実践にどのような意味をもったのか。

この二つさせていただければと思います。

伊藤 では、今の二点のうちのどちらでも結構ですので、コメントしたい方がいらっしゃればお願いします。ではゲバートさん、お願いします。

ゲバート これの後者の質問に対してですが、私としては牧口が非常にハイブリッド的な立場にいたということが重要です。師範学校では優れた世界的な知的遺産に触れることもできながら、大学出の知識人とは違い、留学経験もなく、語学の知識も限られていて、翻訳を通じて知識を吸収するほかなかった。多くの一般読者と同じ立場で、また翻訳を通じてしか世界の知識に触れられなかったことになります。牧口のこのハイブリッド的な位置にいるという状況が、むしろ彼の創造性の源泉であったと考えています。公式に認められた知識人になってしまうと、やはり国家を代弁しなければいけないということがありますが、そうした制約からも解放されていたとも言えます。また庶民と交流して、庶民は何を考えているかということを知悉していたところが、大きな創造力の源泉だったろうと考えております。

勘坂 ありがとうございます。

伊藤 他にご意見のある方はおられますか。

塩原 今の二点目の学歴という問題について、頭の中にあることを二つお話させていただきたいと思います。

一つは、牧口が上京して『人生地理学』の出版まで、主にどこに住んだのかということですが、それは、本郷区の駒込追分町というところですが、東大のすぐそばです。上野の帝国図書館は歩いて行ける距離にあり、そこに手頃な貸間があったということも理由であったと思いますが、追分町に住んだのは、何を意味しているのかということを考えています。

もう一つは、牧口が『人生地理学』出版の一年半後に、女性のための通信教育事業を立ち上げますが、しばらくして、かつて交友があった藤山万吉から、牧口の勉学の為に助成をしたいとの申し出を受けます。藤山家というのは、当時の北海道における大変な資産家で、万吉はその跡取りです。その彼が、牧口のために全面的に支援したいと伝えてきたのです。この申し出に対して牧口は、今はやらなければならないことがあると言って、直ちに受けることを辞退しました。もしそこで、牧口が藤山の申し出に応じていれば、留学も可能であったかもしれませんし、大学への進学も、もしかしたら開けたかもしれません。なぜその時牧口が、地理学の研究よりも女性教育を大事と考えたのか。そこは、本当に考えるところです。答えにはなっていませんが、こんなことを考えています。

勘坂 ありがとうございます。

伊藤 以前塩原さんをご発表の際、牧口が上京後に住んだ場所が坪井九馬三宅に近かったと言われていましたが、このことには大きい意味があると思います。牧口が考える「科学」の概念は、坪井からの指導や示唆によって得られた部分が大きかったのではないかと考えられるからで

す。牧口があえてそういう場所に居を定めたことの持つアドヴァンテージを感じます。あと、牧口が「生命」という言葉を使う知的背景には、私を見る限り、一つには明治期に入ってきたダーウィン進化説があると思います。『人生地理学』では当時の生物学、植物学、動物学等、自然科学関連の本を参照していますので、牧口著作群における「生命」という言葉の用法はそこで培われたものだろうと思います。したがって、いわゆる「大正生命主義」とは随分色彩を異にするものであったと言えるでしょう。

岩木 私も一つめの「生活」と「生命」について見解を述べたいと思います。初版の価値論テキストと補訂版のテキストの全文比較をした時に、「生命力」というワードは戦後の創価学会としてはかなり重要なワードとして使われていると思うのですが、初版の価値論の中では「生命力」というワードはほとんどなかったか、そういう意味では使われていませんでした。先ほど伊藤さんが言われたような意味合いで、例えば水を飲めば命が伸びる、だとか、そういうレベルの話だったので、牧口が特別なワードとして「生命」を使っているという印象はなかったです。むしろ「生活」の方が特別なワードとして使っている印象があります。例えば「生活力」という言い方をしたりだとか。

牛田 勘坂先生が質問された二つのうち、後者の質問、つまり「牧口がいわゆる当時の日本のアカデミズムの王道にいなかったことの意味」について、参考までに二つ述べたいと思います。

私の記憶によると、『創価教育学体系（第3巻）』（1932年）、第三文明社が刊行する『牧口常三郎全集』の第6巻ですが、彼がペスタロッチに言及している箇所を参照できます。牧口によるペスタロッチへの評価が、いつも読むたびに感じるのですが、とても興味深いところ。彼は、他の殆どの教育学者と同じく、ペスタロッチをとっても好意的に評価します。ただその評価は、ペスタロッチが戦災孤児やその教育実践に身を捧げたからでもなく、また教育思想や理論を解き明かそうと努力したからでもなく、これら両方があったという認識に由来しています。牧口は、「実にペスタロッチの真の価値は熱心なる経験の基礎の上に、燃ゆるが如き学究的真面目があるによるのである。此の両方面の全備具足こそペスタロッチの真価値で、その中の何れかの面を欠くならば敢てペスタロッチを俟つに及ばぬのである」(『牧口常三郎全集（第6巻）』第三文明社、1983年、86頁)と述べています。「牧口がいわゆる当時の日本のアカデミズムの王道にいなかったことの意味」について、私には直接的な回答は困難なのですが、牧口自身は自らが教育の実践者であるとともに、教育の研究者でもあったことに、強い自負があったものと推察できます。これが、ペスタロッチの評価の仕方に反映されていると思われる。

同じく『創価教育学体系（第4巻）』（1934年）において、当時アカデミズムの王道を歩んでいた篠原助市について牧口が語る場面があります。牧口によると、嘘か本当かは人から聞いた話なので正確な判断はできないとした上で、篠原がその講演を傾聴していた学生に対

して、『創価教育学体系』を「立派な博士論文とするに足る。惜しいことに見識が浅い云々」と批評した、とされています。牧口はこれに応答して、見識が浅いのはその通りだとのみ込んだ上で、「それこそ本書の企図の要旨であつて、思ひ切つて高遠なる概念哲学の思索から解脱し、浅薄にして卑近なる教育技術の日常経験の帰納から教育学の新体系を組織せんとした」と自らの立場をはっきりと打ち出しています（同上、317頁）。私の解釈を交えて平易に言い換えてみましょう。見識が深くても、そうした教育学では教育実践の改善を突き動かすことができない。それゆえ別の道を進んで、教師が日常に発揮している教育技術の効果の観察から新たな教育学を構想しよう。ここには確かに哲学的な高遠さはないかもしれないが、しかし教育実践から出発し、教育実践の改善に役立つはずだ。このようにまとめることができるかもしれませんが。もちろん篠原助市の業績は誰もが認めるところではあります。ただ牧口の関心は、篠原のそれとは異なり、目の前にある実際の問題を解決することにあつて、これが彼の科学的思考を駆動させています。彼の科学的思考の出発点は、教師が生活の中で直面する問題だということがよく分かります。

この文脈に沿って、勘坂先生から寄せられた最初の質問に応答できます。生活あるいは生命に関する質問でした。一方で、彼は生活をすべての出発点であると考えています。ただしここには、子どもの生活が教育において何よりも代えがたい大事なものだとか、子どもの生活こそが教育の唯一の源泉だなど、このような意図があるわけではありません。生活はすべての出発点ではあるけれども、出発点に過ぎないとも言えます。単なる生活には、無意識的かつ無自覚的に、何も考えてなくても習慣のままに過ごす、ということが含意しています。生活の成立ちにはどのような法則が、どのような規範が、どのような仕組みがあるのか、これを人間がどう発見し創造してきたのか。これらは単に生活することからだけでは子どもに見えることはない。だからこそ、生活から出発する、言い換えれば、生活から出発して、ここから離れることが大事だと、牧口は、教育技術の開発についても、また子どもに対する教育的な働きかけの構想についても、考えていたと思われます。つまり教師が日々の教育実践の中で働きかけているだけでは、技術は開発されない、子どもに様々な生活を経験させるだけでは、法則も規範も仕組みも開示されることはないわけです。生活から離れた後には、どうするのかと問われるならば、生活に舞い戻ることだと彼は回答するでしょう。生活から離れて向かう宛先は、科学的思考とその思考の結果です。そしてこれが舞い戻る宛先は生活です。それゆえ生活は一方では出発点でありつつも、他方では帰着点でもあります。生活から出発し、そして生活に帰着する。そしてその間に科学的思考の迂回路が通っている。子どもの生活に根を張りつつ、この迂回路を子どもに歩ませることで、子どもの生活、生き方の変化を期待していたように思います。そしてこの迂回路の設置は、オーソドックスな近代教育学者たちが、微細な違いはあれ、描いてきたものです。

伊藤 学問の生活化、生活の学問化。

牛田 そうですね。おっしゃる通りです。

伊藤 いま牛田さんが学問と生活との関係について言われたことは、真理と価値との関係についても言えるかもしれません。よく牧口は真理と価値とを区別したと言われますし、そう言って間違いではないのですが、牧口が言いたいのは、一方に「真理」の世界があり、他方に「価値」の世界があるというような話ではないということです。ここはすごく気を付けて読まないといけない場所です。では、どう読むべきか。牧口が対比しているのは二つの方法です。没主観的に客観を把握する科学（自然科学）と、主観との関係において客観を把握する科学（応用科学）、この二つです。それぞれの方法に応じて表現されたものが、かたや人が真理と呼ぶものであり、かたや人が価値と呼ぶものであると牧口は言います。真理と価値というのは、二つの世界があるということではなく、一つの世界を二つの仕方捉えるアプローチの違いを言うのです。

この方法論的な対比も新カント派の議論を踏まえています。ヴィンデルバントは、科学的研究方法を自然科学のような「法則定立的」なもの、歴史のような「個性記述的」なものに分けましたが、リッケルトはこれを「一般化的」と「個別化的」という対比に改め、さらにそこに「自然客体」と「文化過程」という研究対象の区別を掛け合わせました。それゆえリッケルトによれば、「一般化的自然科学」と「個別化的文化科学」のほかに、「一般化的文化科学」（例えば社会学）や「個別化的自然科学」（例えば歴史的生物学）のような《中間形式》も認められることになります。この中間形式という考えからウェーバーの社会学も出てきます。牧口の言う「科学的教育学」も、自然科学の精度には達さなくとも、自然科学的な方法を用いながら、教育という人間の生活現象に関して一定の普遍性を獲得することを目指した《中間形式》的な科学という発想であったと思います。不思議なことに、牛田さんが言及された篠原助市などのアカデミズムの新カント派学者にはそういう視点が抜け落ちていました。「科学としての教育学はいかにして可能か」という新カント派的な問いを突きつめるならば、本来この中間形式という発想が有力な選択肢に上ってくるはずだと思います。ところが、中間形式としての教育学の可能性を論じたのは、私の知る限り、牧口くらいです。他に居たとしても非常に少なかつたらうと思われまふ。これは日本の教育思想史における牧口の業績だと思います。

牛田 牧口が応用科学と言う場合には、これを今の伊藤先生が述べたような「中間形式」と言い換えることができるのですね。

伊藤 ついでにもう一つ付言しておきます。先ほど、真理と価値は、研究方法の違いを考察した結果見出されたカテゴリーであるという話をしましたが、一旦このカテゴリーを見出したあと牧口は、今度はこのカテゴリーを探究するに相応しい研究方法は何かというふうに、改め

て研究方法の再構成をします。ここで出てくるのが、「自然科学」対「価値科学」という新しい分類です。この価値科学という考えが興味深いもので、牧口はこれを伝統芸能のような、ある種の型を習得するプロセスになぞらえています。クーンのパラダイム論に近いとも言えますが、学問であれ、芸術であれ、はたまた宗教であれ、先人の作った一つの型のようなものがあって、その型を習得する中で得られる研究方法というのがあると言うのです。こういう風に、牧口は研究方法の違いから真理と価値という二元論を導き出すけれども、今度はその二元論に立ってもう一回研究方法の違いを捉え直すのです。こうした往還作業は、生活の学問化、学問の生活化という牧口の往還作業とも対応していると思います。このように牧口の場合、同じ真理と価値という対比であっても、著作年代によってそれぞれ意味内容が異なっていることにも注意しなければならないと思います。

ゲバート 『創価教育学体系』第一巻の、一番最初のところで、教育学とは科学なのか、そしてもし科学であるとすれば、どのような科学なのかという問いかけがなされて、そこからいろんな言葉が出てくるんですね。規範科学とか精神科学とか、牛田先生がおっしゃっていた応用科学というのが、これ今英訳しながら非常に悩んでいるところなんです。通常、応用科学というのは applied science という言葉になるんですが、牧口の文章を読み込んでいくと、違って見えてくることがあります。要するに、普通、応用科学というのは、純正科学が発見した原理とか法則を、一つの問題に対して応用していくというだけで、それが例えば教育だったら心理学で発見した原理をそこに応用することになります。ところが牧口のいう応用科学というのは、そういうことではないんですね。自然科学と応用科学との大きな違いは、自然科学は基本的に人間の意志が関わらない自然現象の中に、応用科学は人間の意志が関わっている人間的な様々な営みの中に、法則性を求めるところにある。応用科学は、そうした法則性を明確化して、応用の仕方、効率とか効果を高めるための科学だという。だから applied science ではなくて、science of application ではないのかと思います。こういうふうには、ちょっと大胆に英訳しようか、あるいは今述べたような解釈を注に入れようかと思っています。

伊藤 私の理解では、第一巻の最初に出てくる「応用科学」は applied science に近いんです。ところが第一巻の終わりぐらいになってくると、従来の「応用科学」の概念を変えないといけないという話になってくる。牧口が刷新した概念で言うところの「応用科学」は、今ゲバートさんが言われた science of application という訳が合っているように思います。難しいことですが、文脈に応じて訳し分けを行う必要があるでしょうね。

ゲバート そうそう。応用科学の再定義というところは、今伊藤先生がおっしゃっていたのと同じ実感です。牧口はこれを大変なことだと考えて、やはり科学の部類の地図をもう一度書き直しているんですね。ここは implication がものすごく広いんですね。

伊藤 当時の一般的な科学論とも対照させながら読むと、牧口の思索が持っていた射程の広さに気づかされます。牧口が参照した文献は、『創価教育学体系』で言及しているウォードやデュルケム以外にも多岐にわたっています。斎藤正二先生が『牧口常三郎の思想』で指摘していますが、『人生地理学』執筆の時点で受容していたヘルバルトやキルヒネルの教育学からの影響も無視できません。あと、坪井九馬三との関わりも非常に重要です。『人生地理学』の末尾で牧口は「地理学は科学なりや」という問いを立て、もし地理学が科学であるとするれば、どのような条件をクリアした時にそう言えるのかを考察しています。これは坪井が歴史学に関して行っていた考察方法を参照していたと思われる。また坪井は当時の日本を代表する論理学者でもあって、帰納法や演繹法に関する入門書も書いています。これらの学問的な基礎があって、牧口は独自の仕方でも新カント派との接続を果たすわけですね。先ほど述べたように、リッケルトの言う中間形式のところに教育学こそが位置すべきであるという仕方です。この問題意識に立って、牧口は最終的にデュルケムの教育論に賛意を表するのですが、デュルケムはフランスでカント主義者のルヌヴィエに師事した哲学者でもあって、広義の新カント派に含めてよい社会学者です。もちろん、牧口がデュルケムと新カント派との関係について熟知していたというふうな断定はできません。しかし、もっぱら翻訳書や訳者・田辺寿利からの教示を頼りにしながら、科学としての教育学の条件を鋭く問うて考察していく牧口の思考は、大筋においてヨーロッパ思想界の現状からそれほど外れたものではなかったし、ある意味でアカデミズムの新カント派系教育学者たちよりもはるかに正道を歩んでいたと言える点に、今日から見て驚きすら覚えます。

牛田 教育的な働きかけの中に法則性を見出す。それを帰納的に教育技術として確証していく。こういう牧口の着想について私自身は、非常に困難なことを彼は構想しているのかもしれない、といった印象を持ち続けていました。しかし、先ほどの伊藤先生の「型」に関する言及や「中間形式」についての解説を耳にして、牧口はこのあたりに切り込もうとしていたのかもしれないと考えると、ここに困難なことを紐解く糸口がありそうな予感がしてきました。牧口は、別に無理なことを試みようとしていたわけではなくて、教育学の科学としての位置づけを、科学論という全体の中から探ろうとしていたわけですね。

ゲバート 牧口に「科学と宗教の関係を論ず」という論文がありますよね。さきほど伊藤先生のおっしゃっていた「型」、つまり一つの芸を極めれば、通常の科学が説明できないような領域に達するという考え。これにはいくつかルーツが考えられますけど、先輩とか、先覚が見つけたものを、まず実行していくという、ここにはある程度仏教的な考え方がすでに入っているのかなと思います。あるいは伝統的な芸だけに限られる話ではなく、例えば当時のタイプストが、こんなに早く打てるのかとか、速記者が、こんなに早く書きとれるのか、といった風に、自分の生活の中で、驚異的な熟練者を見ながら、実践していく。こうした人々の生

活風景も念頭にあったのかもしれないと思います。やはり生活が重要で、生活の中で一つの技術を極めれば、ある意味で宗教的体験との境目がなくなるというぐらい、人間が人間を越えるというようなことも捉えていますね。この論文で反論の対象となっている理論物理学者の石原純は、一神教的なキリスト教の影響もあって、聖と俗を分ける境界線を強調し、科学が説明できるところは科学に、それを超えるところは神様をお願いするしかないというような、非常にデイス（理神論）的な考え方を論じていた。これに対する牧口の批判の仕方が非常に独特で、人間の底力というか、人間の可能性ともいえるところに注目し、論を展開しているのが重要な点であろうと思います。

伊藤 仰る通りだと思います。牛田さんの話との接続でいくと、おそらく牧口のもう一つのキーワードは「技術」ですね。牧口は「アート」という言葉を使っていますが、フランス語のラールであり、ドイツ語のクンストですね。教育とはある種の技術であり、教師とはすなわち「技師」である。牧口の技術観は、塩原さんが推進されているような評伝的研究も参照しないとできませんが、高等女学会の通信教育で女性に身につけさせようとしていた教養とか、そういうものも全部含めて、理解していく必要がありますね。

ゲバート 今、ちょっとふと思ったんですけど「技術」から「法」に対する通路があるのかなと思うんですけど。で、もう一つは、ギリシャのエピステーメとテクネのようなものもあるのかなと思いますけど。

伊藤 牧口自身、ソクラテスを引いて「知行合致」と述べています。エピステーメもテクネもフロネーシスも切り離せないわけです。切り離せないものの領域の中で、教育ということが行われている。それゆえ牧口は、最初は、教育学が純正科学の成果を応用する「応用科学」と思っていたけれど、後に、この応用科学は一種の型を踏まえて試行錯誤を繰り返しているうちにエピステーメも作り出すのだという見解に至るのです。これが「価値科学」という考え方で、この考えに牧口は誇りを持っていました。自然科学とは違うが、けっして自然科学に従属した科学ではなくて、まさに並立し、お互いに補い合えるような関係の価値科学があるという主張です。この主張が一つのチャンネルとなって、牧口の最晩年の「実験証明座談会」をはじめとする一連の社会活動への接続を可能にしたと思われます。

ゲバート しかもそれが、「大善生活」です。やっぱり生活に戻りますよね。

伊藤 そうですね。生活の学問化、学問の生活化。

ゲバート いろんなものがクリアになりました。ありがとうございます。

牛田 最近ですが、『人生地理学』（1903年；『牧口常三郎全集（第1巻）』1983年）の緒論を読み直す機会がありました。そこで「賢愚の分岐点」について牧口は語っています。今までの話を聞いていると、彼はこれらの分岐点を「賢」の方向に自ら進もうとしていたんだということに改めて気づかされます（同上、24-25頁）。

彼によると、愚の人は現象を見ても、皮相と真相、要点と枝葉を弁別できない、と言います。区別できないので、現象すべてに注目してしまい、これらの情報を処理できないままに終わってしまう、といった趣旨のことが書かれてあります。この真相と要点を自らの眼で探り当てようとする姿勢は、後年に着想した教育技術の開発の仕方についても、彼の中に貫かれていますと思われる。教育的な働きかけを観察し、そこにある真相や要点を、そうした働きかけの多様の中から見出し出していく。そしてその先に彼は、見出し出された真相や要点を、先ほど伊藤先生が述べていた「型」のような概念につなげようとしていたのかもしれませんが。彼は、自分の眼で教育的な働きかけを観察し、自分の頭でそこにある要点を抽出し、そして自らこれを実験的に試みようとしていました。耳が痛いというか、自分が恥ずかしくなってしまうところは、牧口が愚の人の特徴の続きを綴っているところにあります。彼によれば、愚の人は、自分の眼で、頭で、そして行為でどうにもならないから、自ら現象に直接に対峙することを諦めて、その代わりに本を読むと言っています。たくさん、本当にたくさん読むのだけれど、読んだ前と、読んだ後でその人は何も変わらない、と落ちまでつけて書いてくれています。私はそれほどの読書量はありませんが、身につまされます。そして斎藤正二先生が通教『学光』にお書きになった引越しのエッセイのことを思い出します（斎藤正二『『本の虫』と『引越し』との寓話——刻々と走り過ぎる科学的過程にこそ眼を凝らすべきである』『学光』創価大学通信教育部、1988年11月号）。

伊藤 まだまだ議論したいことが残っていますが、時間となりましたので、ここで一旦終了したいと思います。登壇者の塩原さん、ゲバートさん、牛田さん、岩木さん、また勘坂所長をはじめ参加者の皆さん、ありがとうございました。今後もこのような議論の機会を設けることができると思っています。今日は誠にありがとうございました。

(2021年10月29日、オンラインにて開催)

中国における「池田思想」研究の動向（18）

高橋 強・堀口 真吾

1. 池田思想研究の学術シンポジウム等

(1) 第11回「池田大作思想国際学術シンポジウム」

2021年10月23日、24日に創価大学の創立50周年記念事業の一環として、「人類の共生と世界市民教育」のテーマのもと、同大学キャンパスを中心に各国・地域をオンラインで繋いで上記シンポジウムが開催された。これには計10カ国・地域の52大学・機関から80本の研究論文が提出され、23日の開幕式には、同大学の教職員・学生、研究者ら約350名が参加した。23日午後から24日午前にかけて、7つの中国語分科会と4つの英語分科会がオンラインで開催された。

冒頭、創価大学創立者の池田大作博士からのメッセージが、その後、中国・清華大学高等研究院の顧秉林院長（元学長）とインド・ガンジー研究協会のニーラカント・ラダクリシュナン理事長のビデオメッセージが紹介された。基調講演として、同大学馬場善久学長、中華日本学会の高洪会長、アメリカ・デポール大学池田大作教育研究所のジェイソン・グーラー所長の3名が「世界市民」を育む人間教育の哲学などについて講演した。

ここでは、3名の基調講演の要旨を紹介する。

中華日本学会 高洪会長

池田氏は人間の幸福、平和の方向へ知識を生かしていく本源的な力が、教育であるべきと主張している。氏は1990年代の講演で、生命の相関性を認識する「智慧の人」、差異を尊重し、成長の糧とする「勇気の人」、人々と同苦し、連帯する「慈悲の人」を育むという、示唆に富む世界市民教育の思想を提起した。このような一国の利害や民族的背景を超越した考え方は、国連の「持続可能な開発のための2030アジェンダ」の理念とも合致するもので、この点からも氏の卓越した先見性を知ることができる。

池田氏のスケールの大きい思想体系の中で、「人類共生」の理念は、重要な部分を占めている。1992年10月、中国社会科学院での講演の中で、東アジアに流れる「共生のエートス（道徳的気

Tsuyoshi Takahashi（創価大学文学部教授）

Shingo Horiguchi（池田大作記念創価教育研究所）

風)」、すなわち「対立」よりも「調和」、「分裂」よりも「結合」、「我」よりも「我々」を基調に、人間同士や人間と自然が、共に支え合って繁栄していく思想に触れ、生命尊厳の価値観や慈悲と平等の理念を強調するとともに、調和と共生の思想的源流を指摘した。本年初頭、習近平国家主席は「人類運命共同体」の構築へ、一貫して対話を堅持する重要性に言及した。氏の考え方も通底する。

これまで文明の繁栄は、常に思想によって牽引され、特に教育は何物にも代え難い重要な役割を担ってきた。私たちは今後、文明同士の交流によって東洋の知恵を生かしながら、新たな教育思想をもって時代を進歩させなければならない。それが「人類の永遠の勝利」に通じる道だと確信する。

アメリカ・デポール大学池田大作教育研究所 ジェイソン・グーラー所長

池田氏は、人々が差異を超越した人間性に目覚めるための資質として、「世界市民」のアイデンティティーを主張した。これは、牧口常三郎氏、戸田城聖氏の哲学であるとともに、池田氏が1960年の初渡米の折、シカゴで不公平な人種差別を目撃した体験に基づくもので、人間の心に巣くう偏見を取り除くために、世界的連帯の必要性を呼び覚ました。氏は1996年に行われたアメリカ・コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジでの講演で、「世界市民教育」を提唱した。氏は「智慧」「勇気」「慈悲」の重要性を説いたことから分かるように、人々を分断する障壁を乗り越えるために、根本的な人間性の向上に重きを置いた。この人間性の探究については、あらゆる差異を成長の糧にすることを促すものと主張している。氏にとって「世界市民」とは、相手がどのような人であっても、自分が関わり続けることで、他者の生命の尊極なる「善性」を引き出そうとする挑戦の中に存在する。加えて、人間の潜在能力の発揮は他者との差異を恐れる心によって妨げられるからこそ、「世界市民」の要件として「勇気」を重視する氏の理念は、過去に類例のない素晴らしいものだと申し上げたい。

国連のSDGs（持続可能な開発目標）達成への挑戦が幕を開けた2010年代、池田氏は「智慧」「勇気」「慈悲」の原理のもと、気候変動問題に挑むための資質とともに、世界市民教育の重要性を改めて訴えた。そこには“相手を思いやる想像力”や“足元の地域での実践”など、価値創造の知恵に根差した行動の精神が脈打っている。

創価大学 馬場善久学長

本学の世界市民教育において重要な意味をもつのが、1996年に創立者池田大作先生がアメリカ・コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジで行った「世界市民」に関する講演である。1970年代から創立者は「世界市民」の資質として「平和に貢献すること」を特に強調しており、さまざまな問題を解決するには、国連の機能強化が必要であると訴えている。1987年の「SGIの日」記念提言では、1991年から10年間を「国連世界市民教育の10年」として取り組むことを提案され、1988年には「世界市民憲章」の制定を訴えた。約20年にわたる創立者の考察が同講演に結実し

たとえられる。この講演は創価大学の未来の方向性を考える上でも重要である。

1996年の講演の中で創立者は、価値創造力を「いかなる環境にあっても、そこに意味を見だし、自分自身を強め、そして、他者の幸福へ貢献しゆく力」と定義している。そして、「地球規模で価値創造できる人間」の要件として、生命の相関性を深く認識しゆく「智慧の人」、人種や民族、文化の差異を尊重する「勇気の人」、苦しんでいる人々にも同苦し、連帯しゆく「慈悲の人」との定義を挙げている。

以下は提出された論文である。(参加者用ホームページの掲載順、敬称略)

「人類の共生」セッション

- 蔡瑞燕「池田大作人類共生思想の基本的な内包」(仲愷農業工程学院)
冉毅「評論：池田大作の『新人道主義』の価値志向」(湖南師範大学)
叢曉波「池田大作幸福思想におけるいくつかの支点——幸福の本質とともに」(創価大学)
紀亜光「池田大作生態文明観における人類への眼差し」(南開大学)
田毅鵬「東アジア共生思想体系における池田の『共生観』及び社会的啓発」(吉林大学)
黄順力「池田大作平和主義『民間外交』思想の分析」(厦門大学)
温憲元「『人類運命共同体』から見る人類共生：理念と革新実践」(広東省社会科学院)
王澤應「池田大作共生主義論理価値観の考察」(湖南師範大学)
徐行「人類の文明共生と平和発展の推進に尽力——周恩来と池田大作の中日民間外交に対する歴史的貢献」(南開大学)
周長山「世界市民教育理念の実践と人類運命共同体の構築」(広西師範大学)
河暎愛「趙永植と池田大作の人類共栄(共生)思想と世界市民教育の実践」(韓国・慶熙大学)
官建生「人類運命共同体構築の鍵は人間のグローバル化」(韶関学院)

「世界市民教育」セッション

- 王麗榮、湯煥坤「グローバルガバナンスから見る世界市民教育研究」(中山大學)
陳曉春、肖雪、鄭浩睿「共生、共創、共享：池田大作『世界市民』教育思想の現代価値と実践方途」(湖南大学)
蔣菊「世界市民教育と教師の使命」(肇慶学院)
李鋒「池田大作の平和思想観に基づいた世界市民教育研究」(佛山科技学院)
李丹「『価値創造を実践する』世界市民の育成——創価大学グランドデザイン(2021-2030)に基づく考察」(創価大学)
高岳倫「平凡な市民から非凡な世界市民への育成 池田大作の『世界市民教育観』論」(仲愷農業工程学院)
洪剛「池田大作の『国際理解教育』思想」(大連海事大学)

高橋強「池田大作の『世界市民3要件』と文化対話主義」(創価大学)

章舜欽「池田大作『世界市民』教育と人類運命共同体の構築」(厦門大学)

「人類運命共同体」セッション

張艶涛「池田大作の生命尊厳観と人類運命思想を探る」(天津社会科学院)

葛建華「池田大作『東アジア共同体』思想を探る」(厦門大学)

陳志興「多元文化の理解と対話：人類運命共同体構築の基本方途」(南昌大学)

賈凱「池田大作 SGI の日記念提言における『東アジア共同体』思想に関する一考察」(厦門大学)

陳秀武「池田大作の『相互依存性』原理と『海上運命共同体』の関係」(東北師範大学)

汪鴻祥「新型コロナ下における中日関係の課題と展望——池田大作中日友好思想の啓発的意義を論じる」(創価大学)

張昌玉「池田大作の人類平和共生思想を論じる」(中国人民大学)

「平和主義」セッション

賈蕙萱、伊佐進一「平和を叫ぶ中日対談」(北京大学)

王鉄軍「池田大作の平和教育思想の源泉」(遼寧大学)

栢根興「世界平和と中日友好——池田大作の中日友好関係への貢献を論じる」(陝西師範大学)

張曉剛「池田大作の世界平和思想と中国伝統の和合思想の比較」(長春師範大学)

胡金定「日中友好の根底にある池田大作の反戦平和思想」(日本・甲南大学)

周致宏「池田大作の建学理念から見る平和主義思想」(遼寧大学)

崔学森「日本の連立政権における公明党の役割」(大連外国語大学)

「文化主義」セッション

宋成有「中国文明論の考察と新たな開拓」(北京大学)

林昶「中国の池田研究と『池田現象』」(南京大学)

鐘明華「池田大作の文明観と 21 世紀の文明発展」(中山大學)

姜維公、孫妍「池田大作の中国観を分析する」(長春師範大学)

馬利中「新時代に向かう東アジアの発展する『文化力』と『精神のシルクロード』構築——池田大作『文化主義』思想の内包」(上海大学)

夏広興「『共生のエートス』から見る池田大作先生の文明観」(上海師範大学)

陳多友「池田大作の文学の特徴を論じる」(広東外語外貿大学)

李俄憲、吳江舒悦「池田大作の児童文学における倫理教育価値の研究」(華中師範大学)

董芳勝「音楽芸術による『人間革命』論の実践研究についての一考察——音楽的感性の働きかけと人生哲学形成との関係性を中心に」(創価大学)

「教育主義」セッション

- 曲徳林、楊艦「人類共生理念の世界的影響力——池田大作の『人間主義教育観』考察」(清華大学)
- 李彦良、劉廷揚「中国文化大学主催第七回青年フォーラムの回顧と展望」(中国文化大学)
- 劉愛君「池田大作思想が中国の大学生に与える影響——大連工業大学の実践を中心として」(大連工業大学)
- 馬樹茂、張少波「池田大作先生の教育思想考察——西安培華学院の教員、学生が読んだ『青年抄』を例に」(西安培華学院)
- 松永源二郎「今後の外国語教育のあり方と異文化間コミュニケーション——池田思想のヒューマニズムを手掛かりに」(深圳大学)
- 劉卓紅、劉倩「徳を尊び、徳を守り、徳を行う——池田大作の人間教育思想から見る大学の立徳樹人(徳を持って人を育てる)多角的視覚」(華南師範大学)
- 陳永剛「中日青年文化交流における周池精神の時代的価値と実践方途」(南開大学)

「人間主義」セッション

- 唐彦博「池田大作の持続可能発展観の宣揚」(中国科技大学)
- 曾建平「環境保護と人間革命——池田大作環境思想研究」(井岡山大学)
- 羅国振、張海娜、張舒「池田大作の生態観と日本の生活ゴミ分類の関係を探る——東京都八王子市生活ゴミ分類の上海への啓発」(華東師範大学)
- 蔡立彬、常紅「人類強化(Human Enhancement)技術における生命尊厳と平和共生——池田大作思想研究」(仲愷農業工程学院)
- 陶金「日蓮『女人成仏論』が池田大作の女性観に与えた影響」(大連海事大学)
- 呉迪「中道主義に基づく人間革命理論が人文社会科学研究に与える啓発」(日本・慶応義塾大学)
- 松森秀幸「近代日本『色心不二』思想の展開——池田大作の『色心不二』説(1970年代まで)を中心に」(創価大学)

「Global Citizenship」セッション

- Ana B. García-Varela, Alejandro Iborra, Luana Bruno 「Teachers Competences for Global Citizenship Education」(スペイン・アルカラ大学)
- Chung-Shig Shin 「A Study of “the Global Citizen Project” for the College Education」(韓国・慶熙大学)
- Lewis Ngesu & Erastus Mwove Nzou 「Value Creating Education for Global Citizenship: The Way Forward for Kenya」(ケニア・ナイロビ大学)
- Stephanie Kukita 「Exploring Soka University Students' Perspectives on Global Citizenship」(創価大学)

「Social Problems」セッション

R. Sandhya Lakshmi 「Toward A Better World—A Ecocritical Analysis of Short Stories of Dr. Daisaku Ikeda」(インド・創価池田女子大学)

Yong-Seung Park 「B4P (Business for Peace) Effects of Wisdom-Unleashing Company: Towards Practice of Responsible Management Education in Spirit of SOKA」(韓国・慶熙大学)

Masaru Osanai 「Enhancement of Educational Function of Local Societies to Build a “Society for Education,” through the Participation And Contribution to Local Education by Corporations and Organizations (and Individuals)」(創価大学)

「Dialogue」セッション

Irina Boldonova 「Hermeneutic Approach in Dialogues of Daisaku Ikeda and Arnold Toynbee」(南開大学)

Lillian I & Jason Goulah 「Dialogue, Hope and Joy: Enacting Daisaku Ikeda’s Philosophy with Youth and Scholars at the Ikeda Center for Peace, Learning and Dialogue」(アメリカ・池田国際対話センター)

Eun Sun Lee 「Civil Society as a Policy Entrepreneur of Peace Building: Strategy based on the Implementation Model of Daisaku Ikeda」(韓国・慶尚大学)

「Educational Practices」セッション

Nozomi Inukai 「創価的観点から見た『よい教師』の『在り方』と『実践』: アメリカ創価大学の事例研究」(アメリカ・デポール大学)

Tamy Kobashikawa, Tais Tokusato 「世界市民と環境教育: 創価研究所——アマゾン環境研究センター (アマゾン創価研究所) の事例研究」(ブラジル・創価研究所アマゾン環境研究センター)

Paul Sherman, Olivia Boukydis 「創価教育理論の枠組みにおける学部レベル経験学習についての視点フレーム形成 [フレーミング] について」(カナダ・ゲルフ・ハンバー大学)

Hiroko Tomioka 「創価教育の歴史と概説: 実践的意義」(創価大学)

(2) 「池田大作と文明間の相互参考国際学術シンポジウム」

2021年9月25日、山東大学で「池田大作と文明間の相互参考国際学術シンポジウム——人類運命共同体の下での東アジアの知恵」が開催され以下の発表があった。

松岡幹夫 「すべてを生かす——池田思想の三つの特徴」(日本・東日本国際大学)

汪鴻祥 「池田大作文明融合思想内容と意義」(創価大学)

張耀南・王開心「白璧徳、張東蓀、池田大作、三つの『中道哲学』比較研究の再検討」(北京航空航天大学)

高橋強「多様性を『融合』『創造』に転換する智慧に関する一考察」(創価大学)

大崎素史「池田先生の『対人関係』思想——その具体的事例への考察」(日本・東日本国際大学)

陶金「平和・対話と二十一世紀の女性——池田先生の現代女性観」(大連海事大学)

王麗榮・湯煥坤「グローバルな管理視点での世界公民教育研究」(中山大学)

馬思偉・王麗榮「人類運命共同体視角下の生命尊厳教育——学校学生心理健康教育の実践思考」(広州南方学院)

戴逢紅・劉嶺峰「黄龍禪宗の本土形成と海外発展」(佛山科学技術学院)

胡嘉明「調和とは? (訳文)」(貴州大学)

(3) 山東大学で「池田大作研究所」設立記念学術会議

2021年1月8日、山東大学哲学・社会発展学院「池田大作研究所」設立決定を記念する学術会議が「東アジアと世界」をテーマに、同大学のキャンパスで開催された。学術会議では、同学院の劉森林院長が、両国を結ぶ懸け橋として貢献を果たしてきた同大学の役割に言及し、今後も日本および東アジア研究の先頭に立つ使命を全うしていきたいと強調した。

同研究所所長の傅永軍教授は、他大学との交流を力強く推進しつつ、池田思想の卓越性の研究を通して、人類全体の進むべき針路を探し出していきたいと述べた。

(4) その他(学部生、院生、学生団体等のシンポジウム)

①大連工業大学で読書会 創価大学創立50周年を祝福

2021年3月30日、4月1日の両日にわたり、創価大学創立50周年を祝福する日本語読書交流会が大連工業大学外国語学院で行われた。同大学の「池田大作読書会」の学生らが参加した交流会では、同大学「池田大作思想研究所」の劉愛君所長が創価大学との友好交流の歩みに触れながら、読書会の活動は、学生の人間的成長と実践的な言語能力の向上に、多大な良い影響を与えてきたと強調した。研究所の設立から10周年となる本年を新たなスタートとして、池田博士の平和理念と行動を継承し、中日両国の友好に一段と貢献していく人材に成長をと望んだ。その後、池田博士の箴言集『人生の座標』を研鑽資料として、「語学の学習と国際交流」などをテーマに、グループディスカッションを行った。

②仲愷農業工程学院「廖池会」が発足6周年の集い

2021年5月30日、仲愷農業工程学院の学生団体「廖承志・池田大作研究会(廖池会)」の発足6周年を祝賀する集いがオンラインで行われた。同学院「廖承志・池田大作研究センター」の蔡立彬副主任が、互いの連携を一段と強め、成長の歴史を築こうと述べ、高岳倫主任が、池田思想の研究を通し、一人一人が世界平和に貢献しゆく実力を磨いてほしいと語った。

2. 新設の池田大作研究機関

機 関 名：山東大学哲学社会発展学院「池田大作研究所」

設 立：2020年12月20日

所 長：傅永軍教授、事務長：李海濤副教授、研究員：牛建科教授、邢永鳳教授、陳堅教授

設立趣旨：日本の哲学・宗教に関する基礎研究を踏まえながら、池田先生の仏教観や文化観、東アジアにおける哲学的基盤などを探求し、中日の相互理解のさらなる促進を目指す

機 関 名：信陽師範大学「池田大作・日本研究所」

設 立：2021年3月10日

主 任：張鴻鵬講師（外国語学院系主任）、研究員：郭敏副教授、薛曉燕講師、吳恒講師、李靜講師

設立趣旨：1. 池田大作平和主義思想研究 2. 日本社会・文化研究 3. 中日国際関係研究
4. 日本経営学研究

3. 池田研究の成果等

- ・中国教育部の雑誌「国際学術会議動態」（2021年第3期（総第234期））に、2020年8月東北師範大学で行われた「池田先生名誉博士20周年記念国際シンポジウム」に関する、同大学池田大作哲学研究所王明兵所長の報告が掲載された。
- ・井岡山大学曾建平学長による単著『環境保護と人間革命 池田大作環境思想研究』（江西教育出版社2021年10月）が出版された。
- ・北京大学国際合作部と創価大学の共同出版による『「北京大学桜」は永遠に——創価大学と北京大学の学術交流40年史』（日本東方出版社2021年11月）が出版された。
- ・北京大学池田大作研究会賈蕙萱元会長が、第3回中日三国文化交流與旅游合作国際論壇2021冬（2021年12月26日）で「池田大作眼中的三国文化」と題し講演を行った。

『創価大学50年の歴史』出典資料一覧(2)

創価大学50年史編集委員会編

はじめに

2021年4月2日、『創価大学50年の歴史』(以下『50年史』)が刊行された。同書の編纂に際しては、記述の根拠として大量の資料を引用または参照している。しかし紙幅の関係上、その全てを『50年史』の本文中に明記することはできなかった。そこで、同書の編集事務及び資料提供を担当した池田大作記念創価教育研究所が発行する本紀要『創価教育』に、出典資料の一覧を掲載することとした。

前号に引き続き、本号には『50年史』第6章及び第7章の記述に関する出典資料の一覧を掲載する。第8章以降については、次号以降に掲載することとしたい。

凡 例

- ・この「一覧」には、『50年史』の編纂に際して使用した資料のうち、公刊・公表されているものを掲載した。
- ・『50年史』の編纂に際して直接参照した資料のみを掲載した。『50年史』の内容に関連する資料を全て網羅しているわけではない。
- ・『50年史』の章・節・項・小見出しに続けて、おおむね『50年史』の記述に沿った順序で出典資料の書誌事項を示した。節には『50年史』の該当ページを付記し、小見出しは【】で囲んでいる。出典資料を掲載していない項・小見出しは省略した。
- ・図書は、『タイトル』巻数、出版社、出版年の形で記載した。
- ・雑誌・新聞は、著者「記事名」『タイトル』号数または発行日の形で記載した。号数は原則として「第〇号」の形で表記した。
- ・ウェブサイトは、ウェブページのタイトルまたは更新日が特定できる場合のみ掲載した。創価大学ウェブサイトについては、本稿執筆時点(2022年1月)のウェブサイトで公開されていない過去のページも含めている。
- ・資料のタイトルは原則として資料にある通りに記載したが、タイトルが不明確な逐次刊行物などの場合、統一的なタイトルを記載したものもある(キャンパスガイドなど)。
- ・この「一覧」の編集は、主に坂口貴弘が担当した。また、アルバイトとして創価大学の多くの学部生・大学院生の協力を得た。記して感謝申し上げたい。

第 6 章 1991 年度～2000 年度

1 池田記念講堂と「第九」演奏会 (152～156 頁)

池田記念講堂の建設構想を發表

『聖教新聞』1969 年 1 月 1 日

『創価大学新聞』第 133 号

『創価大学要覧』平成 3 年度版

起工・定礎から竣工・落成まで

『創価大学要覧』平成 3 年度版

『創価大学新聞』第 147 号

『聖教新聞』1991 年 1 月 12 日

『聖教新聞』1991 年 2 月 21 日

『聖教新聞』1991 年 3 月 18 日

『池田大作全集』第 60 卷、聖教新聞社、2004 年

『創大ニュース』第 69 号

『聖教新聞』1991 年 4 月 4 日

池田講堂と付属施設の概要

【構造】

『聖教新聞』1991 年 3 月 18 日

【舞台、照明、音響】

『創大通信』第 52 号

ユゴー、トルストイ、ホイトマン像

『SUN』第 21 号

『SUN』第 22 号

【ユゴー像】

『聖教新聞』1991 年 3 月 18 日

【トルストイ像】

『聖教新聞』1991 年 11 月 3 日

【ホイトマン像】

『聖教新聞』1992 年 11 月 2 日

「池田講堂で第九を」

『創価大学新聞』第 175 号

『池田大作全集』第 75 卷、聖教新聞社、1997 年

新たな冬の学生行事の誕生

『聖教新聞』1991 年 12 月 21 日

『聖教新聞』1992 年 12 月 23 日

『SUN』第4号

『聖教新聞』1994年12月18日

通算13回の「第九」演奏会を開催

『聖教新聞』1994年12月23日

『聖教新聞』1998年12月13日

『聖教新聞』1999年12月25日

『池田大作全集』第130巻、聖教新聞社、2005年

『聖教新聞』1999年12月19日

『聖教新聞』2003年12月16日

『聖教新聞』2003年12月26日

『創価大学新聞』第232号

2 工学部 (156～158頁)

本学初の理工系学部を開設

『創大ニュース』第60号

『創大ニュース』第61号

『創大ニュース』第67号

『創大ニュース』第77号

『創価大学要覧』平成6年度版

『創価大学要覧』平成2年度版

『創大ニュース』第66号

『創大ニュース』第65号

『聖教新聞』1990年12月22日

『聖教新聞』1991年3月29日

『池田大作全集』第60巻、聖教新聞社、2004年

開設当初の工学部

『創価大学新聞』第152号

『創価大学要覧』平成3年度版

【情報システム学科】

『創価大学要覧』平成6年度版

工学部棟

『聖教新聞』1991年3月30日

工学部初の卒業生と大学院開設

『聖教新聞』1992年12月12日

『創大ニュース』第78号

『聖教新聞』1995年3月18日

『創価大学要覧』平成7年度版

『聖教新聞』1995年5月9日

『創価大学三十年誌 学生篇』創価大学学生自治会、2001年

3 本部棟 (158 ~ 161 頁)

建設用地の検討

『聖教新聞』1993年1月5日

『創価大学新聞』第180号

『創価大学三十年誌 学生篇』創価大学学生自治会、2001年

開学25年記念日に基本計画を発表

『聖教新聞』1994年11月3日

『聖教新聞』1996年4月2日

『聖教新聞』1996年4月16日

起工・定礎から竣工・落成まで

『聖教新聞』1997年4月9日

『聖教新聞』1997年11月3日

『聖教新聞』1999年1月1日

『聖教新聞』1998年3月11日

『聖教新聞』1998年4月7日

『創価大学新聞』第212号

『聖教新聞』1999年5月3日

『聖教新聞』1999年7月3日

『聖教新聞』1999年8月2日

『創価大学新聞』第213号

本部棟諸施設のオープン

『聖教新聞』1999年8月2日

『聖教新聞』1999年8月22日

『聖教新聞』1999年7月3日

『聖教新聞』1999年9月12日

『池田大作全集』第142巻、聖教新聞社、2013年

『聖教新聞』1999年9月15日

『聖教新聞』1999年9月18日

ダ・ヴィンチ像、記念碑の除幕

『聖教新聞』1999年11月2日

『聖教新聞』1999年5月3日

『SUN』第22号

『聖教新聞』1999年11月3日

『聖教新聞』1999年11月4日

『創価大学 創立の精神を学ぶ』改訂版、創価大学、2014年

『聖教新聞』2000年3月22日

4 教育・研究 (161～166頁)

多彩な研究機関の設置

【基礎学術研究センター】

『創価大学要覧』平成5年度版

【自然環境研究センター】

『聖教新聞』1990年6月6日

『聖教新聞』1991年4月15日

【シルクロード研究センター】

『創価大学三十年誌 学生篇』創価大学学生自治会、2001年

『聖教新聞』2007年11月4日

『ダルヴェルジンテパ DT25 : 発掘調査報告 : 1989-1993』創価大学、1996年

【環太平洋研究センター】

『創大ニュース』第58号

『創大ニュース』第67号

『創大ニュース』第75号

【アジア研究センター】

『創価大学要覧』平成10年度版

『創価大学要覧』平成8年度版

【国際仏教学高等研究所】

『国際仏教学高等研究所・年報』創刊号

『SUN』第22号

【創価教育研究センター】

杉山由紀男「平成12・13年度センター活動報告」『創価教育研究』第1号

『聖教新聞』1994年10月15日

図書館の充実

【池田文庫】

『池田大作全集』第60巻、聖教新聞社、2004年

『聖教新聞』1997年5月8日

『聖教新聞』1993年7月4日

『SUN』第53号

『SUN』第55号

『SUN』 第 94 号

【関寛治文庫】

『聖教新聞』 1998 年 11 月 2 日

「資料案内」 創価大学ウェブサイト

遺跡発掘調査の展開

【大町遺跡】

『大町遺跡 平成 4・5 年度発掘調査報告書』 創価大学、1995 年

『聖教新聞』 1993 年 4 月 16 日

『聖教新聞』 1993 年 4 月 26 日

【丹木境遺跡】

『丹木境遺跡 平成 7・8 年度発掘調査報告書』 創価大学、2002 年

【森北古墳群合同学術調査】

『創価大学三十年誌 学生篇』 創価大学学生自治会、2001 年

『SUN』 第 22 号

『森北古墳群 森北古墳群測量・発掘調査報告書』 創価大学、1999 年

公開講座・社会人教育の充実

【夏季大学講座】

『聖教新聞』 1996 年 8 月 24 日

創立 30 周年に向けた教学改革

【新カリキュラム】

『SUN』 第 4 号

『履修要項』 平成 7 年度

【 Semester 制と GPA 導入】

『履修要項』 平成 11 年度

『創価大学新聞』 第 211 号

『SUN』 第 91 号

【ワールドランゲージセンター (WLC)】

『SUN』 第 10 号

『SUN』 第 13 号

『SUN』 第 14 号

『SUN』 第 19 号

『SUN』 第 23 号

『創価大学三十年誌 学生篇』 創価大学学生自治会、2001 年

『創価大学新聞』 第 206 号

【教育・学習活動支援センター】

「1999年度 創価大学教育ビジョン」

「2000年度 創価大学教育ビジョン」

「C.E.T.L (Center for Excellence in Teaching and Learning) 教育・学習活動支援センター」

リーフレット

『聖教新聞』2000年5月24日

『SUN』第21号

【研究活動充実のための支援】

『SUN』第25号

【創価大学教育ビジョン】

「学長ビジョン」創価大学ウェブサイト

5 国際交流 (166～182頁)

1991-92年：海外諸大学で創立者が講演

『聖教新聞』1991年1月28日

『聖教新聞』1991年1月29日

『聖教新聞』1991年1月30日

『聖教新聞』1991年2月2日

『聖教新聞』1991年3月6日

『聖教新聞』1991年3月20日

『聖教新聞』1991年4月19日

『聖教新聞』1991年4月18日

『創大ニュース』第69号

『聖教新聞』1991年4月4日

『聖教新聞』1991年4月20日

『聖教新聞』1991年4月22日

『聖教新聞』1991年4月23日

『聖教新聞』1991年5月11日

『聖教新聞』1991年6月5日

【ドイツ】

『聖教新聞』1991年6月6日

『聖教新聞』1991年6月9日

『聖教新聞』1991年6月14日

『創大通信』第53号

『創大ニュース』第70号

【ルクセンブルク】

『聖教新聞』1991年6月11日

『聖教新聞』 1991 年 6 月 12 日

【フランス】

『聖教新聞』 1991 年 6 月 19 日

『聖教新聞』 1991 年 6 月 21 日

『聖教新聞』 1991 年 6 月 22 日

『創価学会三代会長年譜』 下巻（1）、創価学会、2011 年

【イギリス】

『聖教新聞』 1991 年 6 月 26 日

『聖教新聞』 1991 年 6 月 28 日

『聖教新聞』 1991 年 6 月 30 日

『聖教新聞』 1991 年 7 月 1 日

『年譜・池田大作』 第 3 巻、第三文明社、1995 年

『聖教新聞』 1991 年 6 月 1 日

『聖教新聞』 1991 年 7 月 20 日

『聖教新聞』 1991 年 9 月 27 日

『聖教新聞』 1991 年 9 月 28 日

『聖教新聞』 1991 年 10 月 18 日

『創大通信』 第 55 号

『キャンパスニュース』 第 8 号

『創大通信』 第 57 号

『聖教新聞』 1991 年 11 月 1 日

『創大通信』 第 54 号

『聖教新聞』 1991 年 11 月 12 日

『聖教新聞』 1991 年 11 月 16 日

『創大ニュース』 第 72 号

『聖教新聞』 1992 年 1 月 24 日

【香港】

『聖教新聞』 1992 年 1 月 31 日

『聖教新聞』 1992 年 2 月 20 日

『聖教新聞』 1992 年 2 月 22 日

【タイ】

『聖教新聞』 1992 年 2 月 4 日

『聖教新聞』 1992 年 2 月 5 日

【インド】

『聖教新聞』 1992 年 2 月 8 日

『聖教新聞』 1992年2月10日

『聖教新聞』 1992年2月13日

『聖教新聞』 1992年2月15日

『聖教新聞』 1992年2月16日

『創大ニュース』 第72号

『聖教新聞』 1992年3月15日

『聖教新聞』 1992年4月9日

『聖教新聞』 1992年4月22日

『聖教新聞』 1992年4月25日

『聖教新聞』 1992年5月3日

『聖教新聞』 1992年5月15日

【ドイツ・オーストリア】

『聖教新聞』 1992年6月12日

【エジプト】

『聖教新聞』 1992年6月17日

『聖教新聞』 1992年6月20日

【トルコ】

『聖教新聞』 1992年6月23日

『聖教新聞』 1992年6月25日

『聖教新聞』 1992年6月27日

【イタリア】

『聖教新聞』 1992年6月30日

『聖教新聞』 1992年7月3日

『聖教新聞』 1992年6月18日

『聖教新聞』 1992年7月2日

『聖教新聞』 1992年7月23日

『聖教新聞』 1992年7月30日

『聖教新聞』 1992年9月2日

『聖教新聞』 1992年9月16日

『聖教新聞』 1992年9月29日

『聖教新聞』 1992年10月14日

『聖教新聞』 1992年10月15日

『聖教新聞』 1992年10月16日

『聖教新聞』 1992年10月17日

『聖教新聞』 1992年10月18日

『聖教新聞』 1992 年 10 月 29 日

『聖教新聞』 1992 年 11 月 4 日

『聖教新聞』 1992 年 11 月 20 日

『聖教新聞』 1992 年 11 月 6 日

『聖教新聞』 1992 年 2 月 14 日

『聖教新聞』 1992 年 8 月 20 日

1993-94 年：ハーバード大で 2 度目の講演

『聖教新聞』 1993 年 1 月 12 日

『聖教新聞』 1993 年 1 月 19 日

『創大通信』 第 60 号

『創大ニュース』 第 77 号

【アメリカ】

『聖教新聞』 1993 年 1 月 28 日

『聖教新聞』 1993 年 1 月 31 日

『聖教新聞』 1993 年 2 月 1 日

『聖教新聞』 1993 年 2 月 2 日

【コロンビア】

『聖教新聞』 1993 年 2 月 9 日

『聖教新聞』 1993 年 2 月 10 日

【ブラジル】

『聖教新聞』 1993 年 2 月 14 日

『聖教新聞』 1993 年 2 月 15 日

『聖教新聞』 1993 年 2 月 28 日

『聖教新聞』 1993 年 3 月 3 日

【アルゼンチン】

『聖教新聞』 1993 年 2 月 16 日

『聖教新聞』 1993 年 2 月 19 日

『聖教新聞』 1993 年 2 月 22 日

【パラグアイ】

『聖教新聞』 1993 年 2 月 24 日

『聖教新聞』 1993 年 2 月 25 日

【チリ】

『聖教新聞』 1993 年 2 月 27 日

【ボリビア】

『聖教新聞』 1993 年 3 月 8 日

『聖教新聞』1993年3月9日
『聖教新聞』1993年4月7日
『聖教新聞』1993年4月25日
『創大ニュース』第78号

【フィリピン】

『聖教新聞』1993年5月11日
『聖教新聞』1993年5月12日
『聖教新聞』1993年5月14日

【香港】

『聖教新聞』1993年5月15日
『聖教新聞』1993年5月16日
『聖教新聞』1993年5月17日
『聖教新聞』1993年6月16日
『聖教新聞』1993年6月18日
『聖教新聞』1993年6月19日

【アメリカ】

『聖教新聞』1993年9月21日
『聖教新聞』1993年9月25日
『聖教新聞』1993年9月26日
『聖教新聞』1993年9月27日
『聖教新聞』1993年9月29日

【カナダ】

『聖教新聞』1993年10月1日
『聖教新聞』1993年10月4日
『聖教新聞』1993年10月8日
『聖教新聞』1993年10月20日
『聖教新聞』1993年11月4日
『聖教新聞』1993年11月16日
『聖教新聞』1993年12月20日
『聖教新聞』1993年11月5日

【香港・深圳（中国）】

『聖教新聞』1994年1月31日
『聖教新聞』1994年2月1日
『聖教新聞』1994年2月2日
『聖教新聞』1994年2月4日

【タイ】

- 『聖教新聞』 1994 年 2 月 6 日
- 『聖教新聞』 1994 年 2 月 8 日
- 『聖教新聞』 1994 年 2 月 9 日
- 『聖教新聞』 1994 年 2 月 13 日
- 『聖教新聞』 1994 年 3 月 1 日
- 『年譜・池田大作』 第 3 卷、第三文明社、1995 年
- 『聖教新聞』 1994 年 3 月 17 日
- 『聖教新聞』 1994 年 3 月 8 日
- 『聖教新聞』 1994 年 5 月 11 日
- 『聖教新聞』 1994 年 5 月 13 日
- 『聖教新聞』 1994 年 5 月 14 日

【ロシア】

- 『聖教新聞』 1994 年 5 月 16 日
- 『聖教新聞』 1994 年 5 月 18 日
- 『聖教新聞』 1994 年 5 月 19 日
- 『聖教新聞』 1994 年 5 月 20 日
- 『聖教新聞』 1994 年 5 月 21 日
- 『聖教新聞』 1994 年 5 月 22 日
- 『聖教新聞』 1994 年 5 月 23 日

【ドイツ】

- 『聖教新聞』 1994 年 5 月 25 日

【イタリア】

- 『聖教新聞』 1994 年 6 月 3 日

【イギリス】

- 『聖教新聞』 1994 年 6 月 10 日
- 『聖教新聞』 1994 年 6 月 15 日
- 『聖教新聞』 1994 年 6 月 16 日
- 『聖教新聞』 1994 年 6 月 17 日
- 『聖教新聞』 1994 年 7 月 4 日
- 『聖教新聞』 1994 年 7 月 10 日
- 『聖教新聞』 1994 年 8 月 24 日
- 『聖教新聞』 1994 年 9 月 4 日
- 『聖教新聞』 1994 年 9 月 14 日
- 『聖教新聞』 1994 年 10 月 5 日

『聖教新聞』 1994年10月18日
『聖教新聞』 1994年10月19日
『聖教新聞』 1994年11月18日
『聖教新聞』 1994年11月25日
『聖教新聞』 1994年12月9日
『聖教新聞』 1994年12月13日
『聖教新聞』 1994年12月18日
『聖教新聞』 1994年4月26日
『聖教新聞』 1994年6月30日
『聖教新聞』 1994年7月14日
『聖教新聞』 1994年11月26日

1995-96年：創立者がキューバ等を初訪問

『聖教新聞』 1995年1月28日
『聖教新聞』 1995年2月15日
『聖教新聞』 1995年2月18日
『聖教新聞』 1995年3月17日
『聖教新聞』 1995年3月19日
『聖教新聞』 1995年4月17日
『聖教新聞』 1995年6月28日
『聖教新聞』 1995年7月6日
『創価大学要覧』 平成8年度版
『聖教新聞』 1995年9月8日
『聖教新聞』 1995年9月9日

【ネパール】

『聖教新聞』 1995年11月1日
『聖教新聞』 1995年11月2日
『聖教新聞』 1995年11月4日
『聖教新聞』 1995年11月5日

【シンガポール】

『聖教新聞』 1995年11月8日
『聖教新聞』 1995年11月9日

【香港・マカオ】

『聖教新聞』 1995年11月11日
『聖教新聞』 1995年11月15日
『聖教新聞』 1995年11月16日

- 『聖教新聞』 1995 年 11 月 17 日
『聖教新聞』 1995 年 11 月 18 日
『聖教新聞』 1995 年 12 月 9 日
『聖教新聞』 1995 年 12 月 23 日
『聖教新聞』 1995 年 3 月 18 日
『聖教新聞』 1996 年 2 月 11 日
『聖教新聞』 1996 年 2 月 20 日
『聖教新聞』 1996 年 2 月 15 日
『聖教新聞』 1996 年 2 月 29 日
『聖教新聞』 1996 年 3 月 6 日
『聖教新聞』 1996 年 3 月 8 日
『聖教新聞』 1996 年 3 月 16 日
『創価学会三代会長年譜』 下巻 (2)、創価学会、2011 年
『聖教新聞』 1996 年 3 月 13 日
『聖教新聞』 1996 年 4 月 5 日
『聖教新聞』 1996 年 4 月 6 日
『聖教新聞』 1996 年 4 月 20 日
『聖教新聞』 1996 年 4 月 22 日
『聖教新聞』 1996 年 5 月 22 日
『聖教新聞』 1996 年 5 月 23 日
『SUN』 第 8 号
『聖教新聞』 1996 年 5 月 24 日

【アメリカ】

- 『聖教新聞』 1996 年 6 月 4 日
『聖教新聞』 1996 年 6 月 6 日
『聖教新聞』 1996 年 6 月 11 日
『聖教新聞』 1996 年 6 月 16 日
『聖教新聞』 1996 年 6 月 17 日
『聖教新聞』 1996 年 6 月 20 日

【キューバ】

- 『聖教新聞』 1996 年 6 月 27 日
『聖教新聞』 1996 年 6 月 29 日
『聖教新聞』 1996 年 6 月 30 日
『聖教新聞』 1996 年 7 月 1 日

【コスタリカ】

『聖教新聞』1996年7月2日

『SUN』第10号

『聖教新聞』1996年7月17日

『聖教新聞』1996年7月23日

『聖教新聞』1996年8月9日

『聖教新聞』1996年9月3日

『聖教新聞』1996年11月18日

『SUN』第26号

『SUN』第10号

1997-98年：慶熙大学と韓国初の交流協定

『聖教新聞』1997年1月17日

『聖教新聞』1997年2月4日

『聖教新聞』1997年2月17日

『聖教新聞』1997年2月19日

『聖教新聞』1997年2月22日

『創価学会三代会長年譜』下巻(2)、創価学会、2011年

『創価大学要覧』平成10年度版

『聖教新聞』1997年4月8日

『聖教新聞』1997年5月11日

『聖教新聞』1997年5月13日

『聖教新聞』1997年5月14日

『聖教新聞』1997年5月15日

『聖教新聞』1997年7月12日

『創価大学要覧』平成11年度版

『聖教新聞』1997年9月1日

『聖教新聞』1997年9月2日

『聖教新聞』1997年9月3日

『聖教新聞』1997年9月15日

『聖教新聞』1997年9月21日

『聖教新聞』1997年10月18日

『聖教新聞』1997年10月25日

『聖教新聞』1997年10月19日

『聖教新聞』1997年10月22日

『聖教新聞』1997年10月23日

『聖教新聞』1997年10月24日

『聖教新聞』 1997 年 11 月 2 日

『聖教新聞』 1997 年 11 月 11 日

『聖教新聞』 1997 年 11 月 14 日

『聖教新聞』 1997 年 11 月 21 日

『聖教新聞』 1997 年 9 月 28 日

『聖教新聞』 1997 年 10 月 16 日

『聖教新聞』 1997 年 10 月 26 日

『聖教新聞』 1998 年 1 月 13 日

『SUN』 第 16 号

【フィリピン】

『聖教新聞』 1998 年 2 月 12 日

『聖教新聞』 1998 年 2 月 13 日

『聖教新聞』 1998 年 2 月 14 日

【香港】

『聖教新聞』 1998 年 2 月 19 日

『聖教新聞』 1998 年 2 月 21 日

『聖教新聞』 1998 年 2 月 22 日

『聖教新聞』 1998 年 3 月 6 日

『聖教新聞』 1998 年 3 月 19 日

『聖教新聞』 1998 年 4 月 14 日

『聖教新聞』 1998 年 5 月 7 日

『聖教新聞』 1998 年 5 月 12 日

『聖教新聞』 1998 年 5 月 15 日

『聖教新聞』 1998 年 5 月 20 日

『聖教新聞』 1998 年 5 月 17 日

『聖教新聞』 1998 年 5 月 18 日

『聖教新聞』 1998 年 5 月 19 日

『SUN』 第 18 号

『SUN』 第 19 号

『聖教新聞』 1998 年 9 月 20 日

『聖教新聞』 1998 年 10 月 21 日

『聖教新聞』 1998 年 10 月 29 日

『聖教新聞』 1998 年 10 月 30 日

『SUN』 第 20 号

『聖教新聞』 1998 年 11 月 4 日

『聖教新聞』1998年11月13日
『聖教新聞』1998年11月26日
『聖教新聞』1998年11月27日
『聖教新聞』1998年11月30日
『聖教新聞』1998年12月3日
『聖教新聞』1998年12月13日
『聖教新聞』1998年12月16日
『聖教新聞』1998年12月15日
『聖教新聞』1998年4月7日
『聖教新聞』1997年10月16日

1999 - 2000年：インドに創価池田女子大学、池田思想研究機関が誕生

『聖教新聞』1999年1月26日
『SUN』第21号
『聖教新聞』1999年3月13日
『聖教新聞』1999年4月9日
『聖教新聞』1999年4月16日
『聖教新聞』1999年5月7日
『聖教新聞』1999年5月13日
『SUN』第22号
『聖教新聞』1999年5月20日
『聖教新聞』1999年7月17日
『聖教新聞』1999年7月29日
『聖教新聞』1999年11月2日
『聖教新聞』1999年11月3日
『聖教新聞』1999年11月4日
『聖教新聞』1999年11月16日
『創価学会三代会長年譜』下巻(2)、創価学会、2011年
『聖教新聞』1999年11月25日
『聖教新聞』1999年11月24日
『聖教新聞』1999年12月2日
『聖教新聞』1999年12月3日
『聖教新聞』1999年1月8日
『SUN』第25号
『聖教新聞』2000年2月11日
『聖教新聞』2000年2月16日

『聖教新聞』 2000 年 2 月 18 日

『聖教新聞』 2000 年 2 月 22 日

『聖教新聞』 2000 年 2 月 17 日

『聖教新聞』 2000 年 3 月 11 日

『聖教新聞』 2000 年 3 月 24 日

『聖教新聞』 2000 年 8 月 18 日

『聖教新聞』 2000 年 8 月 31 日

『聖教新聞』 2000 年 9 月 8 日

『聖教新聞』 2000 年 9 月 23 日

『聖教新聞』 2000 年 9 月 24 日

『聖教新聞』 2000 年 9 月 27 日

『聖教新聞』 2000 年 10 月 7 日

『聖教新聞』 2000 年 10 月 21 日

『聖教新聞』 2000 年 10 月 31 日

『聖教新聞』 2000 年 11 月 14 日

【シンガポール】

『聖教新聞』 2000 年 11 月 25 日

『聖教新聞』 2000 年 11 月 26 日

『聖教新聞』 2000 年 11 月 27 日

【マレーシア】

『聖教新聞』 2000 年 12 月 1 日

『聖教新聞』 2000 年 12 月 2 日

『聖教新聞』 2000 年 12 月 3 日

【香港】

『聖教新聞』 2000 年 12 月 6 日

『聖教新聞』 2000 年 12 月 7 日

『聖教新聞』 2000 年 12 月 8 日

『聖教新聞』 2000 年 12 月 9 日

『SUN』 第 30 号

6 学生・卒業生の活躍 (183 ~ 186 頁)

創価友誼之証

『創価大学三十年誌 学生篇』 創価大学学生自治会、2001 年
寮生の活躍

『聖教新聞』 1995 年 5 月 29 日

『聖教新聞』 1998 年 6 月 7 日

- 『聖教新聞』1998年6月8日
『SUN』第11号
ダ・ヴィンチ賞
『SUN』第29号
就職実績・卒業生の活躍
『SUN』第13号
『SUN』第24号
『SUN』第29号
『創価大学新聞』第220号
『聖教新聞』1995年11月23日
クラブ・ゼミの主な活躍・学生表彰等
【パン・アフリカン友好会】
『キャンパスニュース』第7号
【ロック研究会】
『キャンパスニュース』第8号
【硬式野球部】
『キャンパスニュース』第10号
『SUN』第11号
『創価大学三十年誌 学生篇』創価大学学生自治会、2001年
【クルーダンス部】
『キャンパスニュース』第11号
『キャンパスニュース』第12号
『聖教新聞』1994年7月25日
『聖教新聞』1995年9月12日
『聖教新聞』1997年9月25日
【トライアスロン愛好会】
『創大ニュース』第78号
【南太平洋研究会】
『SUN』第16号
『SUN』第19号
『SUN』第23号
【チャリーダーズ「パンサーズ」】
『聖教新聞』1994年12月16日
【落語研究会】
『聖教新聞』1995年12月13日

- 『聖教新聞』 1997 年 1 月 19 日
『聖教新聞』 1998 年 3 月 15 日
『聖教新聞』 1998 年 10 月 4 日
- 【ゴールデンベルリンガーズ】
『SUN』 第 10 号
- 【Mission Hands (ミッション・ハンズ)】
『聖教新聞』 1996 年 11 月 5 日
- 【工学部黒木研究室】
『SUN』 第 12 号
『SUN』 第 28 号
『SUN』 第 20 号
『SUN』 第 24 号
- 【ロイヤルキルティーズ】
『SUN』 第 15 号
『聖教新聞』 1997 年 8 月 23 日
- 【準硬式野球部】
『聖教新聞』 1998 年 9 月 6 日
- 【ヨット部】
『聖教新聞』 1999 年 3 月 25 日
- 【フルコンタクト空手道部丈夫会】
『聖教新聞』 1996 年 3 月 1 日
『聖教新聞』 1998 年 11 月 12 日
- 【吹奏楽部】
『SUN』 第 27 号
- 創友会の活動
- 【クラブ活動への支援】
『SUN』 第 7 号
- 【年会費制度・創友会カードの導入】
『SUN』 第 3 号
『SUN』 第 11 号
『SUN』 第 12 号
- 【創友会館移転】
『SUN』 第 13 号
『SUN』 第 39 号
- 【奨学金制度等の支援拡充】

『SUN』第23号

『SUN』第24号

『SUN』第21号

『SUN』第19号

【同窓の集い】

『SUN』第25号

7 キャンパス整備 (186～189頁)

創立25周年に向けた整備

【桜香寮 (A棟・B棟)】

『創大通信』第56号

【学朋寮 (国際友好寮)】

『創大ニュース』第77号

『創価大学要覧』平成5年度版

【研究所棟・国際交流センター】

『キャンパスニュース』第13号

『創大通信』第60号

『創大ニュース』第79号

『聖教新聞』1995年5月9日

【A棟と周辺の整備】

『SUN』第5号

【ニュープリンス食堂】

『SUN』第6号

【ウィズダムホール】

『SUN』第7号

【中央図書館増築】

『聖教新聞』1996年4月2日

『SUN』第9号

『SUN』第10号

【AVライブラリー改装】

『SUN』第11号

【菅平セミナーハウス増築】

『SUN』第12号

【宝友寮】

『聖教新聞』1994年12月17日

『聖教新聞』1995年12月7日

『聖教新聞』 1997 年 1 月 7 日

『聖教新聞』 1997 年 3 月 30 日

『創価大学新聞』 第 183 号

創大時習館と学生ホール

『聖教新聞』 1997 年 3 月 30 日

『聖教新聞』 1996 年 4 月 2 日

『SUN』 第 9 号

『SUN』 第 6 号

『聖教新聞』 1994 年 3 月 20 日

『聖教新聞』 1996 年 5 月 30 日

『SUN』 第 2 号

『SUN』 第 7 号

『創価大学新聞』 第 187 号

『創価大学要覧』 平成 8 年度版

『創価大学要覧』 平成 9 年度版

創立 30 周年に向けた整備

【保健センター】

『SUN』 第 15 号

『聖教新聞』 1998 年 7 月 12 日

『創価大学新聞』 第 208 号

【箱根セミナーハウス新築】

『SUN』 第 21 号

【体育施設の充実】

『聖教新聞』 1999 年 4 月 8 日

『創価大学新聞』 特報版第 46 号 (1999 年 4 月 16 日)

像・記念碑など

【大学時計】

『創大ニュース』 第 70 号

【飲水思源の碑】

『聖教新聞』 1992 年 3 月 19 日

【学光の塔】

『創大通信』 第 60 号

『聖教新聞』 1993 年 4 月 4 日

『聖教新聞』 1993 年 4 月 7 日

『聖教新聞』 2003 年 2 月 21 日

『聖教新聞』2018年8月12日

『聖教新聞』2019年8月12日

【硬式野球部への指針の碑】

『創価大学三十年誌 学生篇』創価大学学生自治会、2001年

【天の獅子像】

『聖教新聞』1999年7月26日

8 管理・運営 (189～192頁)

広報・メディア掲載・イベント

【大学ランキング】

『創大通信』第55号

『SUN』第17号

【シリーズ『大学は挑戦する』】

『SUN』第9号

【公式ホームページ開設】

『SUN』第10号

【『トップが語る現代経営』発刊】

『SUN』第19号

『聖教新聞』1998年7月31日

【サイエンスサマースクール】

『聖教新聞』2005年7月13日

学生募集・入学試験

『キャンパスニュース』第7号

『キャンパスニュース』第16号

『SUN』第2号

『SUN』第4号

『SUN』第6号

『SUN』第10号

『SUN』第14号

『SUN』第19号

『SUN』第27号

『SUN』第28号

『SUN』第29号

教員組織

『キャンパスニュース』第10号

『創価大学新聞』第206号

国内諸機関・近隣との交流

【出雲市長来学】

『創大通信』 第 57 号

【函館市長来学】

『SUN』 第 16 号

【トップが語る現代経営】

『SUN』 第 9 号

【菊花展示会】

『聖教新聞』 1999 年 11 月 5 日

福利厚生・奨学金

【交通事故防止委員会】

『聖教新聞』 1992 年 10 月 2 日

【派遣留学生奨学金制度】

『SUN』 第 2 号

『キャンパスニュース』 第 17 号

【学生証の磁気カード化】

『SUN』 第 5 号

【牧口記念教育基金会留学生奨学金】

『聖教新聞』 1996 年 7 月 12 日

【新入生ガイドブック CD-ROM 化】

『SUN』 第 22 号

【食堂の充実】

『創価大学新聞』 第 206 号

就職支援

【地方公務員センター・行政教育センター】

『SUN』 第 2 号

【ジャーナリズムセンター】

『SUN』 第 12 号

【企業研究講座の開講】

『創価大学新聞』 第 201 号

『SUN』 第 18 号

『創価大学新聞』 第 206 号

【就職講座の充実】

『SUN』 第 23 号

『SUN』 第 24 号

『SUN』第27号

阪神・淡路大震災後の対応

『SUN』第5号

『創価大学新聞』特報版第21号

『自治会新報』号外（1995年2月6日）

『聖教新聞』1995年2月4日

周年事業

【創立25周年記念事業】

『SUN』第3号

『聖教新聞』1995年12月25日

【創立30周年記念事業】

『SUN』第26号

第7章 2001年度～2010年度

1 創立30周年と「第二の草創期」（194～198頁）

「創立者の日」記念行事と『三十年誌』、「50年史」構想

『SUN』第28号

『池田大作全集』第142巻、聖教新聞社、2013年

『創価大学新聞』第213号

『聖教新聞』2001年4月20日

『聖教新聞』2001年4月29日

『創価大学三十年誌 学生篇』創価大学学生自治会、2001年

財政改革の取り組み

川島直子・福田素子『「世界基準の授業」をつくれ』時事通信出版局、2012年

『創価大学三十年誌 学生篇』創価大学学生自治会、2001年

『創価大学新聞』第222号

「学生のための大学」と特別文化講座

『池田大作全集』第142巻、聖教新聞社、2013年

『池田大作全集』第133巻、聖教新聞社、2011年

『聖教新聞』2002年5月3日

『池田大作全集』第143巻、聖教新聞社、2014年

『聖教新聞』2002年10月1日

『聖教新聞』2003年2月13日

『SUN』第37号

『創立者の語らい』特別文化講座・随筆・長編詩篇、創価大学学生自治会、2006年

『聖教新聞』 2003 年 3 月 11 日

第二の草創期

『SUN』 第 37 号

『池田大作全集』 第 134 巻、聖教新聞社、2011 年

『聖教新聞』 2003 年 11 月 14 日

『聖教新聞』 2004 年 3 月 20 日

『新・人間革命』 第 15 巻、聖教新聞社、2006 年

『創価大学 創立の精神を学ぶ』 創価大学、2007 年

『創価大学 創立の精神を学ぶ』 改訂版、創価大学、2014 年

『聖教新聞』 2004 年 3 月 19 日

『聖教新聞』 2004 年 1 月 9 日

『聖教新聞』 2004 年 1 月 23 日

『聖教新聞』 2005 年 3 月 16 日

『聖教新聞』 2005 年 3 月 19 日

『聖教新聞』 2005 年 3 月 24 日

『創立者の語らい』 特別文化講座・随筆・長編詩篇、創価大学学生自治会、2006 年

『創立者の語らい』 第 22 巻、創価大学学生自治会、2012 年

2 世界市民の育成を目指す教育プログラム (198 ~ 202 頁)

経済学部復興をかけた IP

川島直子・福田素子 『「世界基準の授業」をつくれ』 時事通信出版局、2012 年

IP の進化と展開、成果の現われ

川島直子・福田素子 『「世界基準の授業」をつくれ』 時事通信出版局、2012 年

特色 GP、就業力 GP に採択

川島直子・福田素子 『「世界基準の授業」をつくれ』 時事通信出版局、2012 年

『SUN』 第 55 号

『SUN』 第 68 号

文学部にデュアル・ディグリーコースを開設

『聖教新聞』 2011 年 3 月 11 日

『SUN』 第 71 号

建学の精神に基づく世界市民育成・GCP

佐々木論 「グローバル・シティズンシップ・プログラムにおける学びと成果」 『学士課程教育機構研究誌』 第 3 号

『SUN』 第 63 号

GCP のラーニング・コミュニティ

『SUN』 第 63 号

『聖教新聞』2013年1月8日

佐々木論「グローバル・シティズンシップ・プログラムにおける学びと成果」『学士課程教育機構研究誌』第3号

GCP生が目覚ましい活躍

佐々木論「グローバル・シティズンシップ・プログラムにおける学びと成果」『学士課程教育機構研究誌』第3号

創価大学ウェブサイト 2015年3月27日

3 専門職大学院 (202～204頁)

法科大学院 (大学院法務研究科法務専攻)

『聖教新聞』2003年11月28日

『聖教新聞』2004年3月31日

『創価ロージャーナル』第1号

『キャンパスガイド2008』

『SUN』第46号

『創価ロージャーナル』第2号

『SUN』第56号

教職大学院 (大学院教職研究科教職専攻)

『聖教新聞』2008年4月3日

『キャンパスガイド2008』

『キャンパスガイド2009』

「創価大学大学院教職研究科教職専攻認証評価結果」教員養成評価機構、2011年

4 創価大学グランドデザインの策定 (204～208頁)

自己点検・評価の取り組み

『SUN』第31号

『SUN』第34号

大学基準協会「認証評価」結果

「創価大学に対する大学評価結果ならびに認証評価結果」大学基準協会

「教育第一」への取り組みがGPに採択

『SUN』第39号

『SUN』第50号

『聖教新聞』2007年8月4日

『SUN』第64号

『SUN』第63号

創価コアプログラムの導入

『SUN』第61号

寺西宏友「創価大学教育改善サイクルの方向性」『学士課程教育機構研究誌』第 1 号
グランドデザインの策定

『SUN』第 65 号

「知力」の中核担う学士課程教育機構

寺西宏友「創価大学教育改善サイクルの方向性」『学士課程教育機構研究誌』第 1 号

5 教育・研究 (208 ~ 212 頁)

学科・大学院の拡充

【臨床心理士養成コース開設】

『SUN』第 34 号

『心理教育相談室年報』第 1 号

【通教で司書教諭講座を開講】

『SUN』第 30 号

【工学部環境共生工学科新設】

『キャンパスガイド 2003』

【文学部は人間学科 7 専修制に改組】

『SUN』第 50 号

『聖教新聞』2006 年 7 月 7 日

『聖教新聞』2007 年 4 月 3 日

【大学院国際言語教育専攻】

『SUN』第 59 号

『聖教新聞』2008 年 8 月 6 日

IT 環境の基盤整備と情報教育の強化

【総合情報センター】

「2001 年度 創価大学教育ビジョン」

「2003 年度 創価大学教育ビジョン」

『SUN』第 36 号

『SUN』第 29 号

【ウェブ履修・学生ポータル】

『SUN』第 45 号

創価教育研究所を設置

『聖教新聞』2006 年 4 月 3 日

『聖教新聞』2007 年 3 月 5 日

「ジョン・デューイ研究センター」創価大学ウェブサイト

「沿革」創価大学ウェブサイト

特色ある教育を目指す改革

【履修制限と早期卒業】

『SUN』第32号

【キャリア教育科目群の新設】

『キャンパスガイド2006』

『キャンパスガイド2007』

「2006年度 創価大学教育ビジョン」

「2007年度 創価大学教育ビジョン」

【経済学部JASプログラムの開講】

『キャンパスガイド2010』

『キャンパスガイド2011』

FD委員会の発足

「2008年度 創価大学教育ビジョン」

「授業外学習時間の増加へ向けた試み」創価大学ウェブサイト

文部科学省に採択された特色ある取組

『SUN』第55号

『聖教新聞』2004年9月16日

『聖教新聞』2007年8月4日

『SUN』第58号

『聖教新聞』2009年9月17日

『SUN』第63号

創価大学ウェブサイト2009年7月15日

『SUN』第68号

6 国際交流 (212～225頁)

2001-02年：SUA オレンジ郡キャンパスが開学

『聖教新聞』2001年2月17日

『聖教新聞』2001年2月18日

『聖教新聞』2001年2月19日

『創価学会三代会長年譜』下巻(2)、創価学会、2011年

『SUN』第29号

『聖教新聞』2001年3月7日

『聖教新聞』2001年3月15日

『聖教新聞』2001年4月12日

『聖教新聞』2001年5月5日

『SUN』第30号

『池田大作全集』第142巻、聖教新聞社、2013年

『聖教新聞』 2001 年 5 月 6 日

『聖教新聞』 2001 年 5 月 23 日

『聖教新聞』 2001 年 5 月 24 日

『聖教新聞』 2001 年 6 月 5 日

『聖教新聞』 2001 年 6 月 9 日

『聖教新聞』 2001 年 6 月 7 日

『聖教新聞』 2001 年 8 月 2 日

『SUN』 第 31 号

『聖教新聞』 2001 年 8 月 24 日

『聖教新聞』 2001 年 8 月 27 日

『聖教新聞』 2001 年 9 月 9 日

『聖教新聞』 2001 年 10 月 2 日

『聖教新聞』 2001 年 10 月 18 日

高橋強「中国における「池田思想」研究の現状」『創価教育研究』 第 3 号

『SUN』 第 33 号

『聖教新聞』 2002 年 1 月 1 日

『聖教新聞』 2002 年 1 月 6 日

『聖教新聞』 2002 年 1 月 13 日

『聖教新聞』 2002 年 3 月 15 日

『聖教新聞』 2002 年 3 月 16 日

『聖教新聞』 2002 年 3 月 28 日

『聖教新聞』 2002 年 3 月 29 日

『SUN』 第 34 号

『聖教新聞』 2002 年 4 月 4 日

『聖教新聞』 2002 年 4 月 5 日

『聖教新聞』 2002 年 4 月 26 日

『聖教新聞』 2002 年 4 月 27 日

『聖教新聞』 2002 年 6 月 9 日

『聖教新聞』 2002 年 6 月 11 日

『聖教新聞』 2002 年 6 月 15 日

『聖教新聞』 2002 年 6 月 16 日

『聖教新聞』 2002 年 6 月 8 日

『聖教新聞』 2002 年 7 月 13 日

『SUN』 第 35 号

『聖教新聞』 2002 年 9 月 12 日

『聖教新聞』 2002年10月25日
『聖教新聞』 2002年10月27日
『聖教新聞』 2002年10月28日
『聖教新聞』 2002年10月29日
『聖教新聞』 2002年10月30日
『聖教新聞』 2002年10月31日
『聖教新聞』 2003年2月15日
『聖教新聞』 2002年12月11日
『聖教新聞』 2002年12月12日
『聖教新聞』 2002年3月20日

2003-04年：池田研究機関が世界10カ所に

『聖教新聞』 2003年2月14日
『聖教新聞』 2003年2月15日
『聖教新聞』 2003年2月17日
『聖教新聞』 2003年2月18日
『聖教新聞』 2003年11月18日
『聖教新聞』 2003年9月27日
『聖教新聞』 2003年3月3日

高橋強「中国における「池田思想」研究の現状」『創価教育研究』第3号

『聖教新聞』 2006年1月1日
『聖教新聞』 2003年3月20日
『聖教新聞』 2003年5月28日
『SUN』 第38号
『SUN』 第39号
『聖教新聞』 2003年8月5日
『聖教新聞』 2003年9月5日
『SUN』 第40号
『聖教新聞』 2003年12月5日
『聖教新聞』 2004年1月11日
『聖教新聞』 2004年1月12日
『SUN』 第41号
『聖教新聞』 2004年3月11日
『聖教新聞』 2004年3月13日
『聖教新聞』 2004年3月25日
『聖教新聞』 2007年8月25日

『SUN』 第 43 号

『聖教新聞』 2004 年 9 月 15 日

『聖教新聞』 2004 年 10 月 18 日

『聖教新聞』 2004 年 10 月 19 日

『創価学会三代会長年譜』 下巻（2）、創価学会、2011 年

『聖教新聞』 2004 年 10 月 24 日

『聖教新聞』 2004 年 10 月 26 日

『SUN』 第 44 号

『聖教新聞』 2004 年 4 月 22 日

2005 - 06 年：池田大作思想国際学術シンポジウムを北京大学で開催

『聖教新聞』 2005 年 1 月 31 日

『聖教新聞』 2005 年 3 月 10 日

『聖教新聞』 2005 年 2 月 19 日

『聖教新聞』 2005 年 2 月 20 日

『聖教新聞』 2005 年 3 月 12 日

『聖教新聞』 2005 年 3 月 20 日

『SUN』 第 45 号

『聖教新聞』 2005 年 4 月 2 日

『聖教新聞』 2005 年 4 月 13 日

『SUN』 第 46 号

『聖教新聞』 2005 年 5 月 18 日

『聖教新聞』 2005 年 5 月 26 日

『聖教新聞』 2005 年 5 月 27 日

高橋強「中国における「池田思想」研究の動向（2）」『創価教育研究』 第 5 号

『聖教新聞』 2007 年 8 月 25 日

『聖教新聞』 2005 年 7 月 12 日

『聖教新聞』 2005 年 7 月 13 日

『聖教新聞』 2005 年 10 月 16 日

『創価学会三代会長年譜』 下巻（2）、創価学会、2011 年

高橋強「中国における「池田思想」研究の動向（3）」『創価教育研究』 第 6 号

『SUN』 第 48 号

『聖教新聞』 2005 年 12 月 3 日

『聖教新聞』 2005 年 12 月 14 日

『聖教新聞』 2005 年 6 月 18 日

『聖教新聞』 2005 年 10 月 26 日

『聖教新聞』2006年1月31日

『聖教新聞』2006年2月18日

『SUN』第49号

『聖教新聞』2006年3月8日

『聖教新聞』2006年3月6日

『聖教新聞』2006年4月28日

『聖教新聞』2006年4月29日

『SUN』第50号

『聖教新聞』2006年5月4日

『聖教新聞』2006年6月15日

『聖教新聞』2006年7月4日

『SUN』第51号

『聖教新聞』2006年7月15日

『聖教新聞』2006年10月8日

『聖教新聞』2006年11月3日

『聖教新聞』2006年11月4日

『聖教新聞』2006年11月5日

『聖教新聞』2006年11月7日

『SUN』第52号

『聖教新聞』2006年10月19日

『聖教新聞』2006年12月1日

『国際仏教学高等研究所・年報』第10号

『SUN』第53号

『聖教新聞』2006年9月20日

『聖教新聞』2006年11月22日

2007-08年：本学の交流大学が100を突破

『聖教新聞』2007年1月17日

『聖教新聞』2007年2月3日

『SUN』第53号

『聖教新聞』2007年3月1日

『聖教新聞』2007年3月5日

『聖教新聞』2007年5月18日

『聖教新聞』2007年3月26日

『聖教新聞』2007年4月4日

『聖教新聞』2007年4月13日

『聖教新聞』 2007 年 5 月 24 日

『聖教新聞』 2007 年 5 月 28 日

『聖教新聞』 2007 年 6 月 12 日

『SUN』 第 54 号

『聖教新聞』 2007 年 7 月 30 日

『聖教新聞』 2007 年 8 月 25 日

『聖教新聞』 2007 年 9 月 26 日

『聖教新聞』 2007 年 9 月 29 日

『聖教新聞』 2007 年 10 月 18 日

『聖教新聞』 2007 年 10 月 22 日

『聖教新聞』 2007 年 10 月 14 日

『聖教新聞』 2007 年 10 月 25 日

『聖教新聞』 2008 年 1 月 4 日

『聖教新聞』 2007 年 12 月 23 日

『聖教新聞』 2008 年 2 月 29 日

『聖教新聞』 2008 年 3 月 4 日

『聖教新聞』 2008 年 2 月 19 日

『聖教新聞』 2008 年 2 月 23 日

『聖教新聞』 2008 年 3 月 19 日

『聖教新聞』 2008 年 4 月 5 日

『聖教新聞』 2008 年 6 月 7 日

『聖教新聞』 2008 年 11 月 28 日

『聖教新聞』 2008 年 12 月 23 日

『聖教新聞』 2008 年 5 月 9 日

『聖教新聞』 2008 年 5 月 25 日

高橋強「中国における「池田思想」研究の動向 (5)」『創価教育』 第 2 号

『SUN』 第 58 号

『聖教新聞』 2008 年 8 月 13 日

『SUN』 第 59 号

『聖教新聞』 2008 年 9 月 15 日

『聖教新聞』 2008 年 10 月 26 日

『聖教新聞』 2008 年 9 月 27 日

『聖教新聞』 2008 年 9 月 29 日

『SUN』 第 60 号

『聖教新聞』 2008 年 9 月 20 日

- 『聖教新聞』2008年11月30日
2009-10年：創立者の名誉学術称号が300に
- 『聖教新聞』2009年1月16日
『聖教新聞』2009年1月23日
『聖教新聞』2009年2月3日
『聖教新聞』2009年2月25日
『聖教新聞』2009年2月24日
『SUN』第61号
『聖教新聞』2009年3月22日
『聖教新聞』2009年5月13日
『聖教新聞』2009年5月19日
『聖教新聞』2009年5月20日
『聖教新聞』2009年7月2日
『聖教新聞』2009年10月3日
『聖教新聞』2009年10月1日
『SUN』第64号
『聖教新聞』2009年10月27日
『聖教新聞』2009年10月26日
『聖教新聞』2009年10月24日
『聖教新聞』2009年10月28日
『聖教新聞』2009年11月19日
『聖教新聞』2009年11月20日
『聖教新聞』2009年11月21日
『SUN』第65号
『聖教新聞』2009年12月10日
高橋強「中国における「池田思想」研究の動向(6)」『創価教育』第3号
『聖教新聞』2010年1月29日
『聖教新聞』2010年2月23日
『聖教新聞』2010年3月5日
『聖教新聞』2010年3月10日
『聖教新聞』2010年3月14日
『聖教新聞』2010年3月22日
高橋強「中国における「池田思想」研究の動向(7)」『創価教育』第4号
『聖教新聞』2010年4月3日
『SUN』第66号

『聖教新聞』 2010 年 5 月 5 日

『聖教新聞』 2010 年 5 月 14 日

『聖教新聞』 2010 年 6 月 20 日

『SUN』 第 67 号

『聖教新聞』 2010 年 7 月 17 日

創価大学ウェブサイト 2010 年 7 月 25 日

『聖教新聞』 2010 年 9 月 7 日

『聖教新聞』 2010 年 10 月 17 日

『聖教新聞』 2010 年 11 月 11 日

『聖教新聞』 2010 年 11 月 8 日

『SUN』 第 68 号

『聖教新聞』 2010 年 11 月 22 日

『聖教新聞』 2010 年 11 月 28 日

7 学生・卒業生の活躍 (225 ~ 230 頁)

全学読書運動 Soka Book Wave

『聖教新聞』 2012 年 4 月 27 日

『SUN』 第 46 号

『SUN』 第 50 号

『SUN』 第 52 号

『SUN』 第 53 号

『SUN』 第 54 号

『SUN』 第 63 号

『SEASON』 第 14 号

「全学読書運動 Soka Book Wave 2007 が始動！」 創価大学ウェブサイト

『SUN』 第 61 号

寮歌「青春の城」「希望の光」誕生

『聖教新聞』 2005 年 6 月 25 日

『聖教新聞』 2005 年 6 月 28 日

『聖教新聞』 2005 年 7 月 8 日

『聖教新聞』 2005 年 8 月 3 日

『SUN』 第 47 号

『SUN』 第 52 号

『聖教新聞』 2005 年 9 月 28 日

シュリーマン賞

『SUN』 第 64 号

『SUN』第68号

工学部生制作の人工衛星が宇宙へ

『SUN』第59号

『SUN』第60号

『SUN』第62号

『SUN』第66号

『SUN』第67号

『キャンパスガイド2011』

『聖教新聞』2010年5月11日

『聖教新聞』2010年5月22日

『聖教新聞』2010年5月30日

クラブ・ゼミの主な活躍・学生表彰等

【バイオニア吹奏楽団】

『SUN』第32号

【ディベートネットワーク】

『聖教新聞』2001年6月19日

『聖教新聞』2004年12月23日

『聖教新聞』2009年12月15日

『聖教新聞』2009年11月5日

『SUN』第31号

『SUN』第64号

【陸上競技部駅伝チーム】

『聖教新聞』2003年1月4日

『聖教新聞』2005年1月4日

『聖教新聞』2010年1月4日

『聖教新聞』2011年1月4日

『SUN』第65号

『SUN』第69号

創価大学ウェブサイト2010年1月2日

創価大学ウェブサイト2010年1月3日

創価大学ウェブサイト2011年1月2日

創価大学ウェブサイト2011年1月3日

【経営学部・栗山直樹ゼミ】

『聖教新聞』2004年6月11日

『SUN』第42号

「日本監査役協会設立 30 周年記念 懸賞論文」受賞論文（その他報告）日本監査役協会ウェブサイト

【鳥人間研究会】

『聖教新聞』2006 年 7 月 24 日

『SUN』第 47 号

『SUN』第 51 号

【フルコンタクト空手道部丈夫会】

『聖教新聞』2006 年 6 月 12 日

『聖教新聞』2008 年 11 月 3 日

『SUN』第 50 号

『SUN』第 60 号

【落語研究会】

『聖教新聞』2011 年 3 月 8 日

『SUN』第 61 号

創価大学ウェブサイト 2007 年 3 月 1 日

『聖教新聞』2007 年 3 月 13 日

『聖教新聞』2010 年 4 月 1 日

『SUN』第 53 号

【銀嶺合唱団】

『SUN』第 56 号

【経済学理論同好会】

『聖教新聞』2008 年 1 月 23 日

『SUN』第 59 号

『SUN』第 63 号

『SUN』第 67 号

『SUN』第 71 号

『SUN』第 75 号

創価大学ウェブサイト 2008 年 1 月 20 日

創価大学ウェブサイト 2013 年 3 月 8 日

【柔道部】

『聖教新聞』2008 年 6 月 29 日

『聖教新聞』2008 年 6 月 30 日

『聖教新聞』2010 年 6 月 27 日

創価大学ウェブサイト 2010 年 6 月 26 日

【硬式野球部】

『SUN』第66号

『SUN』第68号

『SUN』第46号

『SUN』第54号

『SUN』第62号

『SUN』第36号

『SUN』第48号

『聖教新聞』2010年10月19日

創価大学ウェブサイト2010年6月4日

『創価大学三十年誌 学生篇』創価大学学生自治会、2001年
就職実績など

【教員採用試験】

『SUN』第53号

【各種国家試験】

『SUN』第64号

『キャンパスガイド2011』

創友会とその活動

『SUN』第42号

『SUN』第44号

『SUN』第50号

『SUN』第64号

8 キャンパス整備 (230～233頁)

学生寮の再編・整備

【滝山寮改修工事】

『SUN』第35号

『キャンパスガイド2004』

【学生寮の再編】

『SUN』第37号

【桂冠寮・正義寮・創英寮】

『SUN』第43号

『聖教新聞』2004年2月23日

『聖教新聞』2006年5月8日

【創春寮】

『聖教新聞』2008年3月18日

『SUN』第52号

『SUN』 第 57 号

総合体育館と新グラウンド

【池田記念グラウンド】

『聖教新聞』 2008 年 4 月 6 日

『聖教新聞』 2008 年 6 月 10 日

【総合体育館・ピクトリーグラウンド】

『SUN』 第 61 号

『聖教新聞』 2009 年 3 月 19 日

【記念事業寄付者銘板】

『聖教新聞』 2009 年 4 月 2 日

創大門と創大シルクロード

『聖教新聞』 2009 年 3 月 31 日

【創大門、創大シルクロード】

『聖教新聞』 2004 年 1 月 8 日

『聖教新聞』 2004 年 4 月 2 日

『SUN』 第 58 号

『SUN』 第 61 号

『創価大学新聞』 第 226 号

『SUN』 第 41 号

【誓願の丘に創価教育万代之碑】

『創立者の語らい』 第 19 巻、創価大学学生自治会、2009 年

『聖教新聞』 2007 年 10 月 7 日

『聖教新聞』 2009 年 1 月 17 日

大教室棟・タゴール広場

『聖教新聞』 2009 年 9 月 9 日

創価大学ウェブサイト 2009 年 9 月 8 日

『SUN』 第 63 号

【大教室棟】

『SUN』 第 65 号

【タゴール像とタゴール広場】

『創価大学要覧』 平成 6 年度版

『SUN』 第 3 号

像、記念碑など

【平和時計、栄光時計】

『聖教新聞』 2001 年 11 月 5 日

『SUN』第32号

『SUN』第35号

【通教生への長編詩（碑）】

『聖教新聞』2001年8月15日

【日中友好之碑】

『聖教新聞』2003年9月5日

『SUN』第39号

【アリシエール・ナワイー像】

『聖教新聞』2004年3月27日

【教務課窓口のオープン化】

『SUN』第40号

【学生歌の壁画】

『聖教新聞』2004年7月27日

『聖教新聞』2004年12月12日

【人間野球に真の人生の勝利（碑）】

『聖教新聞』2005年11月19日

【経済学部ラウンジ FEEL (Faculty of Economics Education Lounge)】

『SUN』第56号

【図書館の拡充】

『聖教新聞』2008年4月5日

『聖教新聞』2008年4月7日

『SUN』第58号

9 管理・運営 (234～238頁)

周年記念行事

【学生主導の創立30周年記念行事】

『SUN』第31号

『SUN』第30号

【創立35周年】

『SUN』第45号

『SUN』第50号

【学生主催の創立40周年記念祝賀祭】

『SUN』第64号

創価大学ウェブサイト 2010年11月7日

『SUN』第68号

『聖教新聞』2010年11月7日

キャリア・就職支援

【インターンシップ制度】

『SUN』 第 29 号

『SUN』 第 30 号

『SUN』 第 47 号

『聖教新聞』 2006 年 9 月 27 日

【キャリアセンター発足】

『SUN』 第 54 号

『SUN』 第 44 号

【教職キャリア支援】

『SUN』 第 53 号

【グローバルリーダーカレッジ (GLC)】

『SUN』 第 92 号

福利厚生・奨学金

【創学サービスの発足】

『SUN』 第 31 号

「売店や各種サービス」創価大学ウェブサイト

『SUN』 第 44 号

【学生支援センター】

『SUN』 第 43 号

『SUN』 第 40 号

【学生ホールにサブウェイ】

創価大学ウェブサイト 2009 年 2 月 27 日

『SUN』 第 61 号

【3つの学生食堂がリニューアル】

『SUN』 第 60 号

【返還不要の奨学金制度】

『SUN』 第 67 号

国内諸機関・近隣との交流

【第 27 回日本スタインベック学会】

『SUN』 第 38 号

【八王子市教委研修会】

『SUN』 第 39 号

『SUN』 第 43 号

【外部講師による職員研修】

『SUN』第51号

『SUN』第52号

『SUN』第50号

【放送大学との単位互換】

『SUN』第53号

【第76回社会経済史学会全国大会】

『SUN』第54号

【活字文化公開講座】

『聖教新聞』2007年6月16日

『SUN』第66号

【東京外大学長来学】

『SUN』第64号

学生募集・入学試験

【4タイプの入試に制度変更】

『SUN』第32号

『SUN』第47号

【過去最高の志願者数に】

『SUN』第49号

『SUN』第53号

【入試部長】

『SUN』第57号

【センター試験利用入試（後期）導入】

『SUN』第68号

保護者教育相談会

『SUN』第39号

『SUN』第40号

メディア掲載・イベント

【牧口常三郎の映像評伝】

『SUN』第46号

【変革する大学シリーズ】

『SUN』第48号

『SUN』第57号

【大学ランキング】

『SUN』第50号

『SUN』第54号

【大学実力ランキング】

『聖教新聞』 2006 年 10 月 12 日

【キャンパス・エコツアー】

『SUN』 第 58 号

『SUN』 第 59 号

『SUN』 第 62 号

『SUN』 第 66 号

【21 世紀大学教育セミナー】

『SUN』 第 63 号

『SUN』 第 70 号

危機管理

【麻疹による全学休講と授業再開】

「創価大学における麻疹対応」『IASR』 vol.28、2007 年 9 月号

『聖教新聞』 2007 年 5 月 8 日

【全学総合防災訓練】

創価大学ウェブサイト 2010 年 7 月 14 日

『SUN』 第 96 号

書評

「創価教育の源流」編纂委員会『評伝戸田城聖—創価教育の源流第2部』

松井慎一郎

「クリティカル・バイオグラフィ」の力作

創価大学創立50周年にあたる2021年、『評伝戸田城聖（下）』が発刊され、『評伝牧口常三郎』（2017年）、『評伝戸田城聖（上）』（2019年）と合わせて全3巻におよぶ『創価教育の源流』がここに完結した。月刊誌『第三文明』2013年1月号の連載以来、足掛け8年にわたり執筆の労をとられた編纂委員会の方々に、まずはお祝い申し上げたい。

かつて仏文学者の清水徹が英文学者の篠田一士に「クリティカル・バイオグラフィって何だい？」と質問した時、篠田は「資料を厳密に扱った伝記、それをクリティカル・バイオグラフィというんだ」と答えたという¹。「執筆にあたっては、可能な限り実証的に記述して、注や参考資料は煩瑣をいとわずできるだけ詳細に掲載した」（上P1）、「目指したのは、近年見つかった多くの新資料をも考察し、牧口常三郎・戸田城聖・池田大作の三人に流れてきたものとは何かを探究すること」（下P524）という方針のもと、未公開のものを含め膨大な資料をその時代状況を踏まえながら丁寧に読み解き、戸田城聖という巨人の全体像を見事に浮かび上がらせた本書は、まさに、篠田のいう「クリティカル・バイオグラフィ」の力作と呼ぶにふさわしい。

本書は、戸田の青少年期や牧口常三郎との師弟関係を扱った上巻と、創価学会の再建・躍進および「不二の弟子」池田大作との共戦を扱った下巻から成り、前者は「第1章 志を抱いて」、「第2章 働きながら学ぶ」、「第3章 創価教育学会の創立」、「第4章 国家権力による弾圧」、後者は「第5章 学会組織の再建」、「第6章 後継の育成」、「第7章 願業を達成」という章立てで構成されている。

幼少期から青年期における足跡の明確化

日本近現代史を専攻する評者がまず注目したいのは、従来、明確ではなかった幼少期から青年期における戸田の足跡が鮮明になったことである。

これまでの伝記や年譜²によると、戸田が生誕地の石川県塩屋村から北海道厚田村へ移住した

Shinichiro Matsui（聖学院大学人文学部教授）

¹ 丸谷才一「伝記はなぜイギリスで繁栄したか」『考える人』No25、2008年8月、P38。

² たとえば、西野辰吉『戸田城聖伝』（第三文明社、1997年）や『偉大なる師弟の道 戸田城聖』（潮出版社、2000年）など。

のは、1902年のことで、それは一家総出のこととされてきた。しかし、本書では、姉てるの出生届や札幌地方法務局の建物閉鎖登記簿などを参考に、1898年に北前船の船乗りであった父甚七が寄港地の厚田村に寄留し、1903年には同村に家屋を購入した事実を明らかにし、『貳拾五周年記念 事業及人物』（東京電報通信社、1938年）の「幼少五歳の時厳父と共に北海道に渡り」との記述から、戸田の移住を1904年のこととしている（上P17）。

これまで青少年期の戸田の心境を語る資料は、1914年9月から1922年4月までの期間に断続的に記されていた手記³に限られていたが、本書では、厚田小学校の恩師で詩人であった支部貞助らが創刊した文芸同人誌『囁き』の存在を発見し、同誌第4号（1918年5月）から第12号（1919年2月）まで（第9号を除く）、戸田が「桜桃」や「あかん坊」の筆名で投稿している文章を確認し紹介している（上P97～100）。同誌第11号（1919年1月）に投稿されたエッセー「きかれましたら答へたい」には、「生きて居て楽しいかときかれましたら、楽しいと答へたい。なぜかときかれましたら苦勞を時々するからだ、と答へたい」と記されており、「われわれは、ほんとうは、楽しむために生まれてきたのである。おしるこに少量の塩を加えて甘みを増すごとく、苦しみがあるから楽しめる⁴」という後年の「絶対的幸福」観の萌芽をすでに見ることができるのである。

また、戸田の生涯において決定的ともいえる恩師牧口常三郎との出会いに関しても、従来の伝記や年譜では、1920年4月のこととしてきたが、本書では、戸田と同じ頃に牧口の面接を受けて西町尋常小学校訓導となった窪田正隆の手記と弟宛の書簡（1920年2月3日付）に基づき、1920年1月と推測しているのである（上P124）。

創価教育学会創立前後について

そして、創価教育学会創立前後の状況についても、様々な資料を渉猟して新たな歴史的事実を明らかにしている。牧口と戸田の師弟が日蓮仏法に帰依するのは1928年のことであるが、それ以前の宗教遍歴にも触れている。特に注目すべきは、戸田が牧口に連れられて、たびたび古神道の宗教団体・稜威会による禊に参加していることである。稜威会の機関紙『大日本世界教』や関係者の聞書を参考に、少なくとも、1925年8月、1927年8月、1928年8月の3度にわたって、北軽井沢で開催された禊の会に参加していた事実を明らかにしている（上P179、P191）。本書は、当時結核を患っていた戸田の健康回復をはかろうとした牧口の配慮によるものとし（上巻P180）、信仰とは関係のなかったものとして扱っている⁵。

稜威会と牧口の関係については、今後の研究の進展に期待したいが、評者が調査したところによれば、牧口は、稜威会の創立者であった古神道家の川面凡児の死去にさいして、近親者などが集った「納棺祭」（1929年2月）、37名の友人が集った「追慕会」（1929年4月）に参加してい

³ 戸田城聖『若き日の手記・獄中記』（青娥書房、1970年）に所収。

⁴ 戸田城聖「絶対的幸福をうる道」1953年9月、『戸田城聖全集』第4巻、聖教新聞社、1984年、P78。

⁵ 『評伝牧口常三郎』は、牧口自身が禊に参加した理由を「健康のため」と解釈している。「創価教育の源流」編纂委員会編『評伝牧口常三郎—創価教育の源流第1部』第三文明社、2017年、P270。

た⁶。北軽井沢の禊についても、1927年8月の参加時には、時習学館の児童生徒14名を引き連れて参加している⁷。稜威会による禊の行事は、祓や禊の行だけでなく、それを終えたら「振魂」という行法を行うものであった。具体的には、掌を十字に組み、瞑目して渾身の力をこめて組んだ手を振り動かすと同時に、「伊吹」と呼ばれる呼吸法を行い、午前3回、正午1回、午後3回の計7度にわたって実施する。しかも1回のセッションに要する時間は1時間30分から2時間ほどで休息の時間はほとんどない。しかも行のあいだ、食事は5勺ないし1合の粥を1日2回（午前9～10時頃と午後5～6時頃）食べるほかは、白湯以外の飲食は一切禁止であった⁸。絶食に近い状態で激しい運動を一週間繰り返すという「荒行」に、病んでいる戸田や多数の児童生徒まで引き連れてた牧口が、単純に健康維持・回復のために参加したとは考えにくい。

詳細は別の機会に譲ることとするが、評者は、牧口が「祖神の垂示」とよばれる川面凡児の古神道に思想的な関心も寄せていたのではないかと考える⁹。宗教は個人の精神的平安をもたらすだけでなく、社会全体をも幸福安寧に導くものでなければならぬとし、優れた宗教を有する国家が信仰の上で世界を席卷し人類に平和をもたらすと考える川面は、世界の諸宗教・思想との緻密な比較研究を通じて、古神道こそ道義的精神面で世界に冠たる宗教・思想であると主張した¹⁰。世界各国は武力でも経済力でもなく、それぞれの信仰の優劣によって競争し、その勝者が「世界的盟主」になるという川面の「信仰的競争」論は、かつて大著『人生地理学』において「人道的競争」の到来を思い描いていた牧口に大きな示唆を与えるものであったと推測できるのである。牧口は、1929年2月の川面の死去を前後に稜威会を離れ、前年に三谷素啓を通じて出会った日蓮仏法に深入りしていくことになったのであろう。そのことは、『新教』第6巻第4号（1936年4月）の「創価教育学会宗教革命教団報告」中の「吾々の宗教革命団体の起原は昭和四年春、創価教育学体系の第一巻の起稿以前にある」（上P302）との記述とも符合するものである。禊をはじめとする行法と体系的な神学理論を重視する川面の「祖神の垂示」は、信行学の実践を説く日蓮仏法との間で何らかの共通点があったと想定することもできる。ただし、牧口は最終的には古神道ではなく日蓮仏法を選択した。人間を「天之御中主太神」の分魂の「現神」とし、その神霊を顕すために禊をはじめとする行法を行う「祖神の垂示」と、各人が唱題・折伏行によって仏界を顕出し、やがて仏国土を建設するという日蓮仏法との間の、共通点や差異性は興味深いテーマであり、今後の検討が俟たれる。

川面が死去した1929年は、戸田の人生にとっても画期となる年であった。経営する時習学館は、

⁶ 『大日本世界教』第22巻第3・4号、1929年4月、P28、P151。

⁷ 『大日本世界教』第20巻第9号、1927年9月、P20。

⁸ 藤巻一保『天皇の秘教』学研、2009年、P204～205。

⁹ 牧口と川面との関係について、評者はすでに、東洋哲学研究所研究部員会（2021年1月19日）にて「川面凡児と牧口常三郎—「信仰的競争」と「人道的競争」と題する報告を行っている。

¹⁰ 川面の神道に関する著作は膨大な数に及び、その大半が専門的で難解な文で綴られている。比較的、明解で客観性を有し、その宗教論の特徴を示した著書として、『社会組織の根本原理』（稜威会出版部、1921年）をあげることができる。川面の神道思想を論じた最近の研究に、神杉靖嗣「『大日本世界教稜威会』川面凡児の神道思想」（阪本是丸編『近代の神道と社会』弘文堂、2020年）がある。

激しい受験競争という世相のなかで大きく発展、塾舎は3階建に増改築され、中等学校進学希望者のための模擬試験は外部にも広げられ、青山会館大講堂で行われるまでになった（上 P206～210）、また、その年の12月には、初めての著書となる『家庭教育学総論 中等学校入学試験の話と愛児の優等化』（城文堂）も出版している（上 P199）。この本の序の執筆者は、中央大学学長を務めていた馬場愿治であった。当時、戸田が中央大学本科経済学部在籍していたことからすれば特筆すべき事柄ではないかもしれないが、馬場が当時稜威会の会長であった事実を考えると、そこには大学内の単なる師弟関係に止まらないものが存在していたように思える¹¹。1930年3月における戸田の中央大学中退の理由について、本書では、牧口の『創価教育学体系』の出版に専心しようとしたためと推測している（上 P229）が、それに加えて、牧口と共に稜威会を離れ日蓮仏法に専心していったという事実が関係していたと考えるのは、穿ち過ぎであろうか。1930年6月に出版された戸田の『推理式指導算術』では、序の執筆者は牧口になっている。いずれにしても、日蓮仏法との出会いから『創価教育学体系』出版にいたるまでの牧口と戸田の動向については不明な点が多く、今後の研究の進展に期待したい。

「民衆の味方」としての実像

本書は、創価教育学会が日蓮仏法を根本とした宗教運動を本格的に展開するようになっていた頃から、戸田が出版業をはじめとする様々な事業を展開していった様子を詳細に辿り、1941年には、一流実業家の証とでもいえる「交詢社」社員になった事実を明らかにしている（上 P338）。そして、戸田がそのように積極的に事業に乗り出していった理由として、創価教育学会の活動を支えるとともに、創価教育学に基づいた学校の設立という牧口の構想を実現するために財政基盤の確立が欠かせないと考えたからではないかと推測している（上 P338）。こうした推測は、広宣流布という牧口の遺志を引き継ぎ、学会再建のために通信教育や出版事業を始めた戦後の戸田の動向とも一致するものであり、極めて正当な分析といえるだろう。民衆救済という観点に立った牧口と戸田の師弟関係を理解せずに、戸田城聖という人物の実像は解明できない。戸田が生来の俗人で、戦後、創価学会を「事業の代替物」「集金マシン」とみなして発展させていったとする最近の評価¹²への痛烈な批判にもなっている。

下巻は、戦後、創価学会を再建し、青年育成と民衆救済に全力を注いだ戸田の足跡を、多くの資料に基づいて明らかにしている。「実業家」や「宗教家」といった定型的な枠にあてはまらない民衆救済者としての実像を、「戸田先生は権力にも権威にもこびず、貧しい人の、苦勞している民衆の味方でした。庶民の足下の問題を、膝をまじえつつ語り合う時、路地から路地へと一軒

¹¹ 「創価教育の源流」編纂委員会の中心メンバーである塩原將行氏は、もともと馬場と交友のあった牧口が戸田に勧めて馬場に序を書いてもらうように依頼したのではないかと推測している。また、戸田が自序を書いてから出版まで半年のブランクがあることから、馬場の序の執筆が大幅に遅れ、それは牧口・戸田の師弟と馬場との間に何か疎遠になることがあったのではないかと推測している。塩原將行「戸田城外著『中等学校入学試験の話と愛児の優等化』、『創価教育』第3号、2010年3月、P216～217。

¹² 高橋篤史『創価学会秘史』講談社、2018年、P234。

一軒、訪ねている時が、最もうれしそうでした」という池田大作の証言等を交えながら、鮮やかに浮かび上がらせることに成功している。

政界進出の際に「国立戒壇」建立を主張したことから、戸田も宗門同様、「広宣流布＝国立戒壇」という考えを持っていたのではと誤解されることが多いが、本書は、会長に就任した1951年5月に福岡県在住の田中国之に宛てた書簡中の「広宣流布と言へば人皆国立戒壇の建立と目指します。そして政治家より権力者に頼って戒壇建立を考へる愚者があります。そんな考へ方の者を馬鹿と言ふので御座います。(中略)化儀の広宣流布は御本尊流布以外にないのです」という文章を紹介し、そうした誤解を一蹴している(下P154～155)。

戸田の実像を明らかにすることは、そのまま創価学会の実像を明らかにすることでもある。そうした意味では、本書が、創価学会研究という視点からも重要であることは疑う余地がない。佐藤優『池田大作研究』(朝日新聞出版、2020年)の出版や世界各地の学術機関における「池田大作研究所」あるいは「池田大作研究会」の設置¹³に象徴されるように、昨今、アカデミズムの立場から本格的な池田研究の動きが活発になりつつある。池田研究という点でも恩師戸田城聖の実像を伝える本書の刊行は誠に意義深いものであり、今後、創価学会および池田大作研究における基本文献としての命脈を保っていくものと信ずる。

(第三文明社、上2019年、下2021年)

¹³ 中国では今世紀に入ってから、池田思想研究が大きく進展し、これまで44の大学・研究期間に「池田思想研究機関」が設置され、全国規模の学術シンポジウムも10回にわたって行われたという。汪鴻祥『「価値創造」の道—いま、中国で広がる「池田思想」研究』鳳書院、2021年、P34。

書評

渡邊弘著
『創価教育と人間主義』

利 田 律 子

本書は、作新学院大学学長の渡邊弘氏が、「国家のための教育」を「人間のための教育」へと変革する突破口を「創価教育」¹に見だし、その淵源や理念、そして「創価教育」がどのように実践・継承されてきたかをまとめた書である。

五つの章から構成され、第一章では、「創価教育」の源流たる『創価教育学体系』を著した牧口常三郎の生涯、牧口が構築した「創価教育学」の目的や理論的特徴、そして牧口の教育思想の意義を論じている。第二章では、牧口常三郎、戸田城聖、池田大作（以下それぞれ牧口、戸田、池田と表記する）の三代にわたって継承されてきた「創価教育」の精神の特徴を説明し、第三章では、池田がどのように「創価教育」を確立してきたかについて、創価学園・創価大学の設立、創価学会教育部の創設という側面から考察している。第四章では、創価学会教育本部の実践記録運動の意義を論じ、第五章では、人間主義の教育への改革をめざしてと題して、これからの教育・社会に求められる変革を述べている。

本稿では、特に第二章の「創価教育の精神の継承」に着目する。はじめに、第二章の内容を要約し、そのあと、牧口、戸田、池田の教育の理念を学び実践・継承していく上で、評者が本書から得た気づきを、自身の担当する授業での経験とともに紹介したい。

「創価教育の精神の継承」

著者は、牧口が実践をもとに築き上げた「創価教育」の根底に流れる精神は「途切れることも、変更・歪曲されることもなく、現在まで脈々と継承されている」（p. 69）と述べている。また、

Ritsuko Rita（創価大学池田大作記念創価教育研究所客員研究員）

¹ Goulah（2018, 2021, 2022）や Inukai（2021）が指摘しているように、「創価教育」という言葉は、様々な意味を含有する。例えば、牧口常三郎の提唱した「創価教育学」、創価と名の付く教育機関で行われている教育、創価学会員の教員が実践する教育、価値創造教育などである。本書では、第一章で、「牧口の代表作『創価教育学体系』は、創価教育あるいは創価教育学について、長年の教育実践と教育についての思索を集大成したものである」（p. 26）とあり、牧口の『創価教育学体系』で説かれる教育を「創価教育」と定義しているものと思われる。そして、その精神を受け継ぎ戸田城聖、池田大作によって展開された教育実践や活動を指す言葉としても「創価教育」が使われている。「創価教育」という言葉の多義性については、さらなる検証が必要であるが、本稿では「創価教育」という言葉を使用する際に鉤括弧をつけ、著者の定義する「創価教育」を指すこととする。

池田の「大偉業は一代で成し遂げることはできない。師匠から弟子へ、そして、そのまた弟子へと続く精神の継承があってこそ、成就される」（池田，2011b, p. 176）という言葉引用し、「創価教育」は牧口から戸田、戸田から池田へその精神が継承されてできあがったものだと説明している。

著者は「創価教育の精神の継承」として、下の12の特質をあげ、牧口、戸田、池田がそれぞれどのように体現し継承してきたか、引用を交えて紹介している。

創価教育の精神の継承「12の特質」

- ① 反国家主義の精神
- ② 対症療法的な改革への批判
- ③ 価値創造的人間の精神
- ④ 子どもの幸福のためという精神
- ⑤ 生命尊厳の精神
- ⑥ 「世界市民（地球民族、地球市民）」の育成の精神
- ⑦ 「知恵（智慧）」の精神
- ⑧ 「慈悲（慈愛）」の精神
- ⑨ 学習と生活の一体化の精神
- ⑩ 「連帯」の精神
- ⑪ 最大の教育環境としての教師
- ⑫ 「開かれた対話」（p. 111）

例えば、①反国家主義の精神については、牧口、戸田両氏が時の国家権力と戦い投獄された歴史に触れ、この、教育が政治権力に利用されてはならないという精神が、池田の「四権分立」の構想にあらわれていると述べている。また、④子どもの幸福のためという精神については、牧口の「児童に幸福なる生活をなさしめるのを目的とする」（牧口，1982, p. 130）、戸田の、「人生の真の目的は、幸福生活を営むこと」（戸田，1981, p. 255）、池田の「教育こそが、子どもたちの幸福の礎になるもの」（池田，2011a, p. 378）という言葉引用し、「創価教育」に確固たる目的観が継承されていることを示している。

「創価教育の精神の継承」という視点

この「創価教育の精神の継承」という視点は、評者が現在担当する授業を深めていく上で大変重要な示唆を与えるものとなった。

評者は、現在デポール大学の修士課程の中の Value-Creating Education for Global Citizenship Program（世界市民育成のための価値創造教育プログラム）で、Value Creation in Application（価値創造の実践）というコースを担当している。本プログラムの課程は全てオンラインで行われ、世界の様々な国から多様なバックグラウンドを持つ学生が集い学んでいる。評者の担当するコースでは、牧口、戸田、池田の教育思想や実践について、それぞれどのように異なるのか、ま

たどういった点が共通しているのかを分析する。例えば、Value-Creating Education for Global Citizenship Program の名称にも含まれている、「世界市民」「価値創造」といった概念は、牧口、戸田、池田の教育思想に共通する部分であるが、それぞれの捉え方、応用・実践の方法は異なる。三氏が、それぞれのコンテキストでどういった教育の理想を構築し実践していったのかを学ぶ中で、学生は自分自身のコンテキストにおける「世界市民育成のための価値創造教育」の形について考えていく。

これまでこの授業を担当してきて感じた課題は、牧口、戸田、池田の歴史的コンテキスト、人物像、教育思想、実践など、多岐にわたる内容をどのように統合し、そのエッセンスにたどり着くかということだった。授業では、これまで学んだ重要な概念やテーマをベンダイアグラムに書き込み、これらの概念をつなぐものを考えるという手法をとったが、三氏にまつわる内容の統合は容易ではなかった。その理由として、それぞれの生きた時代や立場が異なることが考えられる。例えば、牧口は小学校での教授の経験をもとに、具体的な教授法や実践について多く書き残しているが、池田は仏法者として、具体的な教授法や実践例というよりは、教育者の理想や目指すべき姿勢などを多く書き著している。ベンダイアグラムに書き込む作業を通し、三者それぞれの違いは見えやすくなったが、三者の思想・実践をつなぐものを見出すことに苦労する学生が多かった。

著者の「創価教育の精神」という概念は、三氏の教育思想や実践の根底にあるものに目を向けるという意味で、大変参考になった。ベンダイアグラムでの概念の比較を平面的な分析とすると、実践の根底にある精神に目を向けることは、立体的でより深い分析ができるようになるのではないかと考える。また、著者の挙げる12の特質は、牧口、戸田、池田が作り上げてきた教育の精神を継承し、各自のコンテキストに合わせて実践していく際の起点、また、自身の教育方法や姿勢を顧みる際の指標にもなりうるところに、その意義があるように思う。

評者の担当するコースはもちろん、Value-Creating Education for Global Citizenship プログラムで学ぶ多くの学生が、「世界市民育成のための価値創造教育」を学び、自身のコンテキストで実践・展開したいと切望している。言葉や文化も違う場所で、「価値創造教育」「世界市民育成のための教育」を実践していくには、その根本精神を理解し、その精神を体現しうる実践を生み出していくことが重要であると考え。と同時に、これは、牧口、戸田、池田によって構築・実践・展開されてきた教育思想が、創価学園や創価大学、創価学会教育本部にとどまらず、様々なコンテキストで実践出来得ることを示唆している。

著者の提案する12の「創価教育の精神の継承」の特質をもとに、様々なニーズのある教育現場で、どのような実践ができるのか、学生と共に探求して参りたい。

参考文献

- 池田大作 (2011a) 『池田大作全集』 第百一卷. 聖教新聞社.
池田大作 (2011b) 『教育の世紀へー親と教師に贈るメッセージ』. 第三文明社.

戸田城聖（1981）『戸田城聖全集』第一巻．聖教新聞社．

牧口常三郎（1982）『牧口常三郎全集』第五巻．第三文明社．

Goulah, J. (2018). The presence and role of dialogue in Soka Education. In P. N. Stearns (Ed.), *Peacebuilding through dialogue: Education, human transformation, and conflict resolution*. George Mason University Press.

Goulah, J. (2021). Value creation and value-creating education in the work of Daisaku Ikeda, Josei Toda, and Tsunesaburo Makiguchi. In W. H. Schubert & M. F. He (Eds.), *Oxford Encyclopedia of Curriculum Studies*. Oxford University Press.

Goulah, J. (2022). Foreword. In D. Ikeda, *The light of learning: Selected writings of education*. Middleway Press.

Inukai, N. (2021). Ikeda/Soka studies in education: A review of the anglophone literature. *Soka Kyōiku*, 14, 25-38.

書評

齋藤毅著
『「人生地理学」からの出発』

岩 木 勇 作

本書では1903(明治36)年に出版された、牧口常三郎著『人生地理学』(文会堂発行・富山房発売)の現代的な意義づけが、地理学・地理教育論を専門とする著者・齋藤毅氏によって語られており、特に現代において牧口の思想を継承・発展させる意義とその方途を、地理教育の「世界像の形成」の視点から述べている。新型コロナウイルスの全世界的な流行によって、人類が新たな枠組みを模索しているなか、『「人生地理学」からの出発』と題する本書が、牧口常三郎生誕150周年記念として出版された意義は大きいだろう。

本書は、2017年1月～2020年3月に『聖教新聞』に掲載された「切手で築こう現代の世界像」、2020年4月～10月に『聖教新聞』に掲載された『「人生地理学」からの出発』を、加筆・再構成したものである。

本書は次の通り、2部で構成されている。

「人生地理学」からの出発

- 第1章 牧口常三郎と「人生地理学」
- 第2章 「人生地理学」の概要
- 第3章 継承・発展させたい研究課題
- 第4章 地理学の考え方と人生
- 第5章 子どもの発達と「地理」
- 第6章 代償行動の一つ、郵便切手の収集
- 第7章 科学的世界観と地理教育
- 第8章 自然美と新しい風景観
- 第9章 多様な世界像の共存と国際理解
- 第10章 「人生地理学」からのメッセージ

切手で築こう現代の世界像

(以下略)

第1部から順をおって内容を見ていこう。第1章では、著者と『人生地理学』との出会い、牧口と地理学の関係について述べられている。『人生地理学』は当時の地理学書としては珍しく「系統地理学」的な手法が取られていること、世界の自然とそれに関わる人間の営みを人生の視点から記したものであることが指摘されている。また『人生地理学』の校閲・批評を担当した高名な地理学者・志賀重昂の『日本風景論』（1894年刊）が当時の日本人の風景観に大転換をもたらしたことに言及している。

第2章では、『人生地理学』の概要が述べられ、現代の我々は、牧口の思想の何を継承・発展させていけばよいのかとの問題提起が行われている。この問題提起を受けて、第3章では、牧口の思想を継承・発展させるための重要な課題として、第1に「トポフィリア」概念と牧口の思想との関係。第2に、長年にわたる教育現場で得られた地理教育の経験を反映した教育諸説、の2つを挙げている。

第4章では、「歴史」や「地理」は暗記科目だと捉えられがちだが、地理学は本来、世界観と直接かかわることから哲学であるとする。私たちがいる世界をどう見るかという「世界観」と世界の姿である「世界像」が個人にとってどのように形成されていくかを第5章～第7章で考察している。

第5章では、子ども時代の独特な見方や考え方（児童世界観）、子どもの空間行動圏の広がり（探検行動）を捉え直した「児童世界像」という著者が提唱した理論を基に、「児童世界観」から「科学的世界観」の橋渡しという学校教育の役割が語られている。また実際の探検行動の代償行動として読書や、世界の郵便切手の収集が紹介されている。

第6章では、代償行動として世界の郵便切手の収集が詳しく述べられているが、この収集が、実は牧口も参考にした内村鑑三の『地人論』（1894年に『地理学考』の書名で刊行され、のちに『地人論』と改められた）において「世界観念を発起」するために効用があると述べられていたことが指摘されている。著者も郵便切手収集の世界像形成の効用について実感しており「現代世界像の形成と郵便切手——その地理教育論の一考察」（『切手の博物館紀要』第6号、切手の博物館、2010年）を著しているが、この世界の郵便切手の収集、分類を通して、科学的認識が進み、世界像が形成されていくという事例を自身の経験を踏まえながら解説し、切手が地理的な情報とともに近現代の世界の歴史を刻み込んだ優れた教材であることを主張している。

この章は第2部の「切手で築こう現代の世界像」にも関連している。先に第2部に簡単に触れておくと、ここでは、世界の郵便切手の図柄からその国や土地の様子、歴史が記述されている。つまり、本章と関連付けて考えるならば、これは単なる各国の紹介ではなく、本書の主題でもある「世界像の形成」を著者の世界の郵便切手の収集という事例を通して提示されているのだといえよう。

第7章では、豊かな世界像を築くための基礎となる地理教育の工夫について述べている。この章では「それにしても、科学的世界観への転換期の最も大切な時機に市役所や町役場の仕事を教えることに、どれほどの意義があるのか、私には分かりかねます」と、やや批判的に「社会科」

が捉えられているが、地理教育が学校教育において十分な役割を果たせていないという著者の長年の主張がうかがえる。

第8章では、第2次世界大戦後に発見された新たな風景美である熱帯・亜熱帯の風景について述べられている。特に亜熱帯の美を日本画家たちの生涯を通して紹介している。

第9章では、多様な世界像の共存について述べている。個々人が形成する世界像は、科学的世界観を共有することで一定の共通性を持つことは事実であるが、一方で、民族・国家・地域によって偏りがあることも事実であるとし、異文化との対話こそ、自分の持つ文化を相対化し、より理解を深め、さらには様々な世界像と共存する国際理解を進めることであると論じている。

第10章では、現代の世界を知り豊かな世界像を築くためには、個々の国や地域について認識してこそ、国と国との関係や地域の結びつきが理解できるという『人生地理学』のメッセージを学び取ることが大事であることを述べている。また牧口の地理教育への貴重な成果を活用するためにも、「社会科」から「地理」と「歴史」を「地理歴史科」として独立させることが先決であると主張している。

本書は、既刊の斎藤毅著『探検教育で子どもが変わる——フィールドワークで築く世界像』（農山漁村文化協会、1996年）、同著『発生的地理教育論——ピアジェ理論の地理教育論的展開』（古今書院、2003年）、前掲「現代世界像の形成と郵便切手——その地理教育論的一考察」などでも披瀝されている「世界像の形成」という著者の重要なテーマによって貫かれている。本書の特色は著者の地理学・地理教育の研究成果、経験を踏まえて、「世界像の形成」という視点から『人生地理学』の現代的意義を導き出していることにある。切手の記述に多くのページが割かれている印象も受けるが、第2部は著者の「世界像の形成」の得難い標本と位置づけることが出来るし、切手収集家としても有名な著者のコレクションが披露された貴重な資料である。特に関連する第1部第6章の切手の収集、分類から「世界像の形成」にいたるプロセスの叙述によって、「世界像の形成」を具体的にイメージすることができるだろう。

著者はあとがきで「人間を取り巻く世界の多様な自然環境や社会の諸形態と諸活動を、とりわけ人生（人間生活）との関わりで地理学的な視点から見つめつつ示された、牧口師の豊かな世界像こそが『人生地理学』。」と述べているが、牧口の世界像そのものである『人生地理学』を現代の我々はどのように受け止め、継承・発展させていくのか、その一つのアプローチを本書は描いている。現代において『人生地理学』を捉え直し、その思想を継承・発展させるための方途を示した好著といえるだろう。

（鳳書院、2021年）

2021年度 池田大作記念創価教育研究所 活動報告

今年度の研究所の主な活動は以下の通りである。

1. 研究教育活動

①学部「創価教育論」の開講

勘坂 純市 (2回:コーディネーター)、神立 孝一 (3回)、富岡 比呂子 (2回)
坂口 貴弘 (2回)、岩木 勇作 (2回)、特別講義 (1回)
ガイダンス・シンポジウム (3回)

②通教「創価教育論」の開講

春期スクーリング 勘坂 純市、富岡 比呂子、坂口 貴弘、岩木 勇作*
夏期スクーリング 勘坂 純市、坂口 貴弘、岩木 勇作*
秋期スクーリング 富岡 比呂子、坂口 貴弘、岩木 勇作* (*は非所員)

③学部「Soka Education」の開講

アンドリュー・ゲバート、久木田 ステファニー 光子ほか

④2021年6月5日 アメリカ・デポール大学大学院「世界市民育成のための

価値創造教育修士課程プログラム」 「戸田城聖の教育哲学と実践」 コースの講義
塩原 將行

⑤2021年6月12日 「SDGs × 価値創造」クローゼンイベント

“Soka Education and Global Citizenship: From Columbia Lecture”
富岡 比呂子

⑥2021年6月16日～18日 デポール大学第2回池田・創価教育研究国際会議

“Toward 2030: The Significance of Value-Creating Pedagogy and the UN Sustainable
Development Goals”
“A Makiguchian Perspective on the Time-Space Disruptions of COVID”
アンドリュー・ゲバート

⑦2021年10月24日 「第11回池田大作思想国際学術シンポジウム」分科会発表

“History and Overview of Soka Education: Practical Implication”
富岡 比呂子
「池田大作幸福思想におけるいくつかの支点——幸福の本質とともに」
叢 暁波

“Exploring Soka University Students' Perspectives on Global Citizenship”

久木田 ステファニー 光子

⑧2021年11月18日 カナダ・ゲルフハンバー大学

「世界市民に関する創価教育研究所」講演

“Overview of Soka Education: From Makiguchi's Pedagogy”

富岡 比呂子

⑨ 2022年2月12日 「創価グローバルキャンパス」講演

「創造的人間」と創価大学の使命」

勘坂 純市

2. 講演会・シンポジウム

① 2021年6月7日「牧口常三郎生誕150周年記念講演会」

「カント哲学へのアプローチ」

福谷 茂（大学院文学研究科教授、京都大学名誉教授）

② 2021年10月23日～24日「第11回池田大作思想国際学術シンポジウム」

「人類の共生と世界市民教育」

挨拶 田代 康則（創価大学 理事長）

ビデオメッセージ

顧 秉林（中国・清華大学高等研究院院長）

ニーラカント・ラダクリシュナン（インド・ガンジー研究協会理事長）

基調講演

馬場 善久（創価大学 学長）

高 洪（中国・中華日本学会会長）

ジェイソン・グーラー（アメリカ・デポール大学池田大作教育研究所所長）

7つの中国語分科会と4つの英語分科会をオンラインで開催

③ 2021年12月13日「2021年度池田大作記念創価教育研究所 講演会」

「ジョン・デューイ —メリオリズムを生きる思想—」

藤井 千春（早稲田大学教育・総合科学学術院教授、日本デューイ学会理事）

3. 研究会

① 2021年6月23日 第5回 研究会

「〆戸田大学、とは何か ——池田大作が学んだこと——」

塩原 将行

② 2021年7月23日 第6回 研究会

「世界市民教育について」

久木田 ステファニー 光子

“Human Capital, Human Right, Human Capability, and Value-creating Education

- Exploring a new model of education in policy level from the viewpoint of creative role -”

田地 浩（大阪府教育センター 教育企画部 指導主事）

③ 2021年9月8日 第7回 研究会

「『評伝 牧口常三郎』をめぐって」

塩原 將行

④ 2021年10月29日 第8回 研究会

「牧口常三郎生誕150周年記念座談会～牧口研究の現状と課題～」

塩原 將行

アンドリュー・ゲバート

牛田 伸一

岩木 勇作

伊藤 貴雄

4. 出版

① 2022年3月16日 紀要『創価教育』第15号を発刊

② 『創立の精神を学ぶ』第3版（書籍版・デジタル版）発刊の準備

5. 年史編纂

2021年4月2日『創価大学50年の歴史』（書籍版・デジタル版）を発刊

6. 展示・映像制作

① 2021年9月24日 本部棟展示「創立者池田大作先生の教育・学术交流——名誉学術称号受章の軌跡——」のリニューアル

② 2021年10月8日 創立50周年記念展「創価大学の歴史」を制作

③ 創立50周年記念映像「誰がために」を制作

④ 創立50周年記念地方巡回展示を制作

7. 事業検討会（研究・教育部会）

① 2021年5月7日 第1回事業検討会を開催した。

② 2021年5月28日 第2回事業検討会を開催した。

8. 資料調査（資料部会）

文系A棟7階資料庫全体の資料調査を行い、資料数一覧を作成した。

9. 図書贈呈会（資料部会）

2021年10月25日～11月5日

文系A棟1階展示室で図書贈呈会を開催（寄贈された図書・雑誌の複本約25,000冊）

10. 国際部会

- ① 翻訳英語表記の再検討のための委員会を準備した。
- ② 2021年9月～10月 創価大学の学生を対象に「世界市民に関するアンケート」を実施した。

11. 資料提供等

- ① 『SUN Soka Univ. News』企画 「回創写真館」への資料提供
SUN 109号 2021 Spring、SUN 110号 2021 Summer
SUN 111号 2021 Autumn、SUN 112号 2022 Winter
- ② 創立50周年特設サイト企画「シリーズ：50年前のあの日」の共同制作を行った。

12. ホームページ更新

- ・「所員紹介」を更新した。
- ・講演会、研究会、紀要、資料提供等のニュースの更新をした。
- ・世界市民教育シンポジウムページを増設し、「Call for Papers」を掲載した。
- ・「刊行物案内」に「Report on Ikeda Studies in Education」(No.1～3)を掲載した。

13. 組織機構改革及び人事

〔機構改革〕

2021年6月1日 大学事務局に総合グローバル・オフィスが設置され、池田大作記念創価教育研究所が異動した。

〔2021年4月1日付人事〕

- ① 久木田 ステファニー 光子が池田大作記念創価教育研究所講師となり所員となった。
- ② 久木田 ステファニー 光子がジョン・デューイ研究センター・センター員となった。

〔2021年6月1日付人事〕

川上 喜彦が池田大作記念創価教育研究所 運営委員会委員となった。

編集後記

1971年4月2日に開学した創価大学は、2021年に創立50周年を迎えた。本誌の前身『創価教育研究』の「創刊にあたって」（2002年）には、創価教育研究センター（当時）は「創立50周年を目指し、大学史が編纂できるよう資料を整えておく」ことを活動の柱の一つとする旨が記されている。その意味で創立50周年は、創価大学全体はもとより、本研究所にとっても大きな節目を刻む一年となった。

この佳節を記念する諸事業に、池田大作記念創価教育研究所（以下「研究所」）は様々な形で参画してきた。まず、4月2日には『創価大学50年の歴史』が刊行をみている。上記の目標を掲げて、研究所は長年にわたり、同書の資料提供等の編纂業務に中心的な役割を果たしてきた。その成果に基づき、本部棟にオープンした創立50周年記念展「創価大学の歴史」や記念映像の制作にも協力している。

また10月23日・24日には、第11回池田大作思想国際学術シンポジウムが、創価大学を中心にオンラインで開催された。日本では初開催となる同シンポジウムには、10カ国・地域の52大学・機関から80本の研究論文の提出があった。当日は11の分科会に分かれて議論が交わされ、研究所所属の3名の教員も研究発表を行っている。

このように2021年度は、これまでの蓄積に基づき、様々な形で創価教育の歴史と意義を国内外に発信する一年になったといえる。『創価教育』第15号には、これらの研究の一端を収録するとともに、今後の学術的な創価教育研究の基礎となりうる論考を多数掲載することができた。

まず論文として、塩原将行氏による「池田大作が『戸田大学、で学んだこと』」を掲載した。これは、当研究所の研究会での発表と議論をもとにまとめられた論考である。犬飼希望氏による英訳も収録したが、これは戸田城聖研究の国際的な展開に資する意図によるものである。

次に、2021年に行われた講演の中から3本を掲載した。まず、前述の第11回池田大作思想国際学術シンポジウムにおける馬場善久学長の基調講演を収録した。福谷茂氏の「カントへの私の道」、藤井千春氏の「ジョン・デューイーメリオリズムを生きる思想―」は、それぞれ6月7日、12月13日に行われた研究所主催講演会の講演記録である。創価教育学の形成に重要な影響を与えたカント、デューイーの思想について論じている。

2021年は牧口常三郎生誕150周年の佳節であった。その意義を込めて10月29日に開催した記念座談会では、牧口研究を精力的に進めてきた5名の研究者が、これまでの成果と今後の展望を語り合っている。

中国における「池田思想」研究の動向についての報告は、本号で18回目を迎えた。2021年に開催された池田思想研究の学術シンポジウム等のほか、池田研究の成果等を紹介している。また前号に引き続き、『創価大学50年の歴史』の編纂にあたって使用した出典資料の一覧を、資料紹介として収録している。

2021年は、創価教育関連の研究書が相次いで刊行された年でもあった。そのうち3

点につき、松井慎一郎氏、利田律子氏、岩木勇作氏より書評をご寄稿いただいた。

おわりに、今回の紀要に原稿をお寄せ下さった諸先生方、そして紀伊國屋書店をはじめ御協力・御尽力いただいた方々に、この場を借りて篤く御礼を申し上げたい。

2022年3月 (T.S.)

創価教育 第15号

2022年3月16日 発行

代表者 勘 坂 純 市

発行者 創価大学池田大作記念創価教育研究所

〒192-8577 東京都八王子市丹木町 1-236

TEL. 042-691-5623 FAX. 042-691-5654

印刷所 株式会社紀伊國屋書店

Contents

Article

- What Ikeda Daisaku Learned at “Toda University” Masayuki Shiohara 1
Translated by Nozomi Inukai

Lectures

- Keynote Speech: The 11th International Academic Symposium on the Philosophy of
Daisaku Ikeda Yoshihisa Baba 69
My Pathway to Kant Shigeru Fukutani 77
John Dewey—The Idea of a Living Meliorism Chiharu Fujii 91

Discussion

- Discussion Commemorating the 150th Anniversary of Tsunesaburo Makiguchi’s Birth:
Current Status and Issues in Makiguchi Research
Speakers: Masayuki Shiohara, Andrew Gebert,
Shinichi Ushida, Yusaku Iwaki, Takao Ito 117

Report

- Recent Works on Ikeda’s Thoughts in China (18) Tsuyoshi Takahashi, Shingo Horiguchi 137

Reference Material

- List of Reference Sources for *The Fifty Years of Soka University* (2)
Editorial Committee of the Fifty Years of Soka University 145

Book Reviews

- Toda Jōsei: A Critical Biography* Shinichiro Matsui 189
Soka Education and Humanism Ritsuko Rita 195
Embarking from the Human Geography of Life Yusaku Iwaki 199